

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊

空港跡地遺跡Ⅵ

(G地区)

2003. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
（ 助 ） 香 川 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー
香 川 県 土 地 開 発 公 社

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊

空港跡地遺跡Ⅵ

(G地区)

2003. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財香川県埋蔵文化財調査センター
香 川 県 土 地 開 発 公 社

序 文

平成元年12月の新高松空港の開港に伴って高松市林町の高松空港跡地は、研究情報機能及び文化機能を有する技術・情報・文化の複合拠点、香川インテリジェントパークとして生まれ変わりました。

高松空港跡地の整備事業に伴い、当センターでは平成2年度より香川県教育委員会から委託を受け、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。また、これと並行して平成6年度から出土文化財の整理研究業務を行い、その成果につきましては、平成8年度から発掘調査報告書として順次刊行しており、今後も継続することにしております。

このたび、「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査調査報告第6冊 空港跡地遺跡VI（G地区）」として刊行いたしますのは、空港跡地東北部の調査についてであります。同地区の調査では、弥生時代後期の集落跡や粘土採掘坑と考えられる土坑群、中世（鎌倉時代～室町時代）の集落跡や近世からの灌漑用水路などが検出されております。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、土地所有者である香川県土地開発公社、委託者である香川県教育委員会、その他関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月28日

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所長 小原 克己

例 言

1. 本報告書は、空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第6冊で、香川県高松市林町に所在する空港跡地遺跡（くうこうあとちいせき）G地区の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土地開発公社から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、予備調査を平成2年4月から同年9月、G地区本調査を平成4年4月から平成5年2月、平成5年11月から平成6年3月まで実施した。
調査組織は、本文中の「第1表調査組織表」に記したとおりである。
4. 調査に当たっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
独立行政法人奈良文化財研究所、林地区開発協議会、地元自治会
5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
編集は、同センター文化財専門員 蔵本晋司が担当し、主任文化財専門員 真鍋昌宏が補助した。
執筆分担は次のとおりである。
第1章・第2章 …… 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊」第1章・第2章（廣瀬常雄・西岡達哉担当）に加筆し、再構成した。
第3章第3節3 近世～近現代（遺物）、第4章3 近世～近現代 …… 松本和彦
上記以外 …… 真鍋昌宏
6. 報告書の作成にあたっては、佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。
7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT. P. を基準としている。
また遺構は、下記の略号により表示している。
SA 柵列跡 SB 掘立柱建物跡 SD 溝状遺構
SE 井戸跡 SH 竪穴住居跡 SK 土坑
SP 柱穴跡 SX 不明遺構
8. 挿図の一部に、国土地理院地形図「高松南部」（1/50,000）を使用した。
9. 写真図版（添付CD）のビューワは、株式会社トリワークス（<http://www.kuraemon.com>）「蔵衛門9」を使用して作成しました。

本文目次

序 文 例 言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
1 遺跡の発見	1
(1) 空港跡地遺跡と高松東道路建設事業関連調査	1
(2) 空港跡地遺跡と太田第2土地区画整理事業関連調査	1
(3) 空港跡地遺跡と弘福寺領讃岐国山田郡田岡関連調査	9
2 調査に至る経過	9
3 保護措置の基本姿勢	10
(1) 基盤整備事業	10
(2) 香川県立図書館・文書館建設事業	10
(3) 四国工業技術研究所建設事業	10
(4) 産業交流センター建設事業	11
(5) 産業頭脳化センター建設事業	11
(6) 民間分譲地整備事業	11
(7) インテリジェントパーク整備事業（香川大学工学部用地）	11
第2節 調査の経過	11
1 調査体制	12
2 調査計画	12
(1) 予備調査	12
(2) 本調査	12
(3) 整理作業	13
3 調査方法	13
(1) 調査方式	14
(2) 調査区画の設定方式	14
(3) 記録類の作成方法	14
(4) 検出遺構の呼称方法	15
4 予備調査の経過	15
5 本調査の経過	15
(1) 平成2年度	16
(2) 平成3年度	16
(3) 平成4年度	16
(4) 平成5年度	16
(5) 平成6年度	16
(6) 平成8年度	17
(7) 平成9年度	17
6 G地区調査の経過	17
7 整理作業の経過	17
(1) 基礎整理作業と概報作成作業	17
(2) 報告書作成作業（G地区）	17

第2章 立地と環境	20
第3章 調査の成果	20
第1節 土層序について	20
第2節 主要遺構の検出状態	20
第3節 遺構と遺物	20
1 弥生時代	20
① 竪穴住居跡	20
② 溝状遺構	36
③ 土坑	58
2 古代～中世	100
① 掘立柱建物跡	100
② 柵列跡	121
③ 溝状遺構	122
④ 土坑	131
⑤ 井戸跡	131
⑥ 柱穴跡	135
3 近世～近現代	136
① 掘立柱建物跡	136
② 溝状遺構	144
③ 土坑	191
④ 井戸跡	238
⑤ 不明遺構	252
⑥ 柱穴跡	278
第4章 まとめ	283

挿図目次

第1図	遺跡位置図 (1/100,000)	4	第43図	SKg163	平・断面図、出土遺物実測図	59
第2図	調査区割・位置図	5	第44図	SKg177	平・断面図、出土遺物実測図	60
第3図	整理報告地区割図	7	第45図	SKg192	平・断面図、出土遺物実測図	61
第4図	空港跡地遺跡周辺遺跡分布図 (塚以外) (1/20,000)	24	第46図	SKg232	平・断面図、出土遺物実測図	62
第5図	Ⅲ33・34区北壁土層断面図	23	第47図	SKg270	平・断面図、出土遺物実測図	63
第6図	Ⅲ35・36区北壁土層断面図	24	第48図	SKg307	平・断面図、出土遺物実測図	63
第7図	Ⅲ33・45区西壁、Ⅲ36・39区 土層断面図	25	第49図	SKg308	平・断面図、出土遺物実測図	64
第8図	Ⅲ33区南壁・東壁、Ⅲ34区 東壁土層断面図	26	第50図	SKg319	平・断面図、出土遺物実測図	64
第9図	Ⅲ36区西壁、Ⅲ45区東壁、Ⅲ47区 西・南・東壁、Ⅲ48区東壁土層断面図	27	第51図	SKg344	平・断面図、出土遺物実測図	65
第10図	SHg01・SDg08 平・断面図	28	第52図	SKg358	平・断面図、出土遺物実測図	65
第11図	SHg01・SDg08 出土遺物実測図	29	第53図	SKg370	平・断面図、出土遺物実測図	66
第12図	SHg02 平・断面図、出土遺物実測図	31	第54図	SKg378	平・断面図、出土遺物実測図	66
第13図	SHg03・SDg18・19 平・断面図	33	第55図	SKg379	平・断面図、出土遺物実測図	67
第14図	SHg03 推定復元図	32	第56図	SKg381	平・断面図、出土遺物実測図	67
第15図	SHg03 (SPg202)・SDg18・19 出土遺物実測図	32	第57図	SKg384	平・断面図、出土遺物実測図	68
第16図	SHg04 平・断面図	35	第58図	SKg393	平・断面図、出土遺物実測図	69
第17図	SDg01 土層断面図	36	第59図	SKg395	平・断面図、出土遺物実測図	70
第18図	SDg03 土層断面図、出土遺物実測図	37	第60図	SKg397	平・断面図、出土遺物実測図	71
第19図	SDg01・03 出土遺物実測図	38	第61図	SKg401	平・断面図	72
第20図	SDg11・13・14 土層断面図	39	第62図	SKg401	出土遺物実測図	73
第21図	SDg11・13・14 出土遺物実測図	40	第63図	SKg404	平・断面図、出土遺物実測図	74
第22図	SHg02・SDg17・20・21・24 平・断面図	41	第64図	SKg405・406	平・断面図、 出土遺物実測図	75
第23図	SDg15・17 土層断面図	42	第65図	SKg410	平・断面図、出土遺物実測図	75
第24図	SDg15 土層断面図	43	第66図	SKg412	平・断面図、出土遺物実測図	76
第25図	SDg17 土層断面図	44	第67図	SKg414	平・断面図、出土遺物実測図	77
第26図	SDg17・20・21・24 出土遺物実測図	45	第68図	SKg415	平・断面図、出土遺物実測図	77
第27図	SDg17 出土遺物実測図 (1)	46	第69図	SKg419	平・断面図、出土遺物実測図	78
第28図	SDg17 出土遺物実測図 (2)	47	第70図	SKg431	平・断面図、出土遺物実測図	78
第29図	SDg15 出土遺物実測図 (1)	48	第71図	SKg443	平・断面図、出土遺物実測図	79
第30図	SDg15 出土遺物実測図 (2)	49	第72図	SKg445	平・断面図、出土遺物実測図	79
第31図	SDg15 出土遺物実測図 (3)	50	第73図	SKg447	平・断面図、出土遺物実測図	79
第32図	SDg15 出土遺物実測図 (4)	51	第74図	SKg449	平・断面図、出土遺物実測図	80
第33図	SDg15 出土遺物実測図 (5)	52	第75図	SKg453	平・断面図、出土遺物実測図	81
第34図	SDg03・15・17 出土遺物実測図	53	第76図	SKg553	平・断面図、出土遺物実測図	82
第35図	SDg46・73 土層断面図	54	第77図	SKg559	平・断面図、出土遺物実測図	83
第36図	SDg71 平断面図	55	第78図	SKg567	平・断面図、出土遺物実測図	83
第37図	SDg82・83・84 土層断面	56	第79図	SKg575	平・断面図、出土遺物実測図	83
第38図	SDg43・46・67・71・73・82・83 出土遺物実測図	57	第80図	SKg581	平・断面図、出土遺物実測図	84
第39図	SKg010 平・断面図、出土遺物実測図	58	第81図	SKg587	平・断面図、出土遺物実測図	85
第40図	SKg012 平・断面図、出土遺物実測図	58	第82図	SKg589	平・断面図、出土遺物実測図	85
第41図	SKg094 平・断面図、出土遺物実測図	58	第83図	SKg604	平・断面図、出土遺物実測図	86
第42図	SKg151 平・断面図、出土遺物実測図	59	第84図	SKg606	平・断面図	87
			第85図	SKg606	出土遺物実測図	87
			第86図	SKg610	平・断面図、出土遺物実測図	88
			第87図	SKg612	平・断面図、出土遺物実測図	89
			第88図	SKg621	平・断面図、出土遺物実測図	89
			第89図	SKg631	平・断面図、出土遺物実測図	90

第90图	SKg657	平·断面图、出土遺物実測図	…	90	第138图	SKg184·SKg416平·断面图、 出土遺物実測図	…	130	
第91图	SKg679	平·断面图、出土遺物実測図	…	91	第139图	SKg673	平·断面图、出土遺物実測図	…	131
第92图	SKg682	平·断面图、出土遺物実測図	…	93	第140图	SDg63·SEg07	平·断面图	…	132
第93图	SKg684	平·断面图、出土遺物実測図	…	93	第141图	SEg07	出土遺物実測図(1)	…	133
第94图	SKg692	平·断面图、出土遺物実測図	…	93	第142图	SEg07	出土遺物実測図(2)	…	134
第95图	SKg693	平·断面图、出土遺物実測図	…	93	第143图	SPg039·087·114·116·133·134·648·651· 655·660·664·668	出土遺物実測図	…	135
第96图	SKg697	平·断面图	…	94	第144图	SBg02	平·断面图	…	136
第97图	SKg697	出土遺物実測図	…	95	第145图	SBg03	平·断面图	…	136
第98图	SKg753	平·断面图、出土遺物実測図	…	95	第146图	SBg11	平·断面图	…	137
第99图	SKg767	平·断面图、出土遺物実測図	…	95	第147图	SBg12	平·断面图	…	138
第100图	SKg771	平·断面图、 出土遺物実測図	…	96	第148图	SBg13	平·断面图	…	139
第101图	SKg776	平·断面图、 出土遺物実測図(1)	…	97	第149图	SBg14	平·断面图	…	140
第102图	SKg776	出土遺物実測図(2)	…	98	第150图	SBg15	平·断面图、出土遺物実測図	…	141
第103图	SKg818	平·断面图、出土遺物実測図	…	99	第151图	SBg16	平·断面图	…	142
第104图	SKg857	平·断面图、出土遺物実測図	…	99	第152图	SBg17	平·断面图、出土遺物実測図	…	143
第105图		掘立柱建物跡配置図(1)	…	101	第153图	SDg02	土層断面图	…	144
第106图		掘立柱建物跡配置図(2)	…	103	第154图	SDg04·05	土層断面图	…	147
第107图		掘立柱建物跡配置図(3)	…	105	第155图	SDg26·47·48·86	土層断面图	…	149
第108图	SBg01	平·断面图	…	100	第156图	SDg02	出土遺物実測図(1)	…	155
第109图	SBg04	平·断面图	…	106	第157图	SDg02	出土遺物実測図(2)	…	156
第110图	SBg05	平·断面图、出土遺物実測図	…	106	第158图	SDg02	出土遺物実測図(3)	…	157
第111图	SBg06	平·断面图	…	107	第159图	SDg05	出土遺物実測図(1)	…	158
第112图	SBg07	平·断面图	…	107	第160图	SDg05	出土遺物実測図(2)	…	159
第113图	SBg08	平·断面图	…	108	第161图	SDg05	出土遺物実測図(3)	…	160
第114图	SBg09	平·断面图	…	109	第162图	SDg05	出土遺物実測図(4)	…	161
第115图	SBg10	平·断面图	…	110	第163图	SDg05	出土遺物実測図(5)	…	162
第116图	SBg18	平·断面图	…	111	第164图	SDg06·07·26	出土遺物実測図	…	149
第117图	SBg19	平·断面图	…	111	第165图	SDg29	出土遺物実測図(1)	…	163
第118图	SBg20	平·断面图	…	112	第166图	SDg29	出土遺物実測図(2)	…	164
第119图	SBg21·SAg02	平·断面图	…	113	第167图	SDg29	出土遺物実測図(3)	…	165
第120图	SBg21	出土遺物実測図	…	114	第168图	SDg29	出土遺物実測図(4)	…	166
第121图	SBg22	平·断面图、出土遺物実測図	…	115	第169图	SDg29	出土遺物実測図(5)	…	167
第122图	SBg23	平·断面图、出土遺物実測図	…	115	第170图	SDg29	出土遺物実測図(6)	…	168
第123图	SBg24	平·断面图	…	116	第171图	SDg29	出土遺物実測図(7)	…	169
第124图	SBg25	平·断面图	…	116	第172图	SDg29	出土遺物実測図(8)	…	170
第125图	SBg26	平·断面图、出土遺物実測図	…	117	第173图	SDg29	出土遺物実測図(9)	…	171
第126图	SBg27	平·断面图	…	118	第174图	SDg29	出土遺物実測図(10)	…	172
第127图	SBg28	平·断面图	…	118	第175图	SDg29	出土遺物実測図(11)	…	173
第128图	SBg29	平·断面图	…	119	第176图	SDg29	出土遺物実測図(12)	…	174
第129图	SBg30	平·断面图	…	120	第177图	SDg29	出土遺物実測図(13)	…	175
第130图	SAg01	平·断面图	…	121	第178图	SDg29	出土遺物実測図(14)	…	176
第131图	SAg03	平·断面图	…	121	第179图	SDg29	出土遺物実測図(15)	…	177
第132图	SDg09	土層断面图	…	122	第180图	SDg29	出土遺物実測図(16)	…	178
第133图	SDg28·29·30·31·75	土層断面图	…	123	第181图	SDg29	出土遺物実測図(17)	…	179
第134图	SDg43·56·57·59	土層断面图	…	125	第182图	SDg29	出土遺物実測図(18)	…	180
第135图	SDg04	出土遺物実測図	…	127	第183图	SDg29	出土遺物実測図(19)	…	181
第136图	SDg04·09·28·30	出土遺物実測図	…	128	第184图	SDg29	出土遺物実測図(20)	…	182
第137图	SDg09·31·43·56·57·59·63·75·84	出土遺物実測図	…	129	第185图	SDg29	出土遺物実測図(21)	…	183
					第186图	SDg29	出土遺物実測図(22)	…	184

第187图	SDg47	出土遺物実測図(1)	185	第238图	SKg831	出土遺物実測図(2)	227
第188图	SDg47	出土遺物実測図(2)	186	第239图	SKg833	平・断面図、出土遺物実測図	228
第189图	SDg47	出土遺物実測図(3)	187	第240图	SKg838	平・断面図、出土遺物実測図	229
第190图	SDg48	出土遺物実測図	187	第241图	SKg840	平・断面図、出土遺物実測図	230
第191图	SDg86	出土遺物実測図(1)	188	第242图	SKg843	平・断面図	231
第192图	SDg86	出土遺物実測図(2)	189	第243图	SKg843	出土遺物実測図	232
第193图	SDg86	出土遺物実測図(3)	190	第244图	SKg870	平・断面図、出土遺物実測図	232
第194图	SDg86	出土遺物実測図(4)	154	第245图	SKg885	平・断面図	233
第195图	SKg674	平・断面図、出土遺物実測図	191	第246图	SKg885	出土遺物実測図	234
第196图	SKg777	平・断面図、出土遺物実測図	191	第247图	SKg888	平・断面図、出土遺物実測図	235
第197图	SKg778	平・断面図、出土遺物実測図	192	第248图	SKg891・892	平・断面図	236
第198图	SKg781	平・断面図	192	第249图	SKg891・892	出土遺物実測図	236
第199图	SKg781	出土遺物実測図	193	第250图	SKg896	平・断面図、出土遺物実測図	237
第200图	SKg783	平・断面図	194	第251图	SKg898	平・断面図、出土遺物実測図	237
第201图	SKg783	出土遺物実測図(1)	195	第252图	SEg01	平・断面図	238
第202图	SKg783	出土遺物実測図(2)	196	第253图	SEg01	出土遺物実測図	239
第203图	SKg783	出土遺物実測図(3)	197	第254图	SEg02	平・断面図	240
第204图	SKg783	出土遺物実測図(4)	198	第255图	SEg03	平・断面図	241
第205图	SKg783	出土遺物実測図(5)	199	第256图	SEg03	出土遺物実測図	242
第206图	SKg783	出土遺物実測図(6)	200	第257图	SEg04	平・断面図	243
第207图	SKg783	出土遺物実測図(7)	201	第258图	SEg04	出土遺物実測図	244
第208图	SKg783	出土遺物実測図(8)	202	第259图	SEg05	平・断面図	245
第209图	SKg783	出土遺物実測図(9)	203	第260图	SEg05	出土遺物実測図	246
第210图	SKg783	出土遺物実測図(10)	204	第261图	SEg06	平・断面図	247
第211图	SKg785	平・断面図	205	第262图	SEg06	出土遺物実測図	248
第212图	SKg785	出土遺物実測図	206	第263图	SEg08	平・断面図	249
第213图	SKg794	平・断面図、出土遺物実測図	207	第264图	SEg09	平・断面図、出土遺物実測図	250
第214图	SKg795	平・断面図	208	第265图	SEg11	平・断面図、出土遺物実測図	252
第215图	SKg795	出土遺物実測図(1)	209	第266图	SEg12	平・断面図、出土遺物実測図	251
第216图	SKg795	出土遺物実測図(2)	210	第267图	SXg05	平・断面図	254
第217图	SKg795	出土遺物実測図(3)	211	第268图	SXg05	出土遺物実測図(1)	255
第218图	SKg795	出土遺物実測図(4)	212	第269图	SXg05	出土遺物実測図(2)	256
第219图	SKg796	平・断面図、出土遺物実測図	213	第270图	SXg05	出土遺物実測図(3)	257
第220图	SKg798	平・断面図、出土遺物実測図	214	第271图	SXg05	出土遺物実測図(4)	258
第221图	SKg799	平・断面図、出土遺物実測図	215	第272图	SXg05	出土遺物実測図(5)	259
第222图	SKg805	平・断面図、出土遺物実測図	216	第273图	SXg05	出土遺物実測図(6)	260
第223图	SKg807	平・断面図、出土遺物実測図	216	第274图	SXg06	平・断面図	263
第224图	SKg809	平・断面図、出土遺物実測図	216	第275图	SXg06	出土遺物実測図(1)	264
第225图	SKg812	平・断面図	217	第276图	SXg06	出土遺物実測図(2)	265
第226图	SKg812	出土遺物実測図(1)	218	第277图	SXg06	出土遺物実測図(3)	266
第227图	SKg812	出土遺物実測図(2)	219	第278图	SXg06	出土遺物実測図(4)	267
第228图	SKg812	出土遺物実測図(3)	220	第279图	SXg06	出土遺物実測図(5)	268
第229图	SKg812	出土遺物実測図(4)	221	第280图	SXg06	出土遺物実測図(6)	269
第230图	SKg813	平・断面図、出土遺物実測図	222	第281图	SXg06	出土遺物実測図(7)	270
第231图	SKg815	平・断面図、出土遺物実測図	223	第282图	SXg06	出土遺物実測図(8)	271
第232图	SKg816	平・断面図、出土遺物実測図	224	第283图	SXg06	出土遺物実測図(9)	272
第233图	SKg824	平・断面図、出土遺物実測図	224	第284图	SXg10	平・断面図	274
第234图	SKg826	平・断面図、出土遺物実測図	224	第285图	SXg10	出土遺物実測図(1)	275
第235图	SKg827	平・断面図、出土遺物実測図	225	第286图	SXg10	出土遺物実測図(2)	276
第236图	SKg831	平・断面図	225	第287图	SXg17	平・断面図、出土遺物実測図	277
第237图	SKg831	出土遺物実測図(1)	226	第288图	SPg475・550	出土遺物実測図	278

第289図	時代別変遷図 (1/800)	285
第290図	近世遺構変遷図 (1/1,500)	287
第291図	明治21年地籍図と調査区配置図 (1/1,500)	288
第292図	遺構検出面地形図 (1/1,500、10cm コンター)	288

写真図版目次

遺構写真

Page 1	1	弥生土坑群全景 (南から)	48	SDg20土層断面 (南から)
	2	弥生土坑群全景 (南から)	Page 17	49 SDg24-C土層断面 (南から)
	3	弥生土坑群全景 (北から)	50	SDg24-B土層断面 (南から)
Page 2	4	弥生土坑群全景 (南から)	51	SDg15土層断面 (東から)
	5	弥生土坑群全景 (南から)	Page 18	52 SDg15 (G ⁷ ロック) 遺物出土状況 (北から)
	6	弥生土坑群全景 (南から)	53	SDg15土層? 攪乱部分 (北から)
Page 3	7	弥生土坑群全景 (南西から)	54	SDg15 (G ⁷ ロック西) 土層断面 (西から)
	8	弥生土坑群全景 (南西から)	Page 19	55 SDg15 (昭和19年埋没) の井ゼキ
	9	弥生土坑群全景 (東から)	56	SDg15 (昭和19年埋没) の井ゼキ
Page 4	10	弥生土坑群全景 (西から)	57	SHg03完掘状況全景 (東から)
	11	調査区全景 (西から)	Page 20	58 SHg03完掘状況全景 (南から)
	12	SDg03全景 (南東から)	59	SHg03上面検出状況 (北から)
Page 5	13	調査区西半部 (南から)	60	SHg03上面検出状況 (南から)
	14	北壁土層断面東半部 (南東から)	Page 21	61 SHg03上面検出状況 (北から)
	15	SHg01全景 (西から)	62	SDg18土層断面 (北から)
Page 6	16	調査区中央部全景 (西から)	63	SDg19-E土層断面 (東から)
	17	SHg02・SHg03全景 (南から)	Page 22	64 SDg19-D土層断面 (北から)
	18	SHg02・SHg03全景 (南から)	65	SHg04上面検出状況 (北から)
Page 7	19	調査区東部全景 (西から)	66	SDg01-K土層断面 (西から)
	20	調査区東部全景 (西から)	Page 23	67 SDg01-I土層断面 (西から)
	21	調査区東部全景 (西から)	68	SDg01-G土層断面 (東から)
Page 8	22	調査区東部全景 (西から)	69	SDg01・03合流部土層 (南から)
	23	SDg82・83全景 (西から)	Page 24	70 SDg03土層断面 (北から)
	24	SDg43全景 (西から)	71	SDg03遺物出土状況 (北から)
Page 9	25	弥生土坑群全景 (西から)		(ミニチュア土器壺)
	26	弥生土坑群全景 (北から)	72	SDg03遺物出土状況 (北から)
	27	弥生土坑群全景 (北から)		(ミニチュア土器壺)
Page 10	28	弥生土坑群全景 (南から)	Page 25	73 SDg03-C土層断面 (南から)
	29	弥生土坑群全景 (北から)	74	SDg03-E土層断面 (北から)
	30	SDg05南半部全景 (北から)	75	SDg03-F土層断面 (北から)
Page 11	31	SDg05南半部全景 (北から)	Page 26	76 SDg14鉄器出土状況 (北から)
	32	調査区西部南側全景 (東から)	77	SDg14-B土層断面 (東から)
	33	調査区西部南側全景 (東から)	78	SDg14-E土層断面 (東から)
Page 12	34	SDg71全景 (西から)	Page 27	79 SDg14-D土層断面 (西から)
	35	SHg01・SBg06完掘状況全景 (南から)	80	SDg14-F土層断面 (北から)
	36	SHg01遺物出土状況 (南から)	81	SDg14-A土層断面 (北から)
Page 13	37	SHg01遺物出土状況 (北から)	Page 28	82 SDg71遺物検出状況 (西から)
	38	SDg08-A土層断面 (北から)	83	SDg71遺物検出状況 (南西から)
	39	SDg08-C土層断面 (北から)	84	SDg71全景 (北から)
Page 14	40	SDg08東部遺物出土状況 (東から)	Page 29	85 SDg71遺物検出状況 (北から)
	41	SDg08-B土層断面 (東から)	86	SDg71-F土層断面 (北から)
	42	SHg02完掘状況全景 (北から)	87	SDg71-D土層断面 (東から)
Page 15	43	SHg02完掘状況全景 (北から)	Page 30	88 SDg71遺物検出状況 (東から)
	44	SHg02内中央穴土器出土状況 (東から)	89	SDg71-C土層断面 (東から)
	45	SDg17土層断面 (西から)	90	SDg71-B土層断面 (東から)
Page 16	46	SDg17遺物出土状況(初期須恵器)(西から)	Page 31	91 SDg82・83土層断面 (東から)
	47	SDg17断面 (西から)	92	SDg82・83土層断面 (東から)
			93	SDg82・83土層断面 (東から)

Page 32	94	SDg84(右)SDg91(左)土層断面(東から)	Page 49	145	SKg581遺物出土状況 (南から)
	95	SDg43土層断面 (東から)		146	SKg587遺物出土状況 (南から)
	96	SDg43土器出土状況 (西から)		147	SKg587遺物出土状況 (北から)
Page 33	97	SDg46土層断面 (南から)	Page 50	148	SKg589袋部遺物出土状況 (南から)
	98	SDg67土層断面 (北から)		149	SKg604遺物出土状況 (西から)
	99	SDg73土層断面 (東から)		150	SKg604遺物出土状況細部 (西から)
Page 34	100	SKg012遺物出土状況 (北から)	Page 51	151	SKg606遺物出土状況 (北から)
	101	SKg094遺物出土状況 (南から)		152	SKg606南部遺物出土状況 (西から)
	102	SKg151遺物出土状況 (西から)		153	SKg610西半遺物出土状況 (東から)
Page 35	103	SKg151土層断面 (西から)	Page 52	154	SKg610土層断面 (東から)
	104	SKg163遺物出土状況 (南から)		155	SKg610西端遺物出土状況 (南から)
	105	SKg163土層断面 (南から)		156	SKg621袋部遺物出土状況 (西から)
Page 36	106	SKg232遺物出土状況 (南から)	Page 53	157	SKg631土層断面 (東から)
	107	SKg232遺物出土状況 (北から)		158	SKg631遺物出土状況 (南から)
	108	SKg270土層断面 (北から)		159	SKg657土層断面 (西から)
Page 37	109	SKg270遺物出土状況 (南から)	Page 54	160	SKg657遺物出土状況 (南から)
	110	SKg307土層断面 (南から)		161	SKg679土層断面 (南西から)
	111	SKg307遺物出土状況 (南から)		162	SKg684遺物出土状況 (南から)
Page 38	112	SKg308土層断面 (南から)	Page 55	163	SKg692遺物出土状況 (北から)
	113	SKg308遺物出土状況 (南から)		164	SKg693遺物出土状況 (北から)
	114	SKg344遺物出土状況 (北から)		165	SKg697西半遺物出土状況 (東から)
Page 39	115	SKg358土層断面 (南から)	Page 56	166	SKg697遺物出土状況 (西から)
	116	SKg370遺物出土状況 (東から)		167	SKg697遺物出土状況 (西から)
	117	SKg379遺物出土状況 (北から)		168	SKg753土層断面 (東から)
Page 40	118	SKg379土層断面 (西から)	Page 57	169	SKg753全景 (東から)
	119	SKg393遺物出土状況 (東から)		170	SKg767遺物出土状況 (北から)
	120	SKg401遺物出土状況 (南から)		171	SKg767土層断面 (北から)
Page 41	121	SKg401遺物出土状況 (南から)	Page 58	172	SKg771遺物出土状況 (北から)
	122	SKg404遺物出土状況 (北から)		173	SKg771遺物出土状況 (北から)
	123	SKg404遺物出土状況 (南から)		174	SKg776土層断面 (北から)
Page 42	124	SKg410遺物出土状況 (北から)	Page 59	175	SKg776遺物出土状況 (北から)
	125	SKg412遺物出土状況 (南から)		176	SKg776甕B口縁部・甕B下小石出土状況 (南から)
	126	SKg414遺物出土状況 (北から)		177	SKg776甕C出土状況 (南から)
Page 43	127	SKg415遺物出土状況 (西北から)	Page 60	178	SKg776土器の下の詰石出土状況 (西から)
	128	SKg419遺物出土状況 (北から)		179	SKg818土器の下の詰石出土状況 (西から)
	129	SKg419遺物出土状況 (北から)		180	SKg818土層断面 (北から)
Page 44	130	SKg431遺物出土状況 (南から)	Page 61	181	SKg818遺物出土状況 (西から)
	131	SKg443遺物出土状況 (南から)		182	SBg02全景 (北から)
	132	SKg445・446遺物出土状況 (南から)		183	SBg05全景 (南から)
Page 45	133	SKg447遺物出土状況 (南から)	Page 62	184	SBg06上面検出状況 (南から)
	134	SKg447遺物出土状況 (南から)		185	SBg20・21全景 (北から)
	135	SKg449土層断面 (北から)			中世掘立柱建物
Page 46	136	SKg449土層断面 (東から)		186	SBg21完掘状況 (南から)
	137	SKg449遺物出土状況 (西から)	Page 63	187	SBg28完掘状況 (南から)
	138	SKg453土層断面 (南から)		188	SBg09土層断面 (北から)
Page 47	139	SKg453遺物出土状況 (北から)		189	SBg09-D土層断面 (北から)
	140	SKg553全景 (北から)	Page 64	190	SBg09-C土層断面 (北から)
	141	SKg553遺物出土状況 (西から)		191	SDg09完掘状況 (南から)
Page 48	142	SKg567土層断面 (南から)		192	SDg09全景 (南から)
	143	SKg575遺物出土状況 (西から)			
	144	SKg581袋部遺物出土状況 (北から)			

Page 65	193	SDg28遺物検出状況 (南東から)
	194	SDg31遺物出土状況 (北から)
	195	SDg75・28北畦畔 (南から)
Page 66	196	SDg75・28北畦畔 (南から)
	197	SDg75・28北畦畔 (南から)
	198	SDg04集石検出状況 (南から)
Page 67	199	SDg04集石検出状況 (北から)
	200	SDg05・04土層断面 (北から)
	201	SKg416遺物出土状況 (南から)
Page 68	202	SKg416遺物出土状況 (西から)
	203	SKg673土層断面 (南から)
	204	SEg07全景 (北から)
Page 69	205	SKg796遺物出土状況 (南から)
	206	SKg805遺物出土状況 (南から)
	207	SKg812野壺1・2検出状況 (南から)
Page 70	208	SKg812内SEg05・06 (南西から)
	209	SKg815土器出土状況 (南から)
	210	SKg827遺物出土状況 (南から)
Page 71	211	SKg870土層断面 (南から)
	212	SEg01土層断面 (南から)
	213	SEg02石組検出状況 (東から)
Page 72	214	SEg02断面 (南から)
	215	SEg02土層断面 (南から)
	216	SEg04完掘状況 (南から)
Page 73	217	SKg812内SEg05立面 (北から)
	218	SEg06土層断面 (北から)
	219	SEg06土層断面 (東から)
Page 74	220	SEg09土層断面 (北から)
	221	SEg12土層断面 (南から)
	222	SXg06全景 (西から)
Page 75	223	SXg10土器出土状況 (南から)

遺物写真

Page 1	1	叩石 (20) SHg01
		スクレイパー (179) SDg15
		二次加工ある剥片 (180) SDg15
		楔形石器 (87) SDg17
		剥片 (88) SDg17
		打製石包丁 (86) SDg17
	2	弥生土器 広口壺 (89) SDg15
	3	弥生土器 広口壺 (98) SDg15
Page 2	4	弥生土器 広口壺 (100) SDg15
	5	弥生土器 広口壺 (101) SDg15
	6	弥生土器 甕 (109) SDg15
Page 3	7	弥生土器 甕 (122) SDg15
	8	弥生土器 甕 (127) SDg15
	9	弥生土器 高杯 (163) SDg15
Page 4	10	弥生土器 高杯 (172) SDg15
	11	弥生土器 中形鉢 (173) SDg15
	12	楔形石器 (456) SDg31
		砥石 (488) SEg05

		石鏃 (608) SDg05
		楔形石器 (455) SDg09
		スクレイパー (454) SDg09
		石鏃 (240) SDg05
Page 5	13	砥石 (241) SDg71
		硯 (939) SDg86
	14	弥生土器 高杯 (262) SKg379
	15	弥生土器 高杯 (267) SKg395
Page 6	16	弥生土器 高杯 (287) SKg419
	17	叩石 (295) SKg453
		叩石 (339) SKg776
		砥石 (1279) SKg885
	18	弥生土器 広口長頸壺 (304) SKg587
Page 7	19	弥生土器 高杯 (309) SKg604
	20	弥生土器 鉢 (315) SKg610
	21	弥生土器 高杯 (329) SKg684
Page 8	22	弥生土器 器台 (343) SKg818
	23	土師質土器 小皿 (360) SPg657
		土師質土器 杯 (353) SPg657
	24	土師質土器 小皿 (354) SPg663
		土師質土器 小皿 (355) SPg663
		土師質土器 小皿 (356) SPg663
Page 9	25	東藩系捏鉢 (365) SPg663
	26	土師器杯 (368) SPg859
	27	磁器 碗 (372) SPg733
Page 10	28	須恵器 碗 (415) SDg04
	29	黒色土器 碗 (440) SDg43
	30	弥生土器 高杯 (458) SKg416
Page 11	31	土師器杯 (462) SEg07
		土師器杯 杯 (461) SEg07
		土師器杯 杯 (465) SEg07
		土師器杯 小皿 (478) SEg07
		土師器杯 小皿 (476) SEg07
		土師器杯 小皿 (473) SEg07
		土師器杯 小皿 (472) SEg07
	32	砥石 (487) SEg07
	33	土師器 皿 (496) SPg114
Page 12	34	土師器 碗 (496) SPg134
	35	須恵質土器 杯 (511) SPg668
	36	土師質土器 鉢 (526) SDg02
Page 13	37	石鍋 (536) SDg02
		砥石 (537) SDg02
		砥石 (609) SDg05
		硯 (872) SDg29
		硯 (535) SDg02
	38	磁器 小鉢 (549) SDg05
	39	磁器 小鉢 (549) SDg05
Page 14	40	磁器 香炉 (557) SDg05
	41	磁器 杯 (570) SDg05
	42	軟質陶器 蓋 (573) SDg05
Page 15	43	陶器 片口鉢 (580) SDg05

	44	陶器	片口鉢 (580)	SDg05		Page 32	94	陶器	甕 (929)	SDg86
	45	磁器	碗 (619)	SDg29			95	石臼 (下臼)	(940)	SDg86
Page 16	46	磁器	碗 (620)	SDg29			96	分銅 (1267)	SKg840	
	47	磁器	碗 (621)	SDg29				鋤先 (1266)	SKg840	
	48	磁器	碗 (621)	SDg29				鋤先 (1228)	SKg812	
Page 17	49	磁器	碗 (622)	SDg29				煙管 (943)	SKg674	
	50	磁器	碗 (631)	SDg29	Page 33	97	陶器	鉢 (945)	SKg778	
	51	磁器	碗 (632)	SDg29		98	磁器	碗 (954)	SKg783	
Page 18	52	磁器	碗 (633)	SDg29		99	陶器	鉢 (951)	SKg781	
	53	磁器	皿 (645)	SDg29	Page 34	100	陶器	鉢 (951)	SKg781	
	54	磁器	碗 (647)	SDg29		101	磁器	碗 (954)	SKg783	
Page 19	55	磁器	皿 (661)	SDg29		102	磁器	碗 (954)	SKg783	
	56	磁器	蓋 (668)	SDg29	Page 35	103	磁器	碗 (965)	SKg783	
	57	磁器	蓋 (668)	SDg29		104	磁器	碗 (969)	SKg783	
Page 20	58	磁器	皿 (673)	SDg29		105	磁器	碗 (973)	SKg783	
	59	磁器	皿 (673)	SDg29	Page 36	106	磁器	皿 (984)	SKg783	
	60	磁器	皿 (676)	SDg29		107	磁器	蓋 (986)	SKg783	
Page 21	61	磁器	鉢 (579)	SDg29		108	磁器	蓋 (986)	SKg783	
	62	磁器	鉢 (679)	SDg29	Page 37	109	磁器	碗 (994)	SKg783	
	63	磁器	香炉 (684)	SDg29		110	陶器	灯明皿 (1007)	SKg783	
Page 22	64	磁器	灰吹きor花生 (690)	SDg29		111	陶器	蓋 (1009)	SKg783	
	65	磁器	水滴 (692)	SDg29	Page 38	112	軟質陶器	把手 (1010)	SKg783	
	66	磁器	油壺 (693)	SDg29		113	陶器	灯火具 (1011)	SKg783	
Page 23	67	磁器	仏飯器 (697)	SDg29		114	陶器	火入れ (1013)	SKg783	
	68	磁器	碗 (706)	SDg29	Page 39	115	陶器	火入れ (1013)	SKg783	
	69	磁器	碗 (708)	SDg29		116	陶器	火入れ (1014)	SKg783	
Page 24	70	陶器	瓶 (721)	SDg29		117	陶器	鉢 (1027)	SKg783	
	71	陶器	蓋 (730)	SDg29	Page 40	118	陶器	瓶or甕 (1035)	SKg783	
	72	陶器	皿 (761)	SDg29		119	陶器	瓶or甕 (1035)	SKg783	
Page 25	73	陶器	皿 (761)	SDg29		120	陶器	土瓶 (1036)	SKg783	
	74	陶器	瓶 (784)	SDg29	Page 41	121	陶器	土瓶 (1038)	SKg783	
	75	陶器	水入れor香炉 (789)	SDg29		122	焼締陶器	摺鉢 (1044)	SKg783	
Page 26	76	陶器	摺鉢 (822)	SDg29		123	土師質土器	浅鉢 (1051)	SKg783	
	77	土師質土器	火鉢 (831)	SDg29	Page 42	124	土師質土器	浅鉢 (1052)	SKg783	
	78	土師質土器	十能 (842)	SDg29		125	土師質土器	火消壺蓋 (1066)	SKg783	
		土師質土器	十能 (843)	SDg29		126	土師質土器	七厘 (1090)	SKg785	
Page 27	79	土師質土器	竈 (860)	SDg29	Page 43	127	磁器	碗 (1104)	SKg795	
	80	瓦質土器	火鉢 (865)	SDg29		128	磁器	碗 (1104)	SKg795	
	81	瓦質土器	焜炉 (871)	SDg29		129	陶器	鉢 (1142)	SKg795	
Page 28	82	石臼 (下臼)	(873)	SDg29	Page 44	130	陶器	鉢 (1143)	SKg795	
	83	陶器	灯明皿 (893)	SDg47		131	陶器	瓶 (1149)	SKg795	
	84	陶器	灯明皿 (894)	SDg47		132	瓦質土器	羽釜 (1189)	SKg812	
Page 29	85	陶器	灯明皿 (895)	SDg47	Page 45	133	瓦質土器	鍋 (1191)	SKg812	
	86	陶器	瓶 (896)	SDg47		134	磁器	火入れ (1201)	SKg812	
	87	磁器	火入れ (919)	SDg86		135	磁器	丸碗蓋 (1202)	SKg812	
Page 30	88	磁器	火入れ (919)	SDg86	Page 46	136	陶器	碗 (1203)	SKg812	
	89	磁器	皿 (921)	SDg86		137	陶器	碗 (1203)	SKg812	
	90	陶器	鉢 (924)	SDg86		138	陶器	碗 (1204)	SKg812	
Page 31	91	陶器	鉢 (924)	SDg86	Page 47	139	陶器	小杯 (1207)	SKg812	
	92	陶器	灯明皿 (925)	SDg86		140	陶器	小杯 (1208)	SKg812	
	93	陶器	甕 (929)	SDg86		141	陶器	碗 (1209)	SKg812	

Page 48	142	軟質陶器 鉢 (1248)	SKg831
	143	焼締陶器 甕 (1252)	SKg831
	144	陶器 瓶 (1253)	SKg831
Page 49	145	石臼 (下臼) (1270)	SKg843
		石臼 (上臼) (1269)	SKg843
	146	磁器 鉢 (1273- 2)	KSg885
	147	磁器 鉢 (1273- 2)	SKg885
Page 50	148	磁器 火入れ (1275)	SKg885
	149	磁器 火入れ (1275)	SKg885
	150	陶器 碗 (1297)	SEg03
Page 51	151	磁器 碗 (1302)	SEg04
	152	磁器 小杯 (1305)	SEg04
	153	磁器 小杯 (1325)	SEg09
Page 52	154	陶器 碗 (1328)	SEg09
	155	陶器 碗 (1328)	SEg09
	156	陶器 碗 (1334)	SEg12
Page 52	157	磁器 小碗 (1336)	SXg05
		磁器 紅皿 (1340)	SXg05
	158	陶器 碗 (1352)	SXg05
	159	陶器 碗 (1353)	SXg05
Page 53	160	陶器 碗蓋 (1354)	SXg05
	161	陶器 碗蓋 (1354)	SXg05
	162	陶器 碗蓋 (1354)	SXg05
Page 54	163	陶器 碗 (1355)	SXg05
	164	陶器 碗 (1357)	SXg05

	165	陶器 碗 (1358)	SXg05
		陶器 碗 (1360)	SXg05
		陶器 鉢 (1369)	SXg05
Page 55	166	軟質陶器 仏花瓶 (1373)	SXg05
	167	陶器 瓶 (1385)	SXg05
	168	軟質陶器 鉢 (1392)	SXg05
Page 56	169	土師質土器 焙烙 (1398)	SXg05
	170	磁器 小杯 (1433)	SXg06
	171	磁器 瓶 (1450)	SXg06
Page 57	172	磁器 瓶 (1453)	SXg06
	173	陶器 德利 (1483)	SXg06
	174	陶器 德利 (1483)	SXg06
Page 58	175	石臼 (上臼) (1536)	SXg06
	176	砥石 (1541)	SXg06
		砥石 (1542)	SXg06
		硯 (1537)	SXg06
		砥石 (1540)	SXg06
	177	砥石 (1539)	SXg06
		砥石 (1543)	SXg06
		砥石 (1544)	SXg06
Page 59	178	砥石 (1538)	SXg06
	179	砥石 (1545)	SXg06
	180	砥石 (1546)	SXg06
Page 60	181	磁器 碗 (1547)	SXg10

表目次

第1表	調査組織表	2
第2表	空港跡地遺跡各地区の調査概要	8
第3表	調査区分・年度別調査工程表	18
第4表	整理作業工程表	19
第5表	主要遺構の土器・陶磁器器種構成表	292
第6表	土坑一覧表	293
第7表	土器観察表	309
第8表	石器観察表	356
第9表	金属観察表	356
第10表	古銭観察表	356
第11表	軒平瓦観察表	357
第12表	丸瓦観察表	357
第13表	平瓦観察表	357
第14表	軒丸瓦観察表	357
第15表	軒棧観察表	358
第16表	木器観察表	358
第17表	埴観察表	358

付図目次

付図1	調査区全体図
付図2	弥生土坑群配置図

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

1 遺跡の発見

(1) 空港跡地遺跡と高松東道路建設事業関連調査

香川県教育委員会が昭和62年度に開始した高松東道路の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和63年度からは財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに業務が受け継がれ、平成5年6月に終了した。その結果、6遺跡、169,880㎡に及ぶ範囲で旧石器時代から江戸時代までの遺跡内容が明らかにされ、高松平野中央部における地域史に新たな知見を加えた。

特に、当該地域に広範囲に認められる方格地割について、従来いわゆる条里制下に施工時期を求め得る土地区画施設の遺構とする見解が主導的であり、全遺跡でその成立の背景を考察するための資料が得られたことから、空港跡地の対象地域内部に関連する資料が包蔵されていることが推測された。

さらに、高松東道路建設に伴う発掘調査は、巨視的には同平野に東西総延長約5kmの帯状の試掘溝を掘削したことになり、対象地域の周辺部における遺跡の様相を推察することが可能となった。

さて、高松東道路建設事業関連遺跡のなかで、とりわけ空港跡地遺跡の存在を暗示したのは高松市林町林・坊城遺跡である。同遺跡は空港跡地の北方約1kmに所在する、網文時代晩期と弥生時代後期を中心とする時期の遺跡である。特に、縄文時代晩期に比定された自然河川跡から稲作に用いられたことを示唆する木製農耕具が出土し、同河川跡の周辺に集落跡、あるいは水田跡等の生産域が存在することを予測させるのに十分であるとともに、同流路が南西から北東方向に延びることから、その上流部が空港跡地の内部においても検出されることが期待された。

次に、同市東山崎町東山崎・水田遺跡で検出された室町時代後期の方形のまとまりを有する居住遺構は、方格地割の一部分を占有し、しかも周囲に大型の溝状遺構を伴っていることから、今日の集落形態との比較研究の格好の素材と考えられた。したがって、同一基軸により形成された方格地割が認められる空港跡地内部においても同様の集落遺跡の存在が予測された。

さらに、同市太田下町太田下・須川遺跡で検出された5世紀終末～6世紀前半頃の集落跡は、大阪府陶邑窯跡産出の須恵器が採取されたことから、近傍に関連集団が存在したと考えられた。

(2) 空港跡地遺跡と太田第2土地区画整理事業関連調査

高松東道路建設事業関連の遺跡群とともに、空港跡地遺跡の発見に重要な示唆を与えたのが高松市を事業主体とする太田第2土地区画整理事業地内の高松東道路用地部分と都市計画道路福岡多肥下町線用地部分の遺跡群の調査結果である。

同事業は、平成元年度に林町浴・長池遺跡の調査に始まり、平成4年度の太田下町、伏石町所在の蛙股遺跡まで、9遺跡、総面積45,200㎡の範囲が対象とされた。

このうち、浴・松ノ木遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、居石遺跡、蛙股遺跡、凹原遺跡は空港跡地から直線距離約1～2kmの至近距離に位置することから、同地域に関連する遺跡が所在する可能性が高いと判断された。

なかでも、凹原遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代初期の竪穴住居跡を主体とした集落遺跡であり、調査

第1表 調査組織票

	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度
香川県教育委員会 事務局文化行政課	<p>課長 太田彰一 課長補佐 菅原良弘 副主幹 野瀬朝二郎 係長 宮内憲生 主任主事 横田秀幸 主任主事 水本久美子 (~5.31) 主事 石川恵三子 (6.11~)</p> <p>埋蔵文化財 係長 大山真充 主任技師 岩橋 孝 技師 北山健一郎</p>	<p>課長 中村 仁 主幹 菅原良弘 課長補佐 小原克己 (6.1~) 係長 宮内憲生 (~5.31) 主任主事 横田秀幸 (~5.31) 主事 桜木新士 (6.1~) 主事 石川恵三子</p> <p>埋蔵文化財 係長 藤好史郎 主任技師 岩橋 孝 技師 北山健一郎</p>	<p>課長 中村 仁 主幹 菅原良弘 課長補佐 小原克己 (~5.31) 係長 宮内憲生 (6.1~) 主任主事 源田和幸 主事 桜木新士 主事 石川恵三子</p> <p>埋蔵文化財 係長 藤好史郎 主任技師 國木健司 技師 北山健一郎</p>	<p>課長 中村 仁 主幹 菅原良弘 主幹兼課長補佐 小原克己 係長 源田和幸 主事 桜木新士 主事 石川恵三子 (~5.31) 主事 藤原和子 (6.1~)</p> <p>埋蔵文化財 係長 藤好史郎 主任技師 國木健司 技師 森下英治</p>
(財)香川県埋蔵文化財調査セ ンター	<p>所長 十川 泉 次長 安藤道雄 係長 加藤正司 主査 山地 修 主任主事 斎藤政好 主事 前田輝夫 係長 廣瀬常雄 主任技師 渡邊茂智 技師 宮崎哲治 技師 佐藤竜馬 調査技術員 間瀬 香</p>	<p>所長 松本豊胤 次長 安藤道雄 係長 加藤正司 (~5.31) 係長 土井茂樹 (6.1~) 主査 山地 修 (~5.31) 係長 今田 修 (6.1~) 主任主事 斎藤政好 主事 篠丸 博 係長 廣瀬常雄 文化財専門員 西村尋文 主任技師 榎松邦浩 主任技師 大西義則 主任技師 真鍋嘉宏 主任技師 渡邊茂智 主任技師 西岡達哉 主任技師 真下拓也 技師 濱野圭司 技師 山本主税 技師 森 格也 技師 木下晴一 技師 山下平重 技師 森下英治 技師 佐藤竜馬 調査技術員 高橋佳緒里 調査技術員 多田政弘 調査技術員 今井由記子 調査技術員 間瀬 香 調査技術員 白川悦代</p>	<p>所長 松本豊胤 次長 市原敏則 係長 土井茂樹 係長 今田 修 主任主事 斎藤政好 主事 糸目末夫 係長 大山真充 文化財専門員 中川芳和 文化財専門員 土佐修治 文化財専門員 西岡達哉 主任技師 片桐孝浩 技師 森下友子 技師 市村拓二 技師 濱野圭司 技師 木下晴一 技師 山元素子 技師 清水 渉 技師 蔵本晋司 技師 佐藤竜馬 調査技術員 今井由記子 調査技術員 森澤千尋 調査技術員 白川芳彦 調査技術員 井原靖子 調査技術員 安藤くに子 調査技術員 吉田圭子 (~6.25)</p>	<p>所長 松本豊胤 次長 真鍋隆幸 係長 土井茂樹 (~5.31) 係長 今田 修 (6.1~) 係長 上林和明 (6.1~) 主任主事 斎藤政好 (~5.31) 主任主事 西村厚二 (6.1~) 主事 糸目末夫 係長 大山真充 文化財専門員 高月 計 主任技師 山元素子 主任技師 蔵本晋司 主任技師 佐藤竜馬 技師 濱野圭司 技師 山本主税 調査技術員 高橋佳緒里 調査技術員 森澤千尋 調査技術員 安川彰司 調査技術員 松村照浩</p>

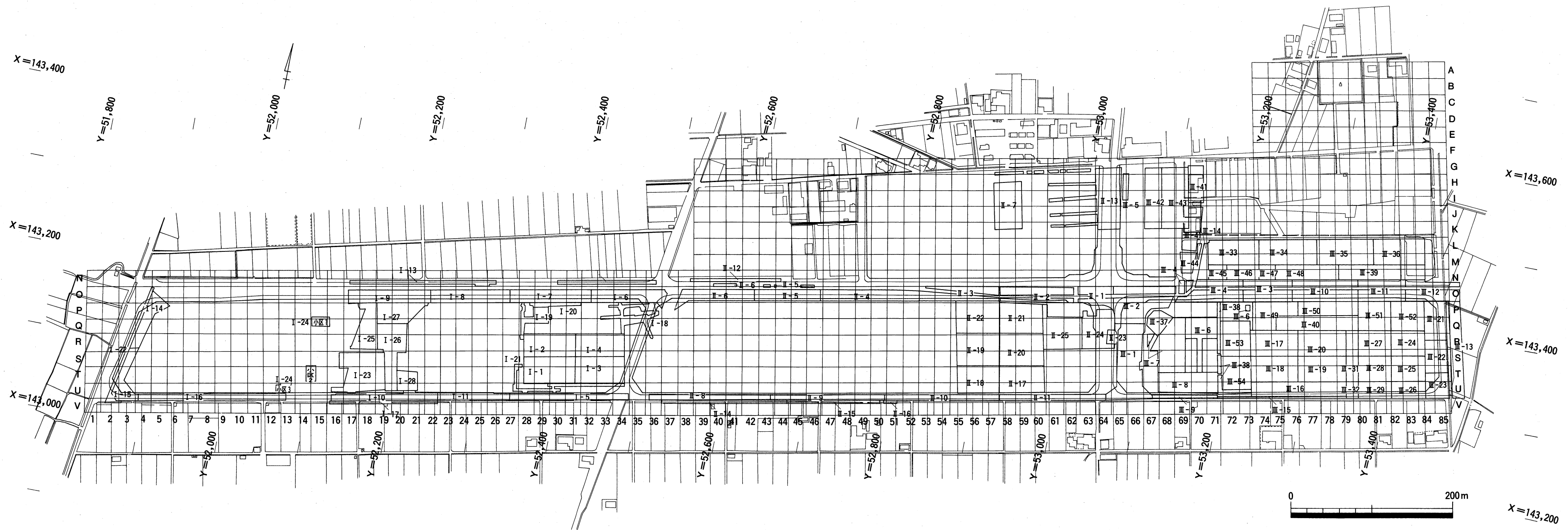
<p>香川県教育委員会 事務局文化行政課</p>	<p>平成6年度 総括 課長 高木 尚 主幹 小原克己 課長補佐 高木一義 係長 源田和幸 主査 星加宏明 主事 高倉秀子 埋蔵文化財 係長 藤好史郎 主任技師 國木健司 主任技師 森下英治</p>	<p>平成8年度 総括 課長 藤原彰夫 課長補佐 高木一義 副主幹 渡部明夫 係長 山崎 隆 主査 星加宏明 主事 打越和美 埋蔵文化財 文化財専門員 木下晴一 技師 塩崎誠司</p>	<p>平成9年度 総括 課長 菅原良弘 課長補佐 北原和利 副主幹 渡部明夫 係長 山崎 隆 主査 松村崇史 主事 打越和美 埋蔵文化財 文化財専門員 木下晴一 技師 塩崎誠司</p>	<p>平成13年度 総括 課長 北原和利 文化財グループ 副主幹 大山真充 主任 西岡達哉 文化財専門員 古野徳久 文化財専門員 宮崎哲治</p>
<p>(財)香川県埋蔵文化財調査セン ター</p>	<p>総括 所長 松本豊胤 次長 真鍋隆幸 係長 別枝義昭 係長 土井茂樹 (~5.31) 係長 前田和也 (6.1~) 主任主事 西村厚二 主事 西村厚二調査 主事 糸目未夫 主任文化財専門員 渡部明夫 係長 大山真充 文化財専門員 谷畑雅稔 主任技師 蔵本晋司 調査技師 陶山仁美</p>	<p>総括 所長 大森忠彦 次長 小野善範 係長 別枝義昭 主任主事 前田和也 主事 西川 大 主事 佐々木隆司 主事 近藤和史 主任文化財専門員 廣瀬常雄 主任文化財専門員 大山真充 文化財専門員 西村尋文 文化財専門員 宮崎哲治 主任技師 多田 慎 調査技師 森澤千尋</p>	<p>総括 所長 大森忠彦 次長 小野善範 係長 別枝義昭 (~5.31) 副主幹兼係長 前田和也 (6.1~) 主任主事 西川 大 主事 細川信哉 主事 近藤和史 主任文化財専門員 藤好史郎 文化財専門員 山元素子 文化財専門員 池田道雄 調査技師 藤澤正則</p>	<p>総括 所長 小原克己 次長 川原裕尊 係長 河野浩征 副主幹 大西誠治 係長 多田敏弘 主査 山本和代 主任主事 高木康晴 主任文化財専門員 真鍋昌宏 文化財専門員 蔵本晋司</p>



第1図 遺跡位置図 (1/100,000)

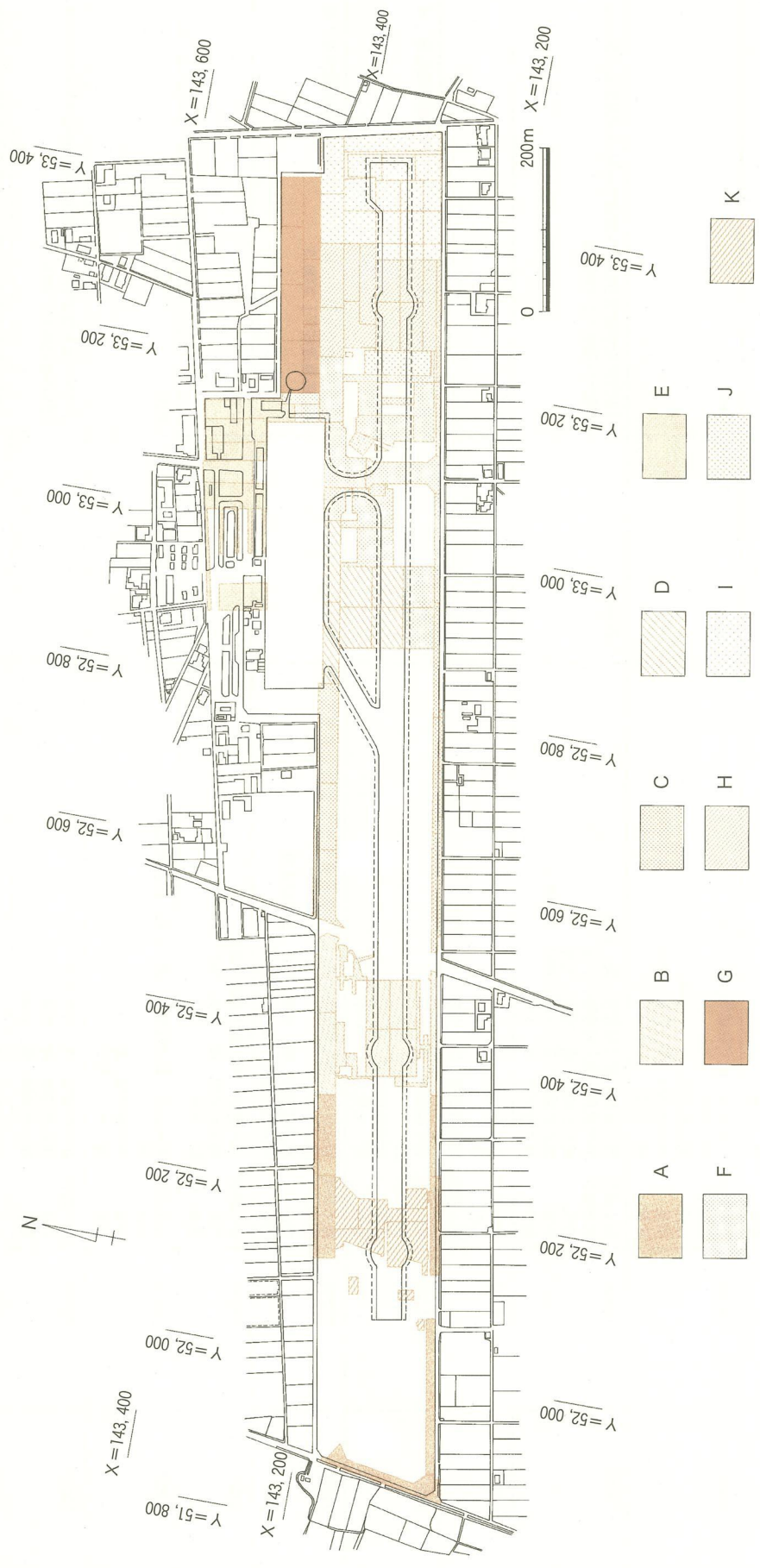
対象地の東南部において検出された自然河川跡を東限とする集落範囲が想定された。この自然河川跡については跡地西端部の通称分ヶ池から、下池、長池、大池に連続する旧香東川から分岐した流路跡の西岸斜面の一部に相当すると予測されたことから、特に集落の激増と拡大化傾向がみられる同時期において、上記集落と河川を挟んで対峙する空港跡地の埋没微高地上に集落遺跡の存在が想定されたのである。

さらに、同河川跡の延長部分は浴・松ノ木遺跡西部と浴・長池遺跡東部において最大幅約150mの流路に変化することが判明したが、特筆すべきは弥生時代以降現代に至るまでの長期間にわたり、流路の埋積過程において内部を水田として利用してきたことが確認された点であった。このように自然河川の埋積過程における、流路の水田利用については、昭和60年度の坂出市下川津遺跡の調査において初めて確認されて以来、県下に類例の増加をみることができるようになった。したがって、埋没微高地と埋没河川が網目状に交差する空港跡地内部においても、集落遺跡のほか、水田遺構などの生産遺跡の存在も予測された。



調査区割図 (1/4,000)

第2図 調査区割・位置図



第3区 整理報告地区割図

第2表 空港跡地遺跡各地区の調査概要

地区名	面積 (㎡)	主要遺構	主要遺物	報告書
A地区	12,200	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世 竪穴住居、溝、土坑、自然河川 竪穴住居、前方後円形・前方後方形・方形周溝墓 溝、土坑、水田 溝、土坑、水田 溝、土坑	銅剣・銅鐻	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 空港跡地遺跡Ⅴ』2002.3
B地区	16,033	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世 竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑 竪穴住居 掘立柱建物、溝、土坑墓 掘立柱建物、溝、土坑、井戸 溝、土坑		未刊
C地区	11,890	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世 竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑 竪穴住居、掘立柱建物、土坑 掘立柱建物、溝、井戸、土坑 掘立柱建物、溝、土坑、井戸、自然河川 掘立柱建物、溝、土坑	二彩陶器	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 空港跡地遺跡Ⅰ』1996.12
D地区	12,567	弥生時代 古代 中～近世 掘立柱建物、溝		未刊
E地区	14,599	弥生時代 古墳時代 中世 近世 掘立柱建物、溝、土坑 掘立柱建物 掘立柱建物？ 溝、土坑、井戸、出水状遺構	人形土製品	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ』1997.9
F地区	27,836	弥生時代 古代 中世 近世 竪穴住居、掘立柱建物、溝 溝 掘立柱建物、溝、土坑、井戸、出水状遺構 掘立柱建物？、溝、土坑、井戸		『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』2000.3
G地区	13,280	弥生時代 中世 近世 竪穴住居、溝、粘土探掘土坑群 掘立柱建物、溝、土坑、井戸 溝、土坑		本書
H地区	19,375	弥生時代 古代 中世 近世 竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、出水状遺構 溝 掘立柱建物、溝 溝、土坑、井戸	鐵形木製品	未刊
I地区	20,205	弥生時代 中世 近世 掘立柱建物、溝、自然河川 掘立柱建物、溝、土坑 掘立柱建物、溝、土坑		『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 空港跡地遺跡Ⅲ』1998.10
J地区	2,780	古代 中世 近世 掘立柱建物、溝 掘立柱建物、土坑 掘立柱建物、土坑		『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡』1997.3
K地区	12,200	弥生時代 古代 中世 近世 円形周溝墓、溝、土坑、自然河川 溝 溝、土坑 ため池、木樋		(香川大学工学部用地) 未刊

(3) 空港跡地遺跡と弘福寺領讃岐国山田郡田岡関連調査

従前より、大川郡志度町多和文庫蔵の「重要文化財 弘福寺領讃岐国山田郡田岡」については高松市林町と木太町境の通称大池周辺地域と、林町と多肥下町境の通称分ヶ池周辺地域を描写した条里制研究の第1級絵画資料として評価する見解があった。当該地域が太田第2土地区画整理事業区域内部に包括されることから高松市教育委員会では、昭和61年度の詳細分布調査に引続き、昭和62年度～平成3年度に同地域で考古学、文献史学、地理学、民俗学等の方法を導入した総合調査を実施した。

南地区と呼称された分ヶ池周辺地域において、空港跡地に隣接して北西部に3地点、南西部に1地点が選定されて調査が実施された。調査範囲は狭小であったが、自然堤防状の自然遺構、郡境界線に関連する畦畔状遺構、坪境界線との関連性が指摘できる溝状遺構等が検出された。これらの遺構の全体規模を復元する情報が欠如しているが、大部分が広域に及ぶ可能性を有していたことから、比定地全域に同様な遺構が埋没していると推測することができた。

2 調査に至る経過

香川県教育委員会が、取り組んだ瀬戸大橋建設に伴う調査事業が終盤を迎えていた昭和62年ごろ、四国横断自動車道（高松～善通寺間）や国道バイパスの建設、あるいはそれらにアクセスする県道の改良工事など、新たな大規模開発の計画が集中して具体化してきた。そのような情勢の中で、香川郡香南町に新空港が建設されることに伴い、供用廃止や再開事業が見込まれる高松市林町の高松空港用地内の埋蔵文化財の包蔵状況やその取り扱いについて、県教育委員会では文化財保護部局として検討を始めた。

高松市林町に約32haの面積を占めていた高松空港跡は、扇状地形として発達してきた高松平野の奥部に位置する。当該地の北方約1kmでは、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが国道11号高松東道路建設に伴って、昭和63年度から継続して埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、周辺の地形や出土している遺物から判断して、空港跡地内にも埋蔵文化財包蔵地が存在することは十分に考えられていた。

高松空港跡地の約32haを含んだ約270haの範囲は、昭和19年1月、第二次世界大戦の終局間際に陸軍の軍用飛行場用地に急遽収用されたらしい。軍事機密であったためであろうか、詳しいデータは不明であるが同年8月には、それまでの農村地帯が計画では東西方向に2本の滑走路をもつ陸軍飛行場用地に造成されている。

香川県は、平成元年12月に高松市林町の高松空港が供用廃止されたこと、当該地を香川県土地開発公社が取得したことに伴い、空港跡地開発整備事業計画を策定した。また、同時に香川県教育委員会では、当該地の埋蔵文化財保護のため、香川県土地開発公社との間に「発掘調査等委託契約書」を結び、それを受けて財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、平成2年4月1日付で香川県教育委員会と「埋蔵文化財調査契約書」を締結し、空港跡地埋蔵文化財調査業務の予備調査に着手した。現地での調査は、平成2年4月1日から同年9月30日までの期間に実施した。

予備調査の結果、跡地西方では弥生時代前期の多量の土器を包含する自然河川と弥生時代後期の竪穴住居跡などの遺構を、中央部では弥生時代及び中世～近代にかけての溝・柱穴などの遺構を、東部及び東北部では弥生時代～近世にかけての遺構を検出した。これらのことから、当該地が濃密な埋蔵文化財包蔵地であることが明らかになった。

香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、香川県企画部地域整備課、香川県土地開発公社の協議の結果、空港跡地開発整備事業に先立ち、当該地の埋蔵文化財保存のために発掘調査を行うことになり、平成2年12月22日から発掘調査に着手した。また、平成3年度からは調査体制を整備・充実し、平成6年度までの5年間で延151,185㎡の発掘調査を実施した。

また、平成8・9年度には、香川大学工学部の設置に伴う調査を実施することになり、計12,200㎡の調査が

行われた。

3 保護措置の基本姿勢

(1) 基盤整備事業

基盤整備事業の中核は、住環境を整備するための道路網と上下水道の整備であるが、後者については、新設道路網の下部に設置されることが決定していたために、単独で埋蔵文化財の保護措置を講じる必要は認められなかった。

計画された道路網としては、旧空港エプロン及び駐車場部分を除く跡地の北辺部分を東西方向に貫く、幅員25mの直線道路（成合町六条線：通称北辺道路）、跡地南辺部分を北辺道路に平行して東西方向に貫く、幅員8mの直線道路（上林町六条線：通称南辺道路）、林・三谷線（旧空港線）の延長道路（幅員28メートル）、跡地西辺部を南北方向に貫く、幅員12mの直線道路（林多肥上町線：通称西辺道路）、市道三谷線の拡幅道路が設計されていた。さらに、幅員5～10mの小規模な直線街路が旧エプロン部分の東西端部と跡地東部地域に建設されることが決定した。

調査の方針は、跡地内部の対象地については調査を実施することに決定した。しかも、工事による掘削が設計幅員よりも広く行われることを考慮して、片側の路肩部分について外方向に幅1mの調査範囲を設定することにより調査区域を設けた。

ところが、これらの多くの施設が既存の施設を拡幅あるいは包括することにより計画されていたために、跡地外部の対象地域については調査途上においても、生活道路として機能を維持していたのである。このため、同地域については、先行した跡地内部の調査結果を考慮して、特に必要とする部分を限定することにより、調査を実施することにした。したがって、最終的には遺構の遺存状態が不良な北辺道路の西部、南辺道路東半部等の既存道路部分に調査を行わない地域が発生した。

なお、市道三谷線の拡幅道路部分については、隧道工事により下部遺構が損傷を受けている事実が判明したために、調査対象地域から除外した。

(2) 香川県立図書館・文書館建設事業

香川県立図書館・文書館（以下「図書館・文書館」と略称する。）は、市道三谷線の西側に隣接して建築される計画であり、工事は建物本体部分と各種配管設備、駐車・輪場、植栽等の付帯施設部分とに分けて実施されることが決定していた。このため、建物の下部については、全面を発掘調査することにし、付帯施設部分は、各種の配管部分と駐輪場用地等の掘削深度が大きい部分についてのみを発掘調査の対象とした。

(3) 四国工業技術研究所建設事業

四国工業技術研究所の用地は、林・三谷線延長道路東側の道路に接した位置であった。図書館・文書館同様、建物本体部分と配管部分、駐輪場用地等の付帯施設部分についての調査を実施することに方針を固めた。

(4) 産業交流センター建設事業

同施設は空港エプロン部分と、ターミナルビル等の空港施設、駐車場等が所在した地域に建設される計画であった。ただし、旧エプロン部分と西側駐車場部分については、造成工事による掘削が著しく、埋蔵文化財の包蔵地としては認められていなかったために、調査の対象範囲から除外されていた。

したがって、建物本体の東側部分と各種配管設備を含む付帯施設部分を全面発掘し、上部施設を伴わない駐車場部分等については、埋蔵文化財を現状保存することに決定した。

(5) 産業頭脳化センター建設事業

建設場所は、林・三谷線延長道路の西側隣接地であり、建物本体部分のみが埋蔵文化財に損傷を及ぼすことが明示されたために調査を実施することに決定した。

(6) 民間分譲地整備事業

民間分譲地として決定していた地域は、林・三谷線延長道路より頭部の四国工業技術研究所用地を除いた地域と、産業頭脳化センター用地の西側隣接地であった。

他の構造物を伴う建設事業については、既にみたとおり、調査開始時期までに工事計画が明らかにされていたために、埋蔵文化財に損傷を及ぼすことが考えられる掘削部分についてのみ記録保存による保護措置を講じることを基本姿勢とすることができたが、当該事業は分譲地の造成行為までを事業範囲としており、構造物の建設計画についてはまったく未確定であったことから、全事業範囲について記録保存の措置を講じることにより、将来発生し得る全ての土地活用方法に対応しえることを配慮することに決定した。

(7) インテリジェントパーク整備事業（香川大学工学部用地）

平成6年度をもって、一段落した空港跡地遺跡の埋蔵文化財発掘調査ではあったが、新たに図書館・文書館の西方部分に香川大学工学部が新設されることに伴って、再びインテリジェントパークの整備が進められることになり、事前調査の必要性が出てきた。そのため、関係諸機関で協議を重ね、平成8年10月1日付で香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとは「埋蔵文化財調査委託契約」を締結した。調査期間は、平成8年10月1日～平成9年11月30日である。

第2節 調査の経過

1 調査体制

空港跡地遺跡の発掘調査は、部分発掘による「予備調査」を平成2年4月1日から同年9月30日までの期間において実施することにより対象範囲を明確にした後、本格的な調査（以下「本調査」と呼称する。）を同年12月22日に着手し、平成6年8月25日に完了した。

その後、図書館・文書館の西側に香川大学工学部が設置されることになり発掘調査を実施したのは前述のとおりである。また、平成13年度に実施した整理作業を含めた調査組織は「第1表調査組織表」のとおりであるが、以下、現場作業時の詳細を記す。

調査組織の構成作業は、まず、予備調査のための調査班を編成することから開始された。調査班は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの所長、次長の総括のもと、派遣職員2名と嘱託職員1名を調査担当とし、これに調査に係る地元折衝等の担当として嘱託参事1名を編成に加えた。また、現場作業に従事する現場作業員は5名程度を雇用了。

また、調査の拠点となる現場事務所を空港跡地内の旧駐車場北側部分に設置した。

平成2年12月に開始された本調査からは、拠点となる現場事務所（通称第1現場事務所）を旧エプロン部分に設置し、跡地中央部における作業の効率化を図る一方、現場作業の専従職員として派遣職員2名を配置した。また、現場事務、現場事務所の維持・管理、資料整理等の作業に従事する整理作業員1名を雇用了。

なお、年度末には市道三谷線の東側に近接した位置に、通称林事務所を設置し、今後の調査に備えるとともに、将来の空港跡地遺跡全体の調査を総括する機能を整備した。

平成3年度は調査対象地域が跡地のほぼ全域に拡大するとともに、調査対象面積も急増した。このために、調査員の増員と体制の強化が計画され、当該年度からは、1班単位の調査員数は派遣職員2名、嘱託職員1名、整理作業員1名の編成の上に、嘱託参事1名と係長1名が林調査事務所へ常勤し、調査全体にかかわる事務処

理のために、同事務所に事務員1名を勤務させた。

他事業との工程調整のために、年度当初から調査に着手したのは3班であった。その後下半期には4班が合流したことにより7班体制となった。拡大した調査地域内において効率的な調査を行うために、跡地東部に通称第2現場事務所を新設した。

平成4年度は、新たに通称西辺道路部分の調査を開始したため、跡地西部に第3現場事務所を設置し、年度当初から5班体制により作業に着手した。また、同年度下半期には1班を追加している。

平成5年度からは、調査範囲の減少に伴い、3班体制に縮小した。

平成6年度は上半期のみの調査期間で、調査範囲も限定された地域であったことから、1班のみの編成により事業を遂行した。

平成8・9年度は1班編成で対応した。

2 調査計画

空港跡地遺跡については、周辺地域における埋蔵文化財調査の成果とその歴史的な環境等を手掛かりとして、相当密度の高い埋蔵文化財包蔵地であると考えられた。

しかしながら、第二次世界大戦中の旧日本陸軍による大規模な土地改変を被ったために、包蔵地の有無を確認する目的で予備調査を実施した。

そして、調査計画の立案作業時に最も重要視しなければならなかったのが、各事業の工事開始時期までの調査終了であったことから、特に早期に着工時期が設定されていた基盤整備事業、図書館・文書館建設事業、四国工業技術研究所建設事業の3事業を考慮し、予備調査は平成2年度上半期に実施し、同年度下半期から本格的な調査に着手することとした。

以下に、予備調査と本調査の計画を分けて記述する。

(1) 予備調査

調査面積は3,200㎡で、空港跡地の総面積約320,000㎡に対する比率は約1%である。

表土層の掘削は重機を使用し、遺物包含層の掘削と遺構の検出作業は人力により行うこととした。そして、東西(南北)方向の区画については、北(東)半部分を遺構検出面まで掘削を中止し、南(西)半部分のみを土層序の確認のために、無遺物層の掘削を継続することにした。また、遺構の精査時においては、必要とする情報が得られる範囲を超えて掘削を進めることは避け、本調査に委ねるよう注意した。

調査の記録は、遺構の検出状態を100分の1の縮尺により平板測量による図化を行い、掘削深度が大きい南(西)半部分の土層序について、壁面を約10m単位に分離し、柱状の地点的な実測を試みることにした。

そして、当該調査区の終了時には、報告書を作成した。

(2) 本調査

予備調査の結果、旧駐車場の西部地域、旧エプロン部分全域、空港跡地西端部の旧溜め池部分を除く広域に埋蔵文化財が包蔵されていることが判明した。したがって、本調査においてはこれらの地域以外の事業箇所において全面調査を実施する必要があることの結論を得た。

事業内容が漸次明らかになるに従い、調査計画を決定・調整する方法により、各事業への対応を図った。

先行すべき業務は工事着工時期の早い基盤整備事業、図書館・文書館建設事業、四国工業技術研究所建設事業に対応することであった。なかでも、基盤整備事業中の林・三谷線延長道路の南半部分の建設が急がれたため、平成2年度12月～3月の期間において、3,000㎡の地域を1班が調査した。

平成3年度は北・南辺道路、林・三谷線延長道路北端部分、図書館・文書館本体部分、四国工業技術研究所

本体部分の工事計画が明らかにされたために、上半期3班、下半期7班の体制により総面積61,453㎡の調査を実施することとした。そして、後3者については調査を終了し、前1者についても現存する外周道路の下部を除いて、調査を終了する計画であった。

平成4年度からは、調査の主体が民間分譲地部分と西辺道路部分に移る一方で、北・南辺道路の残部と各構築物の付帯施設部分の小規模な調査が開始される計画であった。したがって、5班編成による総調査契約面積は48,427㎡（年度当初計画は50,427㎡であった。）となった。

平成5年度は基盤整備事業と図書館・文書館建設事業に伴う調査が最終段階となり、調査規模が相当縮小された（基盤整備事業関連1,670㎡、図書館・文書館建設事業関連410㎡）ために、民間分譲地部分（29,225㎡）に主力を導入する計画を立案した。したがって、班編成についても3班を組織するに留めている。

平成6年度は当初計画の調査終了年度に相当しており、産業頭脳化センター建設用地（3,800㎡）の調査が計画された。対象面積が小規模であることから、1班編成の体制を組織し、上半期のみ期間を確保した。

平成8年度は下半期からの調査となり、1班で5,700㎡を対象地として実施した。

平成9年度は上半期の調査で、1班で当初6,000㎡、最終的に6,500㎡を対象として実施した。

（3）整理作業

事業開始当初において、整理作業には全ての調査が終了後、着手することが決定されていたが、調査期間が長期にわたること、相当数の調査員が調査に関与すること、複雑な小区画が多数存在すること等から当該年度中の調査の成果については、短期間内に実施得る限りの基礎整理作業を行い、実績報告書もしくは調査概報を作成することにした。また、遺物については調査期間中に洗浄作業を終了し得るよう配慮するとともに、若干の資料については注記作業をも遂行することを計画した。

また、平成3年度からは本センターの「整理作業マニュアル」により資料管理の方法を体系化したために、現場作業中に作成した図面類及び写真類についても、台帳化を推進することに決定した。

本格的な整理作業については平成5年度中に基本構想が完成し、全体計画を以下のとおりとした。

対象地域全体を遺跡内容、遺物量、検出遺構の集中状態、地形的環境等を考慮し、9ブロックに分割する。

担当者1名が1～2ブロックを分担して作業を進め、6名が平成6年度から平成11年度までの期間にすべての作業を終える。発刊する報告書は全体を9分冊で構成するものとする。

ただし、各ブロックの報告順序については、本センターの事業計画の調整により、当初計画した担当者が配置されたブロックから作業に着手することとした。

しかし、この後の事業量の増加に伴い、計画の修正が行われている。現在の状況は「第2表空港跡地遺跡各地区の調査概要」のとおりである。

3 調査方法

（1）調査方式

前項において触れたように、平成2年度の予備調査は少人数による機動性が求められたために、現場作業員を本センターが直接雇用する直営方式を採用した。しかしながら、同年度は普通寺市から大川郡志度町までの広い範囲において、高松東道路建設の関連調査2遺跡、四国横断自動車道（高松～普通寺間）建設の関連調査10遺跡、県道建設の関連調査1遺跡と財団創設以来最大規模の事業量が計画されていた上に、坂出市川津町における四国横断自動車道建設の関連調査が最盛期を迎えたことにより、現場作業員の人員確保が極めて困難な事態が生じていた。しかも、年度後半において急遽事業計画が明らかにされたために、掘削作業、現場作業員の雇用、労務管理、調査用具・機械の準備、重機等の準備、安全管理等を専門業者に委託する方法（以下「工事請負方式」という。）を選択した。

以後、調査が完了するまでの期間における調査方式の主体はこの工事請負方式であったが、前述のように平

成4年度に各建築物の小規模な付帯施設工事の関連調査が開始されてからは、同工事担当者との調整の機会が再三発生したこと、小規模な複数地域を移動する必要性が生じたことから、機動性に富んだ直営方式が導入され、両方式が並行して行われることになった。

(2) 調査区画の設定方式

基軸の設定は、既に事業計画が明らかにされていた北辺道路の道路センター杭が西端部の一部分を除き、直線に打設されていることから、その位置を基準線とし、東西方向に延長することに決定した。そして、東西方向と南北方向に20m間隔の定点を設定するとともに、東西方向については西部から1～85のアラビア数字を、南北方向については北部からA～Vのアルファベットを冠して呼称した(A74区～V85区)。

したがって、南北方向の基軸は、真北から約9°西偏した方向性を示している。

(3) 記録類の作成方法

検出した遺構については、配置図と各遺構単位の実測図を作成している。

配置図は調査担当者が平板測量により、1/100程度の縮尺を用いて作成し、遺跡の全容把握、遺物の取り上げ、遺構埋土観察等の作業の他、多岐にわたって活用した。

後者については専門業者に航空写真測量を委託することにより作成した。これは、対象地が広大であることから、全体を同一基準の図化方法と空中写真撮影方法により管理することが、将来記録類を有効に活用しえる手段であると考えられたためである。

委託した作業内容は1/50及び1/100の縮尺による図化と遺構の俯瞰写真を撮影することであったが、より詳細な図面を作成する必要性が生じた場合には、適宜1/10の縮尺による図化も実施した。しかし、大縮尺を用いる実測作業の大部分については、調査担当者が割り付け作業を行い、手書き図面を作成することにより対応した。

遺構と土層序の横(縦)断面図は、手書き作業により1/20の縮尺の図面を作成することを原則とした。特に土層序については、遺跡全体における変化を観察することを目的として、北辺道路用地南壁面と南辺道路用地北壁において対象地域の長軸方向の横断面図を作成することにした。ただし、その他の土層序図面作成位置についてはまったく任意である。

写真撮影については、上記の空中写真以外に調査担当者が35mm(白黒・カラーリバーサルフィルム使用)サイズと6×7(白黒フィルム使用)サイズの各カメラを併用して実施した。

(4) 検出遺構の呼称方法

当該遺跡については、広大な地域を長期にわたり、同一遺跡地内において、複数の異なる原因者による事業が並行して計画されるという状況から、検出された遺構の呼称方法については、同一事業地内部における小区画相互間においても、異なる遺構に同一呼称を与える状態が生じており、例えば「第1号竪穴住居跡」を表す「SH01」の略称は、全体小地域において複数回出現することが確認できるのである。

そこで、報告書の刊行時においては、9ブロックに分割した整理地域と遺構種類を単位として、全種類について「01」から始まる通し番号により再整理を行うものとした。さらに、各整理地域を明確にすることを目的として、遺構略称中に地区番号「A」～「I」の小文字「a」～「i」を挿入して報告することにする。すなわち、本書に収録した遺構については略称中に「g」が併記されるのである(例：SHg01)。なお、整理地域の表記にアルファベット小文字を用いたのは、調査区画名称及び遺構略称との混乱を避けるためである。

4 予備調査の経過

平成2年度当初から調査に着手する計画であったが、空港移転後においても各種の施設については旧状を留めていたため、それらの撤去を待つ必要が生じた。さらに、第二次世界大戦中に投下された爆弾類が当該遺跡地内部に埋没している可能性についての情報が提供されたことにより、関係資料の蒐集の結果が明らかになるまでの期間については、現場作業を停止しなければならない事態が発生した。したがって、現場事務所の着工年月日は平成2年6月4日であり、同月14日から調査員が同事務所において作業を開始することができた。

現場作業は同月18日に対象地域の西部から雑草の除去作業に着手し、基準杭の打設を終えた後に、7月4日から通称第1トレンチから調査を開始した。第1～3トレンチ部分については、第3トレンチの攪乱された土層序中からは弥生時代前期頃の資料を採取することができたことから、当該地域に同時期頃の包蔵地が存在することは十分推測することができた。

第4トレンチの状態は、前記の調査区画のそれとは明らかに異なり、東南から北西に通水する自然流路を確認することができ、当該位置が微高地形の西縁辺部分に相当することが予測された。

上記の推測は第5～7トレンチにおいて、遺構検出面の海拔高度が高いことを確認したことにより確実性が高まった。しかも、相当数の柱穴群と溝状遺構を検出したことと、遺存状態に優れた遺物を採取したことから、微高地上に集落域が展開することを予測させる成果が得られた。

第8トレンチ以東の調査区画においても、上記の状態に変化は認められなかったが、第9トレンチにおいて自然河川跡と考えられる小規模な流路を検出している。したがって、巨視的には微高地状の地形を呈する地域についても、小規模な流路に分断されて中州状を呈している可能性を指摘することができた。

第10～13トレンチにおける調査結果からは、当該地域の主体が中世の建物遺構である事実と、埋蔵文化財の遺存状態が不良な旧エプロン部分については、本調査を必要とする範囲から除外し得る知見を得た。

第14～16トレンチにおいては、東方ほど基盤層序の上位の海拔高度が低くなる事実が判明したことから、現古川あるいは春日川の流路の決定時期を考察するための情報を提供することが期待されたのである。

旧駐車場部分については、旧施設が現存したために第17トレンチのみの調査を行った結果、東半部分において埋蔵文化財の存在を確認するに至ったが、西半部分は既に大部分の遺構が損壊を被っていることが判明した。しかしながら、当該地域における調査結果から、現存しない地域においても、同一遺跡として包括することが可能であることが解った。

以上の作業を8月29日に終了した後、同月30日からは高松航空無線標識所跡地の第18・19トレンチの調査を開始した。両区画においても弥生時代を中心とする遺構が検出できたことから、遺跡地が東北方向へ拡大する様相を確認することができた。

5 本調査の経過

(1) 平成2年度

当該年度9月に予備調査が終了した後、香川県教育委員会では本センターが提出した報告書に基づいて、調査対象範囲の最終決定を行った。その結果、旧滑走路西端部の溜め池埋め立て箇所、旧エプロンの大部分、旧駐車場に市販部分を除く全域について埋蔵文化財の保護措置を講じる必要があることの結論に達した。

調査は緊急を要したこと、年度途中からの現場作業員の雇用が難しかったことから、工事請負方式を導入し、現場作業は平成2年12月22日から平成3年3月27日までの期間に実施した。

調査結果は、調査区域の一部分が空港造成工事による損傷を被っていたものの、現存する方格地割の方向性に合致したL字型の溝状遺構を配する、中世前半頃の集落跡が検出できた。

(2) 平成3年度

図書館・文書館の建設工事工程が明示されたことから、年度当初から1班分が調査を開始するとともに、前年度からの継続事業である基盤整備事業の林・三谷線延長道路部分についても、2班が並行して調査を進めた。そして、前者については相当数の竪穴住居跡によって構成された弥生時代後期頃の集落跡、古代の幹線水路跡、中世前半頃の集落跡等を検出した後、平成3年10月に全ての作業を終了し、同地域の北辺に近接する北辺道路部分に主体が展開した。一方、後者の調査終了後は、1班は林・三谷線と北辺道路の交差点から西方の北辺道路部分を、他の1班は四国工業技術研究所の建物部分の調査を分担することにより実施した。これらのうち、図書館・文書館用地に近接する北辺道路部分については、既に図書館・文書館用地において集落遺構を検出していたことから、その延長部分を明らかにするとともに、同道路部分の西端部分については、「弘福寺領讃岐国山田郡田岡」の南部地域に比定されていたことから、関連遺構の確認が重要な課題となった。

四国工業技術研究所建設予定地における調査は、方形に溝状遺構を配置した集落跡のほぼ全体の様相を把握することができたに留まらず、当該地域の土地区画との関連性を指摘する等、画期的な成果を収めて、平成3年12月に調査を終了した。

年度途中の10月からは3班を異動することにより、本遺跡の調査体制の強化を図った。さらに、県道調査事業を担当していた1班を加えることにより、7班による編成とした。

新たに編入された4班は主として北辺道路と南辺道路部分の調査を行ったが、事業の具体化に伴い、産業交流センターと民間分譲地の一部分についても調査に着手した。

(3) 平成4年度

同年度は跡地東部の民間分譲地部分の調査が中心となった。同地域については、北辺道路東部と民間分譲地東端部分の調査結果と、対象地の大部分が旧春日川方向への傾斜地に相当していたことから、調査開始時点においては遺構の遺存状態は不良であると考えられた。しかしながら、広範囲を調査対象とした結果、近世の集落跡と弥生時代の流路を主体とする遺跡の様相を明らかにすることができた。とりわけ、弥生時代後期頃の円形周溝墓と取水施設状の遺構(調査途上においては「出水状遺構」と呼称されている。)の検出は同時期の集落形態を検証するための資料として重要であると評価することができる。また、民間分譲地の中でも最も北西部分に相当する位置において、弥生時代の性格不明の不定形土坑が群集する状態を確認したことは、居住空間以外の土地利用の様態が明らかになった。

さて、上記の民間分譲地部分の調査に並行して、西辺道路部分の調査を実施している。同地区は大規模な埋没自然河川跡に近接して位置することから、自然遺構の存在が想定されていたが、古墳時代前期の建物跡が検出されたことは、新しい知見となった。

(4) 平成5年度

年度当初に図書館・文書館付帯施設の建設予定地部分についての調査を終えた後は、跡地中央部と北東部の民間分譲地部分について調査を行い、跡地東半地域全体の様相を明らかにした。特に注目された成果は、旧駐車場東部地域を中心として自然流路が集中する低地部分が存在することが判明した点である。しかも、同地域においては、人形土製品6点を採取しており、居住空間との関連性が注目された。

(5) 平成6年度

産業頭脳化センター建設用地について平成6年4～8月の期間に調査を行った。対象地域が小規模であったことから、東西に2分割することにより作業を進めた結果、室町時代後半頃の集落跡を検出することができた。

(6) 平成8年度

香川大学工学部建設用地について平成8年10月1日～平成9年3月31日まで調査を実施した。この調査区で

は、弥生時代の周溝墓2基をはじめとして中世の溝などが検出された。

(7) 平成9年度

前年度に引続き、平成9年4月1日～11月30日まで調査を実施した。前年度同様、周溝墓のほか、弥生時代前期・古代・中世・近世の溝などが検出された。

以上、各年度の調査概要を記したが、年度単位の調査成果については、各年度単位の調査概報を作成することにより、平成9年度までに全6冊を刊行した。

また、全体の調査工程は、「第3表調査区分・年度別調査工程表」を参照されたい。

6. G地区調査の経過

前項まで、事業主体別に年度概要を記したが、本報告に係る調査経過について簡単に記述する。

今回報告するG地区は、空港跡地東北部の民間分譲地部分である。

平成4年4月に準備を開始し、北側の33区から順次調査に着手した。年度後半からは、一部南側に位置する39区にも着手した。平成5年4月～10月の間を除き、11月から3月まで残りの45区～48区の調査を実施して終了した。

7. 整理作業の経過

(1) 基礎整理作業と概報作成作業

調査が長期間に及び、調査終了から報告書作成までに長時間が経過することが明白であったために、各調査年度単位の若干の基礎整理作業を行った。平成3年度からは「整理作業マニュアル」により図面及び写真類については、パーソナルコンピューターを用いた統一的な台帳化作業を実施した。

(2) 報告書作成作業（G地区）

本報告書は、平成13年度に整理作業を行い、平成14年度に印刷を行った。平成13年度の整理作業の経過については「第4表整理作業工程表」による。

整理は、蔵本・真鍋の指導の下、西山佳代子・長井真由美・福永光恵・森澤千尋・松本恭子・安藤真澄・上原慶子・福家良子が実測・トレース等の業務を担当し、前田好美・長谷川郁子・松本知子が補助した。また、遺物の一部については、外注でデジタルトレースを実施している。

第3表 調査区分・年別調査工程表

調査区分	面積 (㎡)	平成2年度			平成3年度			平成4年度			平成5年度			平成6年度			平成8年度			平成9年度					
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
予備調査	(3,200)																								
基盤整備	30,520																								
県立図書館・ 文書館	9,833																								
西国工業 技術研究所	7,032																								
産業交流 センター	5,200																								
民間分譲地	61,600																								
産業顕脳化 センター	3,800																								
香川大学 工学部	12,200																								
計	160,185																								

第4表 整理作業工程表

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
遺構整理												
報告遺物の抽出												
遺物の注記												
遺物の接合、石膏復元												
遺物の実測												
遺物図面のチェック												
遺物挿図原稿の作成												
遺構挿図原稿の作成												
付図、表原稿の作成												
遺物写真撮影												
原稿作成												
編集												
遺物の取納、台帳整備												

第2章 立地と環境

空港跡地遺跡の立地及び歴史的環境については、既刊の「空港跡地遺跡Ⅰ・Ⅳ・Ⅴでそれぞれの視点で記述が行われているので参照されたい。ここでは、第4図に周辺の主な遺跡を図示するにとどめた。

第3章 調査の成果

第1節 土層序について

本調査区の土層は、第5図～第9図のとおりである。第5図～第9図は、縦方向を20分の1、横方向を300分の1で表している。調査区全域では、遺構面を形成するベースとして、粘土・シルト・砂礫からなる土層があり、遺構面は一部を除いて同一面で検出している。

ベースの粘土、シルト、砂礫の互層状態から地山形成段階での状況を伺うことができ、弥生時代後期に至るまで、他の地区に比べて不安定な状況にあったと考えられる。

第2節 主要遺構の検出状態

この地区で検出された遺構は、弥生時代後期後半、古代～中世、近世の大きくは3時期に分けられる。弥生時代後期後半は、本地区の中央部やや東側に集落が形成され、これと溝状遺構がセットになる。調査区西端では、土坑が密集して検出された。

古代～中世段階では、調査区の東端、西端に集落が認められる。この段階では、条里型地割りに方向を合わせた掘立柱建物跡が検出されている。

近世では、条里型地割りに合致する溝状遺構及び土坑群が認められるが、居住区としての性格はなくなり、生産域になったと考えられる。この状態は、空港が建設される昭和19年まで継続している。

第3節 遺構と遺物

1 弥生時代

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡、溝状遺構（以下「溝」という）、土坑がある。以下、遺構ごとに記述する。なお、竪穴住居跡に伴う溝については、竪穴住居跡とあわせて報告する。

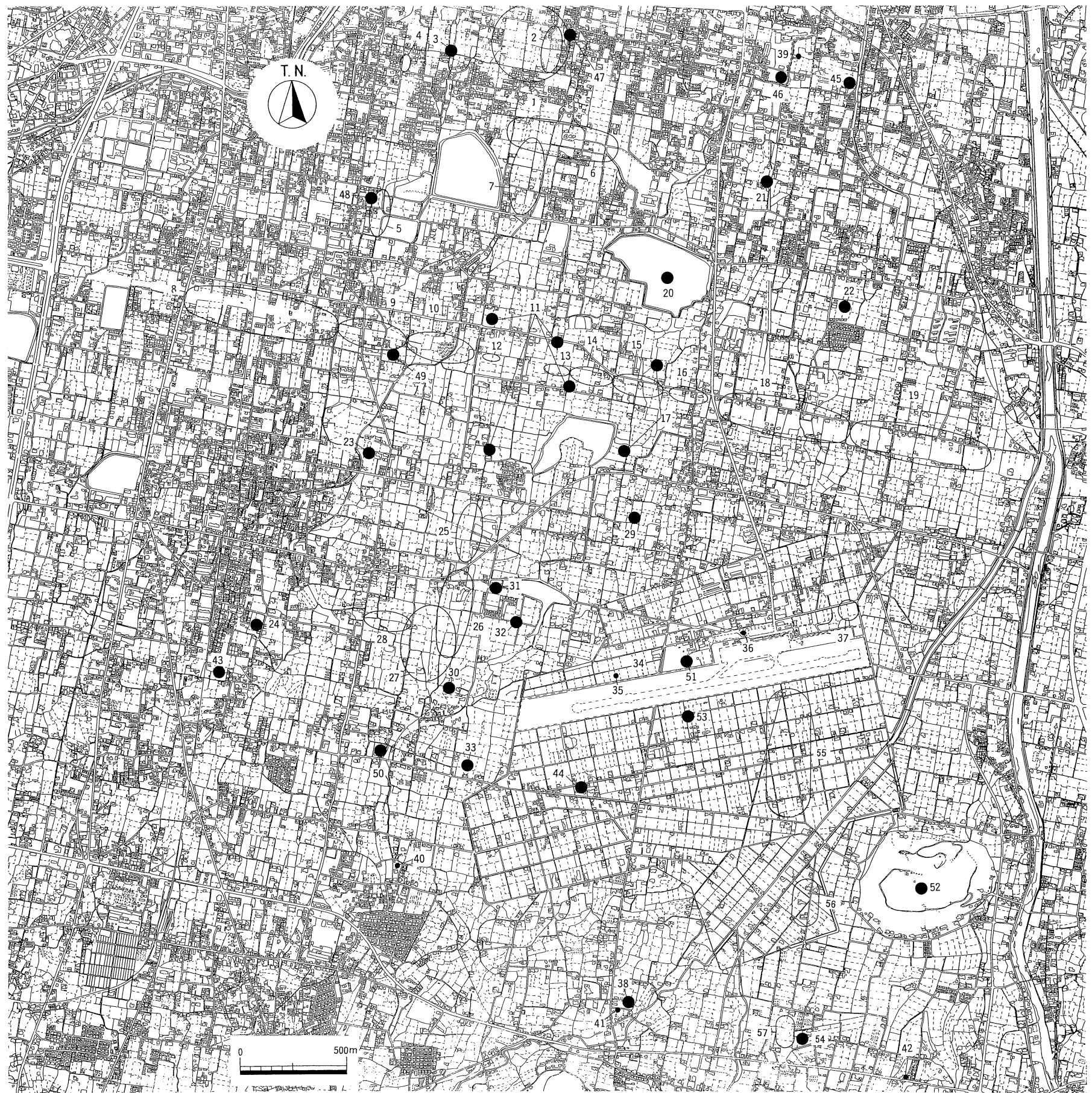
① 竪穴住居跡

S H g 0 1（第10・11図）

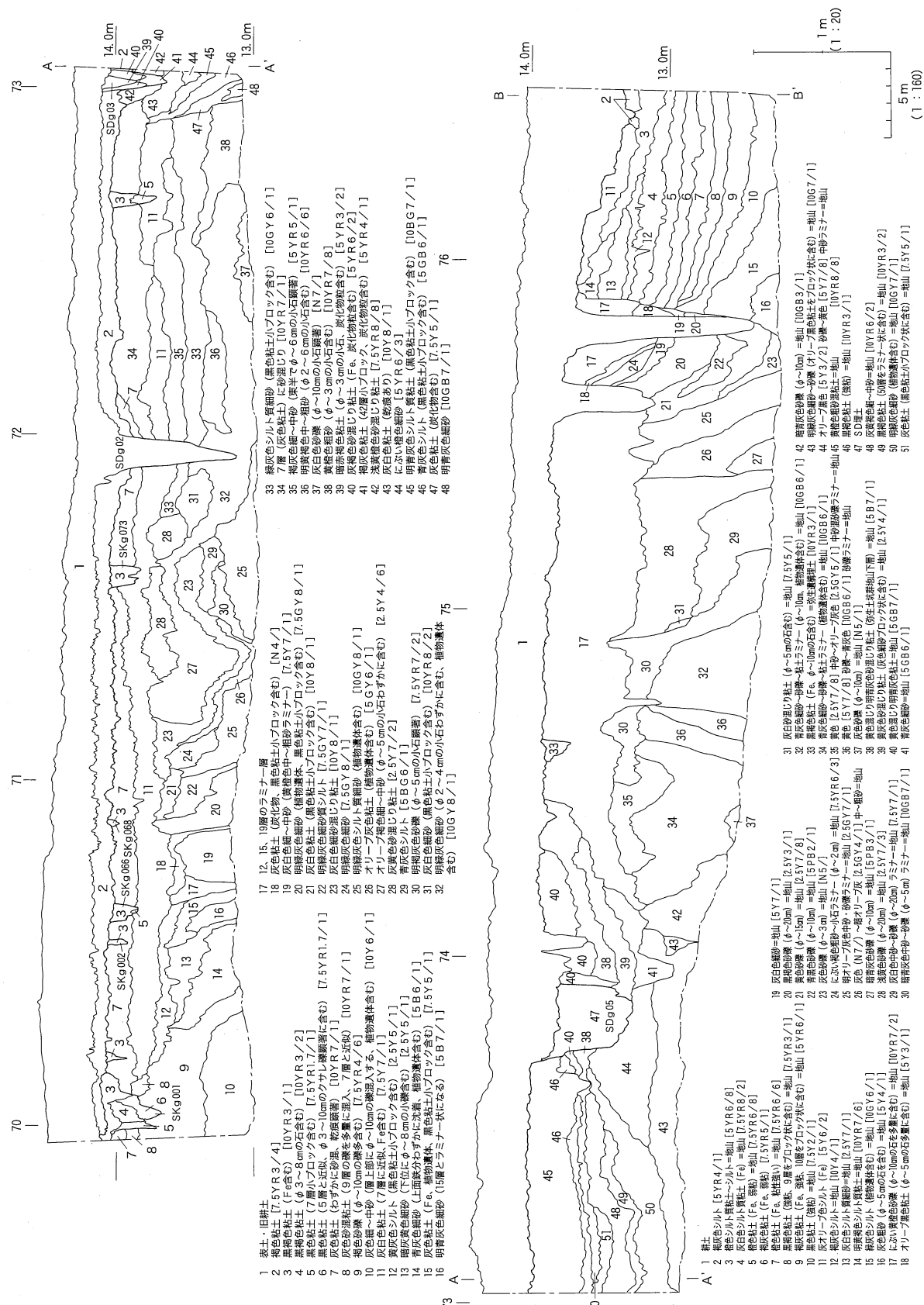
隅丸方形の竪穴住居跡で、周囲に溝をめぐらせる。中央部の掘り込みと溝との間が大きく開いていることから、ベッド状遺構を持つ竪穴住居跡と考える。内部には、船底状土坑と4つの支柱穴が見られる。支柱穴の埋土から、柱の抜き取りを示す状況が認められ、集落の移動に伴う廃絶と考えられる。周囲を巡る溝（S Dg08）は、卵形に巡る。攪乱により約1/2強の残存である。

竪穴住居跡に伴う遺物は、第11図1～15、20、21である。これ以外の遺物は周囲を巡る溝からの出土である。

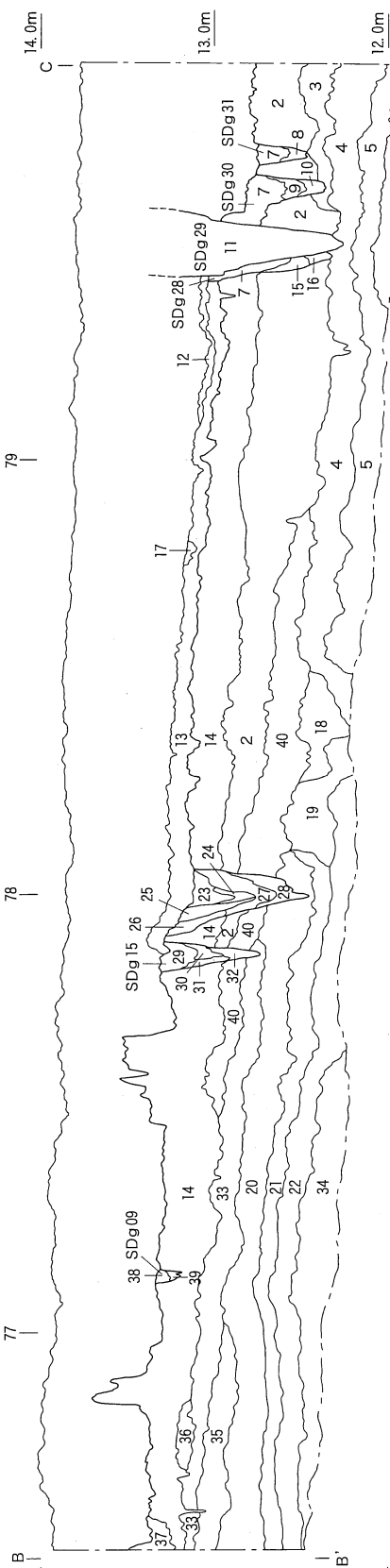
1～3は広口壺の口縁部である。形態からみて、胴部から外反気味に延びる口縁部を有するものと考えられる。4～6は甕の口縁部である。甕は、口頸部から鋭く外反する4や、体部から緩やかに外反する6、中間に位置する5などいくつかのバリエーションがある。17の甕は、口縁部がやや内湾気味に立ち上がるため、時期的に後出するものとも考えられる。底部は、壺、甕とも平底のものが多い。13のみ丸底であり、17の甕同様、混入の可能性もある。高杯は、内湾気味に外反する口縁部を有する杯部と筒状の脚部を持つ。鉢は大型鉢のみで、口縁部の内側を強くヨコナデするものである。20は側面に打痕が認められることから、通常の形態ではないが、叩き石の範疇に含まれるものと考えられる。



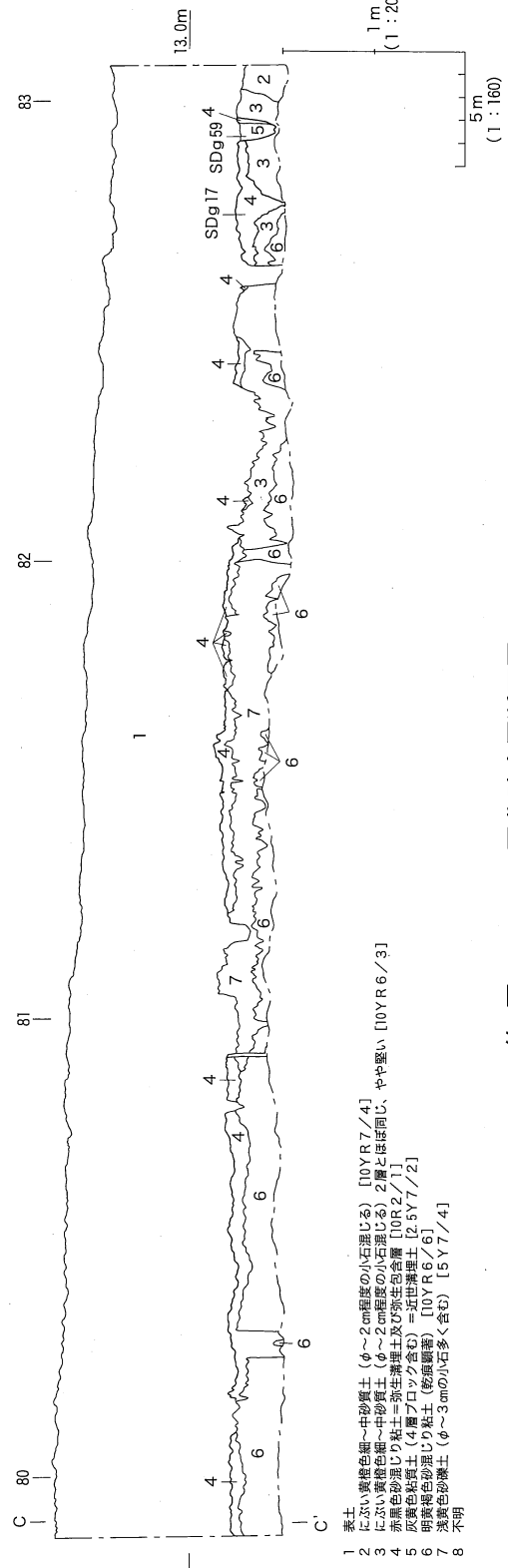
第4図 空港跡地遺跡周辺遺跡分布図（塚以外）（1/20,000）



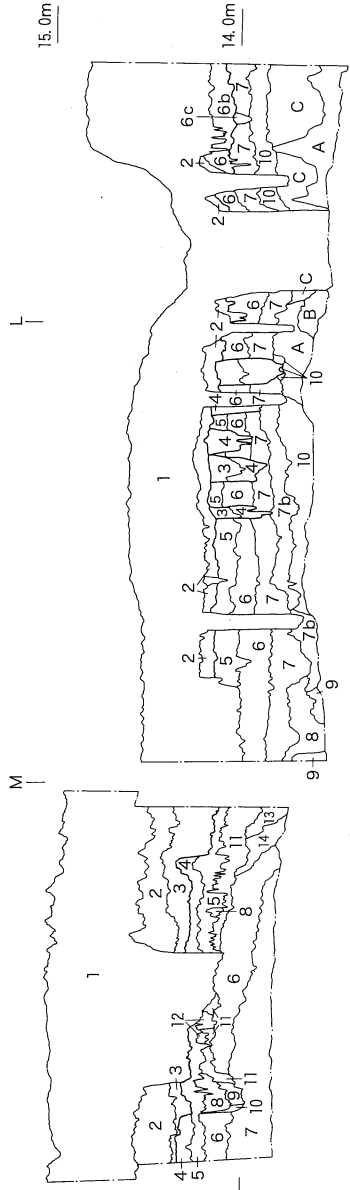
第5図 Ⅲ33・34区北壁土層断面図



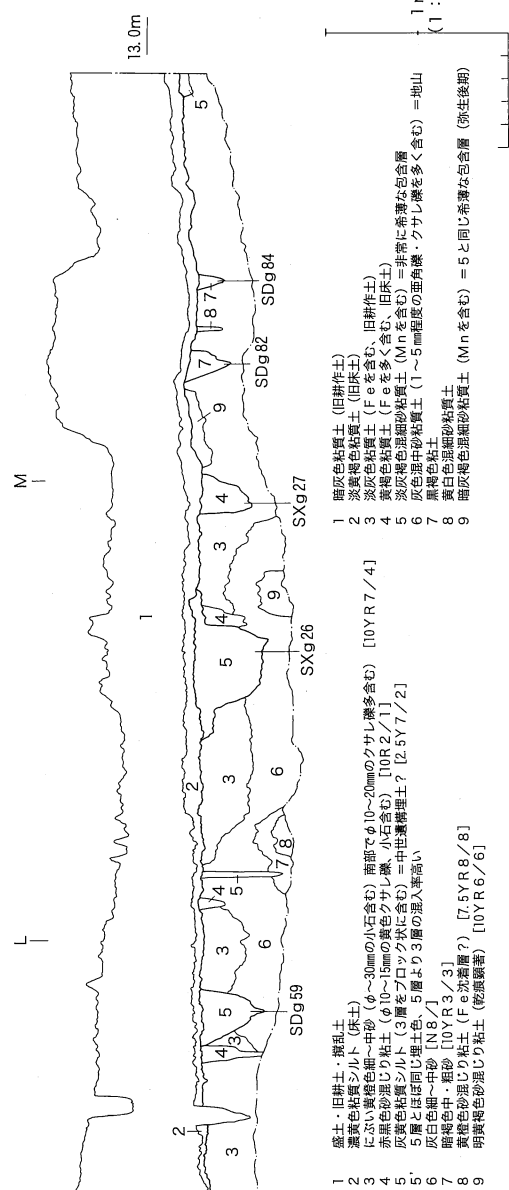
- 1 粘土 (上面は1層の影響による薄りあり) = 地山 [5Y8/6]
- 2 黄褐色粘土 (Mn, 2層に近砂) = 地山 [5Y8/4]
- 3 暗赤褐色粘土 (Mn沈着層) = 地山 [5YR3/2]
- 4 褐色粘土 (Fe, Mnわずか) = 地山 [7.5YR4/6]
- 5 黄褐色粘土 = 地山 [7.5YR8/8]
- 6 暗灰色粘土 = 地山 [7.5YR5/1]
- 7 暗灰色中砂 = SD28埋土 [2.5Y7/1]
- 8 暗灰色砂 = SD27埋土 [10YR8/1]
- 9 暗灰色砂 = SD27埋土 [10YR8/1]
- 10 暗灰色砂 = SD27埋土 [10YR8/1]
- 11 暗褐色粘土 (Mnわずか) = 中世色含層 [7.5YR5/6]
- 12 暗褐色粘土 (Mnわずか) = 新生色含層 [7.5YR3/1]
- 13 暗褐色粘土 (Feわずか) = 地山 [5YR5/3]
- 14 にぶい赤褐色粘土 (Feわずか) = 地山 [5YR5/3]
- 15 暗灰色粘土 (13・14層ブロック状に含む) = SD18埋土 [5YR5/1]
- 16 暗褐色粘土 (φ~5mmの小石含む) = SD18埋土 [7.5YR7/1]
- 17 黄褐色粘土 (Mn, 灰化物粘含む) = 古状色含層 [2.5Y6/1]
- 18 灰白色粘質シルト = 地山 [10YR7/1]
- 19 灰白色粘質シルト (下層は黒味帯びる) = 地山 [2.5Y8/2]
- 20 にぶい褐色粘土 (Fe) = 地山 [7.5YR7/3]
- 21 黄褐色粘土 (Fe) = 地山 [2.5Y4/1]
- 22 灰黄色粘土 = 地山 [10YR6/2]
- 23 暗赤褐色粘土 = 地山 [10YR6/2]
- 24 暗褐色粘土 (Mn) = SD17埋土 [5YR1/1]
- 25 暗褐色粘土 (Fe) = SD17埋土 [5YR3/2]
- 26 暗褐色粘土 = SD17埋土 [7.5YR3/2]
- 27 暗褐色粘り粘土 = SD17埋土 [7.5YR3/2]
- 28 暗灰色砂り粘土 = SD17埋土 [7.5YR4/1]
- 29 暗褐色粘土 (Fe, 灰化物粘含む) = SD23埋土 [5YR3/1]
- 30 暗褐色粘土 (地山小ブロック多く含む, φ~5cmの小石含む) = SD23埋土 [5YR4/1]
- 31 暗褐色粘土 (地山小ブロック含む, Fe) = SD23埋土 [5YR3/1]
- 32 暗褐色粘土 (φ1cmの小石多く含む) = SD23埋土 [5YR2/1]
- 33 灰白色粘土 (Mn) = 地山 [2.5Y8/2]
- 34 黒色粘土 = 地山 [10YR2/1]
- 35 黄褐色粘土 = 地山 [10YR5/1]
- 36 暗褐色粘質シルト = 地山 [10YR5/1]
- 37 灰白色粘質シルト = 地山 [5Y7/1]
- 38 暗褐色粘土 (灰化物粘含む) = SD03・10埋土 [10YR2/1]
- 39 暗褐色粘土 (φ~2cmの小石含む) = SD03・10埋土 [7.5Y3/4]
- 40 黄褐色粘土 = 地山 [7.5YR7/8]



第6図 III 35・36区北壁土層断面図

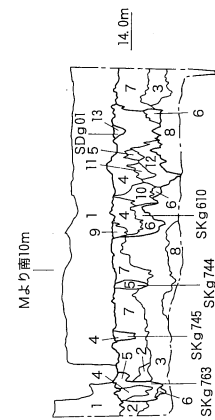


- 1 盛土・掘乱土
 2 旧耕土
 3 灰味黄褐色粘質土 (白色紅, Mn 含む) = 中世包合層
 4 赤味灰褐色粘質土 (白色紅含む) = 中世包合層
 5 灰色砂礫 (φ ~ 5cm のクサレ礫を含む) = 地山
 6 灰 ~ 黄褐色中 ~ 粗砂 (φ ~ 5cm の小石わずかに含む) = 地山
 7 黄味灰褐色粘土 = 土坑埋土
 8 黄味灰褐色粘土 (11層の小ブロックを底面にわずかに含む) = 土坑埋土
 9 青味灰褐色粘土 (11層に類似, おそらく11層と同じ) = 地山
 10 青味灰褐色粘土 (強粘質) = 地山
 11 黒褐色粘土 (Fe) 土坑埋土
 12 黒褐色粘土 (強粘質) = 地山
 13 黄味灰褐色粘土 (強粘質) = 地山
 14 灰褐色粘土 (強粘質) よくしまりかたい = 地山
- 盛土・旧耕土・掘乱
 1 灰味黄褐色粘土 (Fe, Mn 含む)
 2 赤味灰褐色粘土 (Fe 含む)
 3 黒色粘土 (3層ブロック含む, Fe 含む)
 4 黄味灰褐色粘土 (Fe 含む, 2層に近似, 強粘)
 5 暗灰色粘土 (Fe 含む)
 6 b 黒褐色粘土 (Fe 含む, わずかに砂混)
 6 c 灰味黒褐色粘土 (砂混) = SD03埋土
 7 明灰色粘土 (Fe 含む, 6層キレツミこみあり)
 8 暗灰色粘土 (Fe 含む, 堆物遺体含む)
 9 灰色中砂 (やや粘土あり, 堆物遺体含む)
 10 灰褐色中砂・砂礫 (φ 0.5 ~ 3mm の石多量, 北半部で粘土の率が低くなる)
 A 灰褐色中砂 (φ 2mm 程度の小石わずかに混じる)
 B 濃褐色砂礫 (φ 4.5mm 程度の小石含む)
 C 濃褐色砂礫 (φ 5mm 程度のくされ礫多量を含む)

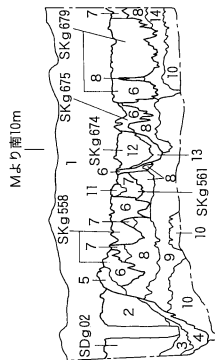


- 1 盛土・掘乱土
 2 濃褐色粘質シルト (粘土)
 3 濃い黄褐色細中砂 (φ ~ 30mm の小石含む) 南部で φ 10 ~ 20mm のクサレ礫多量含む [10YR 7/4]
 4 赤褐色砂混じり粘土 (φ 10 ~ 15mm の黄褐色クサレ礫, 小石含む) [10R 2/1]
 5 灰褐色粘質シルト (3層をブロック状に含む) = 中世遺構埋土? [2.5Y 7/2]
 6 層とほぼ同じ埋土色, 5層より3層の埋入葉高い
 7 灰白色細中砂 [N 8/1]
 8 暗褐色中・粗砂 [10YR 3/3] 遺構埋土? [7.5YR 8/8]
 9 黄褐色砂混じり粘土 (Fe 包合層?) [10YR 6/6]
 10 明黄褐色砂混じり粘土 (乾強粘質) [10YR 6/6]
- 盛土・旧耕土 (旧耕作土)
 1 暗灰色粘質土 (旧耕作土)
 2 淡黄褐色粘質土 (旧耕作土)
 3 淡灰色粘質土 (Fe 含む, 旧耕作土)
 4 黄褐色粘質土 (Fe 多量含む, 旧耕作土)
 5 淡灰褐色埋土細砂粘質土 (Mn 含む) = 非耕に希薄な包合層
 6 灰褐色埋土細砂粘質土 (1 ~ 5mm 程度の埋土礫, クサレ礫を多く含む) = 地山
 7 黒褐色粘土
 8 黄白色埋土細砂粘質土
 9 暗灰褐色埋土細砂粘質土 (Mn 含む) = 5と同じ希薄な包合層 (弥生後期)

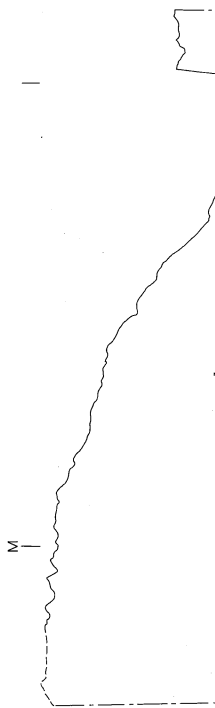
第7図 III 33・45区西壁、III 36・39東壁土層断面図



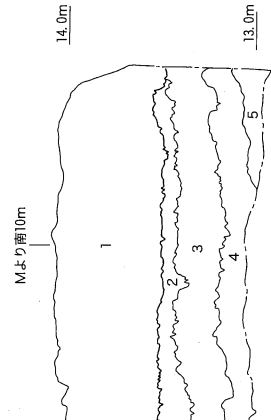
- 1 旧耕土
- 2 明灰黄色砂埋じり粘土 (白色筋含む) = 地山
- 3 薄灰褐色砂埋じり粘土 (ややシルト質 $\phi \sim 5$ mmの小石少量含む) = 地山
- 4 薄灰褐色粘質シルト (Fe、黒色粘土細層を数層介在)
- 5 明灰褐色粘土 (地山層に近似)
- 6 灰黒色粘土
- 7 明灰褐色粘土
- 8 薄灰褐色中砂 = 地山
- 9 黄色粘土 (地山層に近似)
- 10 薄灰褐色粘土 (白色筋含む)
- 11 薄灰褐色粘土
- 12 灰黄色粘土
- 13 黒褐色粘質シルト = SD01埋土



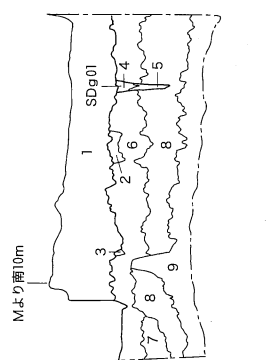
- 1 旧耕土・盛土
- 2 褐色土 ($\phi \sim 30$ mmの砂岩礫多量に含む) = SD0埋土
- 3 灰黄色粘土 (下面に鉄分沈着) = SD0埋土
- 4 淡黄色細中砂 = SD0埋土
- 5 灰褐色粘質シルト
- 6 不明
- 7 黄灰色粘土 (鐵結核、Mn含む)
- 8 黄灰色砂埋じり粘土 (Mn、白色筋含む)
- 9 灰黄色粘土 (Fe)
- 10 茶味灰色粗砂 (粘性有り、 $\phi \sim 15$ mmのクサレ礫含む)
- 11 黒褐色粘質シルト
- 12 薄灰褐色粘土 ($\phi \sim 5$ mmの石含む)
- 13 灰黄色粘土 (下面に鉄分沈着)
- 14 明灰褐色粘土 (鐵結核)



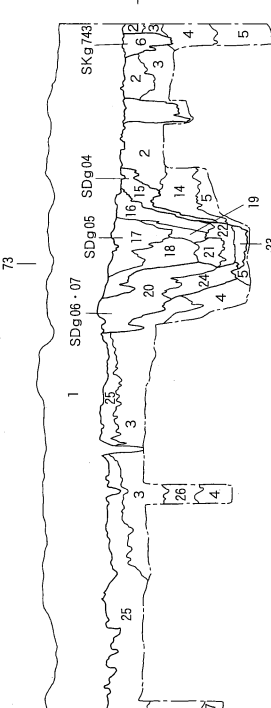
- 1 表土・旧耕土
- 2 薄褐色粘質シルト (Fe含む) [5YR7/6]
- 3 黄色粘土 (乾張有り) [2.5Y8/8]
- 4 灰白色粘土 [2.5Y7/1]
- 5 黄灰色粘土 [2.5Y5/1]
- 6 灰褐色粘質シルト (5~3層ブロック、Fe含む) [5YR5/2] [1.5YR5/2]
- 7 灰白色粘質シルト (3層ブロック、Fe含む、炭化物含む) [7.5YR8/2]
- 8 薄灰褐色粘土 (白色筋含む) [7.5YR3/1]
- 9 明灰褐色粘質シルト (3層ブロック $\phi 2 \sim 3$ mmの小石、炭化物含む) [7.5YR7/1]
- 10 灰白色砂礫 [10YR7/1]
- 11 黒褐色粘土 = 新生埋土? [10YR2/2]
- 12 明灰褐色粘土 (Fe乾張有り) [10YR7/6]
- 13 灰褐色粘質土 (Fe、 $\phi \sim 0.5$ mmの小石多く含む) = 中世色名層? [7.5YR5/2]
- 14 にびい褐色粘質シルト (Fe、12層小ブロック含む) [7.5YR7/3]
- 15 黒色粘土 (白色筋含む) [7.5YR2/1]
- 16 黒褐色粘土 (白色筋含む) [7.5YR3/1]
- 17 薄灰褐色粘土 (白色筋、3層ブロック含む) [7.5YR4/1]
- 18 黒褐色粘土 [7.5YR2/2]



- 1 旧耕土・盛土
- 2 黒褐色粘質シルト (Fe磁層) = 地生? 包含層
- 3 薄灰褐色粘質シルト (黄斑) = 地山
- 4 薄灰褐色粘質シルト (3層よりやや明るい黄斑) = 地山
- 5 濃灰褐色粘土 (黄斑顯著) = 地山

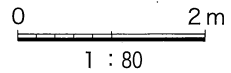
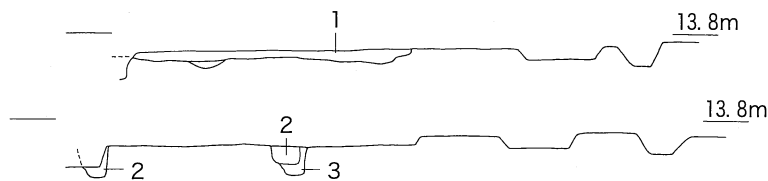
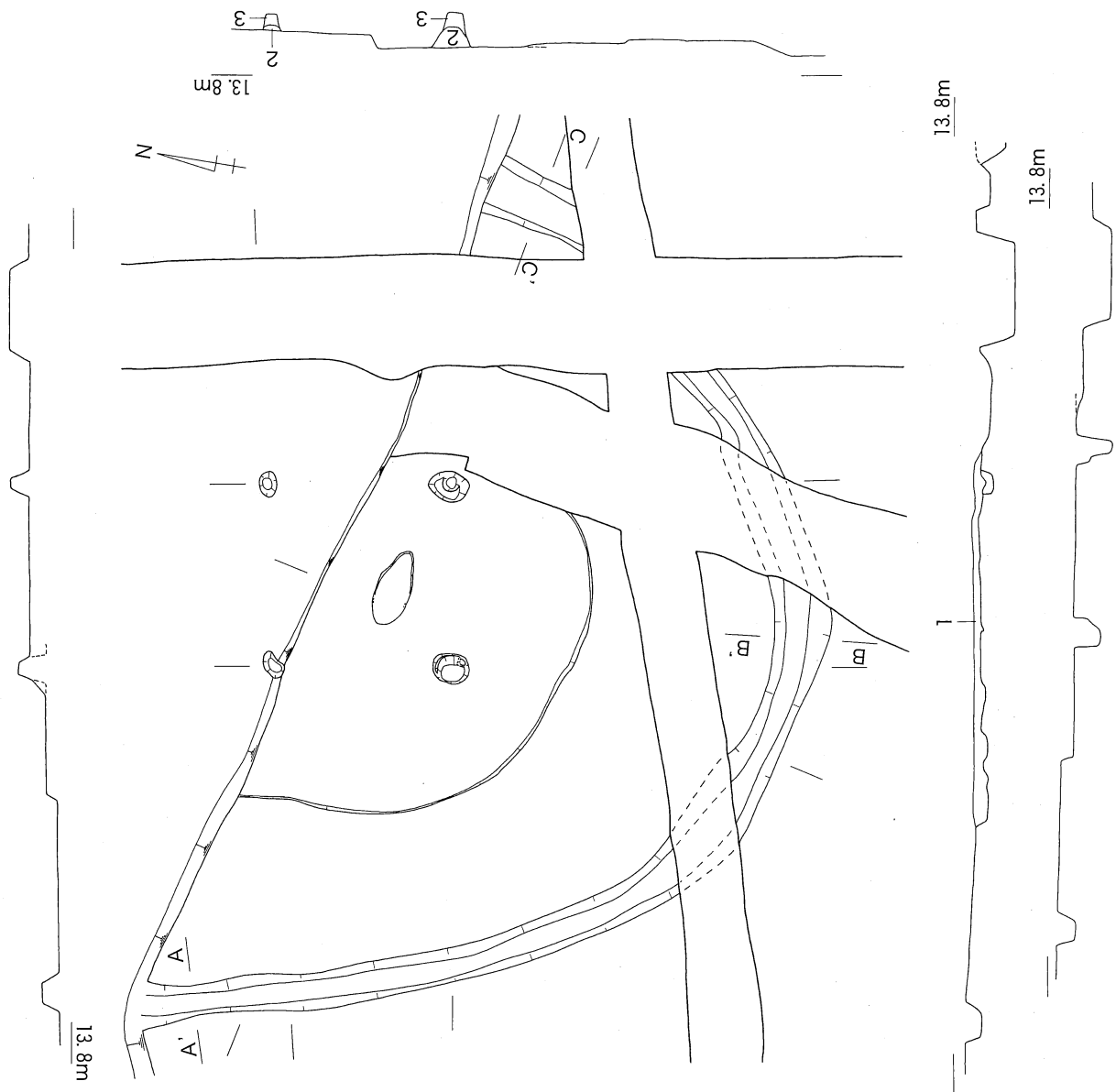


- 1 盛土・旧耕土
- 2 灰黄色粘土 ($\phi \sim 1$ mmの小石含む) = 近出整地層
- 3 黄褐色粘質シルト ($\phi \sim 1$ mmの地山小ブロック含む) = 地生包含層
- 4 SD0埋土
- 5 SD0埋土
- 6 薄灰褐色粘質シルト (砂質シルトはい)
- 7 明灰褐色粘質シルト
- 8 黄褐色粘質シルト
- 9 黄味灰色砂埋じり粘土

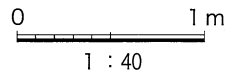
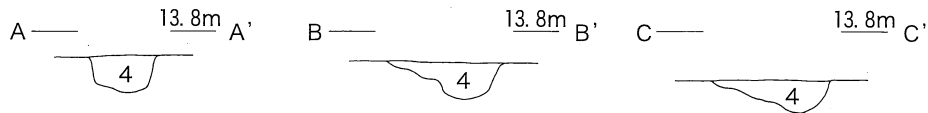


- 1 盛土・旧耕土
- 2 灰黄色粘土 (薄結核、白色筋含む) = 地山
- 3 灰黄色砂埋じり粘土 (薄結核、白色筋含む) = 地山
- 4 茶味灰褐色中砂 ($\phi 2 \sim 5$ mmのクサレ礫含む) = 地山
- 5 灰黄色中細砂 = 地山
- 6 灰黄色粘土 = 土壌埋土
- 7 灰黄色粘土 (Fe含む)
- 8 明灰褐色粘土 = 自然堆積層潜水下
- 9 薄灰褐色粘土 = 自然堆積層潜水下
- 10 薄灰褐色粘土 (2層に近似、おそらく地山層の流入土)
- 11 灰褐色粘質シルト = 自然堆積層 (潜水下?)
- 12 薄灰褐色粘土 (2層に近似、おそらく地山層の流入土もしくは埋土前凍土)
- 13 明灰褐色粘土 (ややシルト質)
- 14 淡灰黄色粘土 (Fe含む) = 地山
- 15 暗褐色粘土 = SD0埋土
- 16 灰黄色シルト (16層よりやや暗い、黄色シルトの小ブロック $\phi 20$ mm含む)
- 17 褐色砂礫土 (2~4層ブロック含む)
- 18 灰黄色粘土 (17層に近似、Fe含む)
- 19 灰黄色粘土 (2層、15層ブロックに含む、Fe含む)
- 20 薄灰褐色粘土 (上部鉄分沈着)
- 21 黄褐色粘土 (上面鉄分沈着)
- 22 黄褐色粘土 (上面鉄分沈着)
- 23 黄褐色粘土 (上面鉄分沈着)
- 24 黄褐色粘土 (上面鉄分沈着)
- 25 黄褐色粘土 (上面鉄分沈着)
- 26 茶味灰褐色砂埋じり粘土 (砂粒多い、III-3区で多く認められたもの)
- 27 青味明灰褐色粘土 (鐵結核)

第9図 III 36区西壁、III 45区東壁、III 47区西・南・東壁、III 48区東壁土層断面図



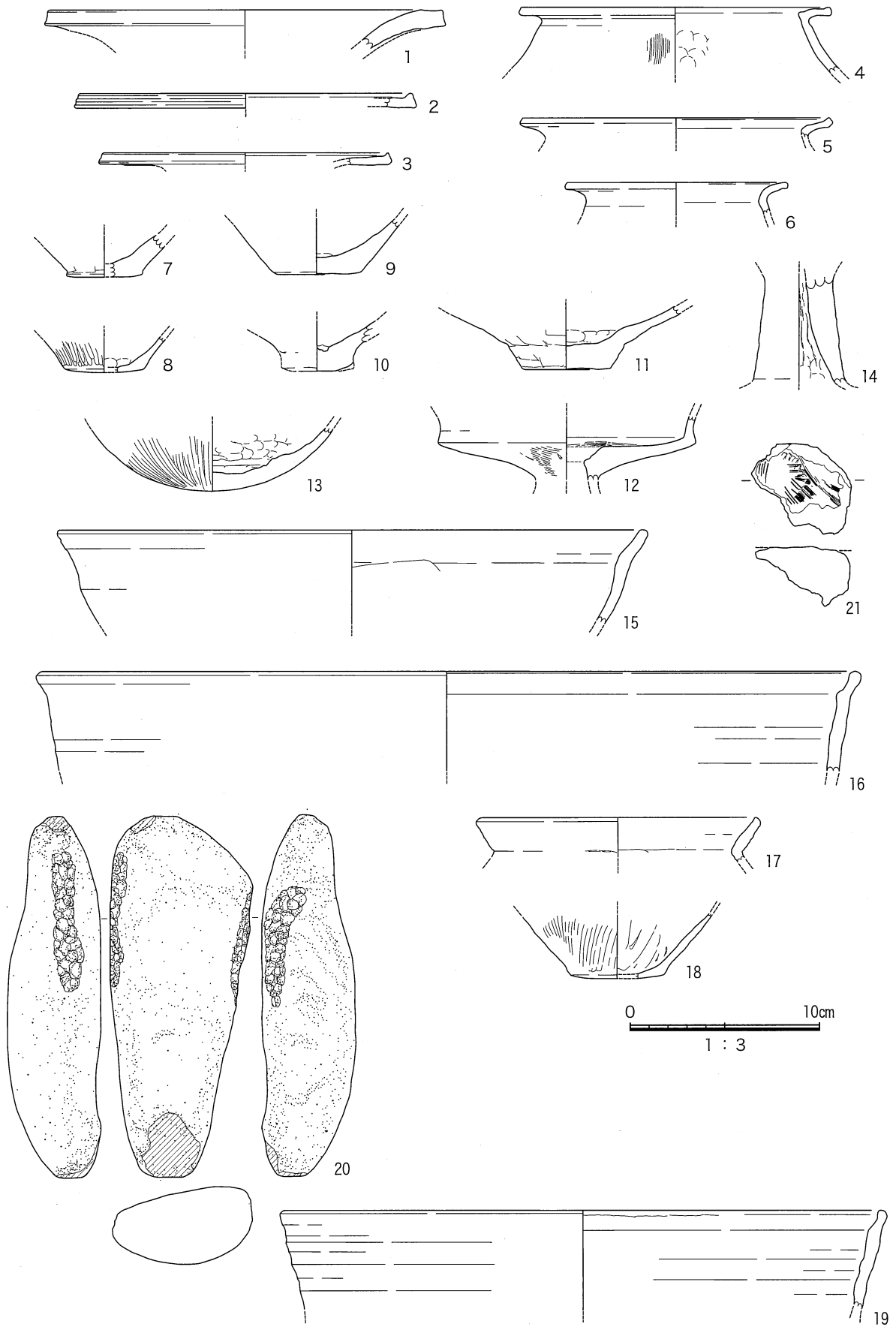
- 1 黒色 [7.5YR2/1] 粘土 (ベース小ブロック・焼土細粒・Fe含む)
- 2 黒色 [7.5YR2/1] 砂混り粘土 (ベースブロック顕著に含む)
- 3 黒色 [7.5YR2/1] 砂混り粘土 (よく締まっている)
- 4 黒色 [7.5YR2/1] 粘土 (ベース小ブロック含む)



第10図 SHg01・SDg08 平・断面図

これらの資料の内、2～5、8、12、13、16は下川津B類の胎土を有する。

出土遺物の全体から、真鍋昌宏「2 讃岐地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』2000 木耳社 (以下、弥生土器の編年には同書を用いる) のV-8様式に位置づけられる。



第11図 SHg01・SDg08 出土遺物実測図 (1/3)

SHg02 (第12図)

方形の竪穴住居跡である。内部には、しゃもじ形の土坑と4つの主柱穴が見られる。柱穴断面の状況から見ると、柱は杭のように立てられた後根固めが行われ、廃絶する段階では柱の抜き取り痕が見られないことから、地面と接する部分で切断されたと考えられる。

SHg02と関連する溝として、SHg02を取り囲んでいるSDg15、17、20、21、24がある。これらの溝は、全体形状はやや不整形ではあるが、SHg02との距離がほぼ等距離であることから、SHg02を意識した配置であると考えている。また、SDg15を除く4本の溝はつながっており、同一溝と捉えて差し支えない。溝の埋没状況は、自然堆積の状況を示し、廃絶後一定の期間で埋没したものと考えられる。

SHg02出土の土器は22～26で、甕・高杯・鉢が見られる。22の甕は、口縁部が「くの字」に外反するものである。底部は平底もしくは丸平底である。

28～88は、SDg17、20、21、24から出土した遺物である。これらの溝は、壺・甕類の底部形状が、突出平底・平底・平丸底に分類できること、82・83の製塩土器の形状、84・85の5世紀代の須恵器の存在から、SHg02が機能している時期の前後から5世紀代までの遺物を含んでおり、一括性は乏しいと考えられる。自然堆積の状況を示す埋没状況からして、長期間埋没しなかったことが想定される。

89～180は、SDg15の出土遺物である。壺・甕・高杯・鉢・製塩土器が見られ、ほぼ単一時期の遺物と考えられる。

この出土遺物から、SDg15とSHg02はほぼ同一時期に廃絶・埋没したことが明らかであり、機能していた年代もほぼ同一時期と考えて差し支えない。

以上のことから、SDg17、20、21、24については、廃絶後の一定時期完全に埋没していなかったことにより、新旧の遺物が混入したものと考えられる。

廃絶の年代は、SHg01同様、V-8様式と考えられる。

特筆すべきこととして、早い段階の須恵器壺口縁部と杯蓋が出土しており、この段階の何らかの遺構が周辺部で確認される可能性を示唆したことである。

SHg03 (第13～15図)

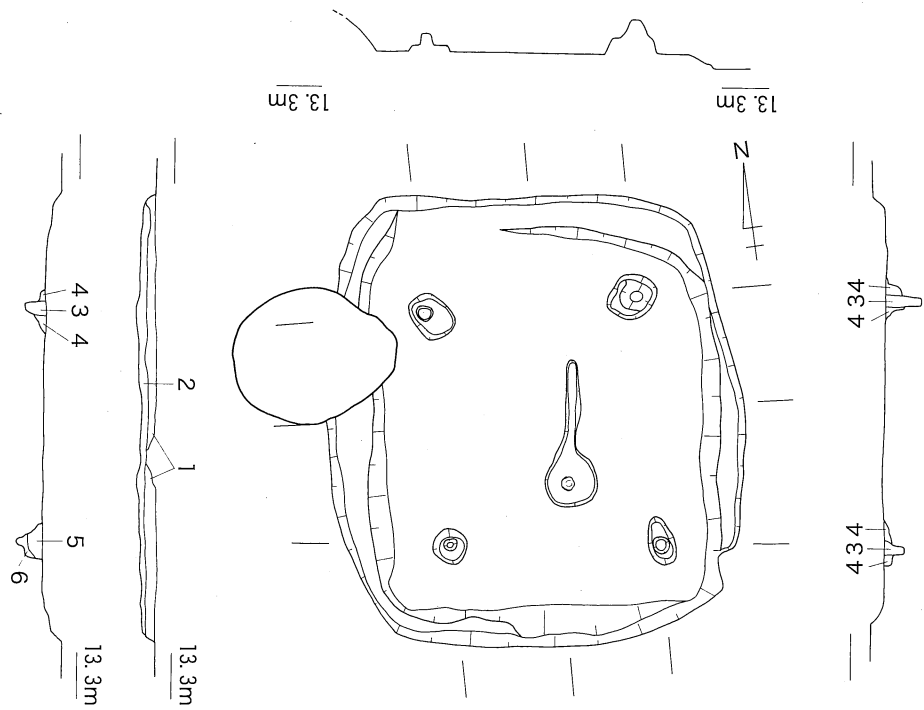
SHg03は、直径約10mを計る円形の竪穴住居跡で、約1m幅のU字溝に囲まれている。北・東側が攪乱により明確ではないが、南に偏って4つの主柱穴が見られる。この柱穴断面においても、柱の抜き取り穴は見られず、廃絶時には柱を切り取ったのではないかと考えられる。

この溝に囲まれた竪穴住居跡に隣接して半円状の溝が巡る空間がある。SHg03同様の溝によって取り囲まれており、西側でSHg03の溝と合流する。

ここでは、この空間をSHg03に先行する竪穴住居跡の可能性を考えておく。第14図は、SHg03の復元予測であるが、SDg15・17に削られたと考えられるため、SHg02に先行する竪穴式住居跡と考えている。

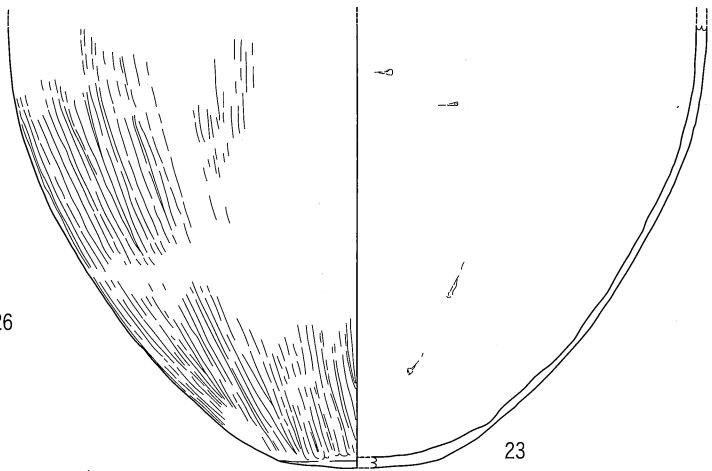
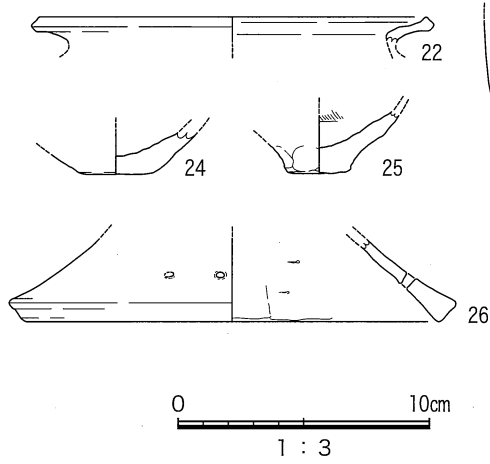
同住居跡をSHg02に先行するものと考えた場合、現状で主柱穴と考えている柱穴とは異なるプランの竪穴住居になる。

第15図のように、出土遺物は微量であり、年代決定は難しいが、SHg02と同時期もしくは若干先行すると考えて矛盾はない。



- 1 暗褐色 [10YR 3/3] 粘質土 (Fe含む)
- 2 1層とほぼ同じ (ベースブロック・炭化物粒・粒土・顕著に含む)
- 3 黒褐色 [5YR 3/1] 粘土 (ベースブロックわずかに含む・Fe含む)
- 4 黒褐色 [5YR 2/1] 粘土 (ベースブロック顕著に含む炭化物粒・Fe含む)
- 5 黒褐色 [5YR 3/1] 粘土 (ベースブロック顕著に含む)
- 6 黒色 [10YR 2/1] 粘土 (Fe含む)

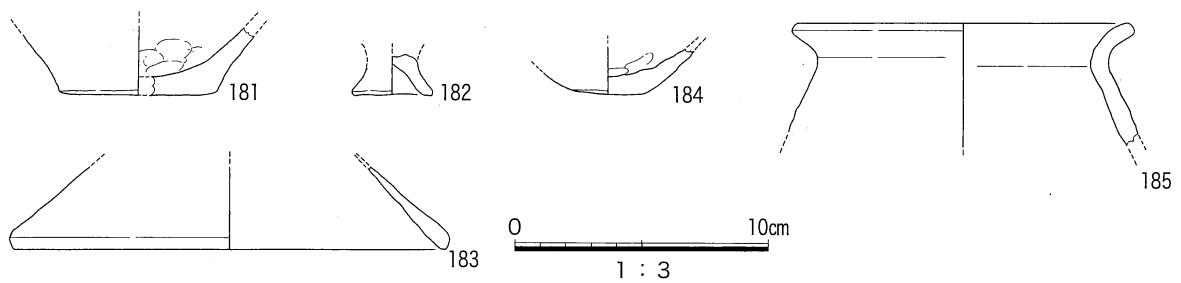
0 2m
1 : 80



第12図 SHg02平・断面図、出土遺物実測図



第14図 SHg03 推定復元図



第15図 SHg03 (SPg202)・SDg18・19 出土遺物実測図



第13図 SHg03・SDGg18・19 平・断面図

番号	遺跡名称	種類	概要	文献
1	天満遺跡	散布地	現熊野神社の西部一帯において、弥生時代前期末～後期前半頃の遺物が採取されている。詳細不明。	1
2	天満・宮西遺跡	集落跡	弥生時代前期～近世の複合遺跡であるが、特に弥生時代前期中頃の環濠集落跡と同後期の堅穴住居跡を主体とする集落跡が目される。磨製石砲丁、土製紡錘車、木製鉄斧柄、木製船形模造品、管玉、ガラス玉等が出土。	2
3	鹿原・中筋遺跡	散布地	弥生土器と須恵器の散布がみられる。	—
4	鹿腹遺跡	集落跡	詳細不明。	—
5	キモンドー遺跡	集落跡、城館跡	弥生時代の堅穴住居跡と溝状遺構、中世の佐藤城の堀跡、江戸時代の建物跡等が検出されている。	21, 22, 26
6	境目・下西原遺跡	水田跡	弥生時代～近世までの複合遺跡である。掘立柱建物跡、溝状遺構、水田跡、土坑跡、自然河川跡等の多くの遺構が検出されている。	27
7	松縄下所遺跡	集落跡	条里地割に重複する溝状遺構の他、弥生時代後期の掘立柱建物跡や中世の水田跡が検出されている。	2, 28
8	太田下・須川遺跡	集落跡	弥生時代中期後半頃～同後期と5世紀後半頃の集落跡を中心として近世まで断続的に集落が営まれている。大阪府陶器窯跡産出の須恵器が特筆できる。	3
9	蛙股遺跡	墓地	古代～中世にかけての水田跡、溝状遺構、畦跡等が検出されている。また、弥生時代後期の自然河川跡から3基の土器棺が出土している。	4, 35
10	居石遺跡	自然河川跡	香東川に起因する自然河川跡が検出されている。遺物は縄文時代晩期中頃の土器や古墳時代初期の小型仿製鏡等が出土している。	2, 5, 36
11	三軒屋遺跡	散布地	広域において弥生土器、中世土師器、石鏃等が採取されている。	—
12	井手東Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代の溝状遺構が多く検出されている。縄文土器と弥生土器が併存して出土しているほか、石棒等の石器も出土している。	2, 30
13	井手東Ⅰ遺跡	集落跡	縄文時代～弥生時代の溝状遺構と鎌倉時代～江戸時代の集落跡を検出している。弥生時代中期中頃の溝状遺構から出土した鋤、鋏、容器、琴、機織具、弓等の木製品が目されている。	2, 29
14	浴・長池Ⅱ遺跡	集落跡、水田跡	縄文時代晩期～近世の複合遺跡であるが、弥生時代前期末頃の整然と配置された水田跡が特筆できる。	2, 6
15	浴・長池遺跡	集落跡、水田跡	弥生時代前期の水田跡と同中期の堅穴住居跡、周溝墓、掘立柱建物跡等が検出されている。また、自然河川跡から縄文時代晩期の木製農耕具が出土している。	2, 7
16	浴・松ノ木遺跡	自然河川跡、水田跡	弥生時代前期以降近世まで自然河川と水田が断続的に出現したことが判明している。最も水田の規模が拡大する時期は、古墳時代中期末頃～同後期初頭頃と12世紀後半頃である。	2, 8
17	松ノ木・天皇遺跡	散布地	弥生時代前・後期の土器と須恵器が採取されている。	—
18	林・坊城遺跡	自然河川跡、墓地	自然河川跡から縄文時代晩期の土器組成・編年研究に有効な凸帯文土器が出土している。また、同時期の木製農耕具が多数採取されている。さらに、弥生時代後期の円形周溝墓1基が検出されている。	9
19	六条・上所遺跡	集落跡	古墳時代中期の2基の堅穴住居跡から出土した韓式系土器が目される。	25
20	大池遺跡	散布地	弥生土器、須恵器、サヌカイト剥片等が散布。特に池底において採取された有舌尖頭器2点が注目されている。	1, 10
21	木太町散布地	散布地	多量の弥生土器が採取されている。	—
22	高松中央団地北方散布地	散布地	粘土採取作業時に土器が出土している。詳細不明。	11
23	多肥下遺跡	散布地	弥生土器、須恵器、土師器が採取されている。	—
24	北原遺跡	散布地	工事に伴って存する土師器1点が出土している。詳細不明。	11, 12
25	凹原遺跡	集落跡	弥生時代後期後半頃～古墳時代初期頃の堅穴住居跡を主体とする規模の大きい集落跡である。	2
26	日暮・松林遺跡	集落跡	弥生時代中期～近世の遺構を検出している。主に弥生時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、中世の条里地割に基づく溝等があげられる。遺構では古墳時代の自然河川跡から多数の須恵器が出土している。	23, 31
27	多肥松林遺跡	自然河川跡、集落跡	弥生時代中・後期と平安時代の集落跡や自然河川跡を中心に縄文時代晩期～近世にかけて遺構を検出している。河川下層からは弥生時代後期の溝状遺構が2基検出されている。遺物では弥生時代中期の自然河川跡から出土した農具、工具、建築部材、容器、祭祀具等の木製品と、平安時代の自然河川跡から出土した墨書土器等が注目される。	13, 14, 15, 38
28	松林遺跡	集落跡、墓地	弥生時代中期の堅穴住居跡1基、土坑、墳塚、溝状遺構と里界に相当する溝状遺構が検出されている。	32
29	天皇西原遺跡	散布地	弥生時代土器（前・後期）と須恵器が出土する。	—
30	桜木神社北方散布地	散布地	土器が採取されている。詳細不明。	11
31	下池遺跡	散布地	弥生土器が採取されている。詳細不明。	—
32	池の内遺跡Ⅱ	散布地	弥生土器の出土が知られるが、詳細不明。	—
33	桜木神社南方散布地	散布地	土器が採取されている。詳細不明。	11

34	宮西一角遺跡	散布地	弥生時代前期の土坑5基、溝状遺構11条、中世の土壇墓1基、弥生時代後期頃の自然河川跡等が検出されている。	33
35	一角遺跡	自然河川跡、寺院跡	弥生時代後期後半の自然河川跡と旧吉国寺跡と考えられる寺院跡を検出している。	34
36	公務員宿舎遺跡	自然河川跡、集落跡	弥生時代後期後半頃の堅穴住居跡1基と同時期から古墳時代初頭頃の自然河川跡が検出されている。	16
37	空港跡地遺跡（亀の町地区）	溝状遺構	現春日川方向へ通水する溝状遺構と里界を構成する溝状遺構が検出されている。	24
38	加摩羅神社東北壇上遺構	道路遺構？	推定南街道の位置に壇上の盛り土遺構が存在することから、道路遺構の一部であるとする見解がある。	1, 11
39	白山神社古墳	古墳	円墳。直径約30m。堅穴式石室は全長180cm、幅40cm、深さ20cm。石室内面に朱が施されていた。遺物は遺存しない。	11, 17
40	天満宮古墳	古墳	詳細不明。	11
41	加摩羅神社古墳	古墳	横穴式石室を有する。	1, 17
42	高野丸山古墳	古墳	円墳。最大径約80m。周濠もしくはテラス状の施設の存在を示唆する地割が現存する。	1, 12
43	多肥廃寺	寺院跡	布目瓦が出土し、見性寺林（地名）が遺存する。『多肥郷土史前編』口絵の瓦3点は本遺跡出土の可能性が高い。	1, 18
44	拝師廃寺	寺院跡	奈良時代後期の布目瓦が出土する。	11
45	向城跡	城館跡	土塁跡と考えられる土壇状地形が現存する。	11
46	神内城跡	城館跡	「城屋敷」の地名が現存する。	11
47	松縄城跡	城館跡	現熊野神社の敷地が比定地である。	21, 22
48	佐藤城跡	城館跡	キモンドー遺跡の調査時に、方形館の南東隅部分に相当する堀跡が検出されている。遺存する遺構は堀跡内部の傾斜面下部の1～2段の積み石のみである。	11
49	居石城跡	城館跡	現居石神社一帯が比定地である。	11
50	高木城跡	城館跡	鎮守「城の神」と、関連地名が現存する。	11
51	旧高松空港内伝承地	城館跡	『山田郡下林村順道図説』に2重の土塁状施設の表現がある。周辺地域に城館跡の存在を示唆する地名が伝承している。	11
52	由良山城跡	城館跡	由良山山頂部分の平坦地を中心とする。詳細不明。	19
53	上林（浄願寺）城跡	城館跡	岡氏の居館跡。陸軍飛行場建設時に南掘に相当した「城井」が埋め立てられた。	11, 20
54	鎌野城跡	城館跡	詳細不明。	—
55	多肥宮尻遺跡	自然河川	縄文時代晩期～鎌倉時代にかけての遺跡が検出されているが、密度は稀薄である。自然河川跡から多量の遺物が出土している。	37

（文献）

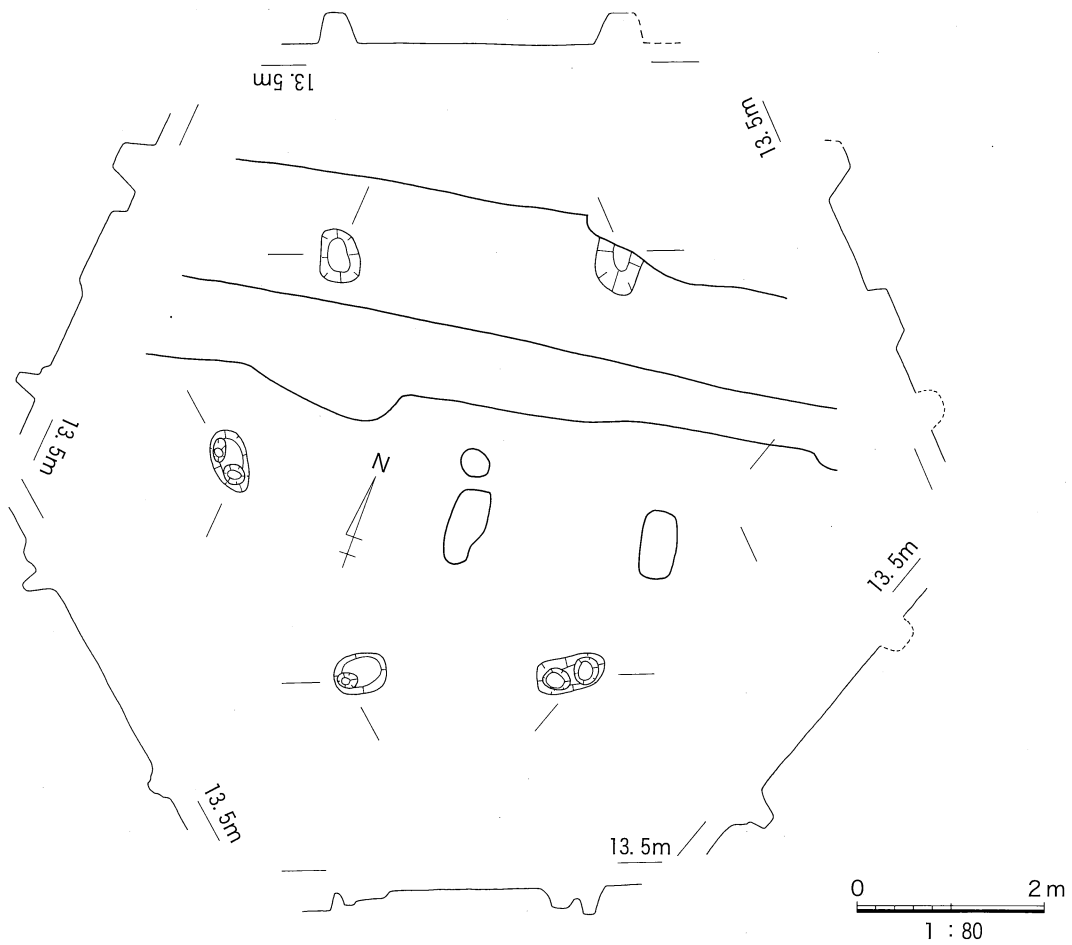
- 1 丹羽佑一・藤井雄三『遺跡が語りかける 高松の古代文化』1988年
- 2 木原博幸・他『讃岐国弘福寺領の調査—弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書—』1992年
- 3 北山健一郎・森下友子・他『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 太田下・須川遺跡』1995年
- 4 山元敏裕『蛙股遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成4年度』1993年
- 5 木下晴一『井堰と瀬の祭祀』『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』1994年
- 6 山本英之・山元敏裕『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡』1994年
- 7 山本英之・山元敏裕・他『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊 浴・長池Ⅱ遺跡』1993年
- 8 山本英之・山元敏裕・中西克也『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 浴・松ノ木遺跡』1994年
- 9 宮崎哲也『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 林・坊城遺跡』1993年
- 10 浜田重人『高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器』『香川考古』第2号1994年
- 11 木原博幸・他『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』1987年
- 12 伊達 伍・三木一夫『多肥郷土史前編』1981年
- 13 土佐修治・他『高校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡 平成5年度』1994年
- 14 宮崎哲治・他『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡 鹿伏・中所遺跡 平成6年度』1995年
- 15 中川芳和・北山健一郎・福西由実子『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』1995年
- 16 北山健一郎『公務員宿舎遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度』1992年
- 17 片桐孝浩・他『白山神社古墳』『香川考古』第3号1994年
- 18 矢野謙三・他『林村史』1958年
- 19 東原岩男・他『川島郷土誌』1995年
- 20 石上英一『弘福寺領讃岐国山田郡田図の分析（3）』『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅲ』1990年
- 21 中西克也『キモンドー遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度』1994年
- 22 高松市教育委員会『むかしの高松』第4号1994年
- 23 中西克也『日暮松林遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成5年度』1994年
- 24 山本英之・他『高松市林町RT（加入者線多重伝送装置）設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空跡跡地遺跡（亀の町地区）Ⅰ』1995年
- 25 北山健一郎・他『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 六条・上所遺跡』1995年
- 26 山本英之・中西克也『太田第2土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二冊 キモンドー遺跡』1999年
- 27 山本英之・中西克也『太田第2土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 境目・下西原遺跡』1998年
- 28 川端 聰『太田第2土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 松縄下所遺跡』2001年
- 29 山本英之・山元敏裕・中西克也『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 井手東Ⅰ遺跡』1995年
- 30 山本英之・山元敏裕・中西克也『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五冊 井手東Ⅱ遺跡』1995年
- 31 山本英之・中西克也『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林遺跡』1997年
- 32 大嶋和則『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 松林遺跡』1996年
- 33 山元敏裕『市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 宮西・一角遺跡』2000年
- 34 大嶋和則『特別養護老人ホームさくら荘建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 一角遺跡』2000年
- 35 山本英之・中西克也・山元敏裕『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 蛙股遺跡』1995年
- 36 藤井雄三・山元敏裕『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第七冊 居石遺跡』1995年
- 37 小野秀幸『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 多肥宮尻遺跡』2000年
- 38 山下平重『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第一冊 多肥松林遺跡』1999年

SHg04 (第16図)

竪穴住居跡の掘り込みは確認されていない。確認されている柱穴5穴の配置から、当初六角形の柱穴を持つ竪穴住居跡であった可能性を考えている。

ただし、この想定には①柱穴が1穴不足していること、②中央土坑など他の施設が確認されていないこと、③他の住居跡には見られない柱穴の並びであることが比定的な材料であると考えている。

いずれにしても、柱穴内からの遺物がなく、時期・内容は不明であり可能性にとどめておきたい。



第16図 SHg04 平・断面図

② 溝状遺構

SDg01・03 (第17~19・34図)

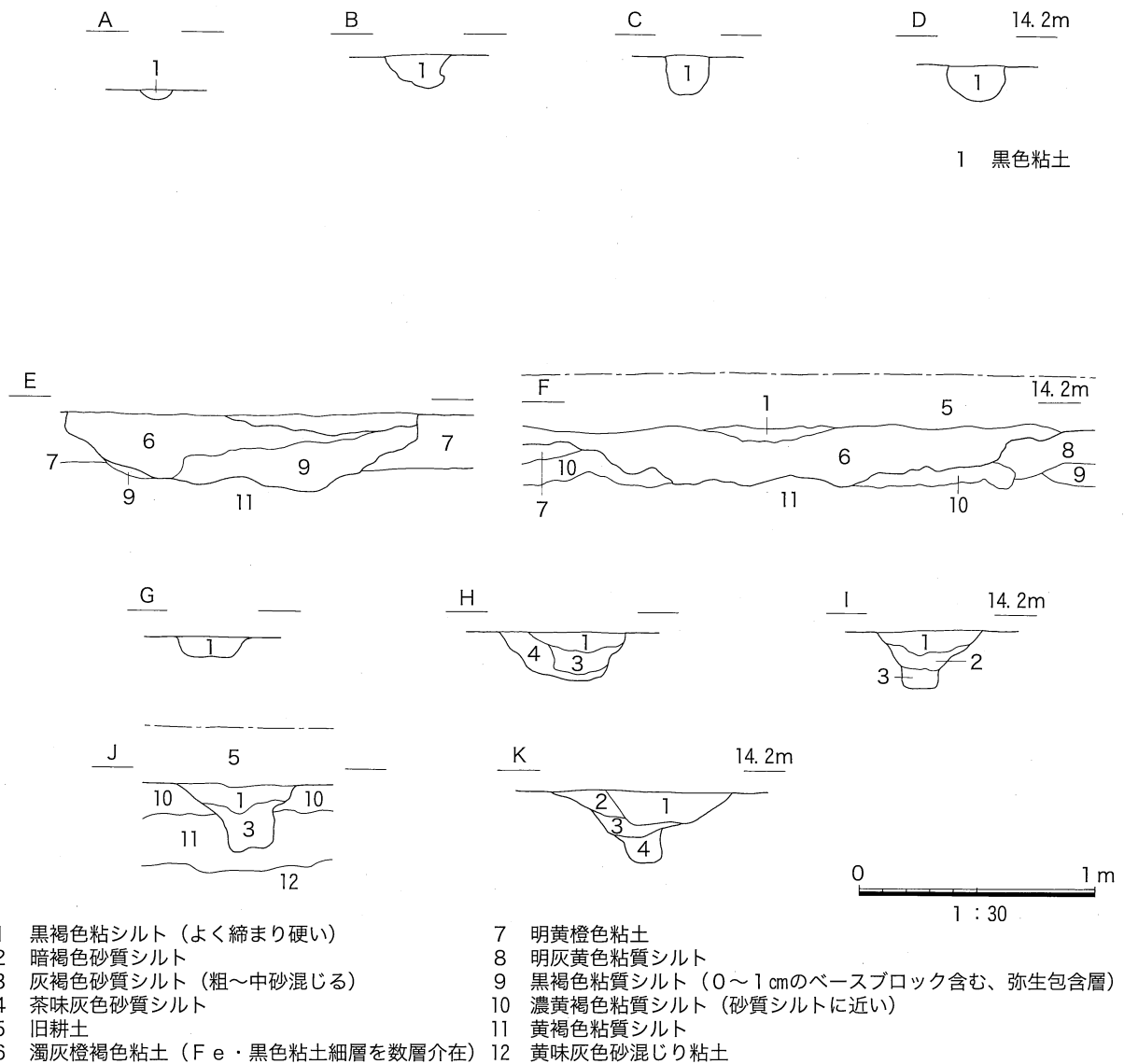
SDg01は、本調査区の西北から中央に向かって不整形な円弧を描いて伸びる溝で、後述するSDg03に合流する。調査区西部では、後述する土坑群を切っており、土坑群が先行することが明らかである。

埋没状況は、第17図の断面に見られるように、単純な埋没状況を示すことから、徐々に埋没したのではなく、水が溜まった状況→ヘドロ化→埋没→水が溜まった状況→ヘドロ化→埋没を繰り返したものと考えられる。

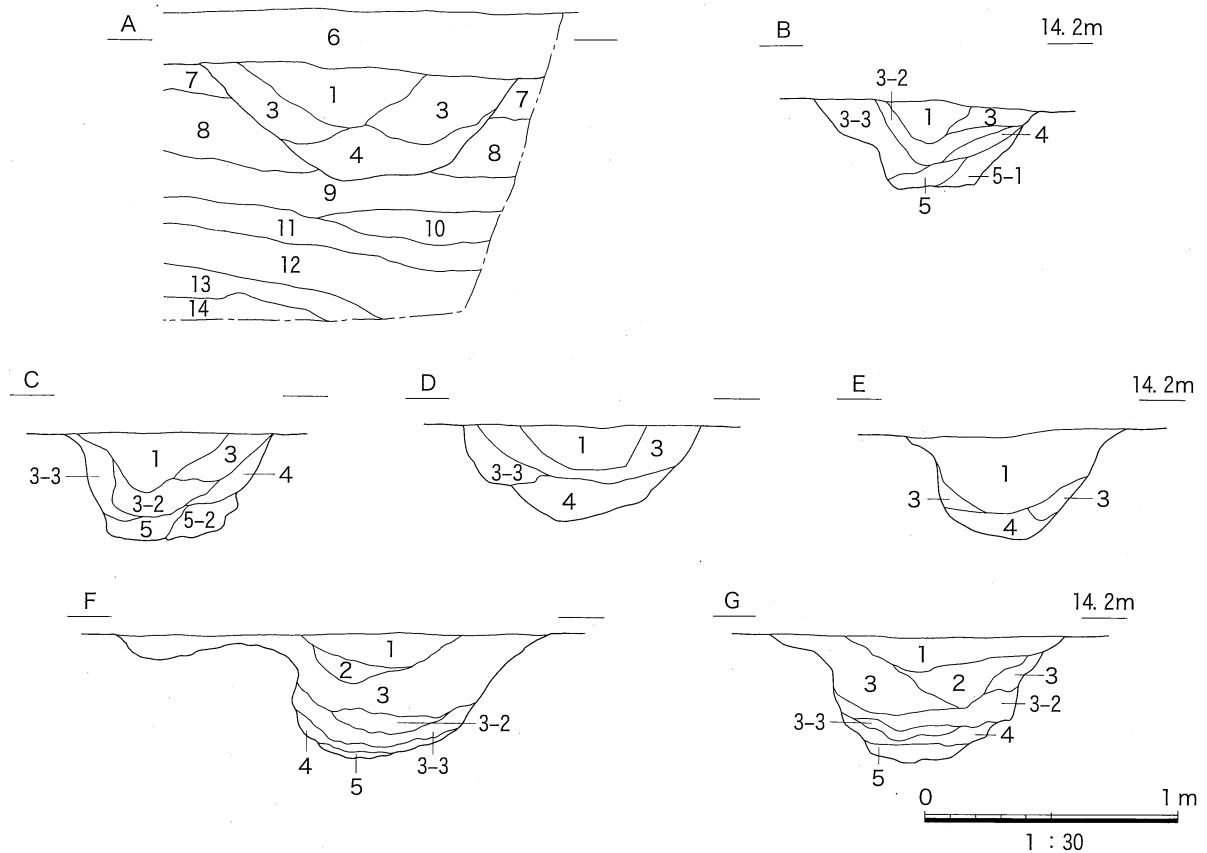
これに対してSDg03は、南北に流れる基幹水路と考えられ、自然堆積の状況が伺われる。

SDg01の遺物は少なく、第19図186・187・194の3点のみである。第19図188~193、195~214第18図221はSDg03出土遺物で、V-6・7様式に該当すると思われる。

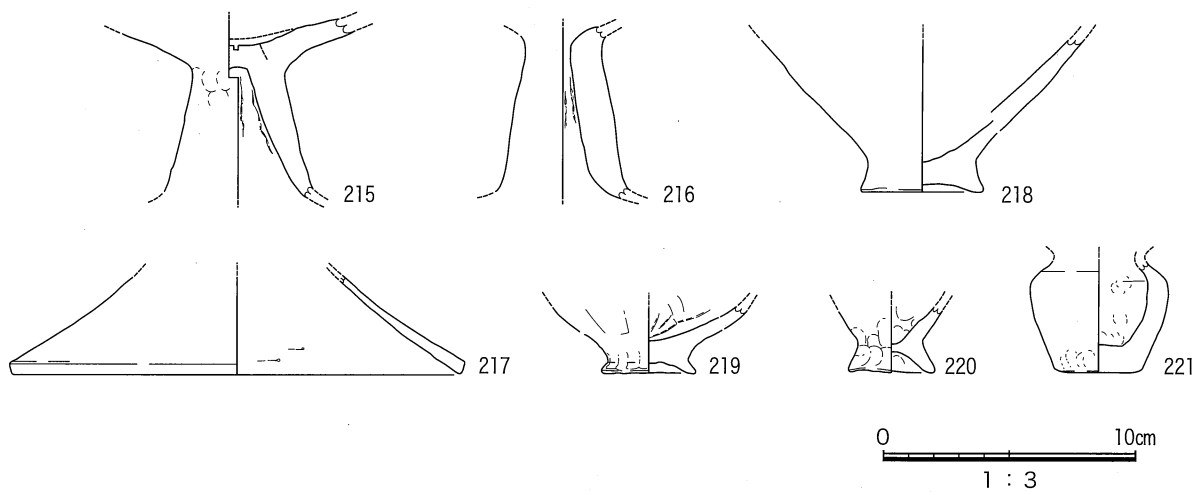
これ以外の溝については、出土土器が限られていることから、遺構の変遷を考える資料としては難しいが、おおむねV-6~8様式の範疇で捉えられる。



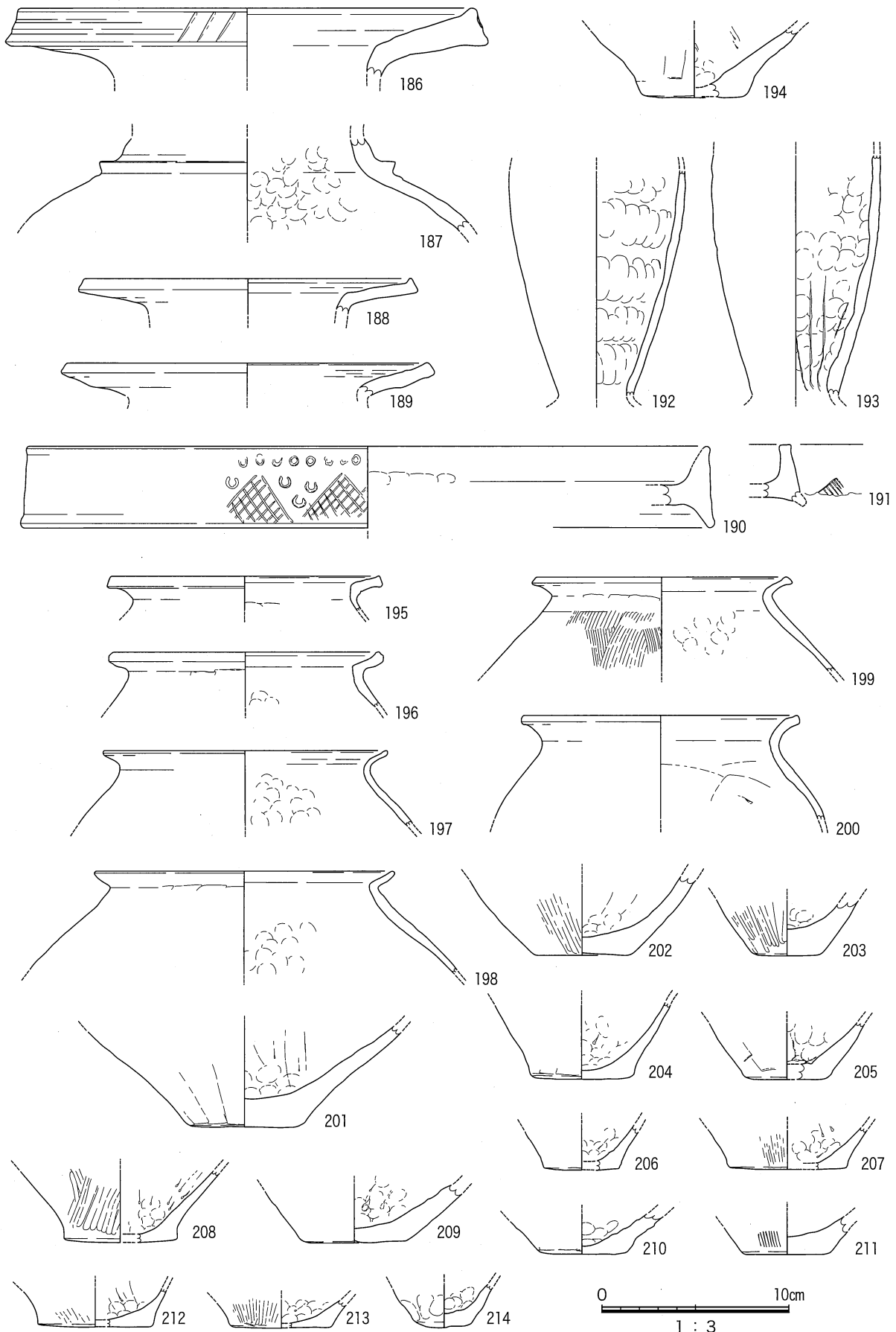
第17図 SDg01 土層断面図



- | | |
|--|---|
| 1 黒色 [7.5YR 2/1] 粘土 (遺物多く含む、炭層の細層が数枚あり) | 6 表土・旧耕作 |
| 2 灰黒色粘土 | 7 褐色 [7.5YR 3/4] 粘土 |
| 3 褐灰色 [7.5YR 2/1] 中砂質土 | 8 浅黄橙色 [7.5YR 8/8] 砂混じり粘土 |
| 3-2 褐灰色 [7.5YR 2/1] 粘土 (ベース粘土小ブロック含む) | 9 灰白色 [10Y 8/1] 粘土 (乾痕あり) |
| 3-3 褐灰色 [7.5YR 2/1] 砂混じり粘土 | 10 にぶい橙色 [5YR 6/3] 細砂 |
| 4 黒褐色 [7.5YR 3/1] 粘土 (炭化した植物遺体多く含む) | 11 明青灰色 [10BG 7/1] シルト質粘土 (黒色粘土小ブロック含む) |
| 5 黒褐色 [7.5YR 3/1] 砂混じり粘土 | 12 青灰色 [5BG 6/1] シルト (黒色粘土小ブロック含む) |
| 5-2 褐灰色 [7.5YR 5/1] 中砂質土 (ベース中砂質土ブロック含む) | 13 灰色 [7.5Y 5/1] 粘土 (炭化物含む) |
| | 14 明青灰色 [10BG 7/1] 細砂 |



第18図 SDg03 土層断面図・出土遺物実測図

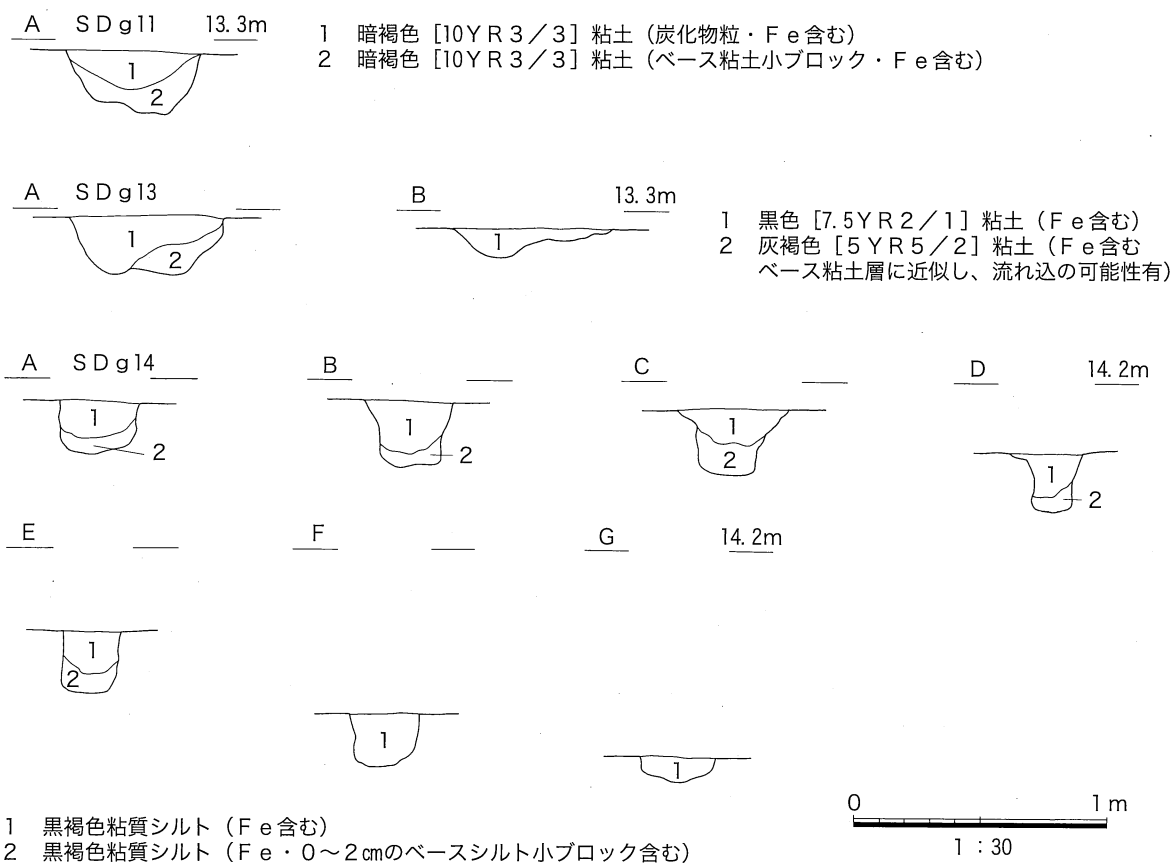


第19图 SDg01·03 出土遺物実測図

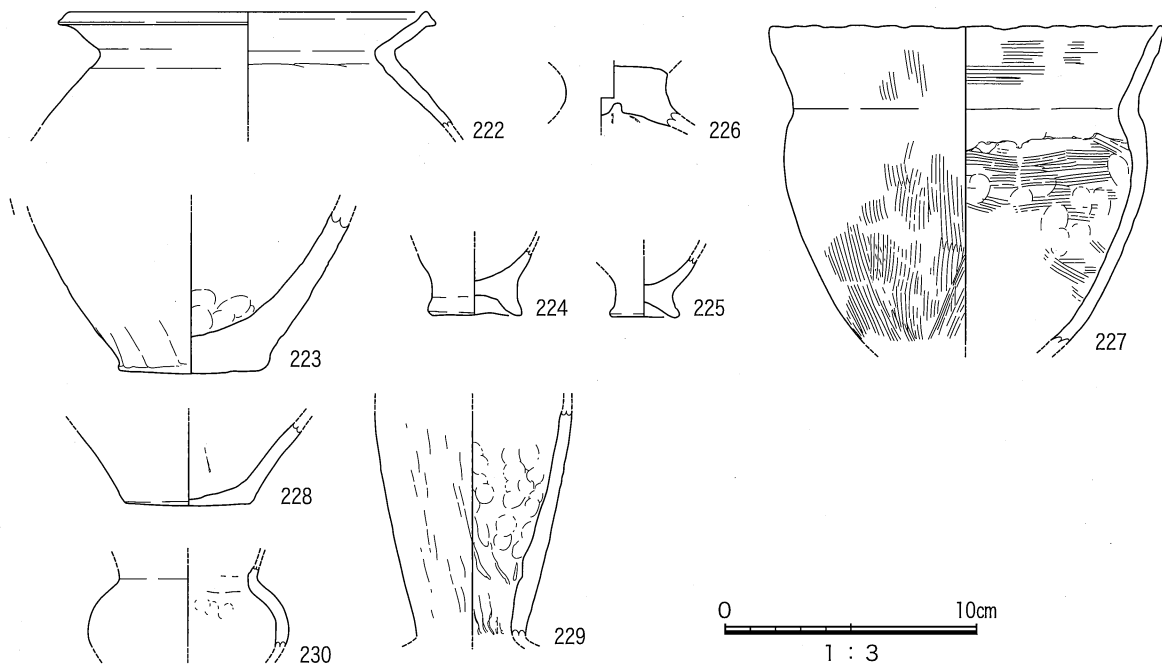
SDg11・13・14 (第20・21図)

SDg11は、調査区ほぼ中央の北辺部にあり、SHg02に関連する溝であるSDg15に合流する溝である。また、SDg13は、SDg18と交差しており、想定しているSHg03の内部に伸びている。交差点での切り合い関係は明確ではないが、SHg03が北辺をSDg15に切られていると考えられることから、SDg18より後出するものと考えられる。

SDg14は、SDg03を軸としてあたかもSDg01と対照的に北東方向に円弧を描いて伸びる溝で、東端ではSDg13に切られている。断面形状は、SDg01同様四角形に近い形での掘削が行われている。



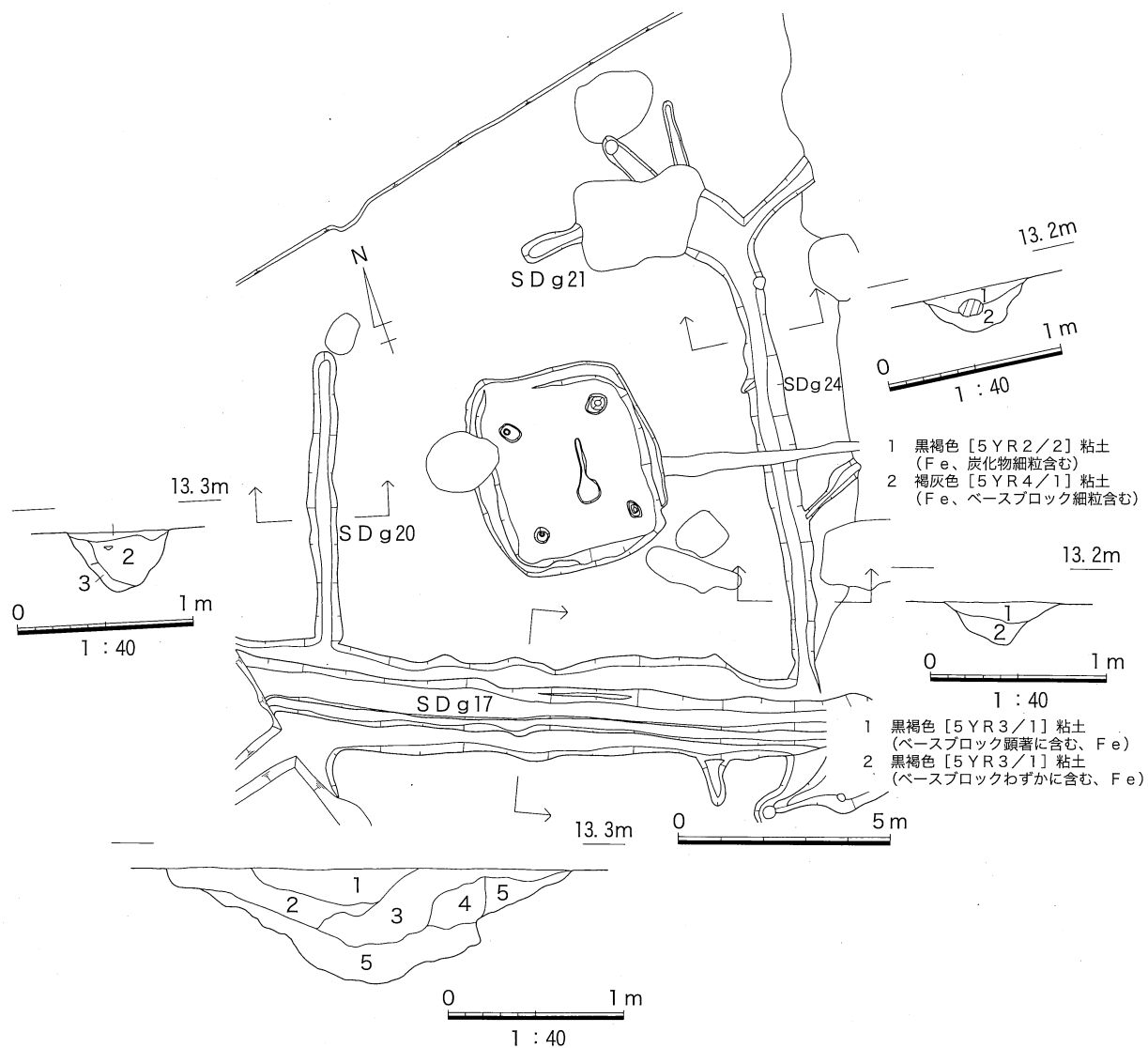
第20図 SDg11・13・14 土層断面図



第21図 SDg11・13・14 出土遺物実測図

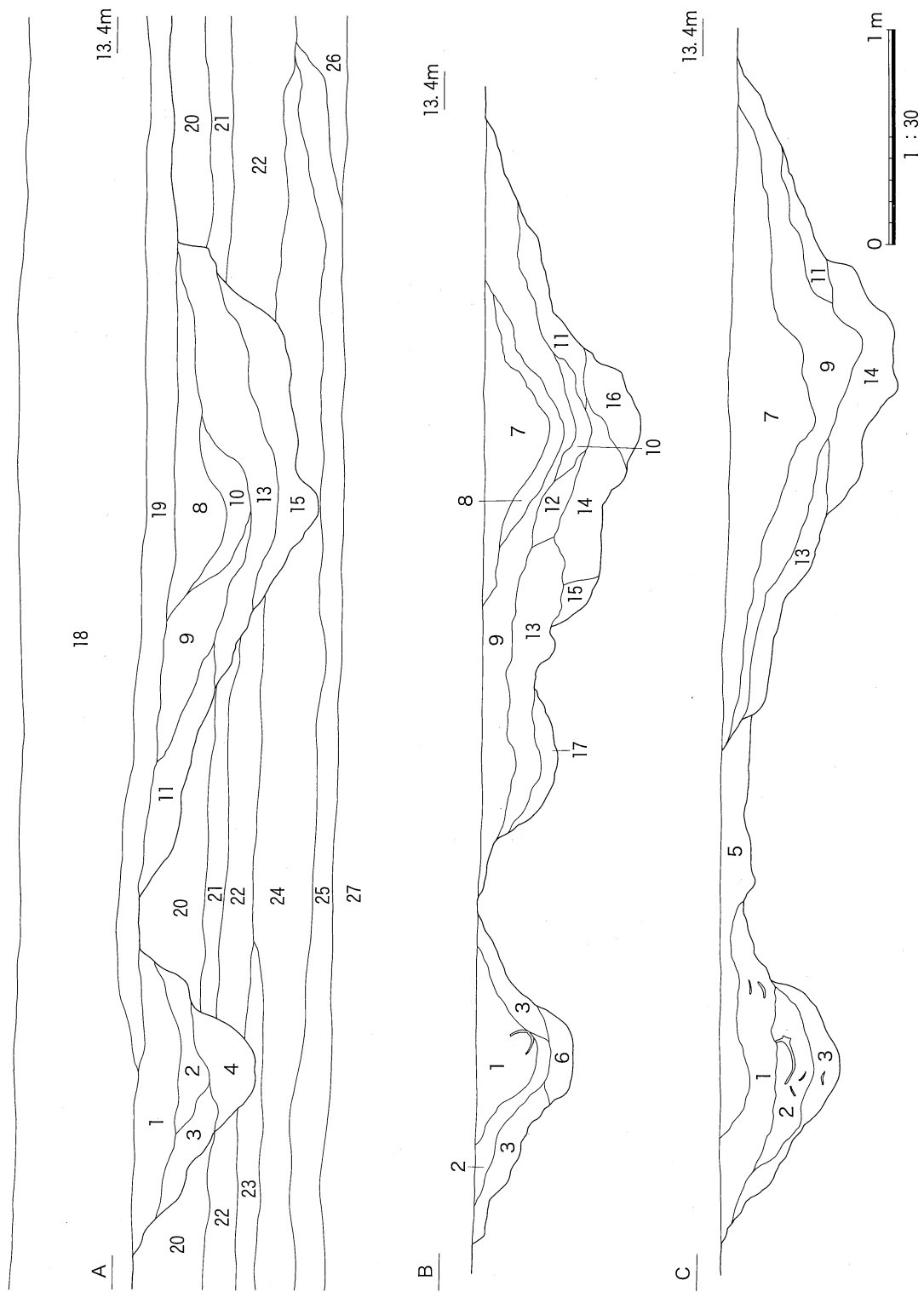
SDg15・17 (第22~34図)

SHg02に関連する溝として位置づけている溝である。両者ともほぼ並行に円弧を描き、最終的に合流して北東部に伸びる。この円弧内には現時点ではSHg02のみ認められるが、集落域の南辺を画する溝とも考えられる。断面から見て、比較的長い間機能していたことを伺わせ、徐々に自然埋没したものと考えられる。平面位置から見てほぼ同一時期に機能していたことが分かるが、断面3ではSDg15が先行して掘削・埋没した状況も見られる。先にも述べたが、出土遺物からはほぼ同一時期での埋没が想定される。



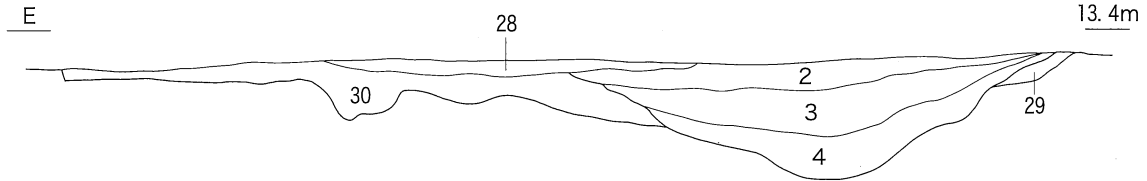
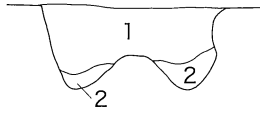
- 1 黒褐色 [5YR2/1] 粘土 (Fe、Mn)
- 2 黒褐色 [5YR2/1] 粘土 (3層小ブロック、ベース粘土小ブロック含む、Fe)
- 3 黒色 [7.5YR1、7/1] 粘土 (ベース粘土小ブロック含む、土器多量に出土、Fe)
- 4 黒褐色 [10YR3/1] 粘土 (ベース粘土小ブロック含む、Fe)
- 5 褐灰色 [7.5YR4/1] 砂混じり粘土 (炭化物細粒含む)

第22図 SHg02・SDg17・20・21・24 平・断面図

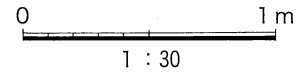
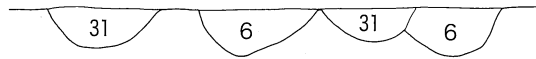
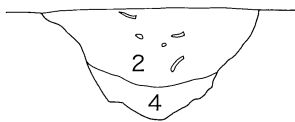


第23图 SDg15·17 土层断面图

D 13.4m

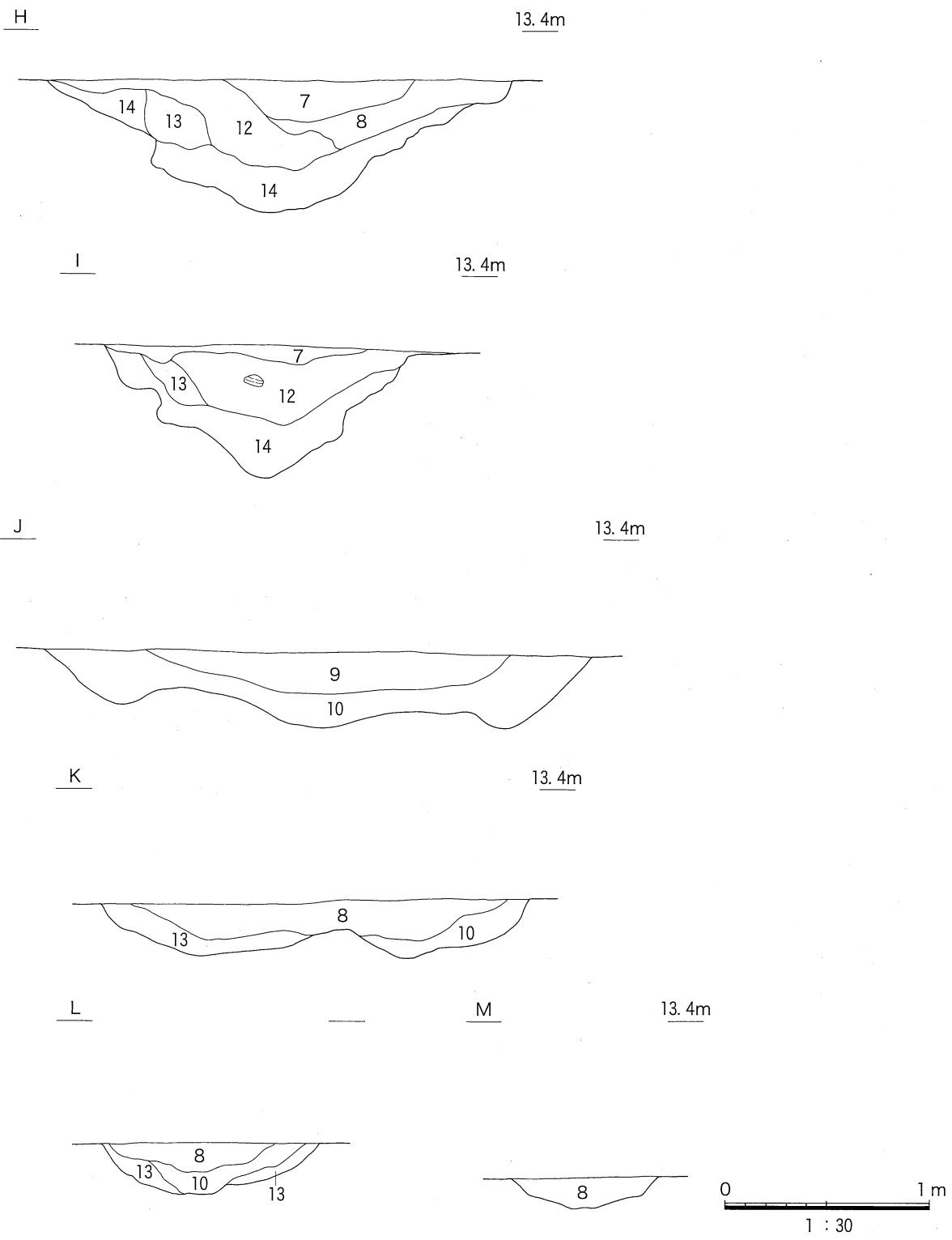


F G 13.4m

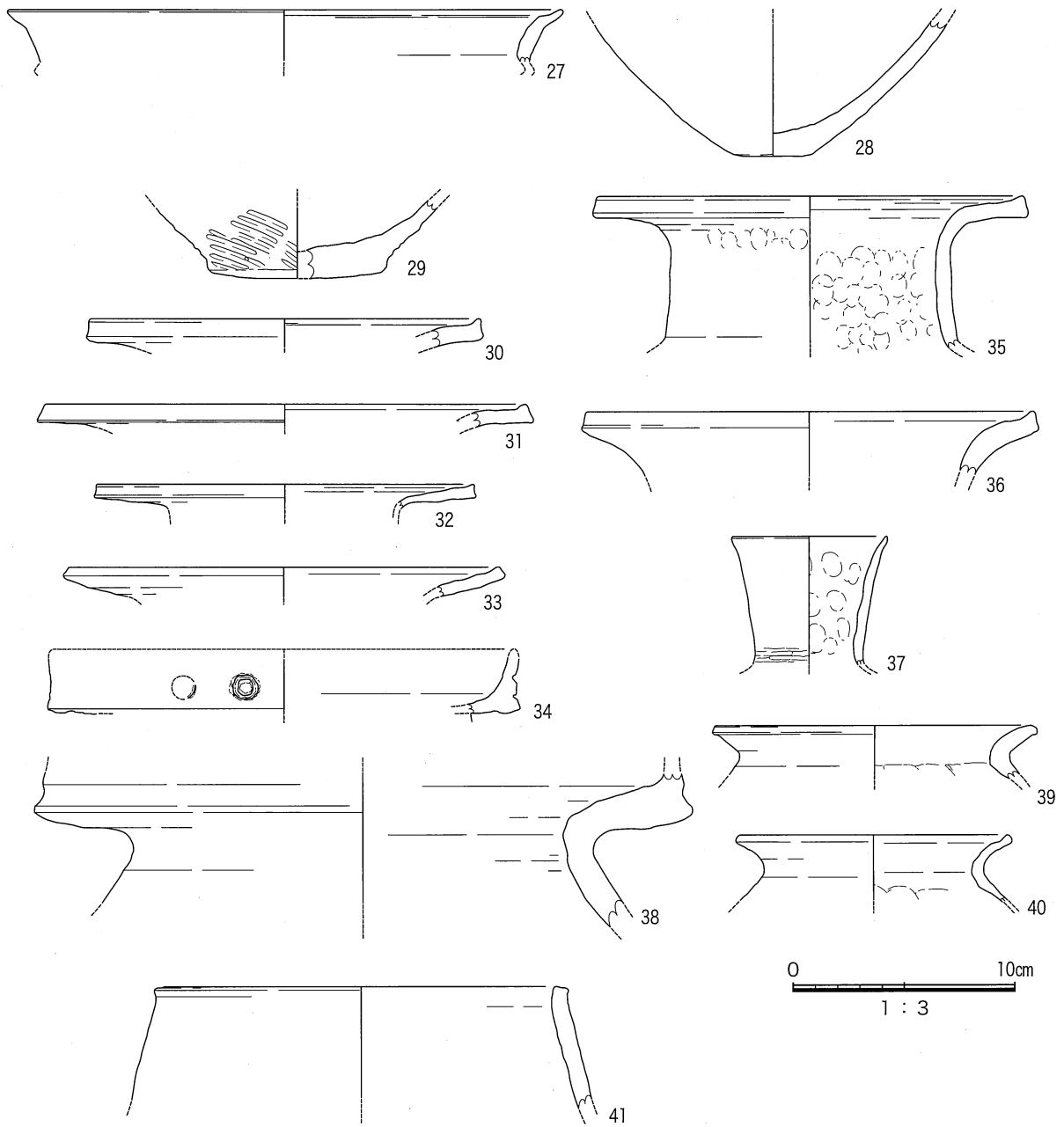


- 1 黒褐色 [5YR3/1] 粘土 (Mn含む)
- 2 黒褐色 [7.5YR2/2] 粘土 (Mn・ベース小ブロック僅かに含む)
- 3 黒褐色 [7.5YR2/2] 粘土 (Mn・ベースブロック顕著に含む)
- 4 黒色 [7.5YR2/1] 粘土
- 5 暗褐色 [7.5YR3/4] 粘土
- 6 暗茶褐色混色礫粘土 (1~3cmの亜色礫・クサレ礫を含む)
- 7 黒褐色 [5YR3/1] 粘土 (Mn)
- 8 黒色 [5YR1・7/1] 粘土 (Mn)
- 9 黒褐色 [7.5YR3/1] 粘土
- 10 黒色 [7.5YR2/1] 粘土 (僅かに砂混じる)
- 11 灰褐色 [5YR4/2] 粘土 (ベース粘土小ブロック状に含む)
- 12 黒色 [5YR1・7/1] 粘土
- 13 黒褐色 [5YR2/1] 粘土 (僅かに砂混じる)
- 14 黒色 [7.5YR2/1] 砂混じり粘土 (ベース粘土小ブロック状に僅かに含む)
- 15 褐灰色 [7.5YR4/1] 粘土 (ベース粘土ブロック顕著に含む)
- 16 黒色 [7.5YR2/1] 砂混じり粘土 (ベース粘土ブロック顕著に含む)
- 17 黒色 [7.5YR2/1] 粘土 (ベース粘土小ブロック状に含む)
- 18 耕土
- 19 黒褐色 [7.5YR3/1] 粘土 (Mn僅かに含む、弥生包含層)
- 20 にぶい赤褐色 [5YR5/3] 粘土 (Mn僅かに含む)
- 21 黄色 [5YR8/6] 粘土 (上面は18層の影響による濁り有)
- 22 黄橙色 [7.5YR7/8] 粘土
- 23 灰白色 [2.5YR8/2] 粘土 (Mn)
- 24 にぶい橙色 [7.5YR7/3] 粘土 (Fe含む)
- 25 黄灰色 [2.5YR4/1] 粘土
- 26 灰白色 [2.5YR8/2] 細砂 (下層は黒味帯びる)
- 27 灰黄褐色 [10YR6/2] 粘土
- 28 褐色 [7.5YR4/6] 粘土 (Fe・2層ブロック含む)
- 29 褐灰色 [7.5YR5/1] 粘土 (Fe・ベース小ブロック含む)
- 30 褐灰色 [7.5YR4/1] 粘土 (Fe・ベース小ブロック顕著に含む)

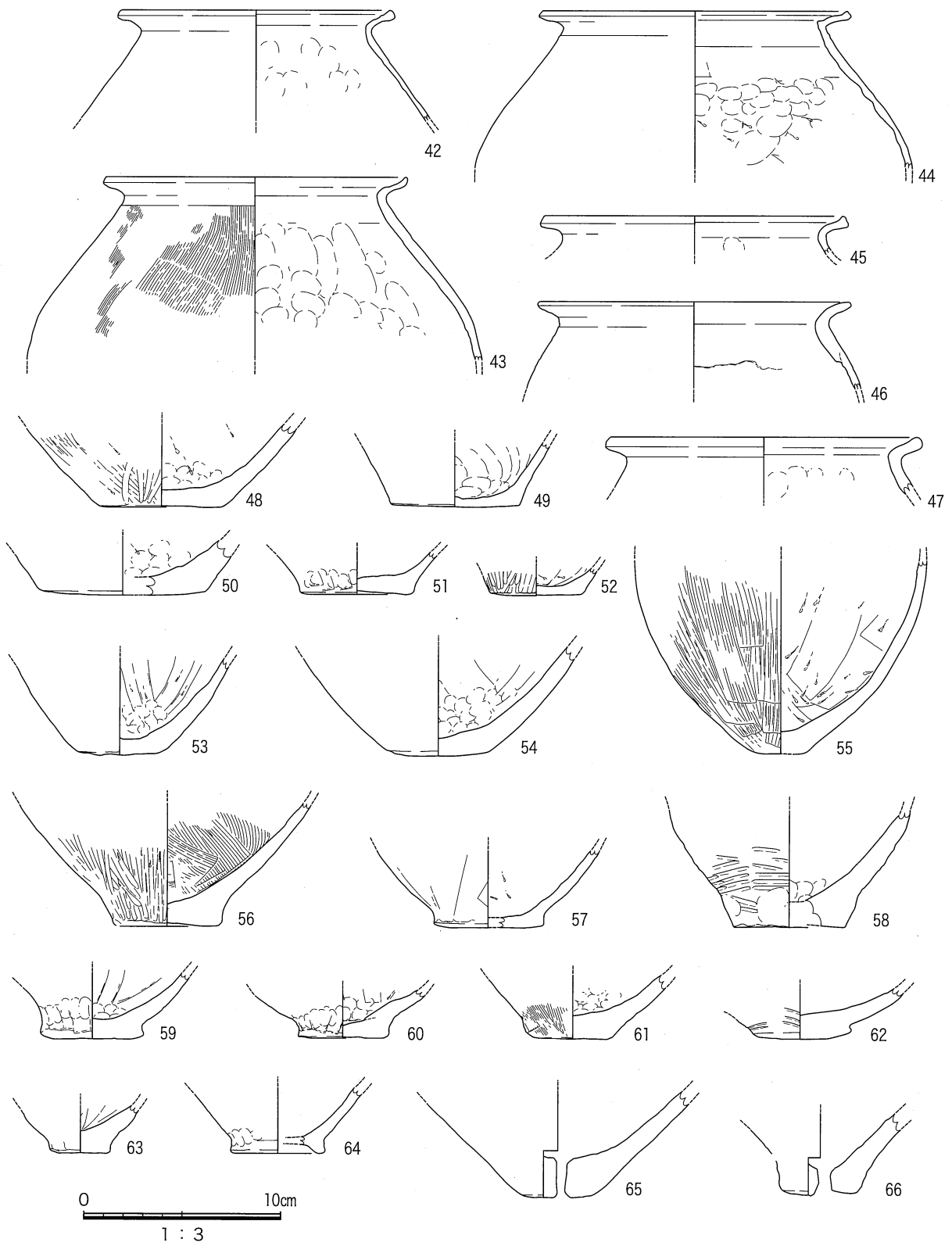
第24図 SDg15 土層断面図



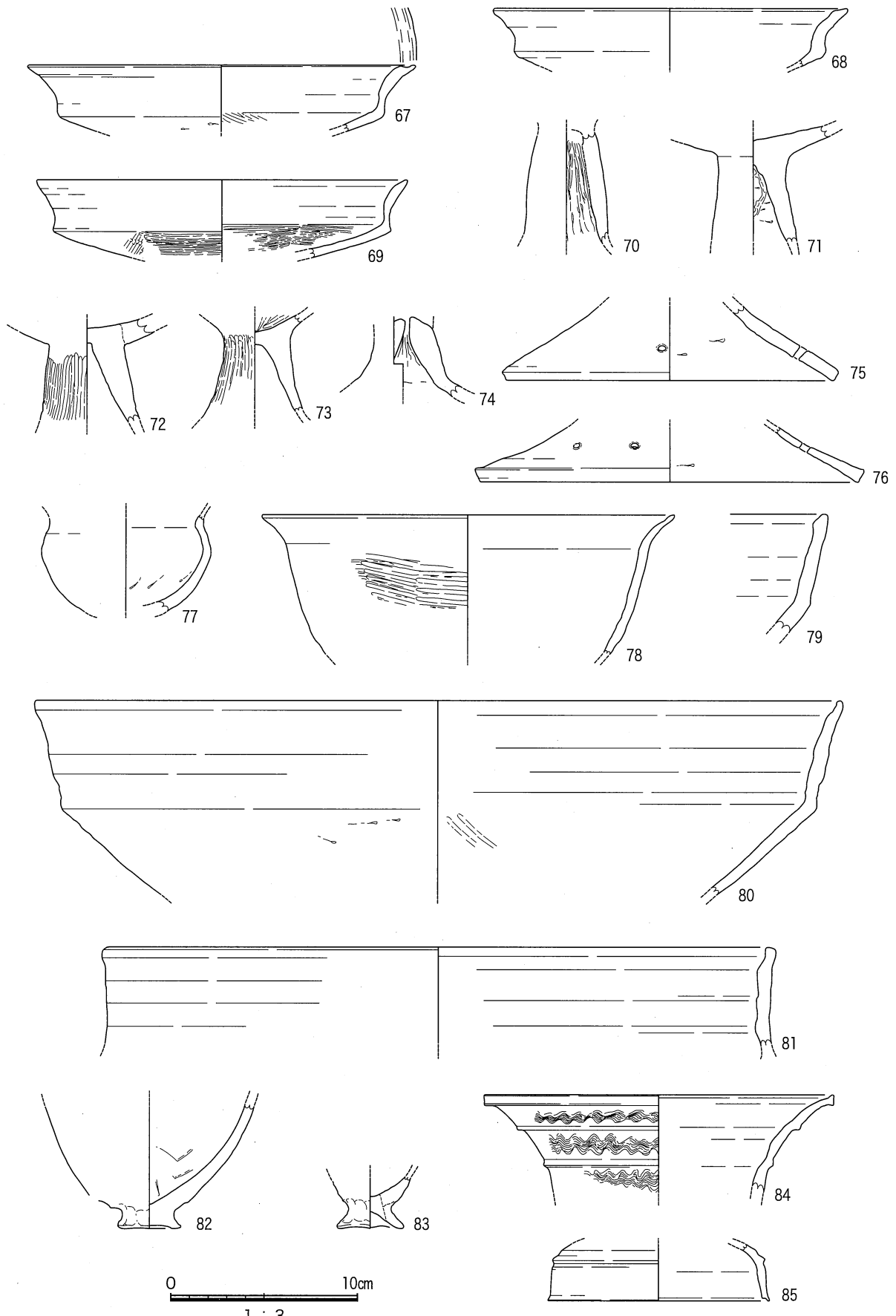
第25图 SDg17 断面图



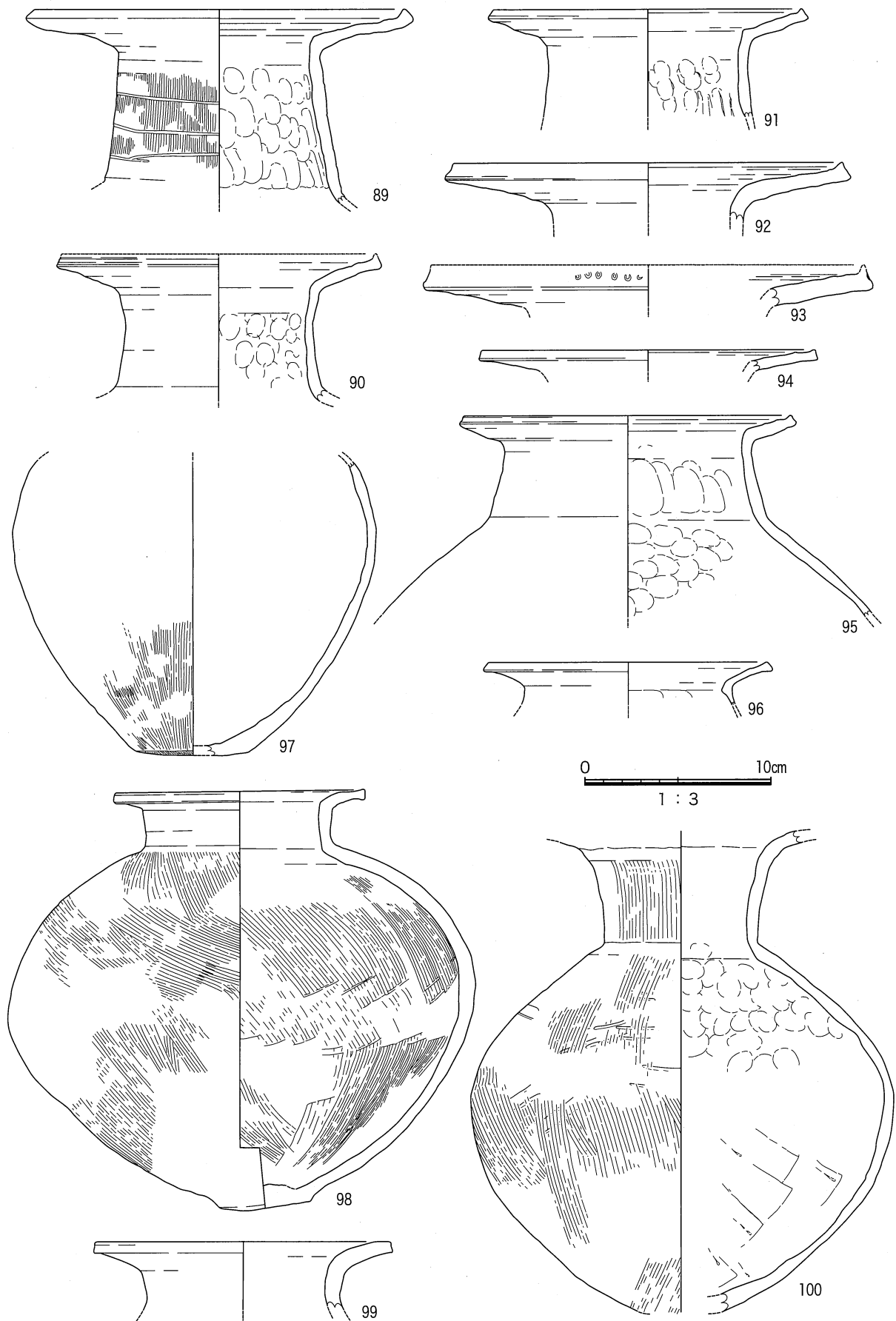
第26図 SDg17・20・21・24 出土遺物実測図



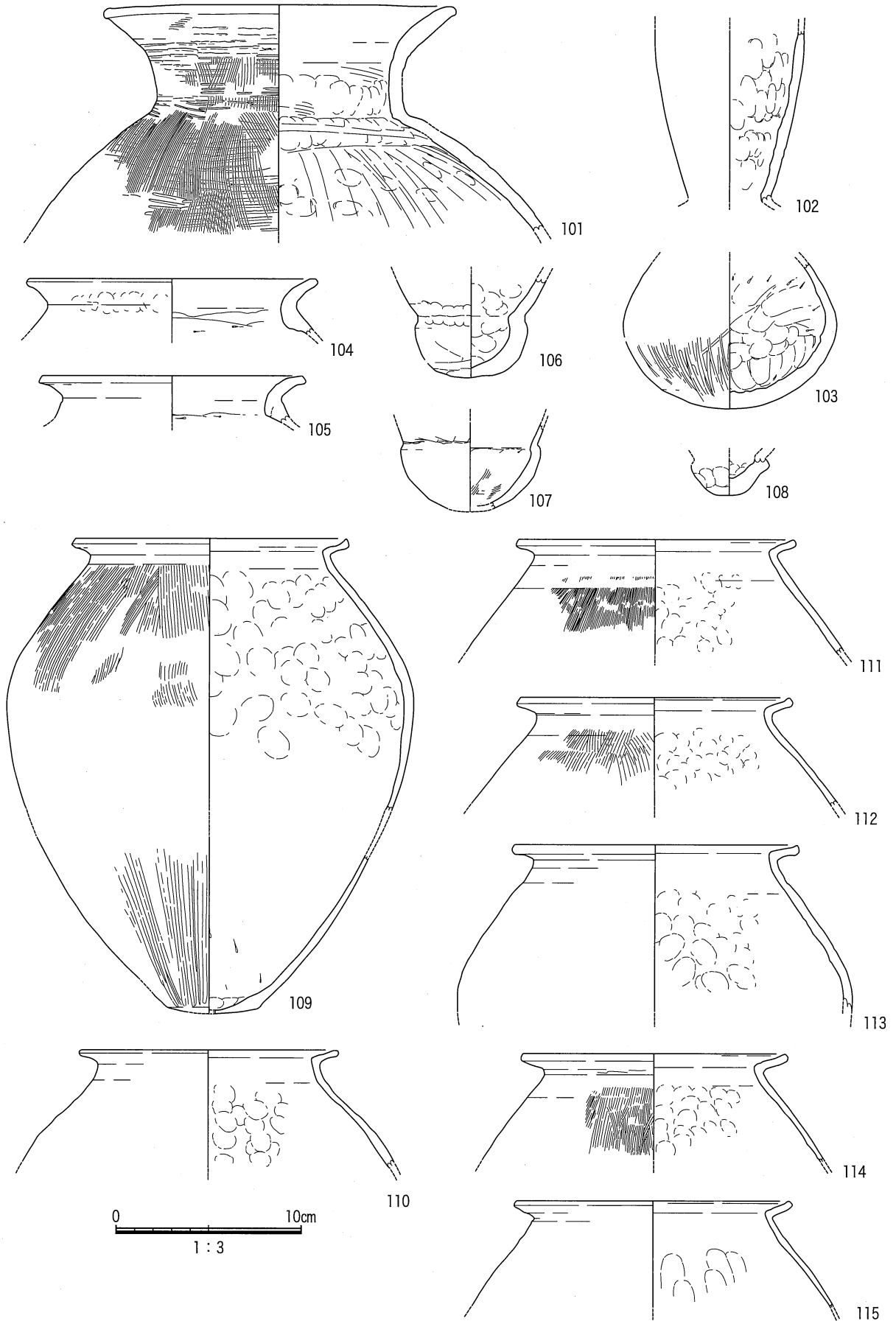
第27图 SDg17 出土遺物実測図 (1)



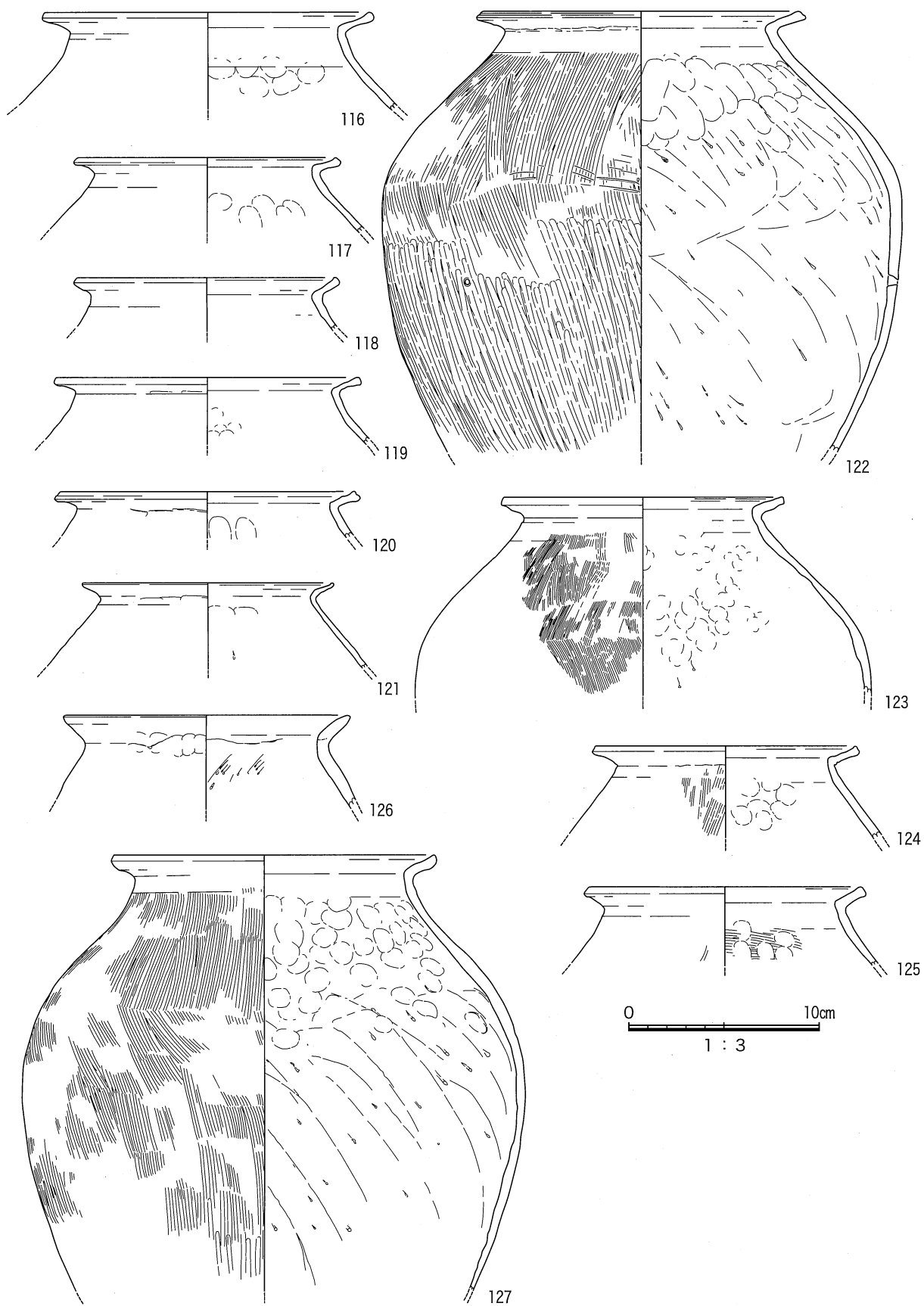
第28図 SDg17 出土遺物実測図 (2)



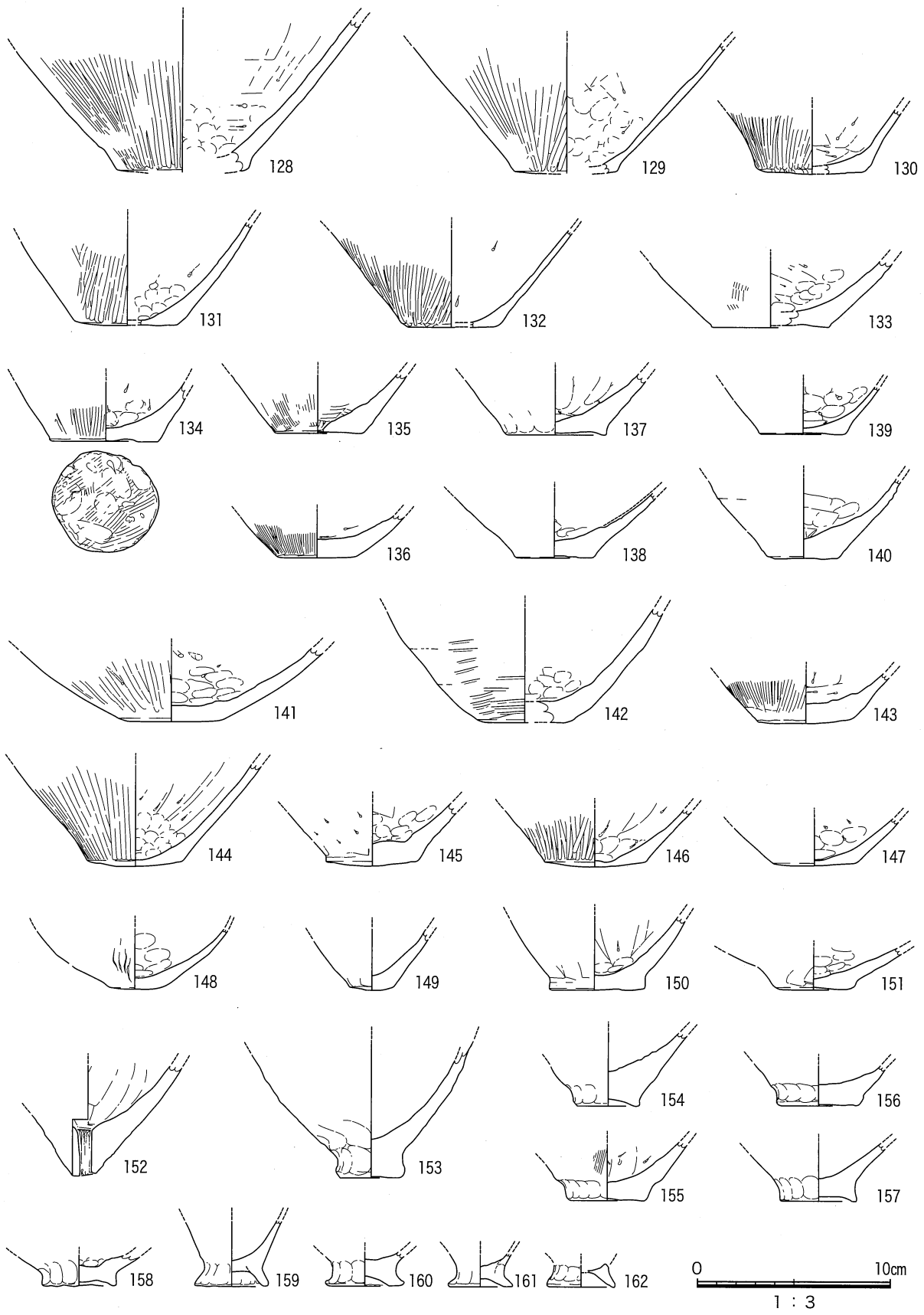
第29图 SDg15 出土遺物実測図 (1)



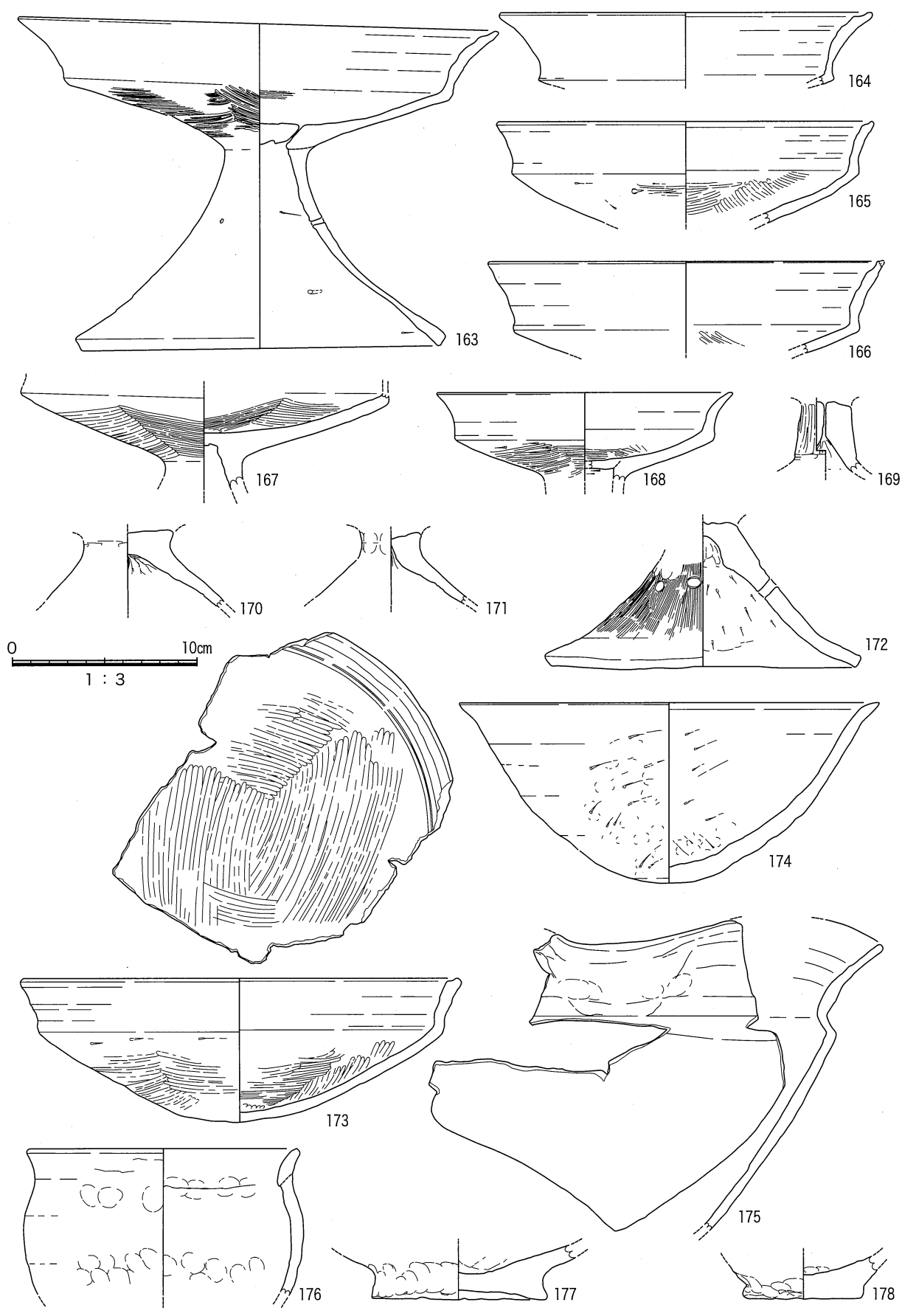
第30図 SDg15 出土遺物実測図 (2)



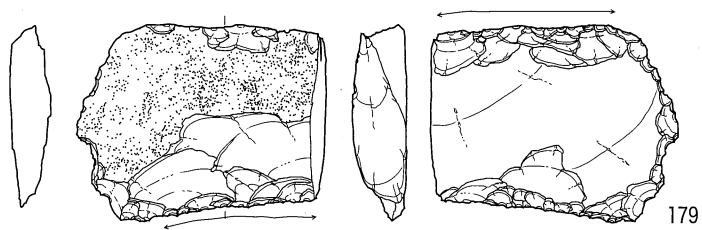
第31图 SDg15 出土遺物実測图 (3)



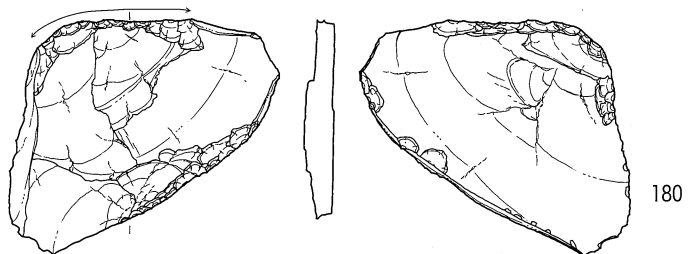
第32图 SDg15 出土遺物実測図 (4)



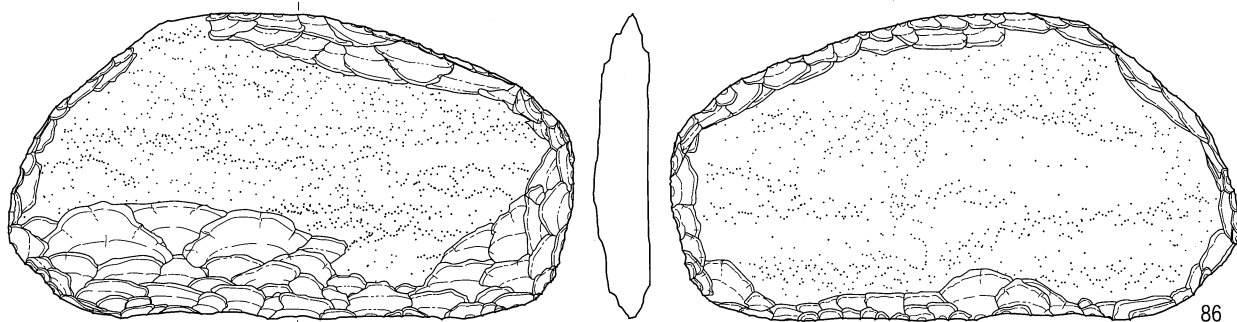
第33图 SDg15 出土遺物実測図 (5)



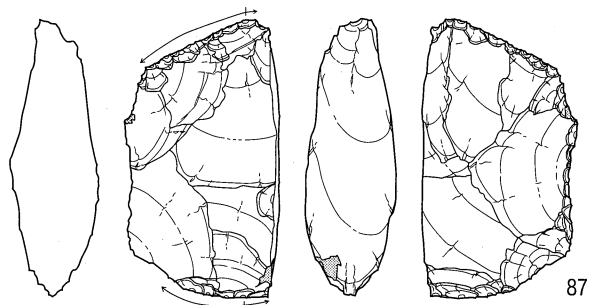
179



180



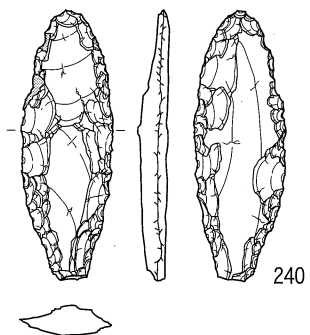
86



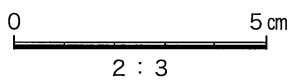
87



88



240



第34図 SDg03・15・17 出土遺物実測図

SDg 46・73 (第35図)

SDg46は、調査区東部をほぼ東西に延びる溝で東端、西端を近世の土坑によって壊されている。土層からは一部自然に埋没した後、最終的に埋められた可能性が高い。埋土中から弥生土器が出土している。

SDg73は、調査区中央部を東西に延びる溝で、東端はSKg858で収束している。西端は調査区外に延びるため不明である。溝の断面はU字形を呈し、自然埋没の状態を呈する。東端のSKg858を出水と考える事も可能である。

SDg 71 (第36・38図)

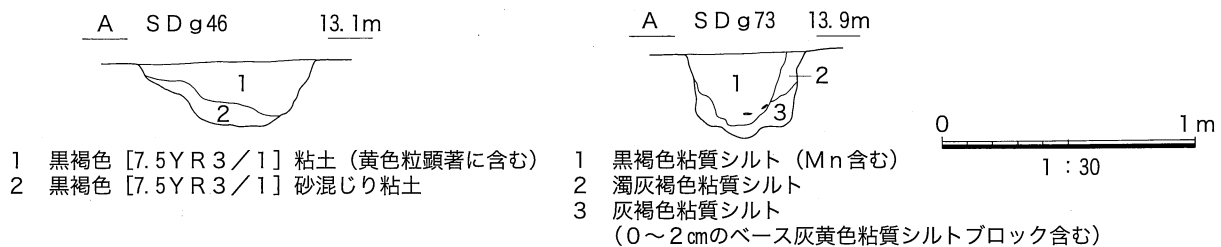
この溝は、円弧を描き、竪穴住居跡と想定すると直径約10mの円形住居跡となる。本調査区内で検出されている竪穴住居跡との位置関係からは、他の住居跡が北辺に集中する傾向にあるのに対して、やや南西にずれているが一群のものと考えられる。ただし支柱穴などが検出されていないことから、他の遺構とした場合、円形周溝墓の可能性も否定できない。

可能性としては両者とも同レベルでの可能性があるが、空港跡地遺跡内での周溝墓の検出状況を考慮すると、竪穴住居跡の可能性が高いと判断している。

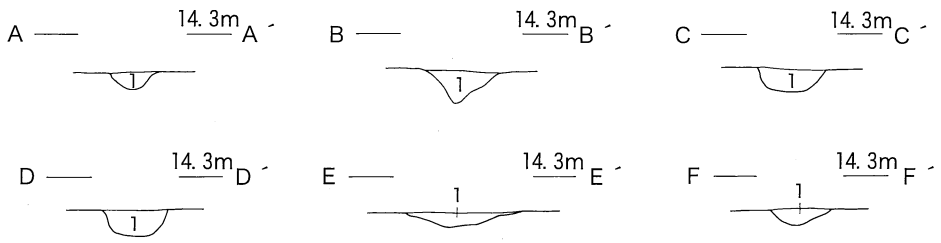
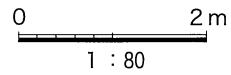
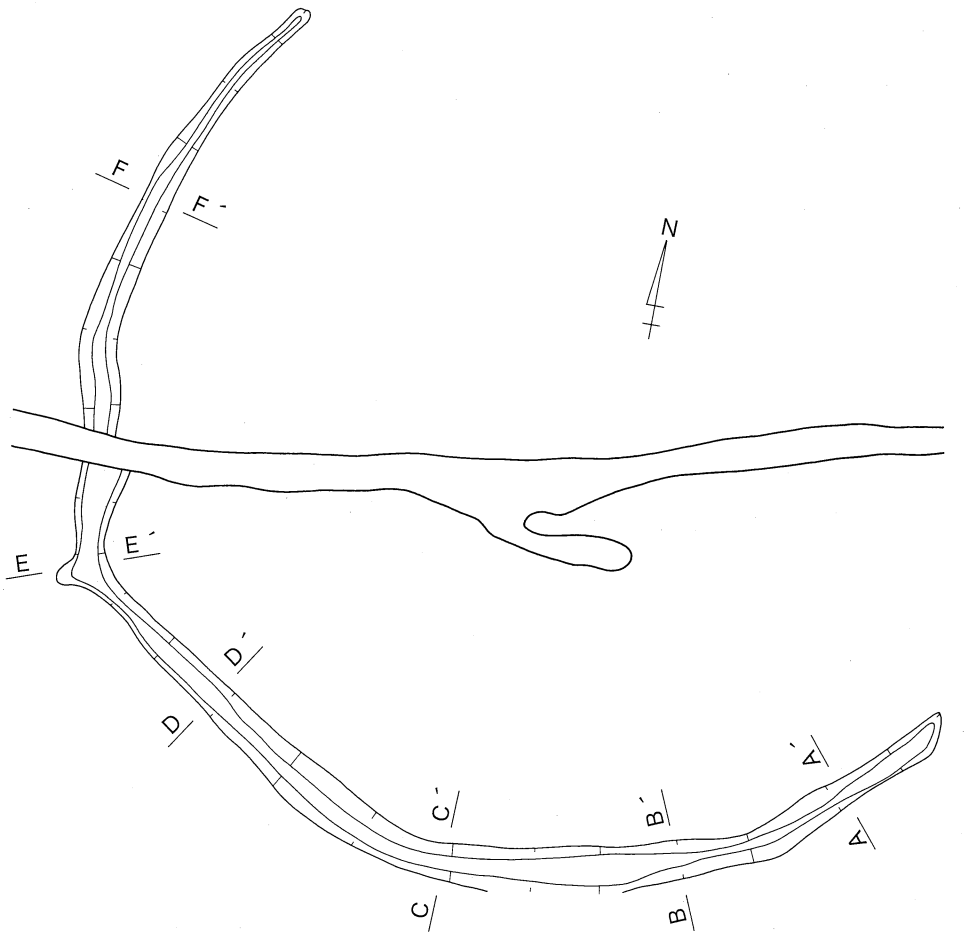
また、SDg14に切られており同溝に先行して掘削されていたことが分かる。このことから、SDg71が竪穴住居跡に伴う溝であった場合、SHg02・SHg03に先行する竪穴住居跡といえる。

SDg 82・83・84 (第37・38図)

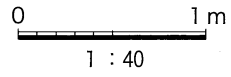
SDg82・83・84は、調査区の北東部を円弧状に巡るSDg17から派生した溝で、東側では不明瞭ながら合流する。検出状況では、同時並存ではなく北側から南側に徐々に流れを変えている状況も伺われるが、不明である。土層の状況から、3本とも埋められている可能性が高い。SDg82・83の埋土中からは弥生土器が出土している。



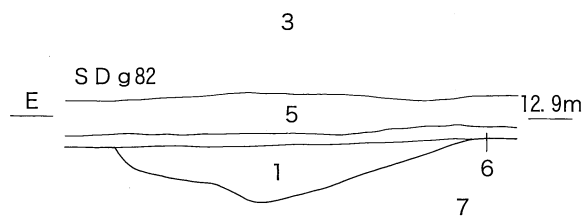
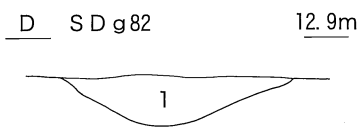
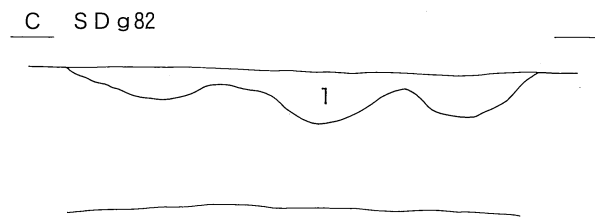
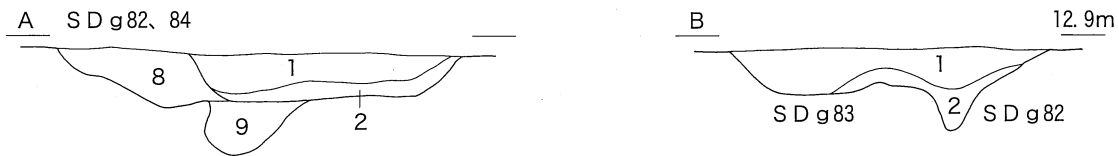
第35図 SDg46・73 断面図



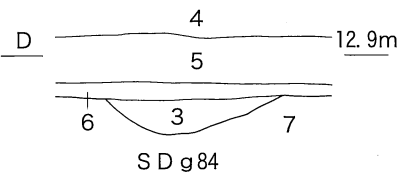
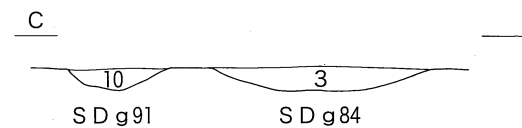
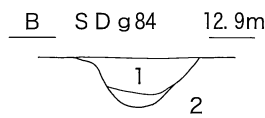
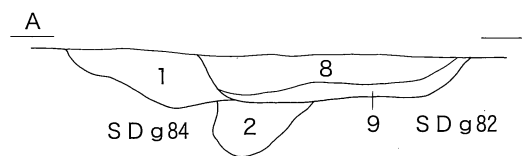
1 黒褐色粘質シルト (Fe・Mn、0~1cmの小石含む)



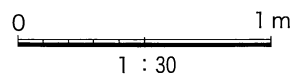
第36図 SDg71 平・断面図



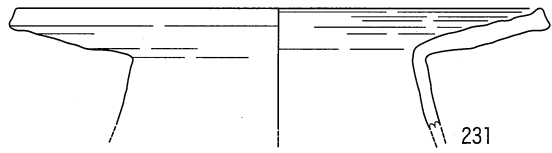
- 1 黒褐色粘土 (1~5cmの亜角礫・クサレ礫を含む)
- 2 暗灰色細砂 (1~3cmのクサレ礫を多く含む)
- 3 暗灰色粘質土 (旧耕作土)
- 4 淡灰色粘質土 (Feを含む・旧耕作土)
- 5 黄褐色粘質土 (Feを多く含む・旧床土)
- 6 灰色混中砂粘質土 (1~5cm程度の亜角礫・クサレ礫を多く含む、地山)
- 7 暗茶褐色混礫粘質土 (1~5cmのクサレ礫を含む)
- 8 暗灰褐色混細砂粘質土 (1~3cmのクサレ礫少し含む)



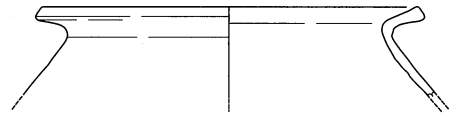
- 1 暗茶褐色混礫粘質土 (1~5cmのクサレ礫を含む)
- 2 暗灰褐色混細砂粘質土 (1~3cmクサレ礫少し含む)
- 3 黒褐色粘土
- 4 暗灰色粘質土 (旧耕作土)
- 5 淡灰色粘質土 (Feを含む・旧耕作土)
- 6 黄褐色粘質土 (Feを多く含む、旧床土)
- 7 灰色混中砂粘質土 (1~5cmの亜角礫・クサレ礫を多く含む・地山)
- 8 黒褐色粘土 (1~5cmの亜角礫・クサレ礫を含む)
- 9 暗灰色細砂 (1~3cmのクサレ礫を多く含む)
- 10 暗茶褐色粘土 (ベース・茶灰色混中砂粘質土)



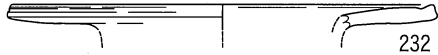
第37図 SDg82・83・84 土層断面図



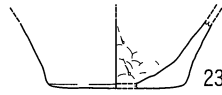
231



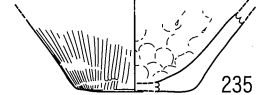
234



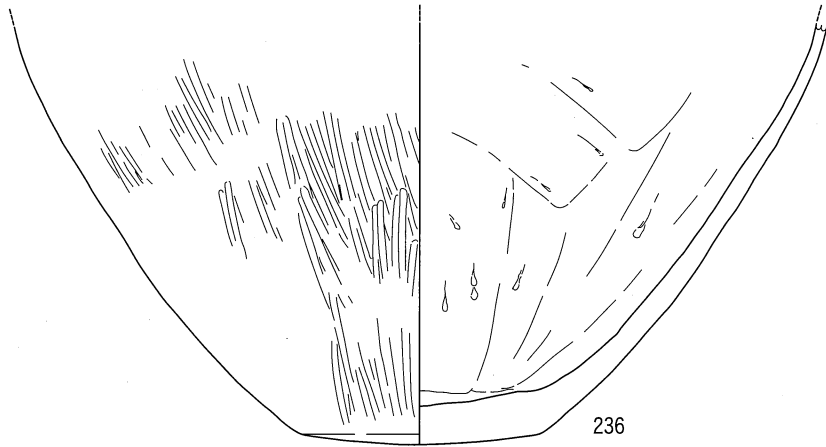
232



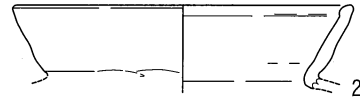
233



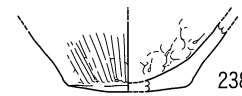
235



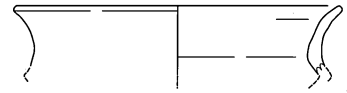
236



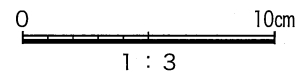
237



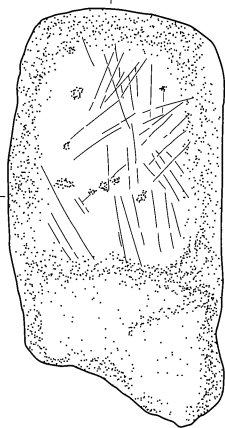
238



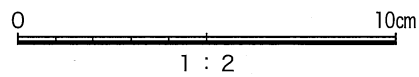
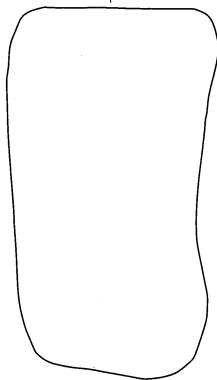
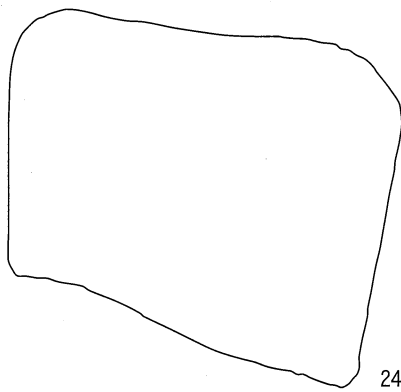
239



1 : 3

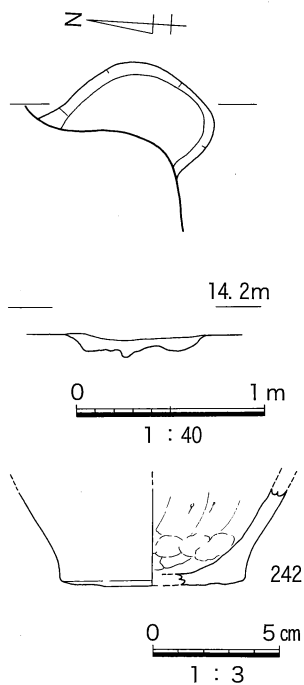


241

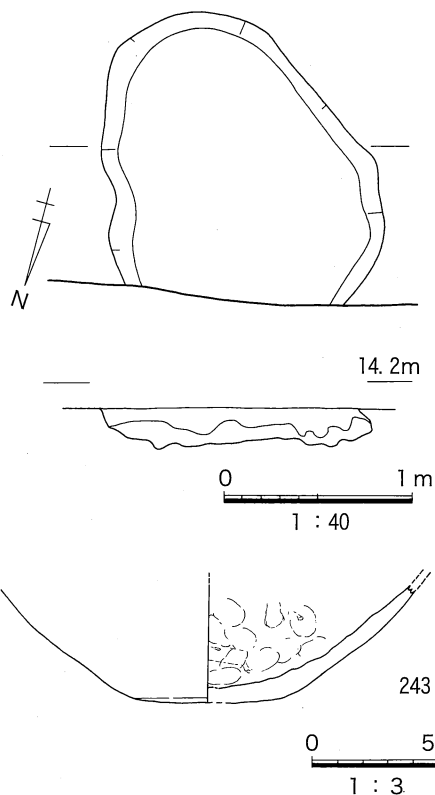


1 : 2

第38図 SDg43・46・67・71・73・82・83 出土遺物実測図



第39図 SKg010 平・断面図、出土遺物実測図

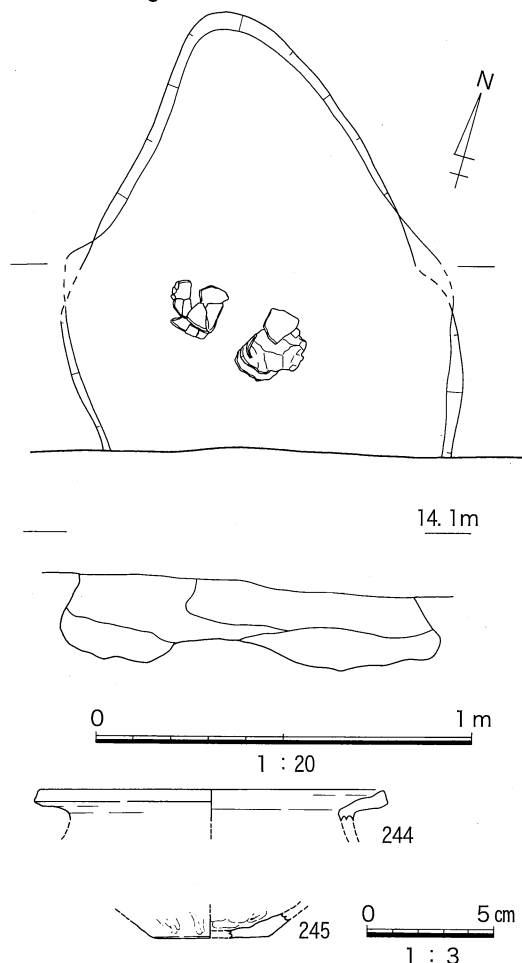


第40図 SKg012 平・断面図、出土遺物実測図

③ 土坑

検出した土坑の全体像については第5表土坑一覧表のとおりである。遺構の検出状況から、土坑は調査区の西部、一定範囲内で集中して検出され、調査段階から粘土採掘坑と考えられてきた。付図2弥生土坑群配置図を見ても分かるように、土坑群はSDg01を境に北側には大形土坑が集中し、南側にはそれよりも小形の土坑が密集している。また、SDg01に切られている大形土坑もあることから、この地区での土坑の掘削は、まず大形土坑が掘削され、この後SDg01、そしてその他の土坑の掘削と移り変わったものと考えられる。このことは、大形土坑の時期とSDg01・その他の土坑の大きさは2時期にわたるものと考えられる。

ここでは遺物が検出できた土坑のみ取り上げて記述する。



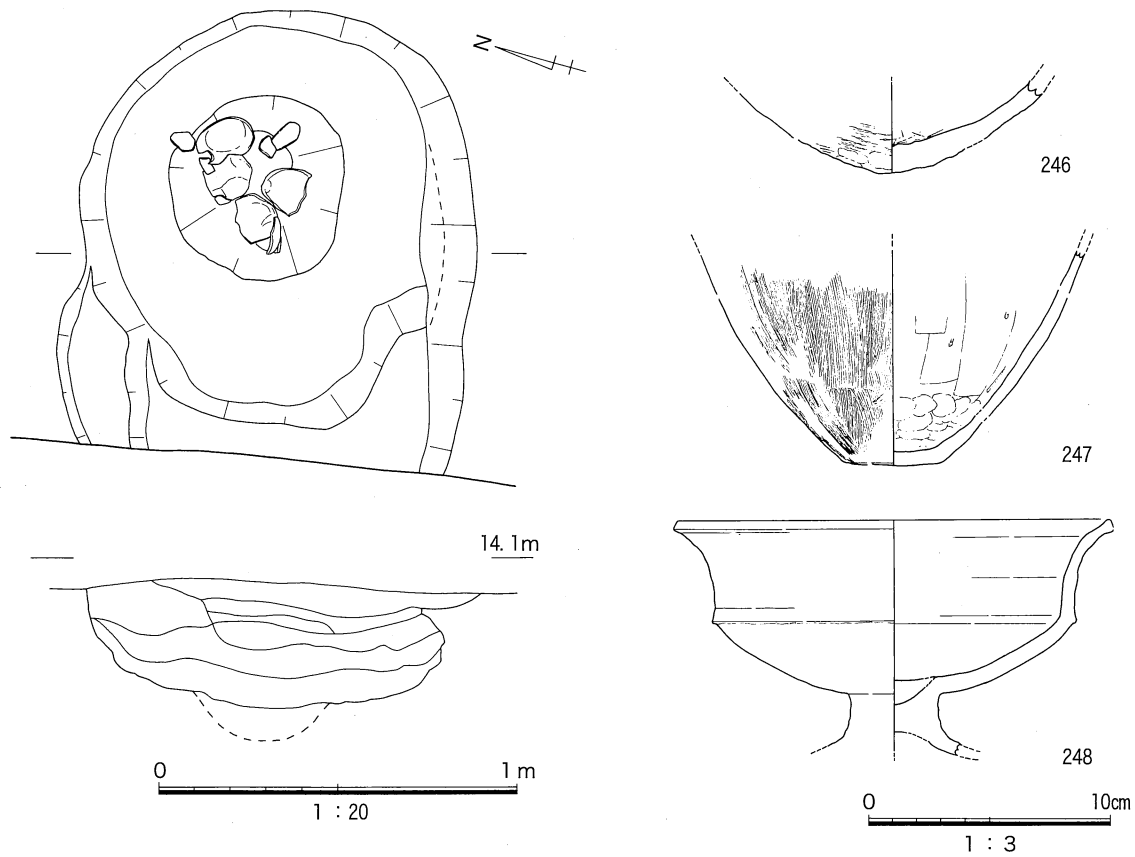
第41図 SKg094 平・断面図、出土遺物実測図

SKg010 (第39図)

方形土坑で、西半分が攪乱により検出できていない。壺もしくは甕の底部1点を検出している。底部は平底を残している。

SKg012 (第40図)

不整形な土坑で、北側が攪乱を受けている。やや丸

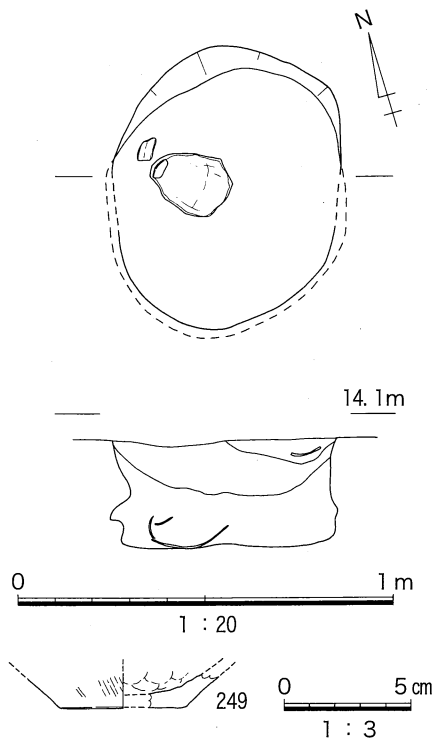


第42図 SKg151 平・断面図、出土遺物実測図

底化した平底底部1点を検出した。

SKg094 (第41図)

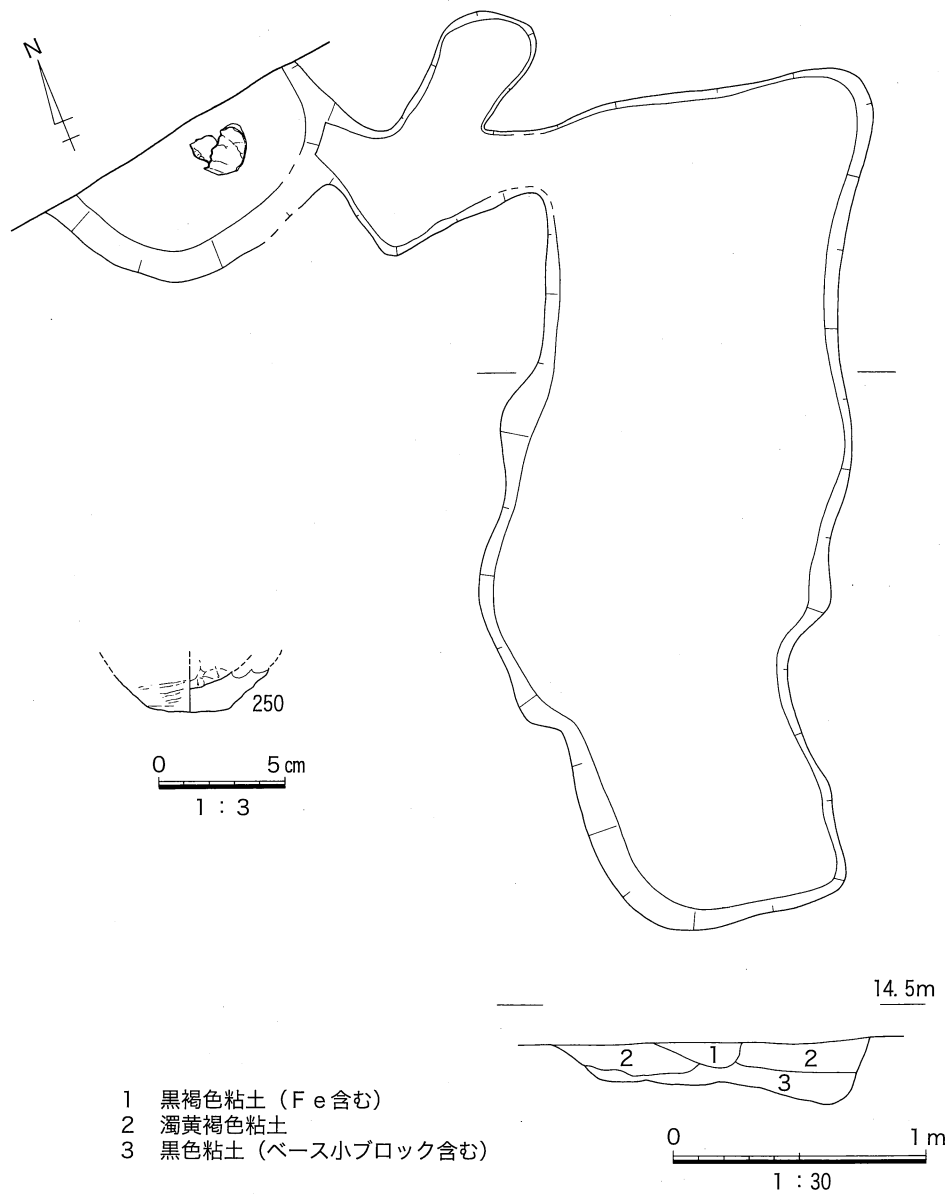
不整形な土坑で、南側が攪乱を受けている。検出段階ではほぼ一個体と考えられる甕が検出されているが、図化できるだけのしっかりした破片は口縁部と底部のみであった。土坑の断面形状はやや袋状で底部が広く、埋没状況からして人為的に埋められた可能性が高い。また、土層1からすれば、土層2による埋没後、再度掘削された可能性がある。



第43図 SKg163 平・断面図、出土遺物実測図

SKg163 (第43図)

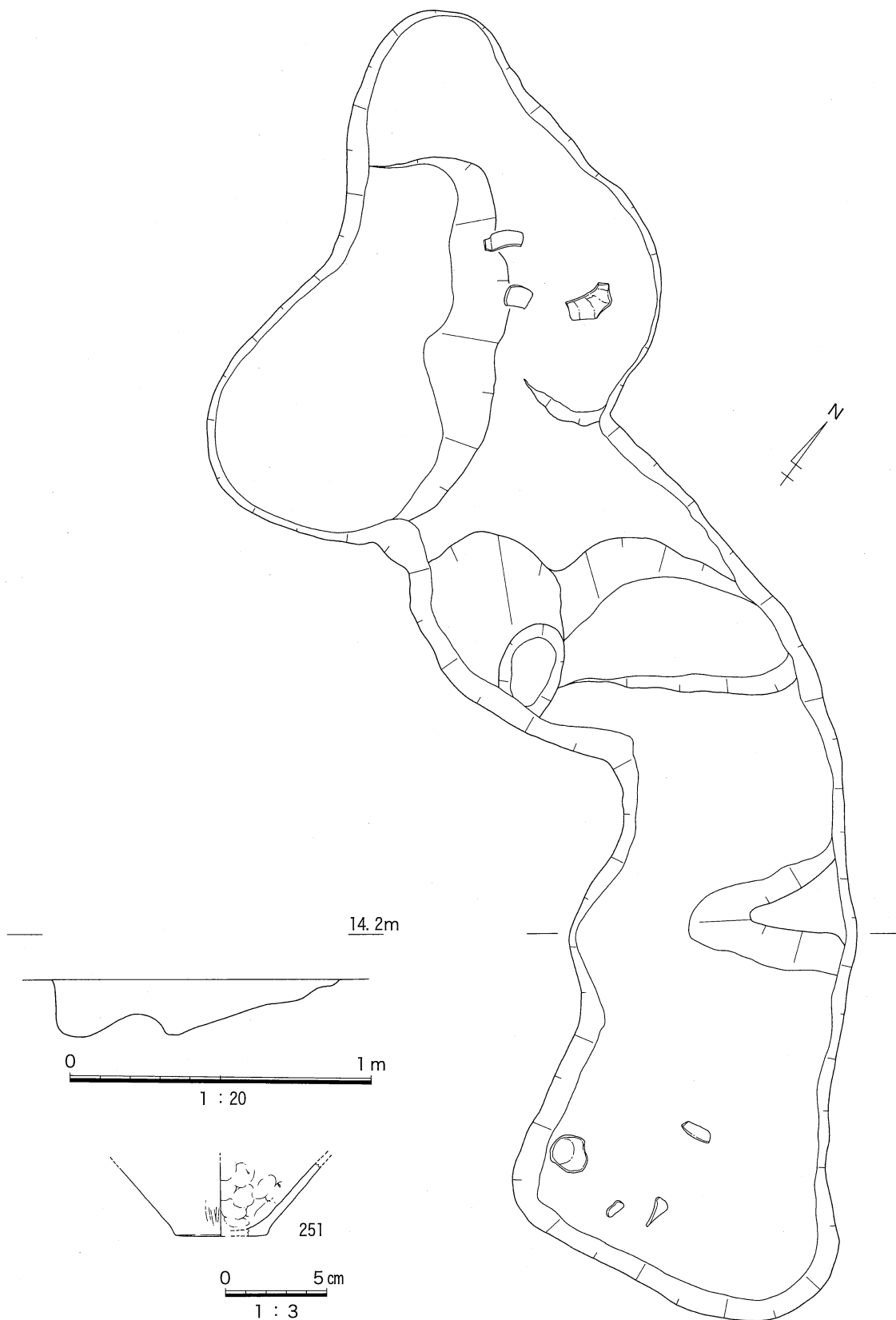
ほぼ円形の土坑で、床直上から甕体部片が出土している。ほぼ水平堆積であることから、自然堆積と考えられる。



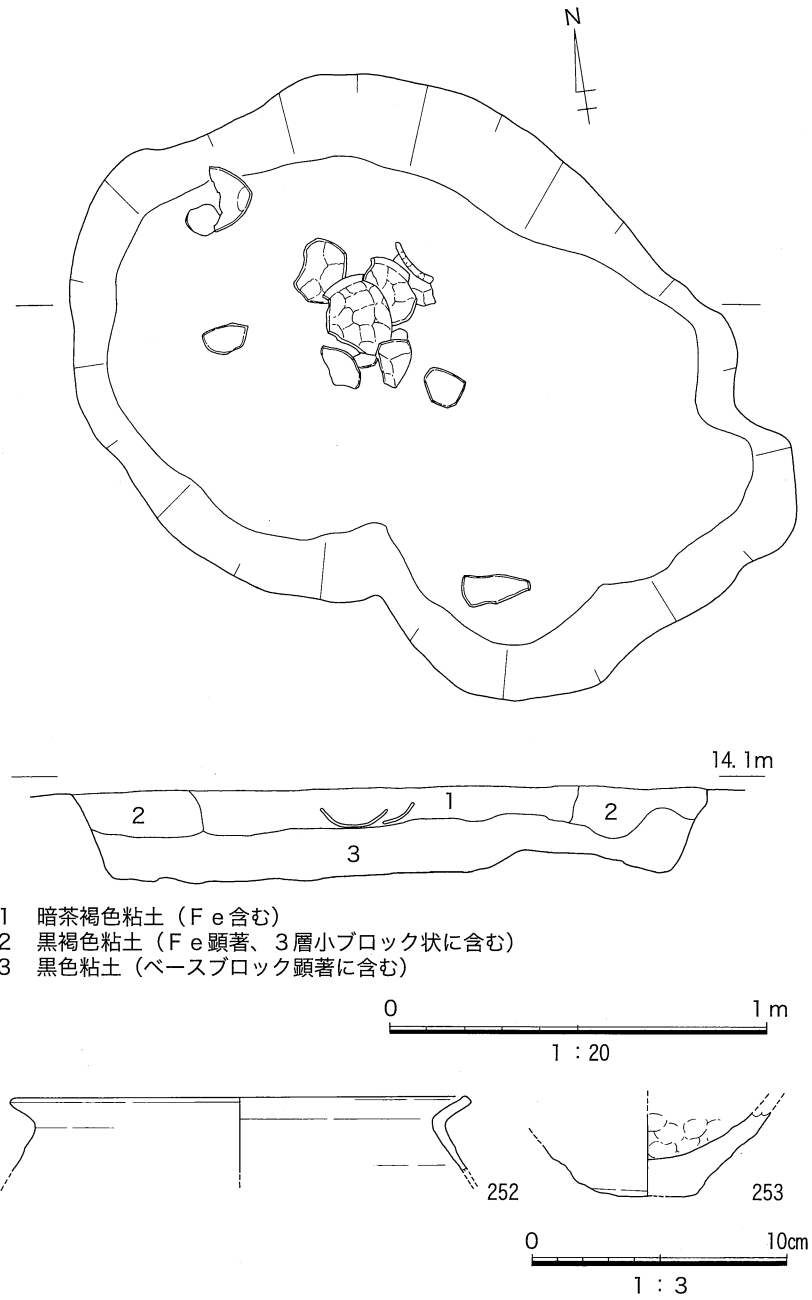
第44図 SKg177 平・断面図、出土遺物実測図

SKg177 (第44図)

長方形を主体とした不整形な土坑で、自然堆積後、後世の掘削が認められる。土坑底面はほぼ水平で自然埋没後に土層1の掘削が認められる。土坑北西端の部分から平丸底の甕底部1点が検出された。全体に不整形であることから北西端の土坑を別の土坑と捕らえることもできる。



第45図 SKg192 平・断面図、出土遺物実測図



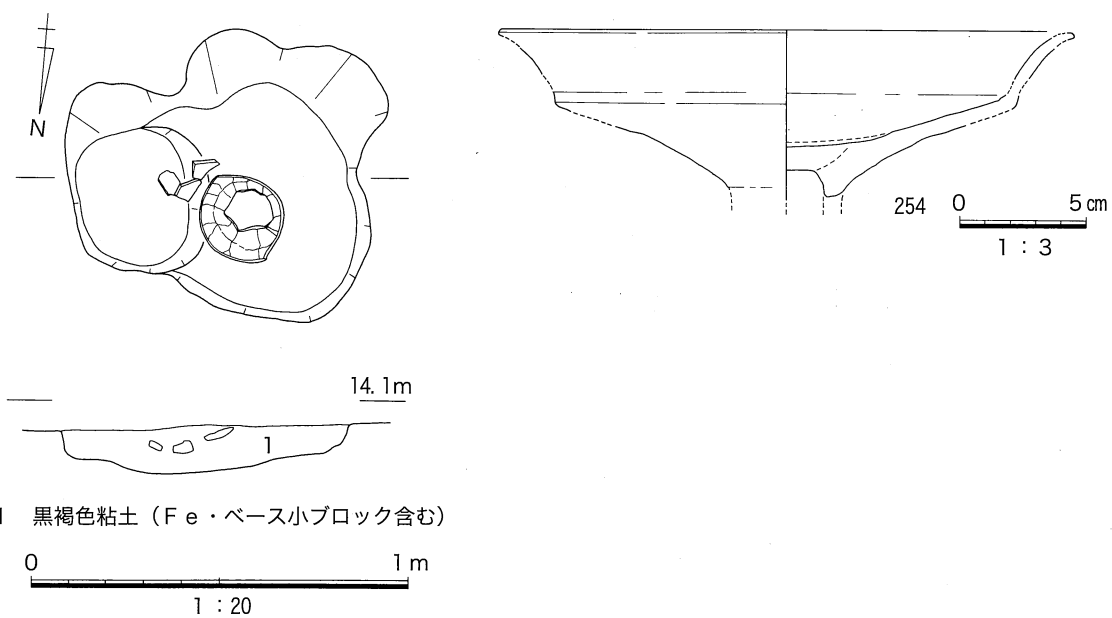
第46図 SKg232 平・断面図、出土遺物実測図

SKg192 (第45図)

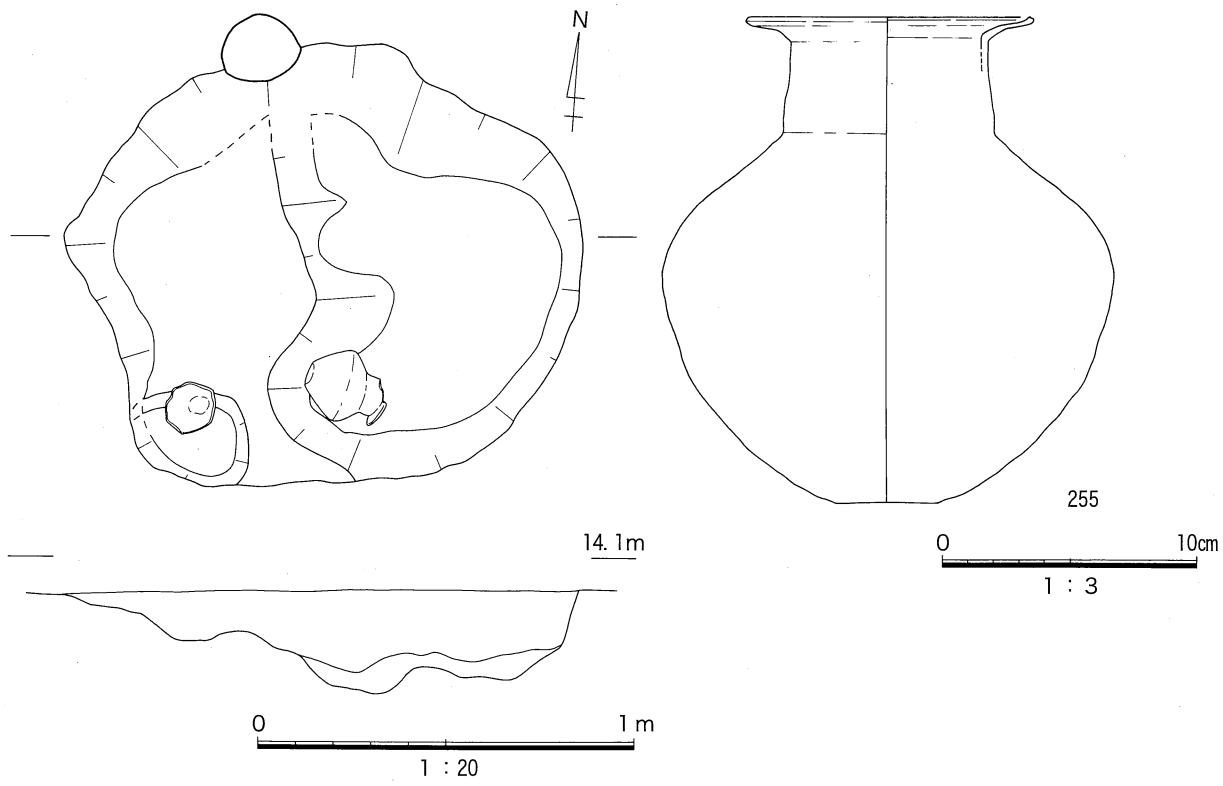
東西方向に不整形に広がる土坑で、底面もいびつである。埋土は一層で平底の壺底部が1点検出されている。

SKg232 (第46図)

隅丸方形の土坑で、掘削は直線的に行われている。埋没は土層3が水平堆積した後、土層2も水平堆積し、土層1の状態の後世の掘りこみが行われ、この底面に貼りつく形で土器が出土している。厳密には、同土坑に重なる別の土坑出土といえる。土器は、やや丸みが生じた段階の平底の甕である。



第47図 SKg270 平・断面図、出土遺物実測図



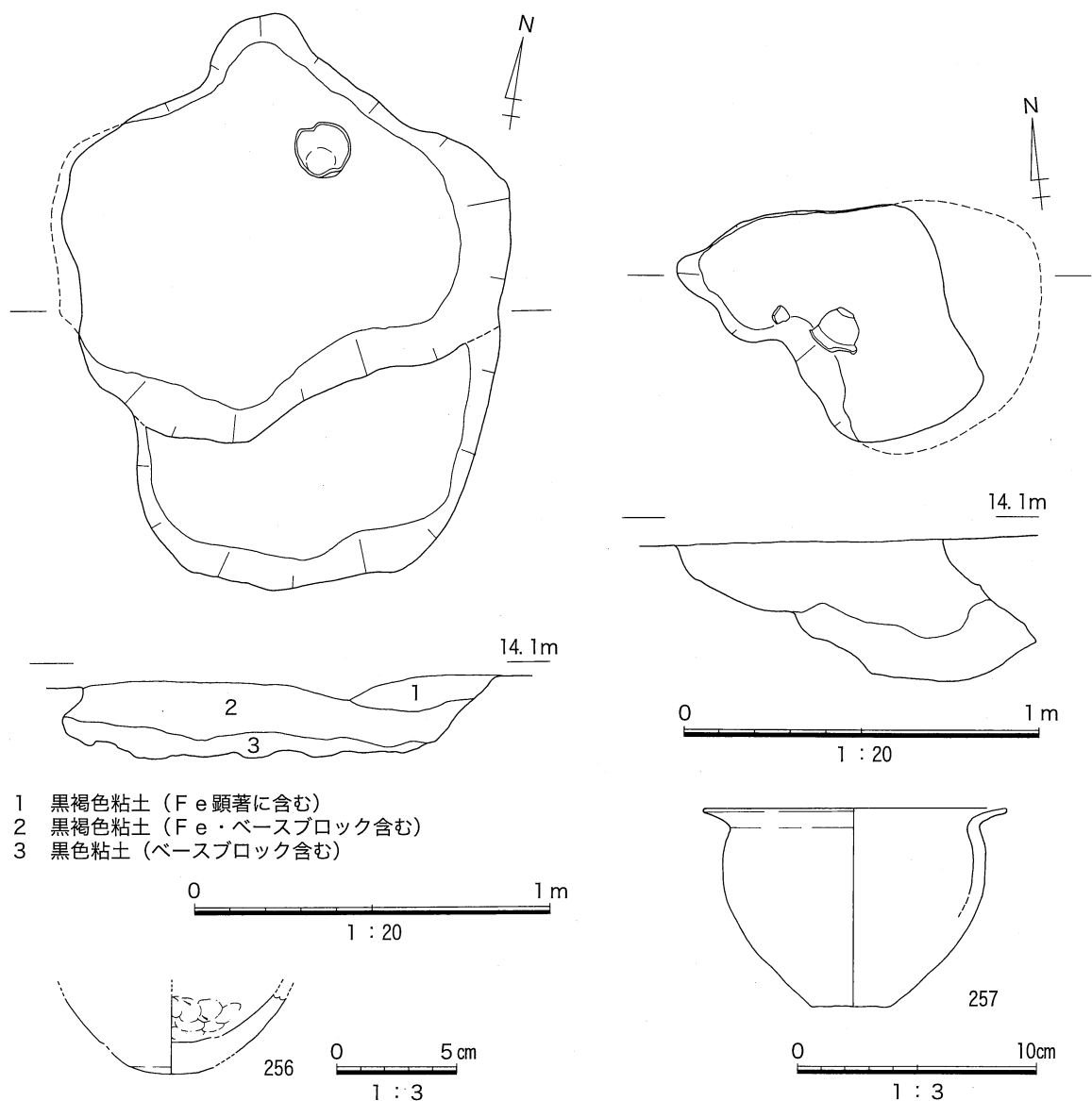
第48図 SKg307 平・断面図、出土遺物実測図

SKg270 (第47図)

ほぼ円形の土坑で、部分的に二段掘りを呈している。土坑中央から高杯の杯部が出土している。

SKg307 (第48図)

ほぼ円形の土坑で、東半分が深くなっている。底面は不整形で、深い部分のみ薄く土層2が堆積する。この土坑からは壺がほぼ完形の状態で出土しているが、土化しているため、完全な形では取り上げができていない。



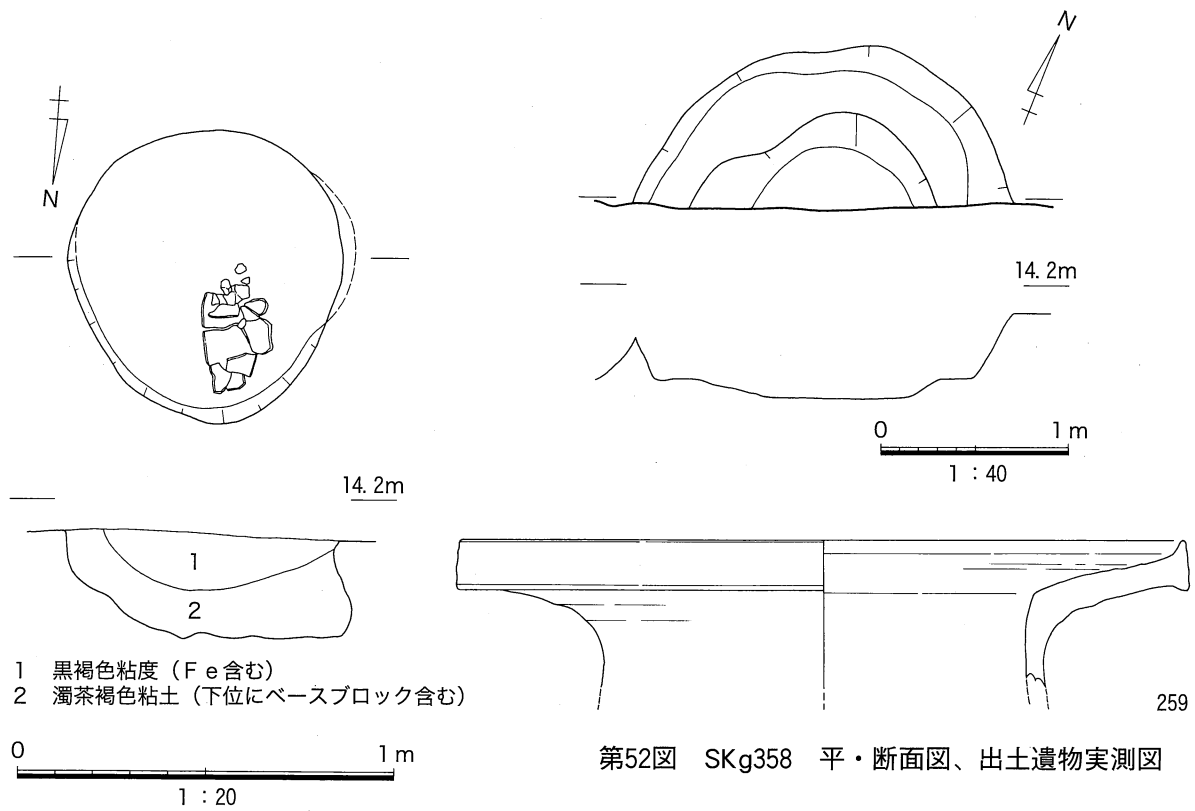
第49図 SKg308 平・断面図、出土遺物実測図 第50図 SKg319 平・断面図、出土遺物実測図

SKg308 (第49図)

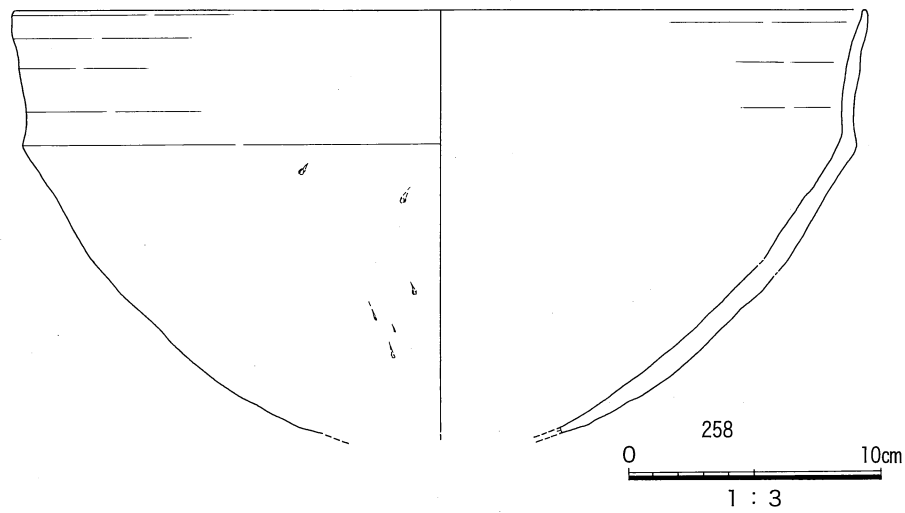
不整形な土坑で、部分的に袋状を呈する。埋土は3層に分かれほぼ水平に堆積する。土坑からは、ほぼ丸底の壺もしくは甕の底部が出土している。

SKg319 (第50図)

不整形で、斜め方向に穿たれている袋状土坑である。埋土は2層に分かれ1層が堆積した後にほぼ完形の甕もしくは鉢が投げ入れられている。構造的には長期間開口していたとは考えられず、自然堆積ではなく埋められた可能性が高い。



第52図 SKg358 平・断面図、出土遺物実測図



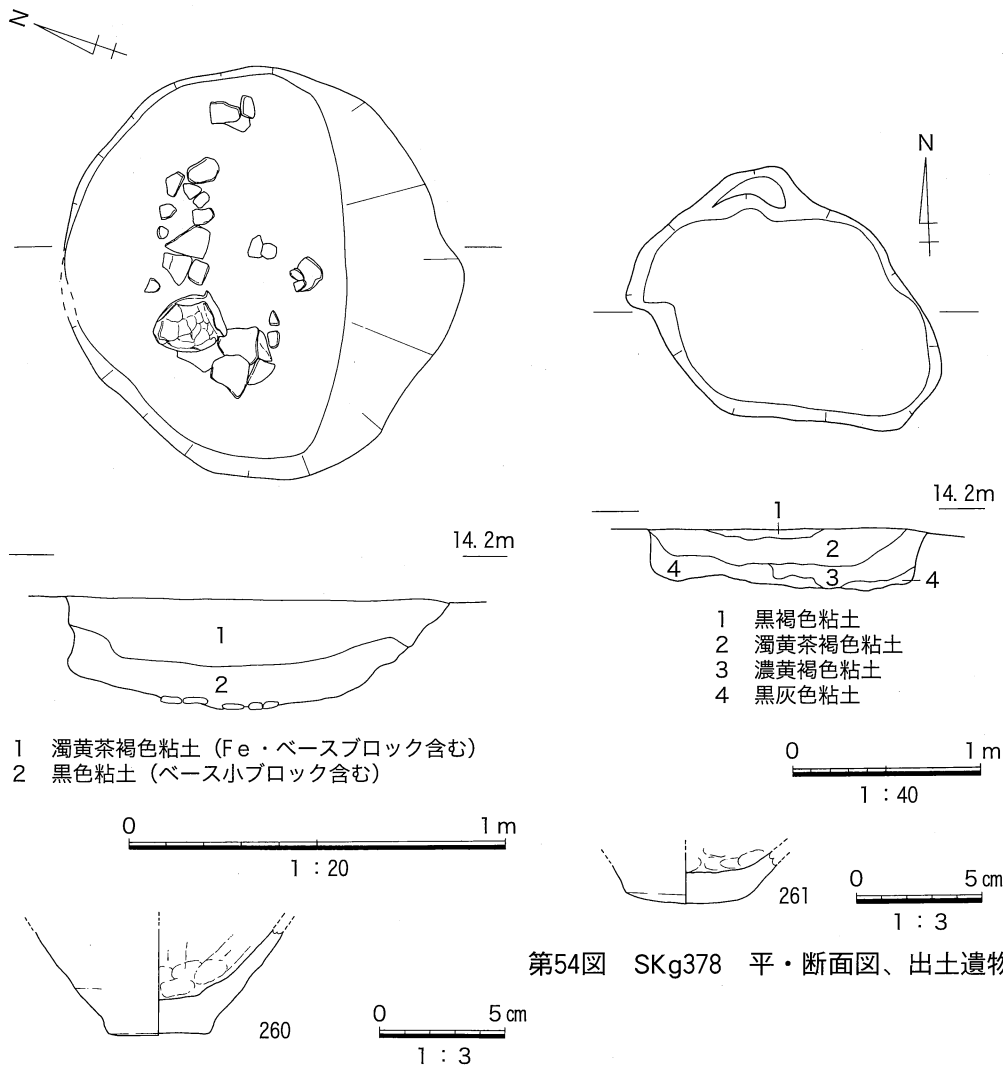
第51図 SKg344 平・断面図、出土遺物実測図

SKg344 (第51図)

円形の土坑で、部分的に袋状を呈する。埋土は2層に分かれ、底面形状に並行するような埋没状況を呈するため、自然堆積とは考えられない。内部から鉢が1点出土している。

SKg358 (第52図)

円形の土坑で、南半分を後世の攪乱により破壊されている。底面はほぼ水平で、部分的に二段掘りの状況を呈する。内部からは、壺口縁部が出土している。



第54図 SKg378 平・断面図、出土遺物実測図

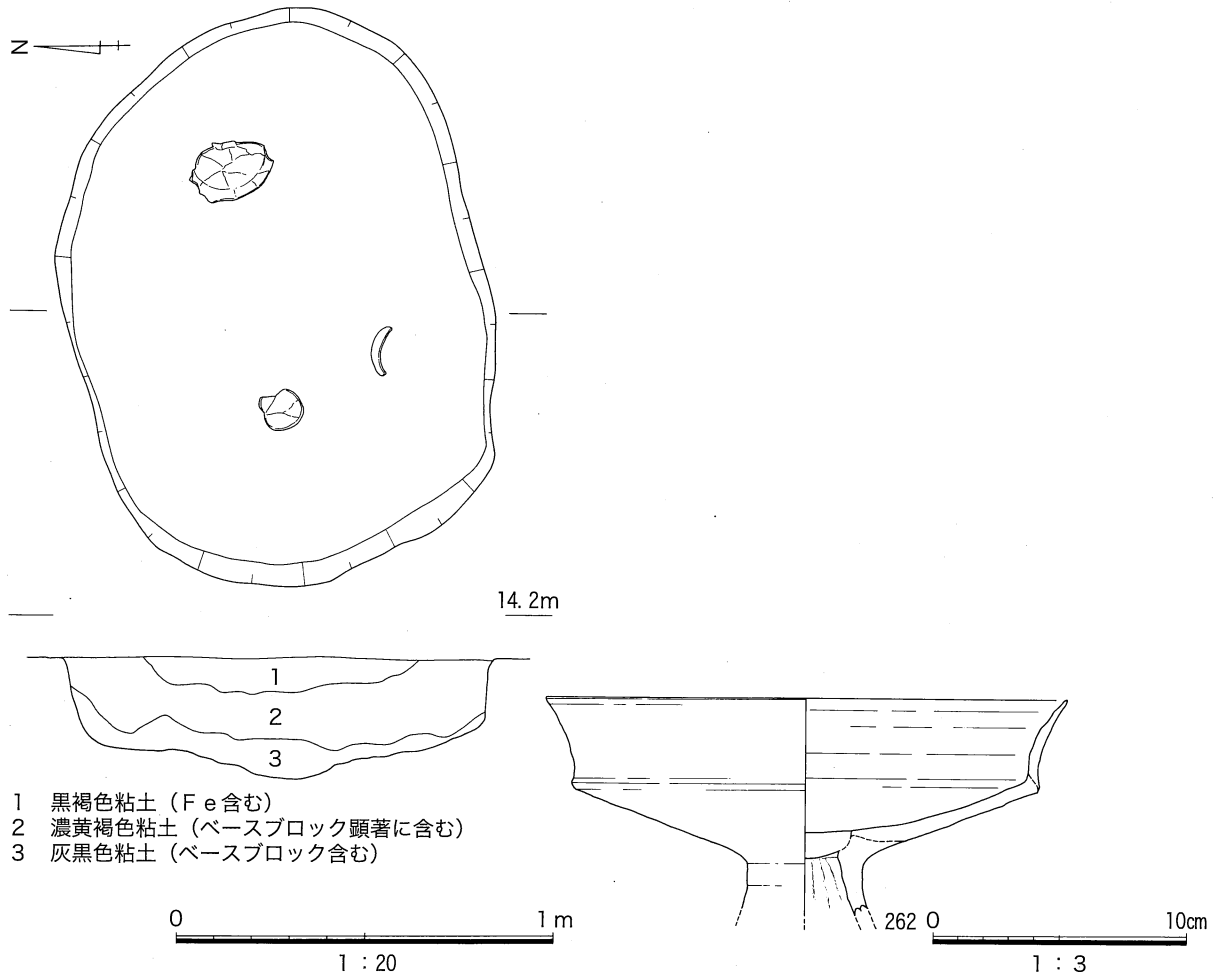
第53図 SKg370 平・断面図、出土遺物実測図

SKg370 (第53図)

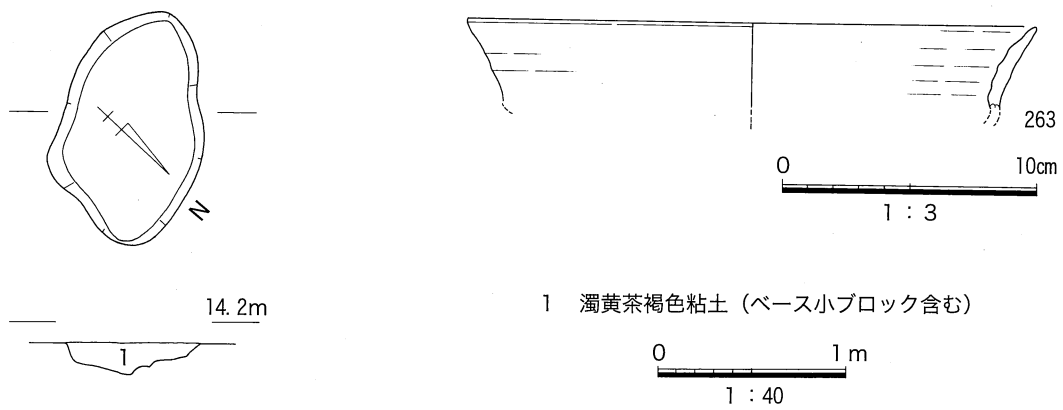
円形の土坑で、部分的に袋状を呈し、底面の形状に合わせて土層2が堆積している。内部から平底の底部が出土している。

SKg378 (第54図)

不整形な土坑で、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋没状況は、4層に分けられて土層から自然埋没と考えられる。丸底気味の平底が出土している。



第55図 SKg379 平・断面図、出土遺物実測図



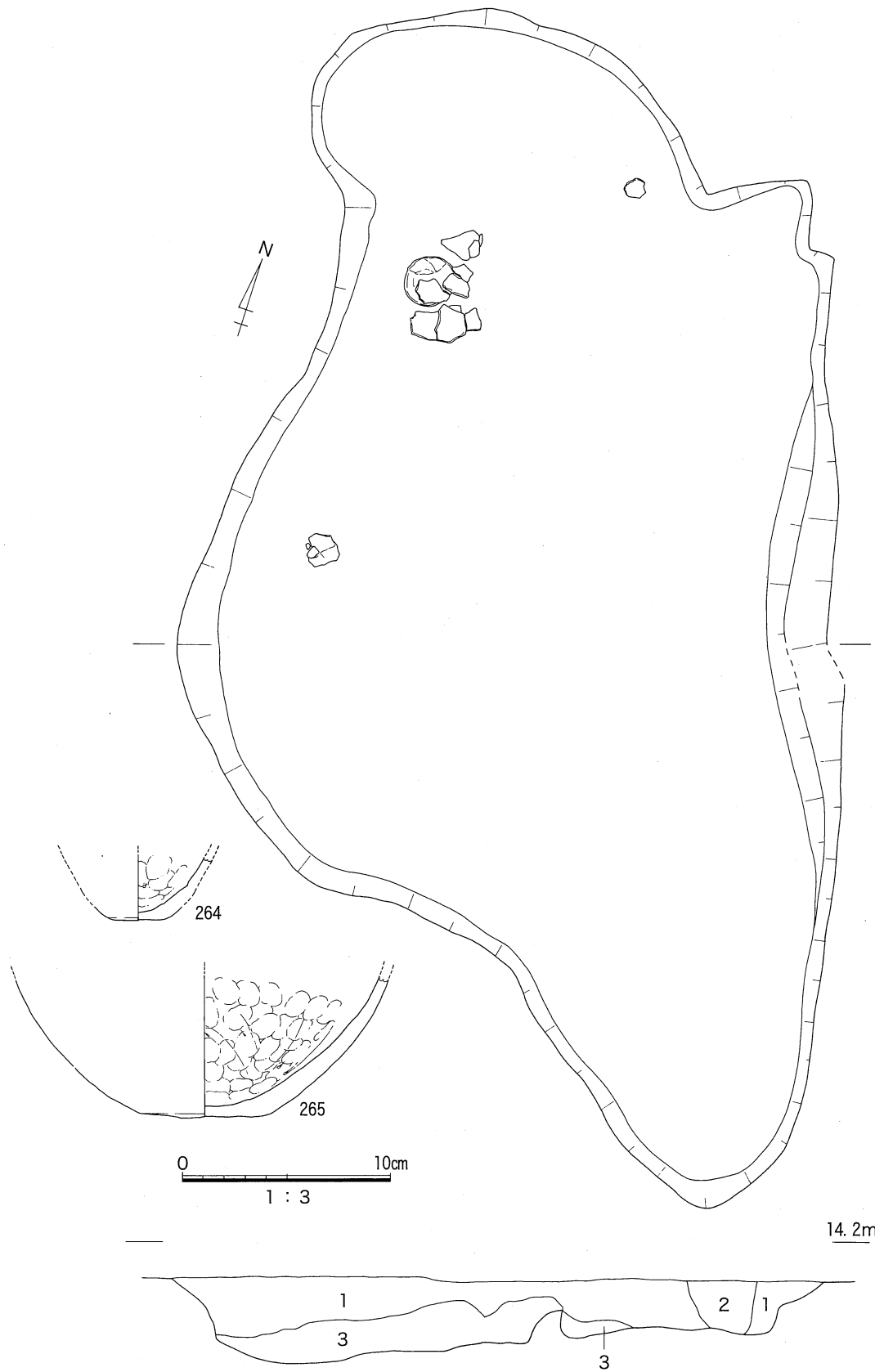
第56図 SKg381 平・断面図、出土遺物実測図

SKg379 (第55図)

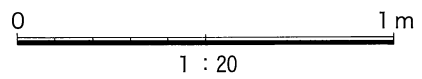
長円形の土坑で、ほぼ垂直に掘り下げられている。埋土は3層で、底面の形状に合わせて堆積している。土坑中からは、高杯、甕などが検出されたが、図化できたのは高杯のみである。

SKg381 (第56図)

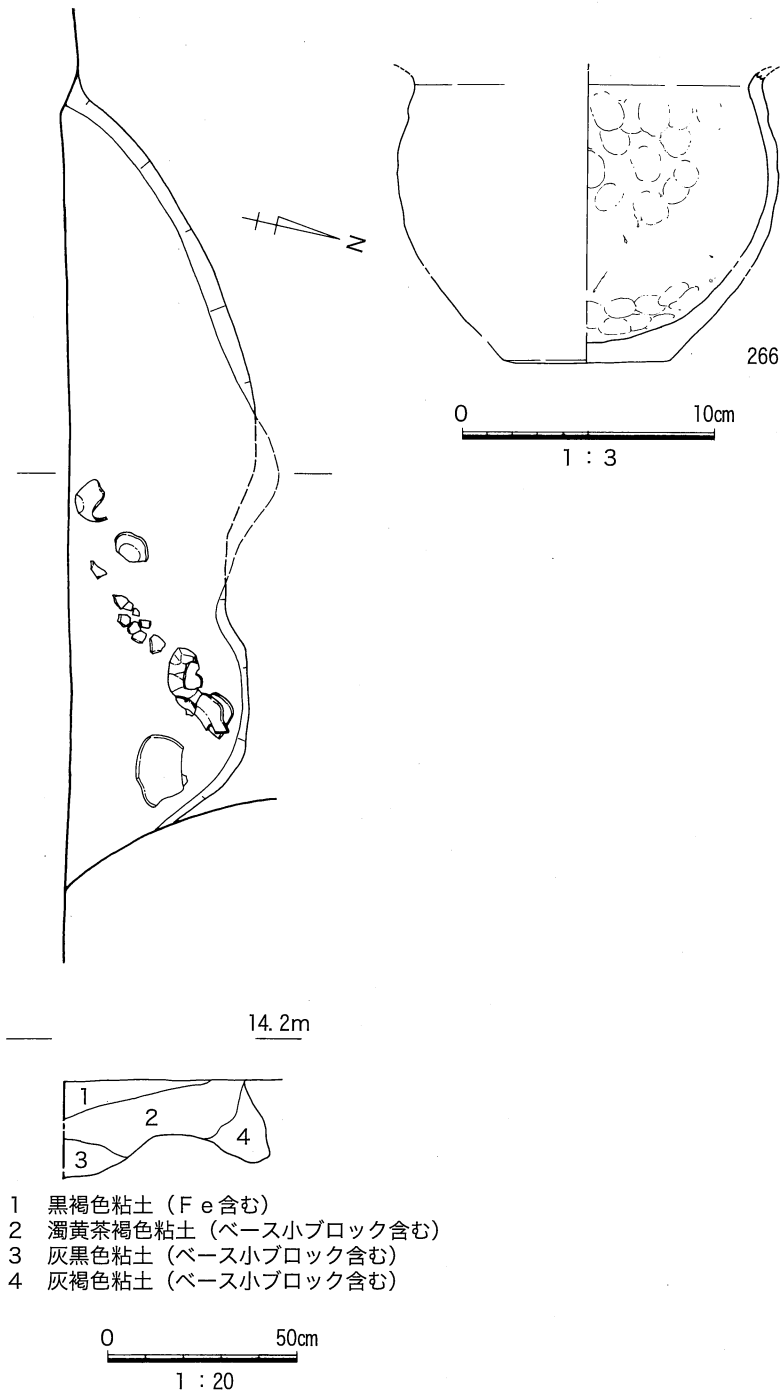
不整形な小形の土坑で、高杯口縁部が1点出土している。



- 1 濃黄褐色粘土 (Fe・ベース小ブロック含む)
- 2 濁黄茶褐色粘土
- 3 灰黒色粘土 (ベースブロック含む)



第57図 SKg384 平・断面図、出土遺物実測図



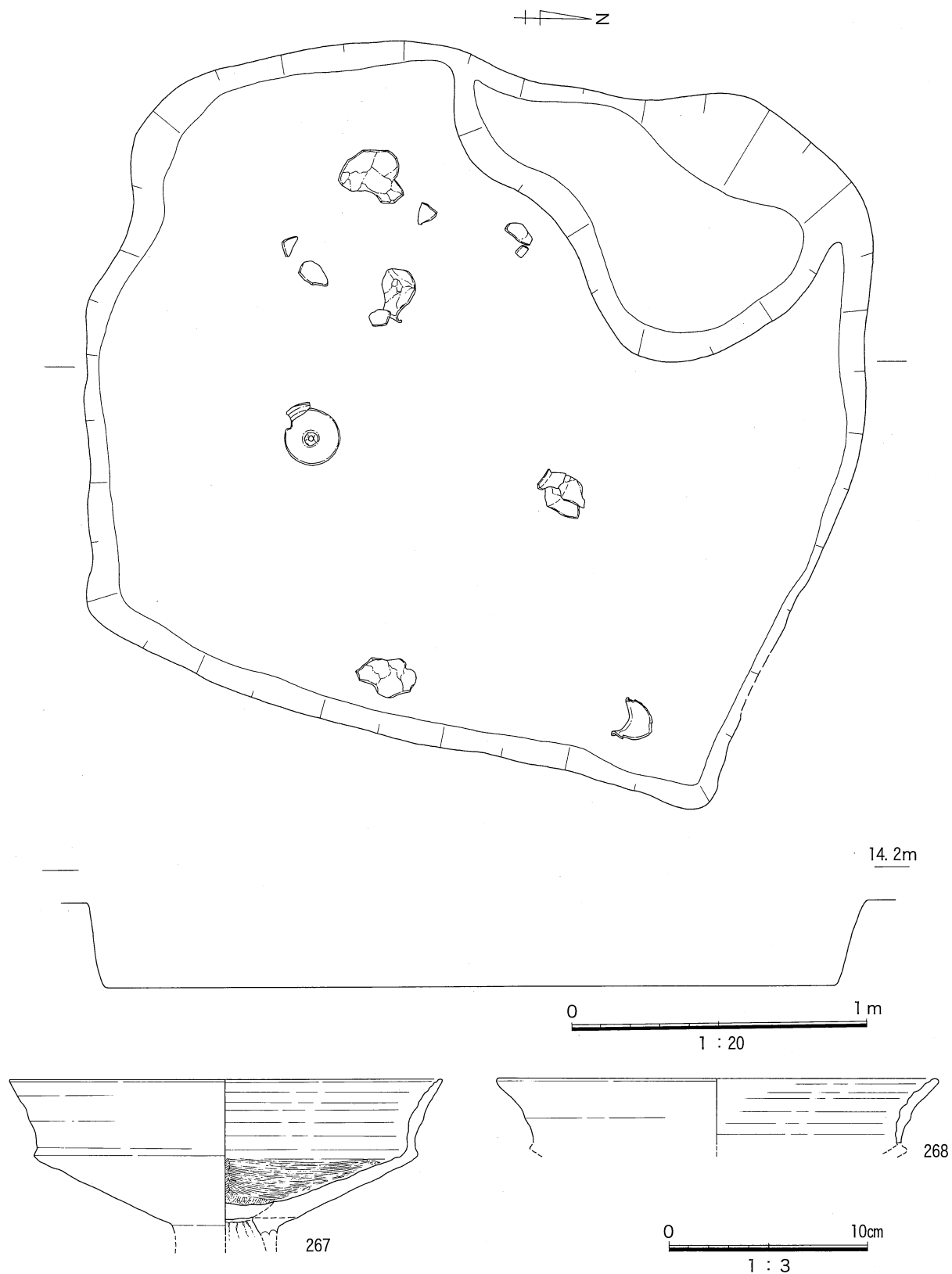
第58図 SKg393 平・断面図、出土遺物実測図

SKg384 (第57図)

不整形な大形土坑で、斜め方向に掘り下げられている。埋土は2層で、土層3が堆積した後、再度掘り下げが行われ、土層1で埋没した後柱穴(土層2)が穿たれている。土坑中からは、平丸底が2点出土している。

SKg393 (第58図)

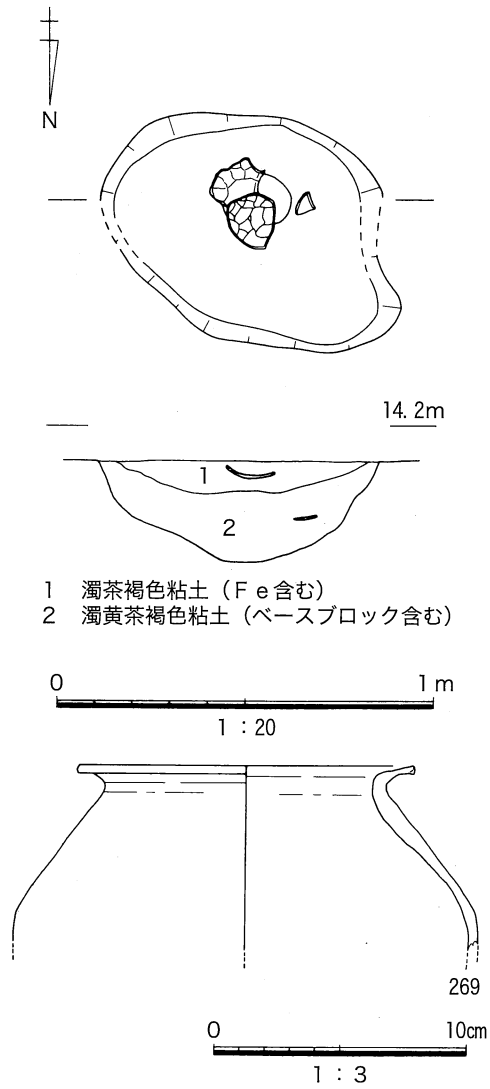
不整形な土坑で、南半分は欠損している。部分的に袋状を呈している。埋土は、袋状部分に堆積している土層4を除けば、自然埋没の状況を呈する。土坑中からは、甕もしくは鉢が1点出土している。



第59図 SKg395 平・断面図、出土遺物実測図

SKg395 (第59図)

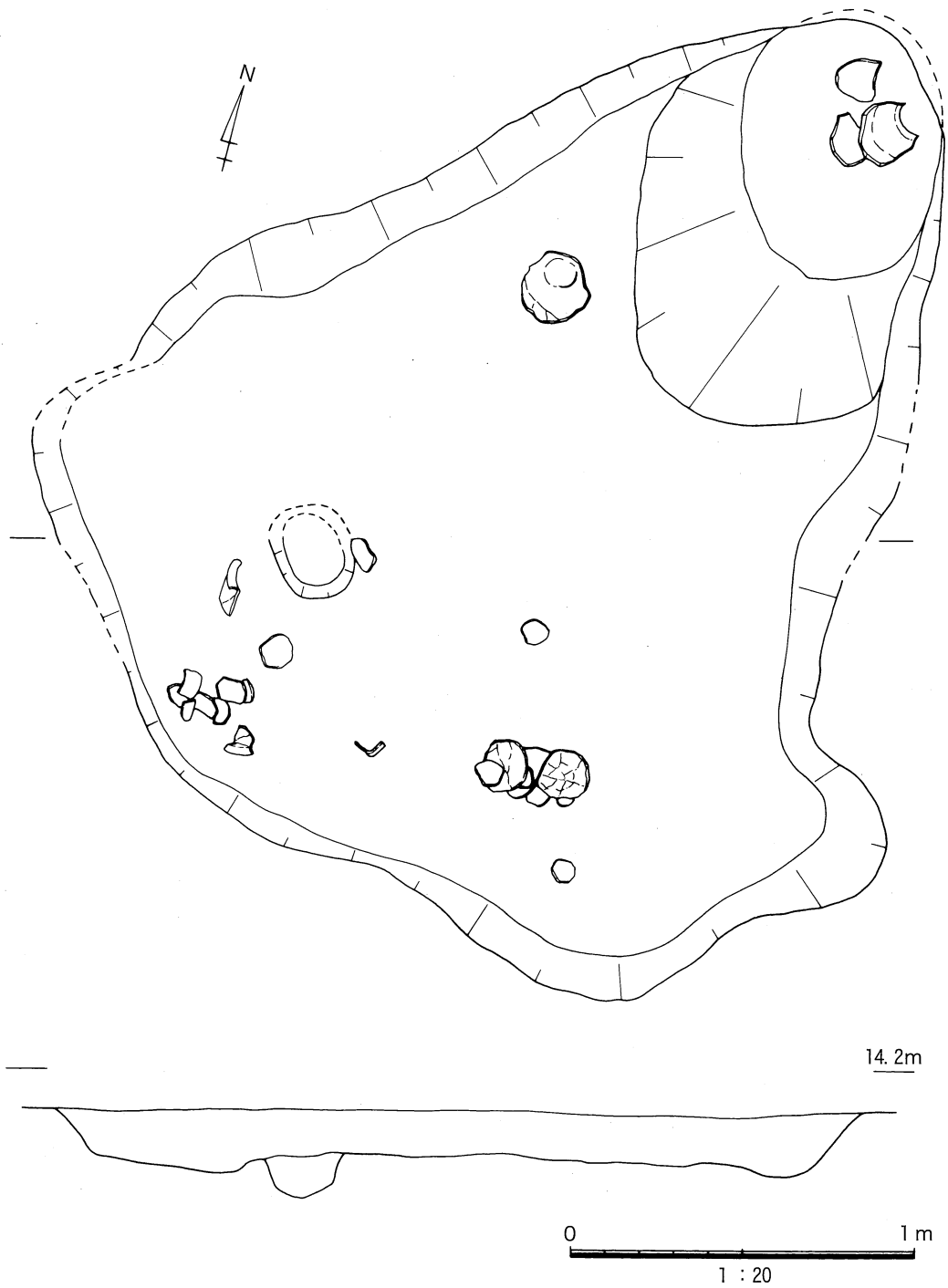
ほぼ方形の土坑で、西北部がやや不整形で深く穿たれている。底面はほぼ水平で、多くの土器片が検出された。図化できたのは、高杯の杯部2点であるが、このほか甕の破片などもみられる。



第60図 SKg397 平・断面図、出土遺物実測図

SKg397 (第60図)

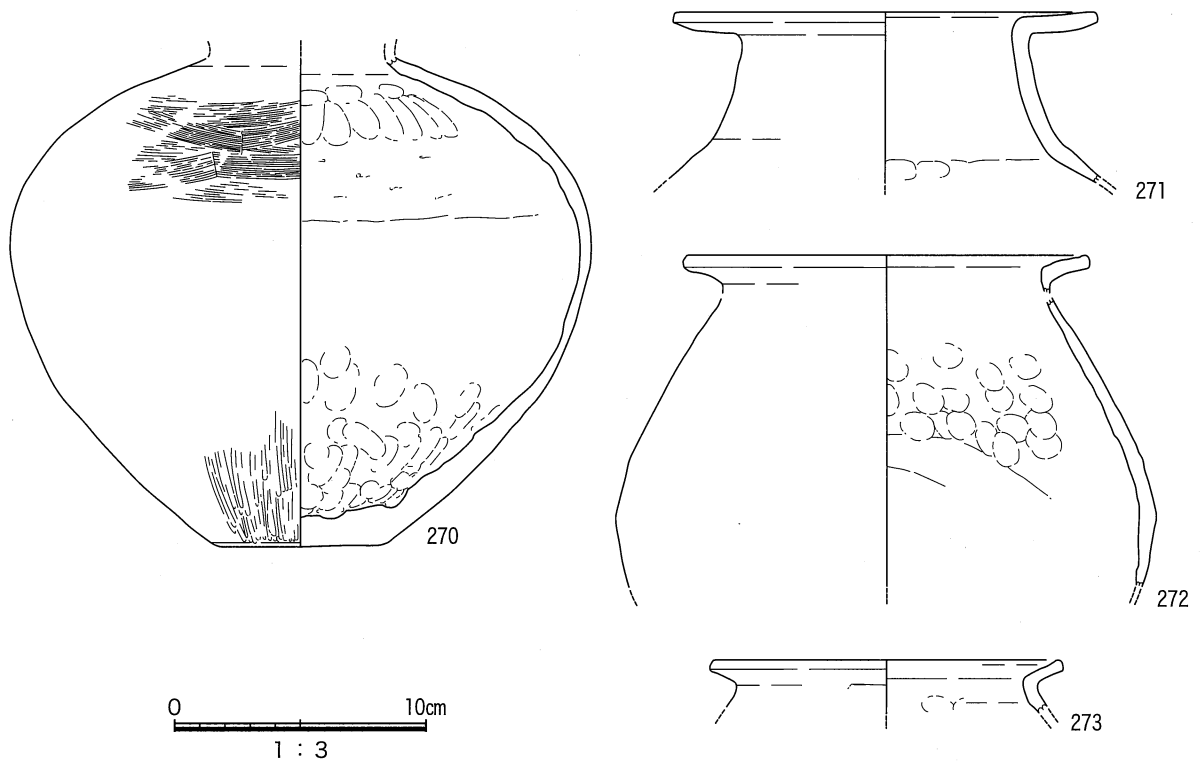
ほぼ円形の土坑で、底面は円弧を描く。埋土は2層に分かれ、土層1中から甕上半部の破片が出土している。



第61図 SKg401 平・断面図

SKg401 (第61・62図)

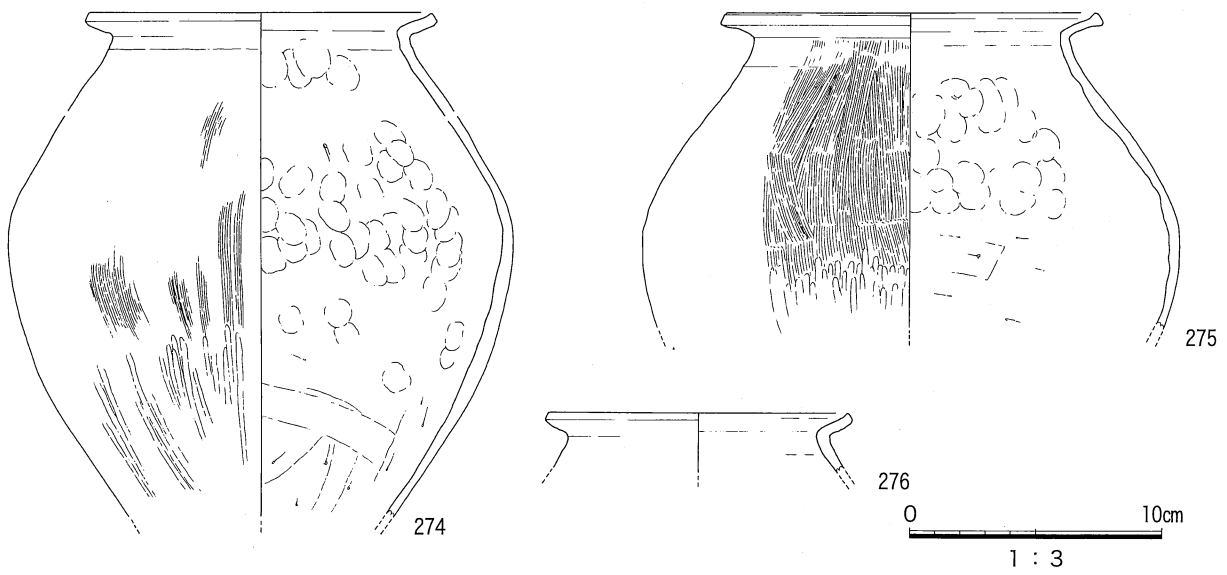
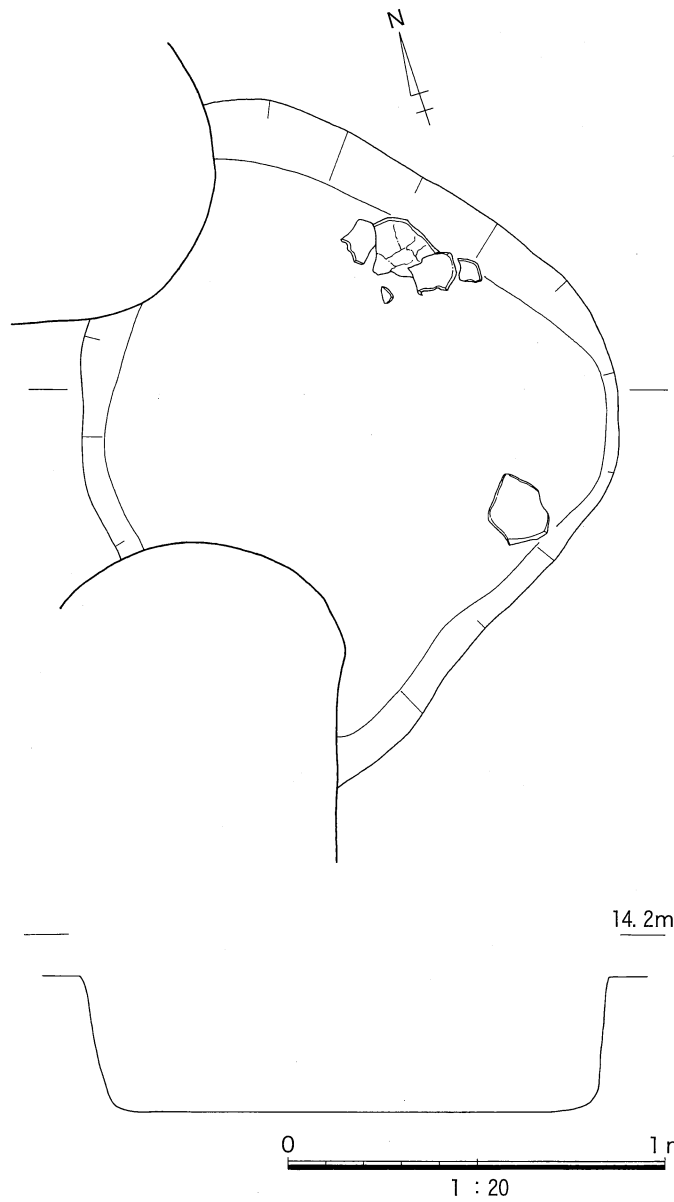
二等辺三角形を呈する土坑で、先端が深く掘削されている。また、底辺近くには柱穴が1穴見られる。全体から土器片が出土している。図化できたのは、壺の口縁部・体部と甕が2点である。



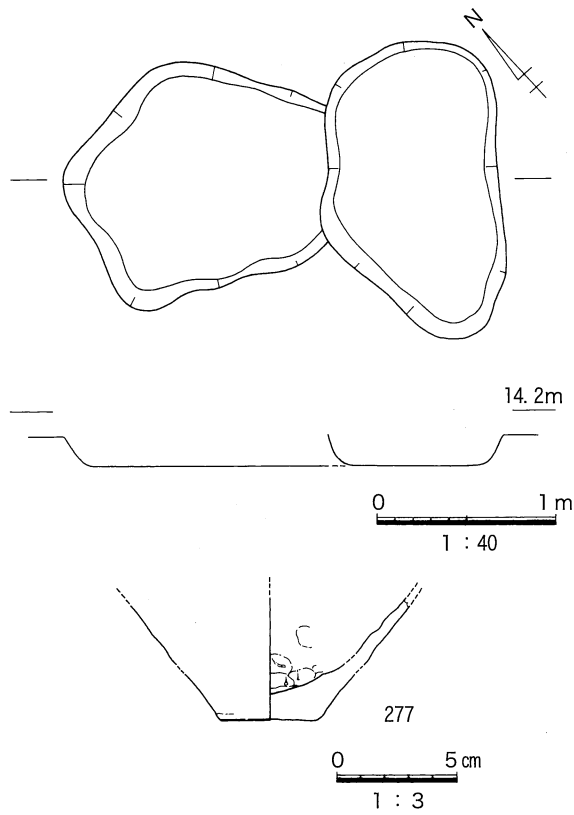
第62図 SKg401 出土遺物実測図 (1/3)

SKg404 (第63図)

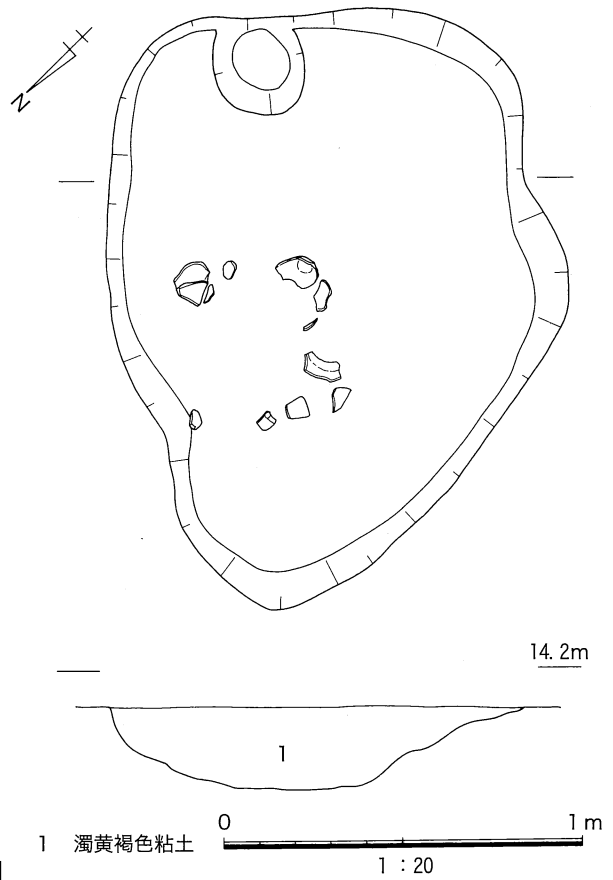
不整形な土坑で、他の土坑により切られている。底面はほぼ水平で、土坑中から甕が3点検出された。



第63图 SKg404 平・断面图、出土遺物実測图



第64図 SKg405・406 平・断面図、出土遺物実測図



第65図 SKg410 平・断面図、出土遺物実測図

SKg405・406 (第64図)

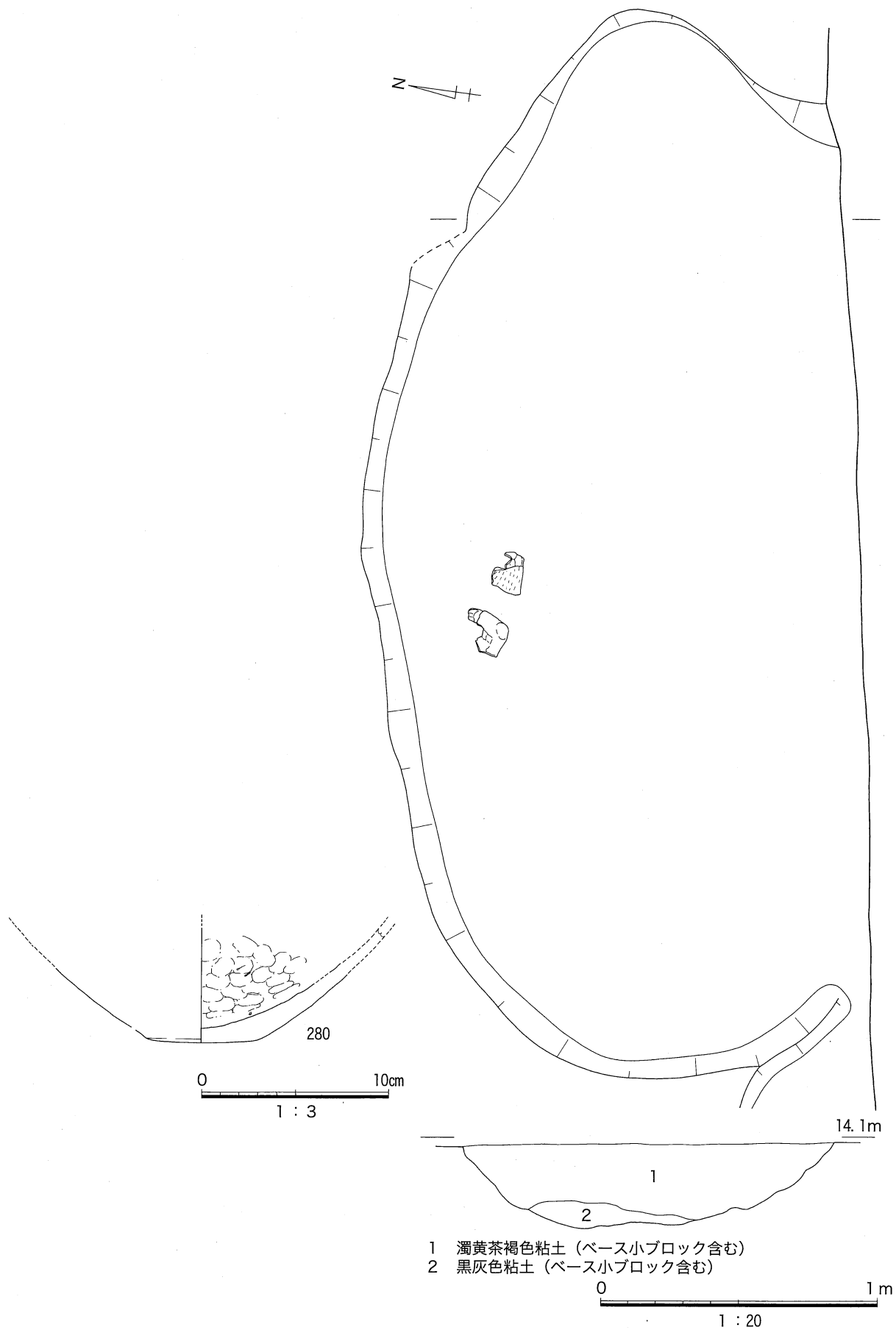
各々不整形な小形の土坑で、平底が各1点出土している。

SKg410 (第65図)

不整形な土坑で、平底が1点出土している。埋土は一層で、短期での埋没と考えられる。

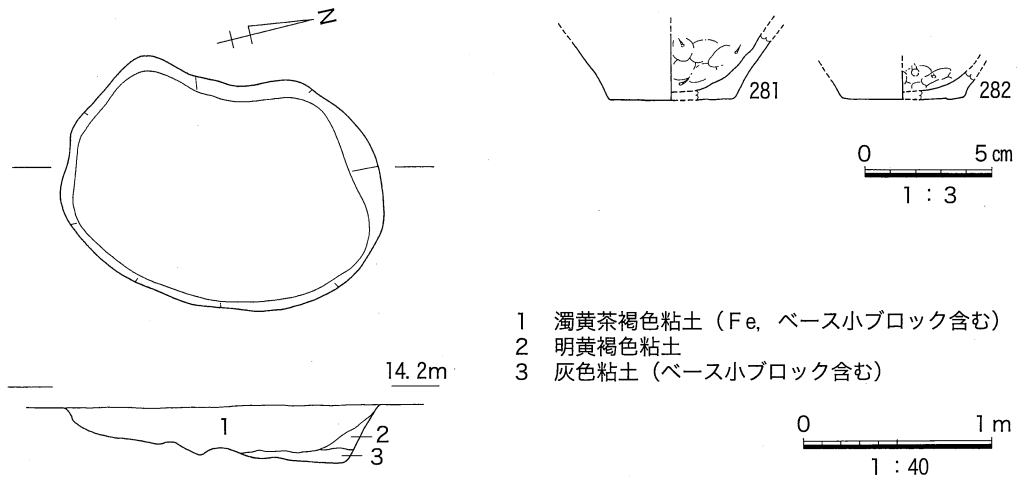
SKg412 (第66図)

不整形な大形の土坑で、甕または鉢、壺の底部が出土しているが、図化できたのは、やや丸みを帯びた平底1点である。埋土は二層であるが、断面図に示すように、長期間での埋没は考えられない。

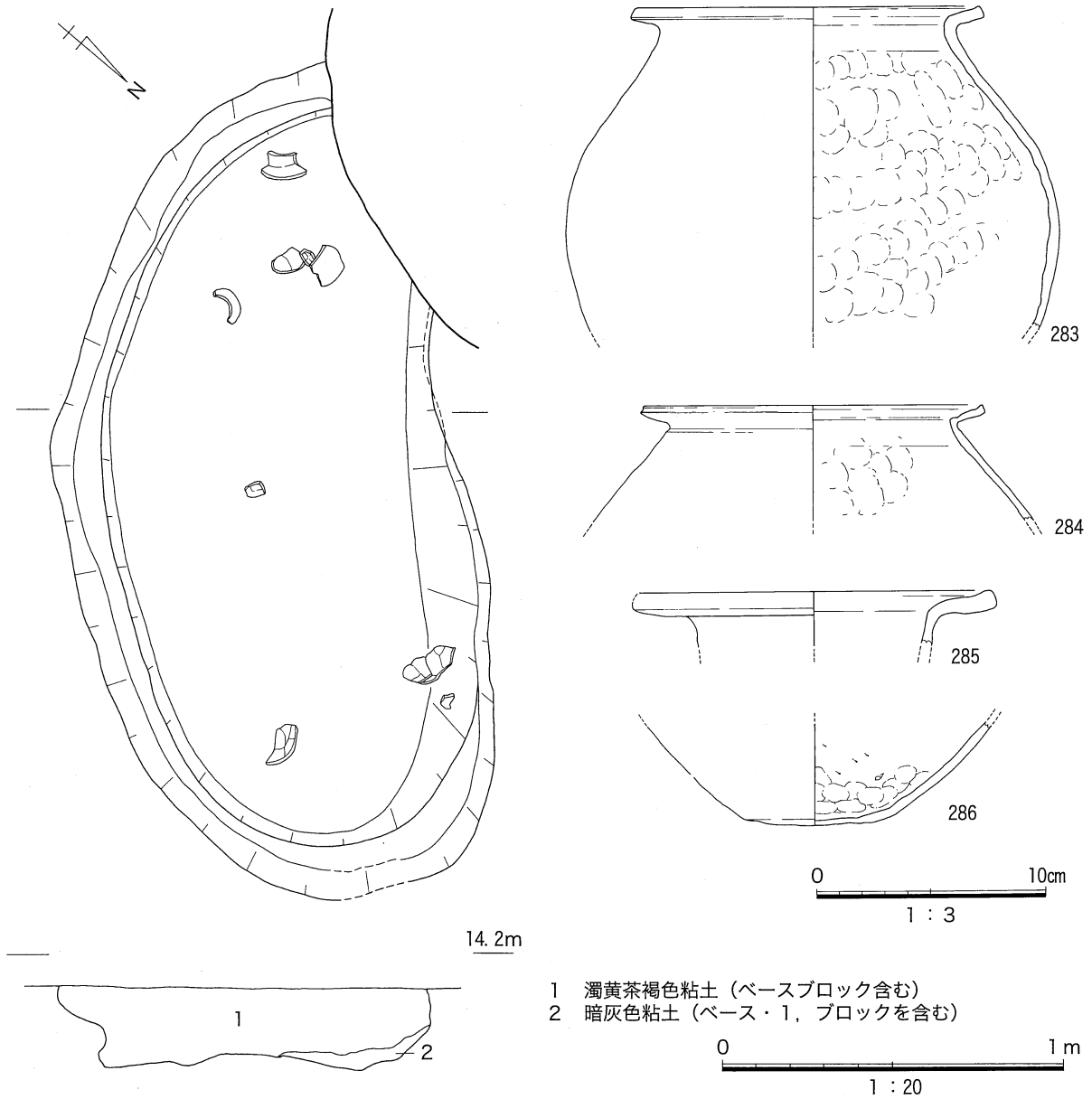


- 1 濁黄茶褐色粘土 (ベース小ブロック含む)
- 2 黒灰色粘土 (ベース小ブロック含む)

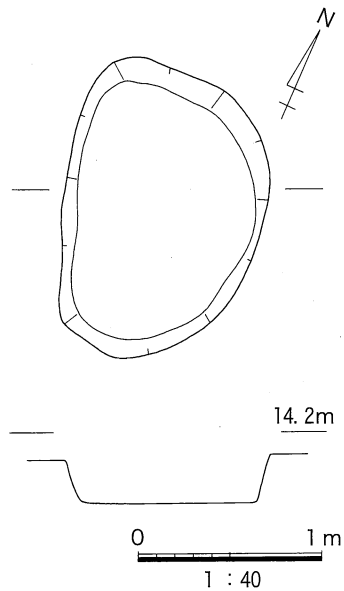
第66図 SKg412 平・断面図、出土遺物実測図



第67図 SKg414 平・断面図、出土遺物実測図



第68図 SKg415 平・断面図、出土遺物実測図

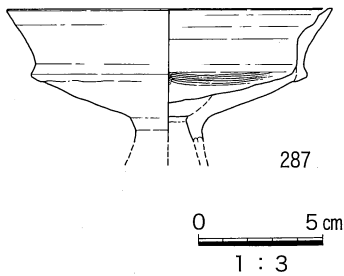


SKg414 (第67図)

不整形な土坑で、平底が2点出土している。埋土は三層であるが、短期での埋没と考えられる。

SKg415 (第68図)

楕円形の土坑で、壺1点、甕2点、甕底部1点が出土している。埋土は二層であるが、土層図に見るとおり短期での埋没と考えられる。283は「くの字」に外反する甕で、内面には指頭圧痕が顕著に見られる。284も同様の甕であるが、口縁部の屈曲が明瞭である。285は壺の口縁部で、体部からやや開き気味に上方に伸びた後、水平方向に開く。口縁端部はやや肥厚している。286はやや丸底気味の平底で、指頭圧痕が顕著であることから、283の底部の可能性が高い。V-8様式に比定される。



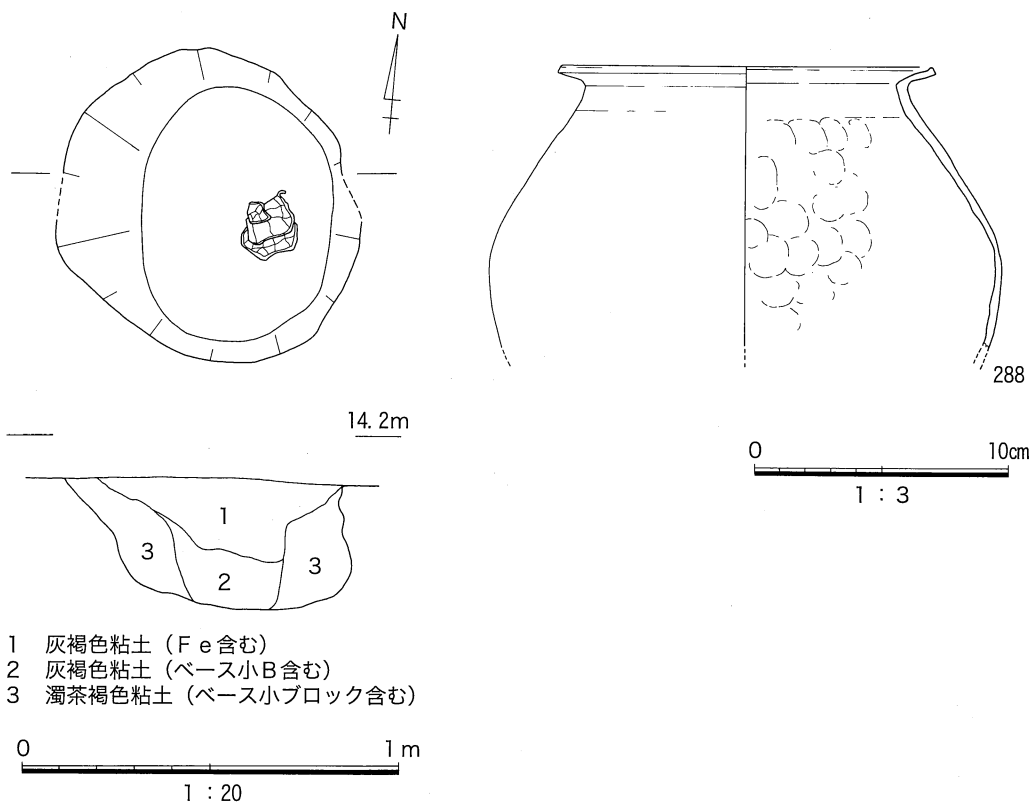
SKg419 (第69図)

不整形な小形の土坑で、高杯の杯部が1点出土している。杯部は体部が直線的に外上方に伸びた後、外反気味に上方に伸びて終わる。杯部の底部は円盤充填で仕上げられている。V-8様式前後に比定される。

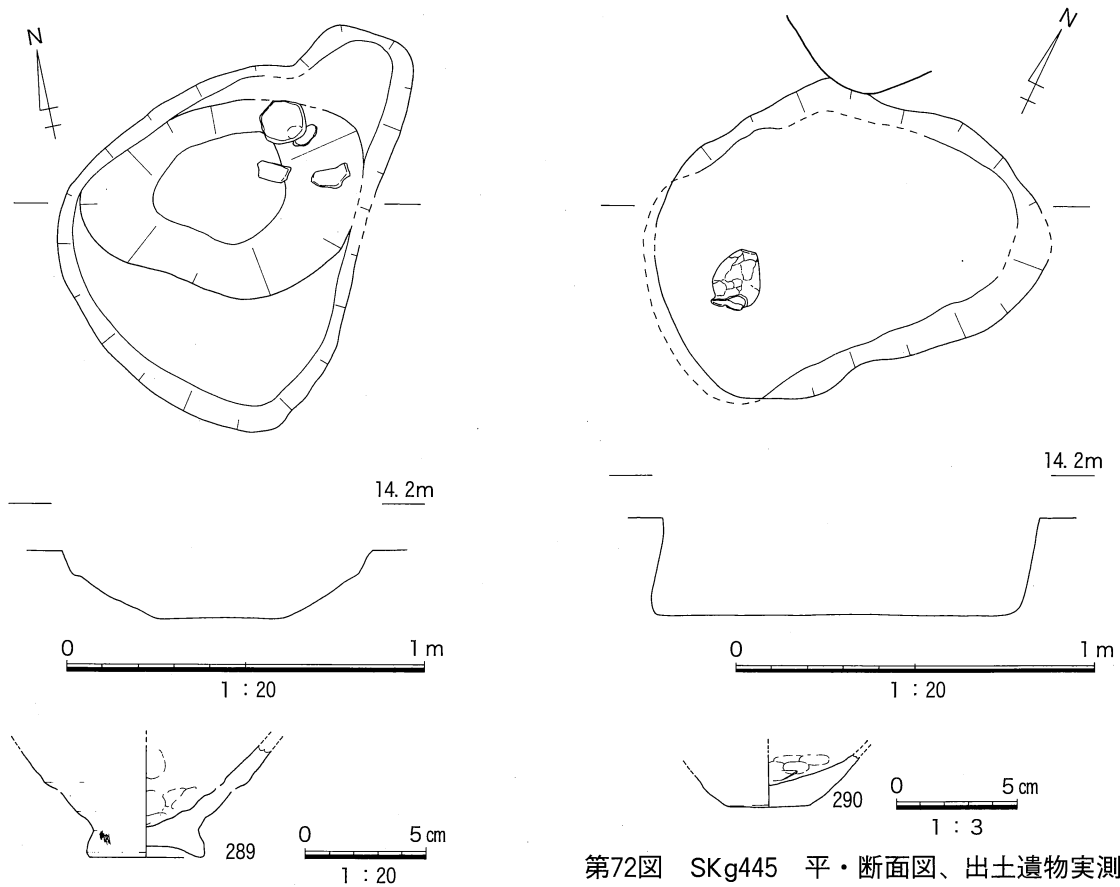
第69図 SKg419 平・断面図、出土遺物実測図

SKg431 (第70図)

ほぼ円形の土坑で、甕が1点出土している。埋土は三層で、土層3堆積後、中央部に掘り込みが行われ、土層2が堆積したのち

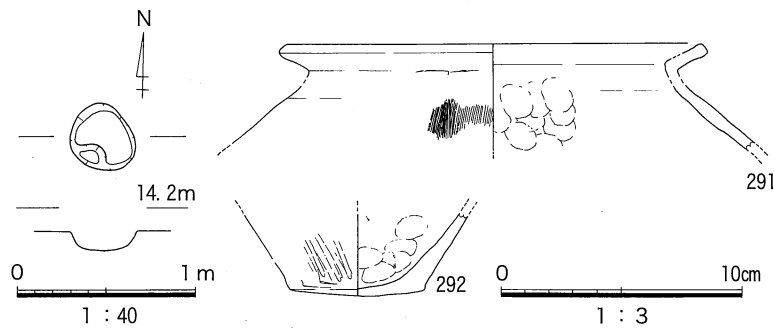


第70図 SKg431 平・断面図、出土遺物実測図



第71図 SKg443 平・断面図、出土遺物実測図

第72図 SKg445 平・断面図、出土遺物実測図



第73図 SKg447 平・断面図、出土遺物実測図

土層1が堆積している。土坑埋没過程のいろいろな可能性を考えさせられる資料である。288は口縁部が「くの字」に短く外反するタイプの甕で、内面には指頭圧痕が顕著に認められる。V-8様式に比定される。

SKg443 (第71図)

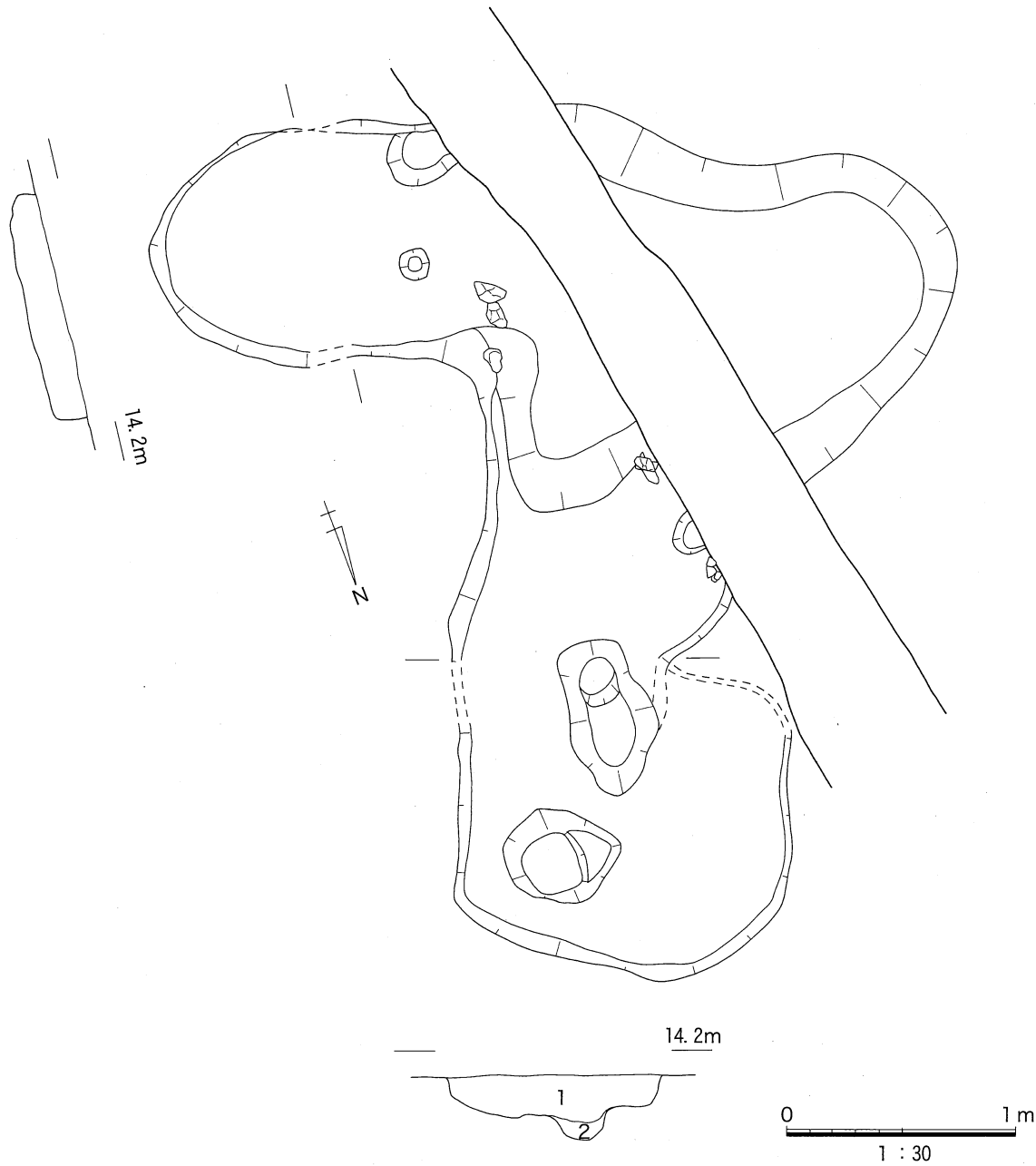
不整形な土坑で、二段落ちの形態を示す。高杯・鉢等が出土しているが、図化できたのは底部1点のみである。

SKg445 (第72図)

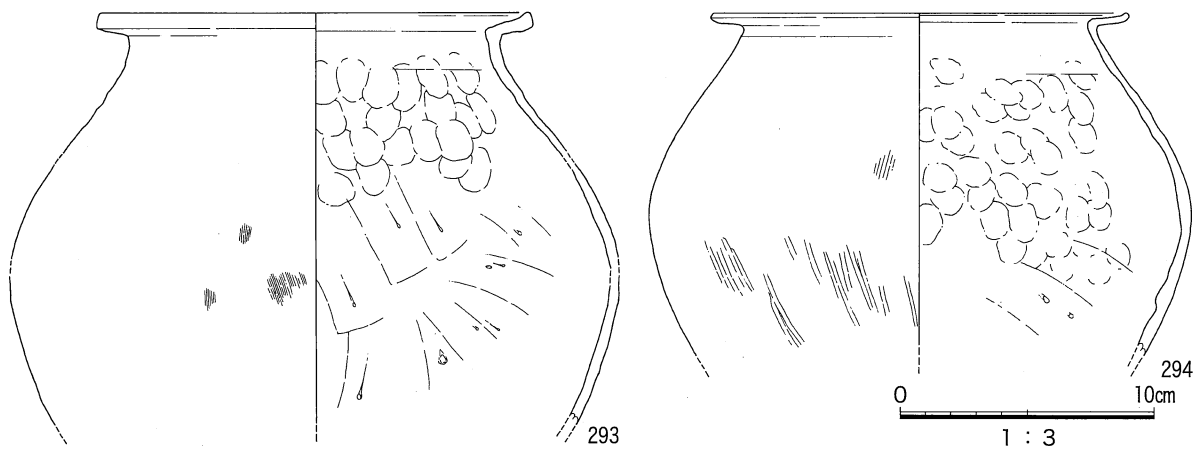
不整形な土坑で、底面直上から甕が1点出土している。壁はほぼ垂直である。290は甕の底部で、やや丸みを持った平底を呈する。

SKg447 (第73図)

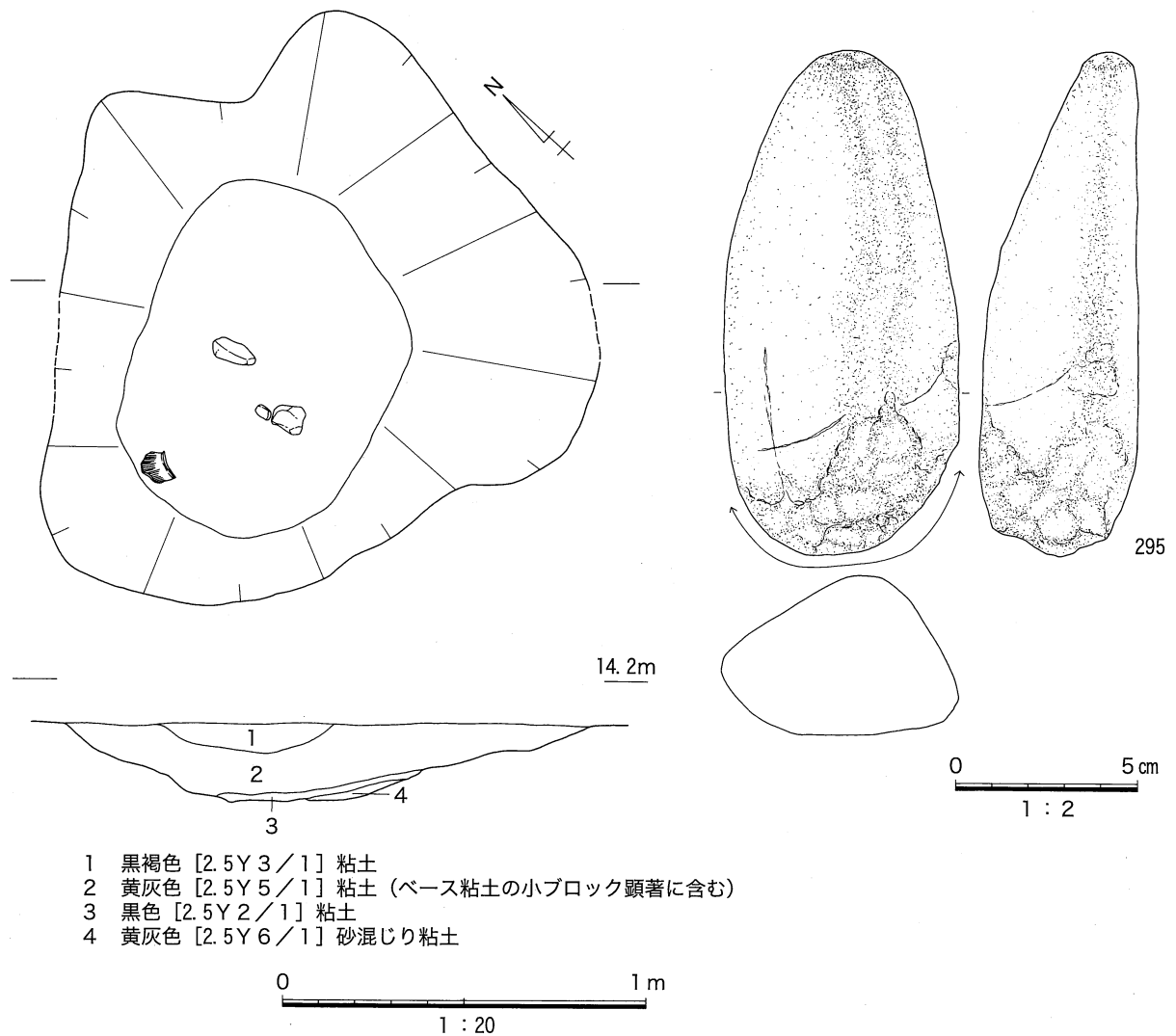
円形の小形の土坑で、甕が出土している。口縁部は「くの字」に短く外反し、内面には指頭圧痕が顕著で、底部はやや丸みを持つ底部であることからV-8様式に比定される。



- 1 褐灰色 [10YR 6/1] 粘土 (ベース粘土のブロックに顕著に含む)
- 2 褐灰色 [10YR 5/1] 粘土 (ベース粘土ブロック含む)



第74図 SKg449 平・断面図、出土遺物実測図



第75図 SKg453 平・断面図、出土遺物実測図

SKg 449 (第74図)

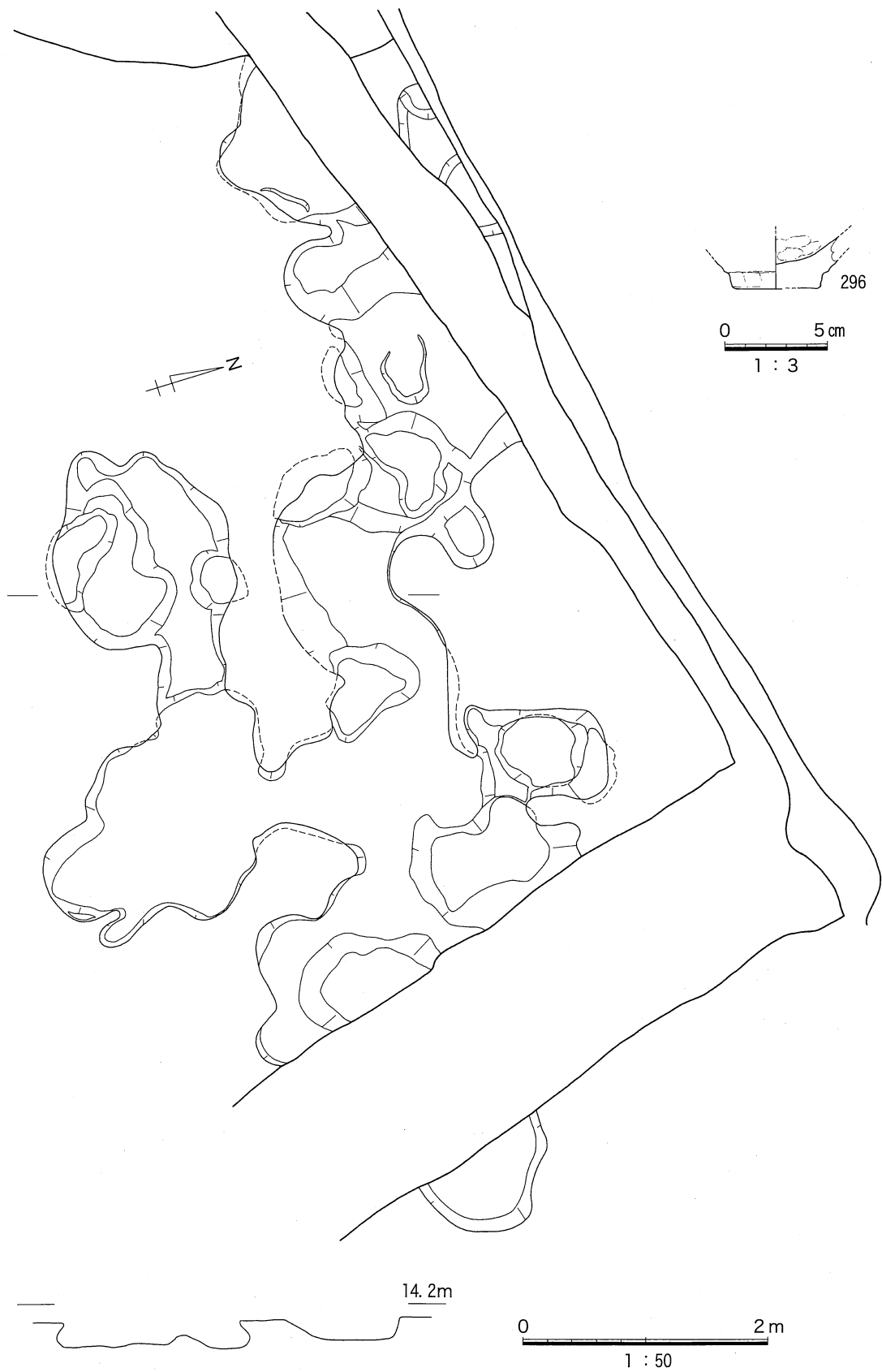
T字形の不整形な土坑で、甕が2点出土している。底面には部分的な落ち込みが見られ、土層2が堆積する。全体的には土層1が見られるため、短時間での埋没が考えられる。293・294とも口縁部は「くの字」に短く外反し、内面には指頭圧痕が顕著であることからV-8様式に比定される。

SKg 453 (第75図)

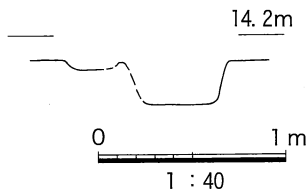
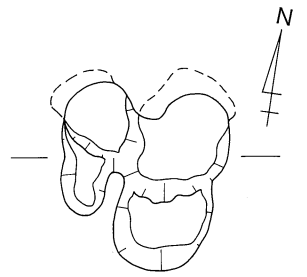
不整形な土坑で、底面のカーブに合わせて4層の埋土で埋没している。堆積状況からは自然埋没と考えていい。この土坑中からは、砂岩製の叩き石1点が出土している。295は、広い小口部分に叩打痕が顕著で、一部反対側の狭い小口にも叩打痕が認められる。

SKg 553 (第76図)

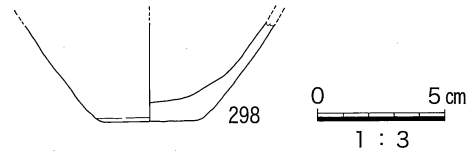
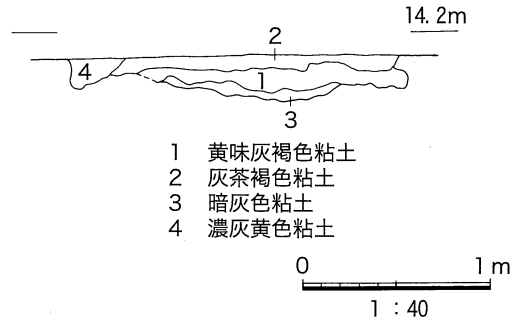
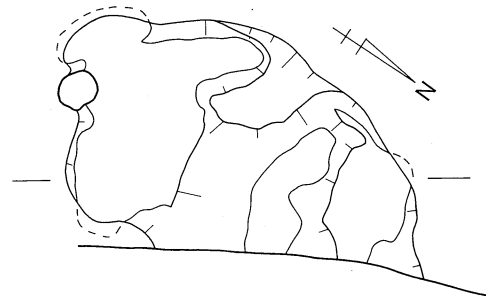
不整形な大形土坑で、甕底部が1点出土している。いくつかの土坑が重なっている可能性もある。296はやや突出した平底の底部である。



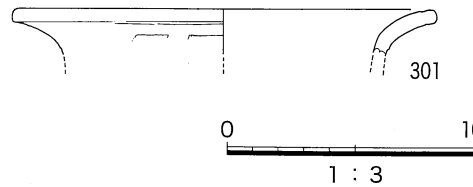
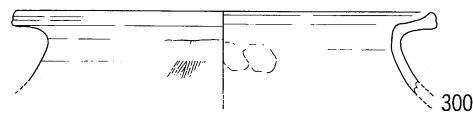
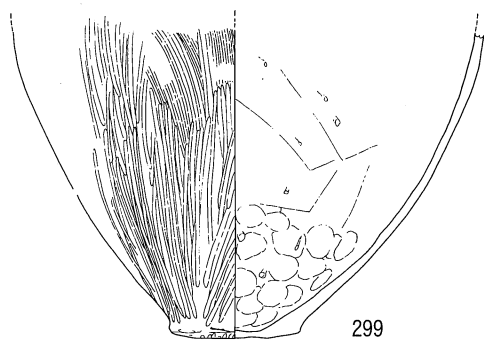
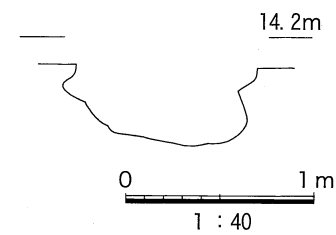
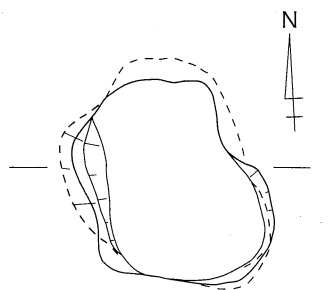
第76図 SKg553 平・断面図、出土遺物実測図



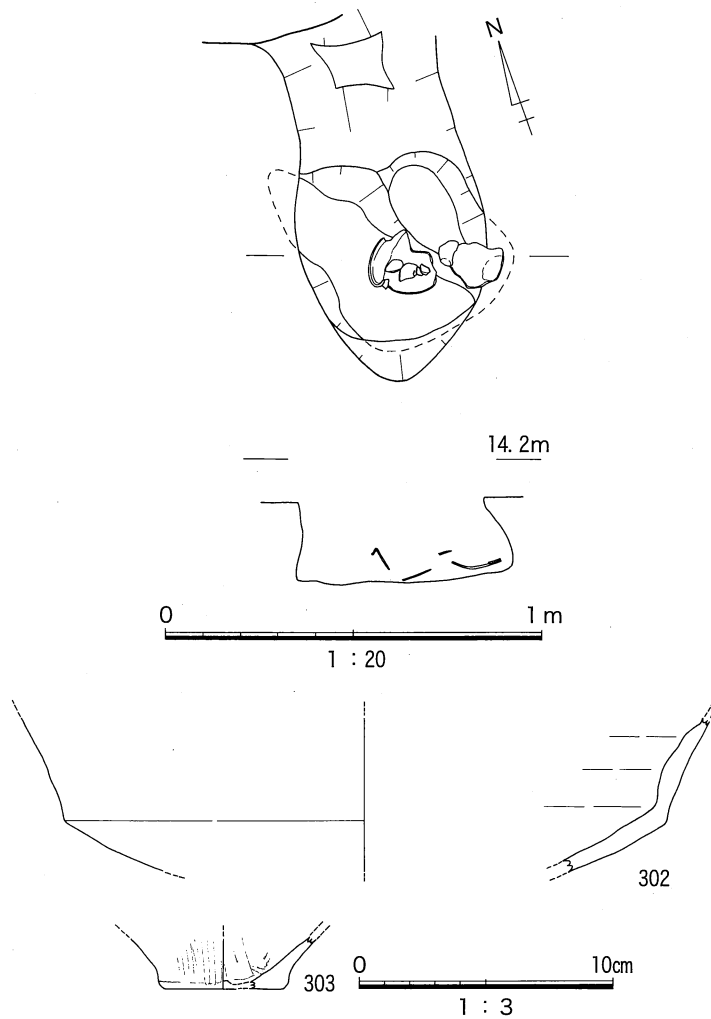
第77图 SKg559 平·断面图、出土遺物実測图



第78图 SKg567 平·断面图、出土遺物実測图



第79图 SKg575 平·断面图、出土遺物実測图



第80図 SKg581 平・断面図、出土遺物実測図

SKg559 (第77図)

不整形な土坑で、二つの土坑が重なっている可能性がある。297は高杯の接合部である。年代は不詳である。

SKg567 (第78図)

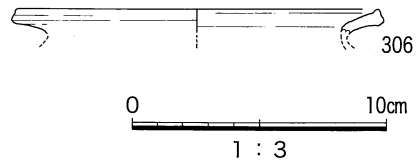
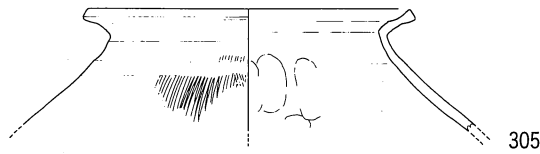
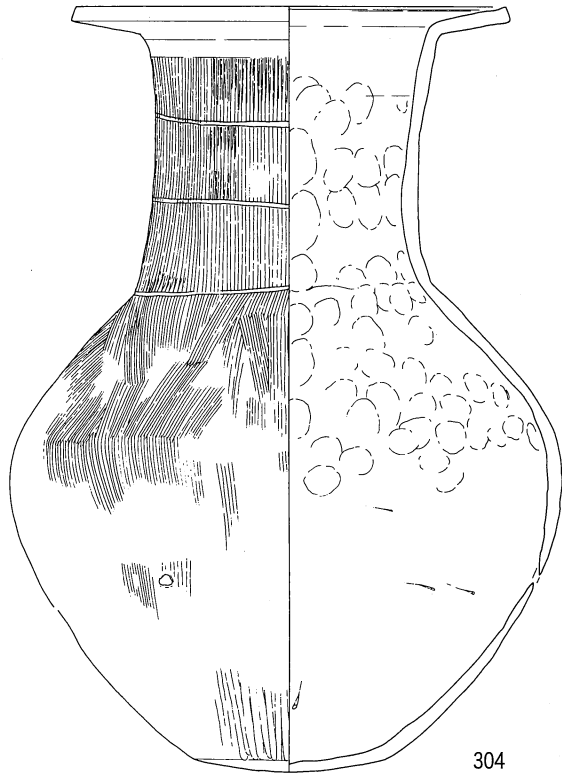
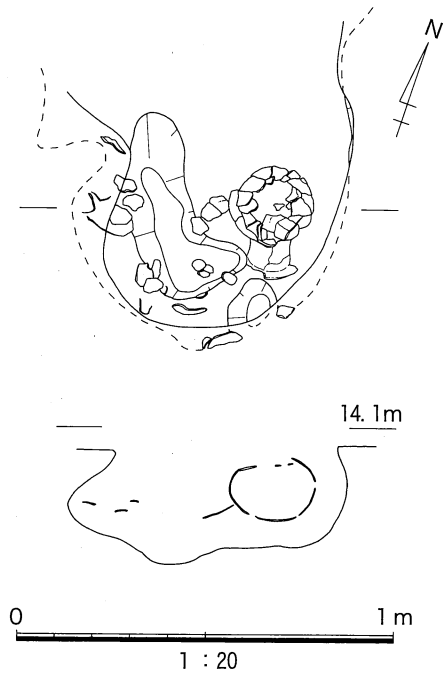
不整形な土坑である。298は甕の底部で、やや丸みを持った平底を呈する。

SKg575 (第79図)

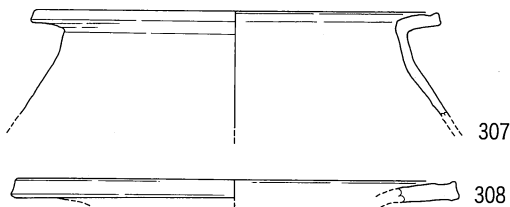
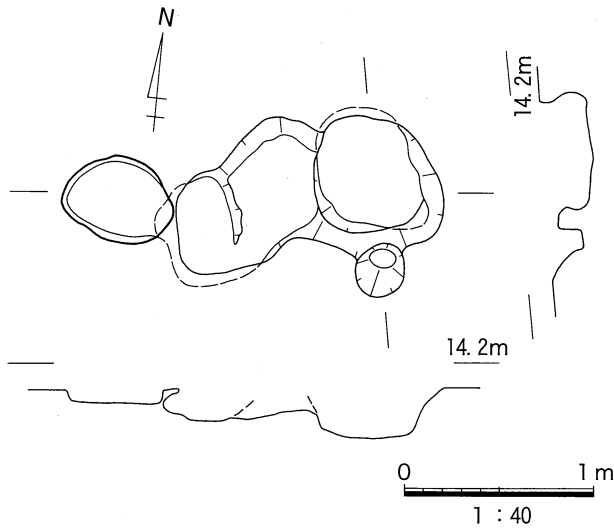
楕円形の小形土坑で、東側がやや袋状を呈する。土坑中から甕・壺の口縁部が各々1点ずつ、甕体部下半が1点出土している。300は短く外反する口縁部と内面の指頭圧痕、301は逆八の字に外反する口縁部を有する壺、299の丸底気味の平底などの形態からV-8様式に比定される。

SKg581 (第80図)

小形の袋状土坑で、底面直上から甕などの破片が出土した。302は高杯で、やや内湾気味に上方にのびたのち外上方に短く屈曲する口縁部を有する。303は、やや丸みを持った平底を呈する。



第81図 SKg587 平・断面図、出土遺物実測図



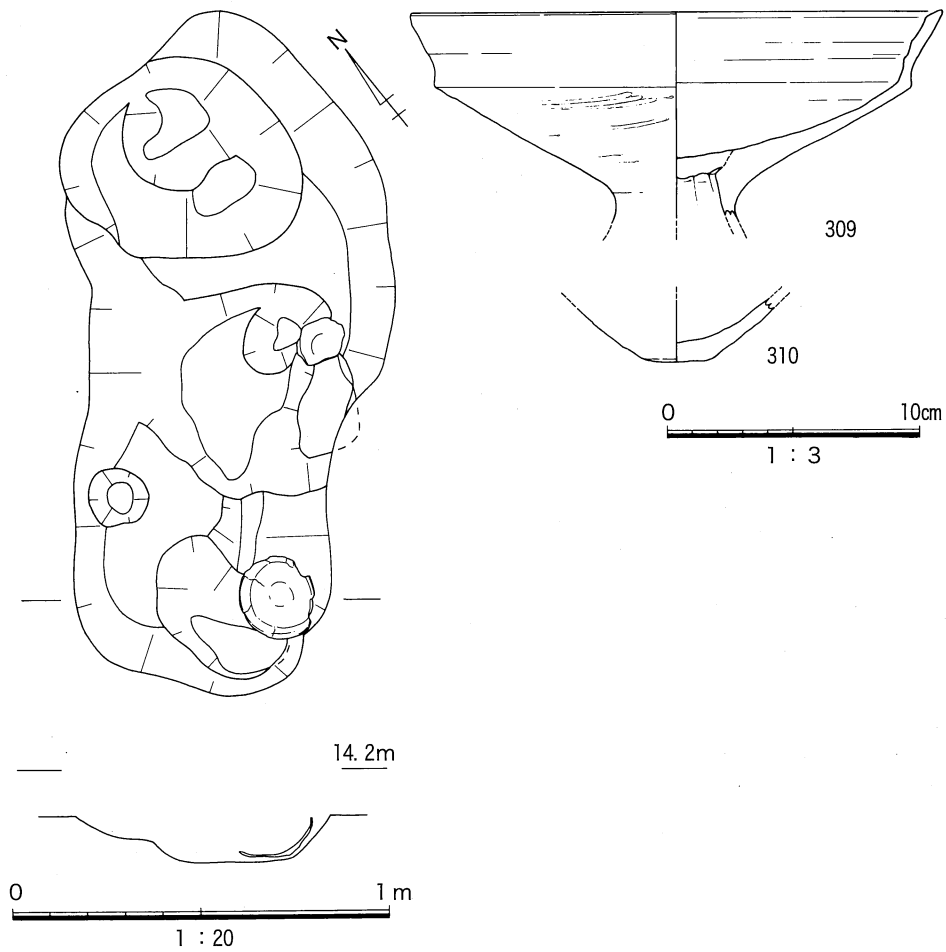
第82図 SKg589 平・断面図、出土遺物実測図

SKg587 (第81図)

小形の袋状土坑で、埋土中から壺・甕が出土している。304は広口長頸壺で頸部が直立気味に上方に延び、屈曲して口縁部を構成する。体部は中位に最大径があり、球形を呈する。底部もやや丸底気味である。305・306は甕の口縁部で、「くの字」に短く外反する口縁部を有する。やや丸みを持った平底を呈する。304はV-6様式に比定されるが、305・306はV-8様式と考えられる。

SKg589 (第82図)

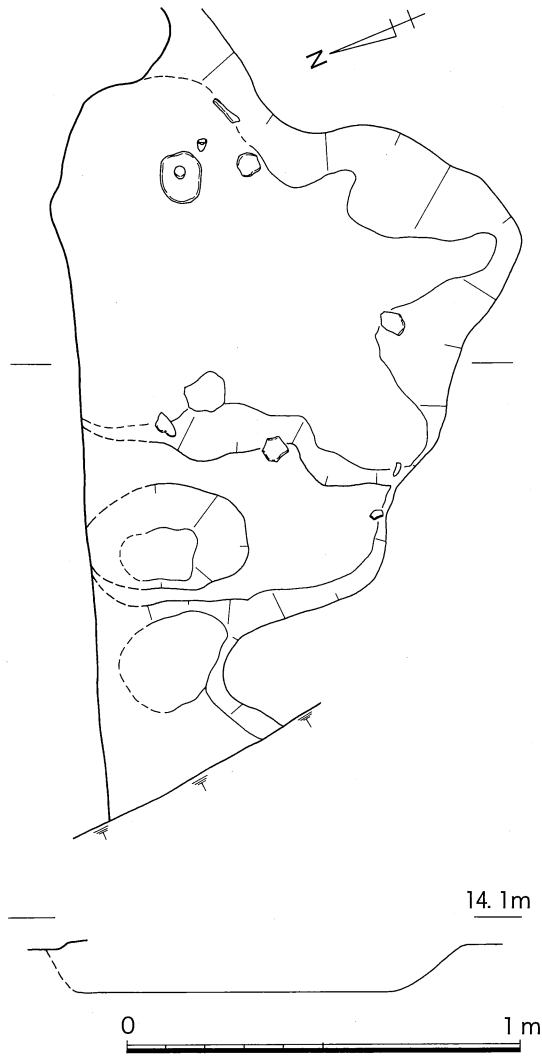
不整形な土坑で、小形の土坑が連続して構成されている。土坑中からは甕口縁部2点が出土している。307は「くの字」に短く水平に伸びる口縁部を有し、308も同様の形態と考えられる。



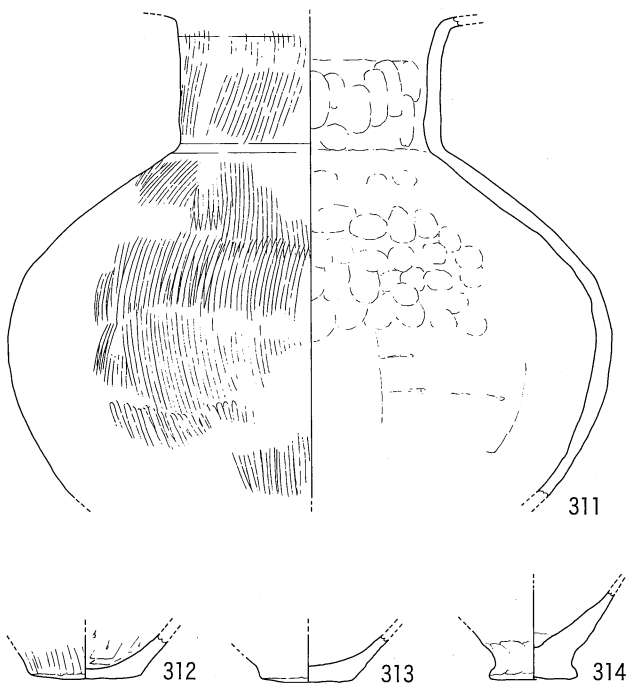
第83図 SKg604 平・断面図、出土遺物実測図

SK g 6 0 4 (第83図)

長方形の土坑で、底面には凹凸が見られる。土坑中からは高杯・甕底部が出土している。309は高杯の杯部で、円盤充填が見られる。甕底部はやや小さな平底である。



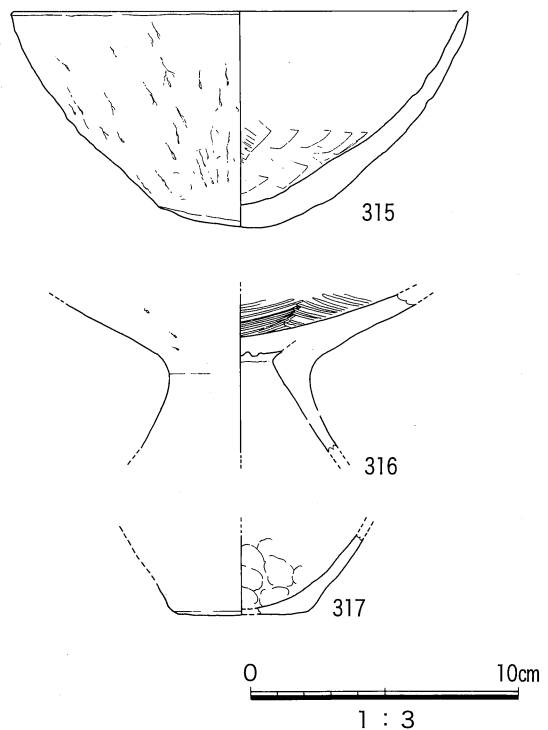
第84図 SKg606 平・断面図

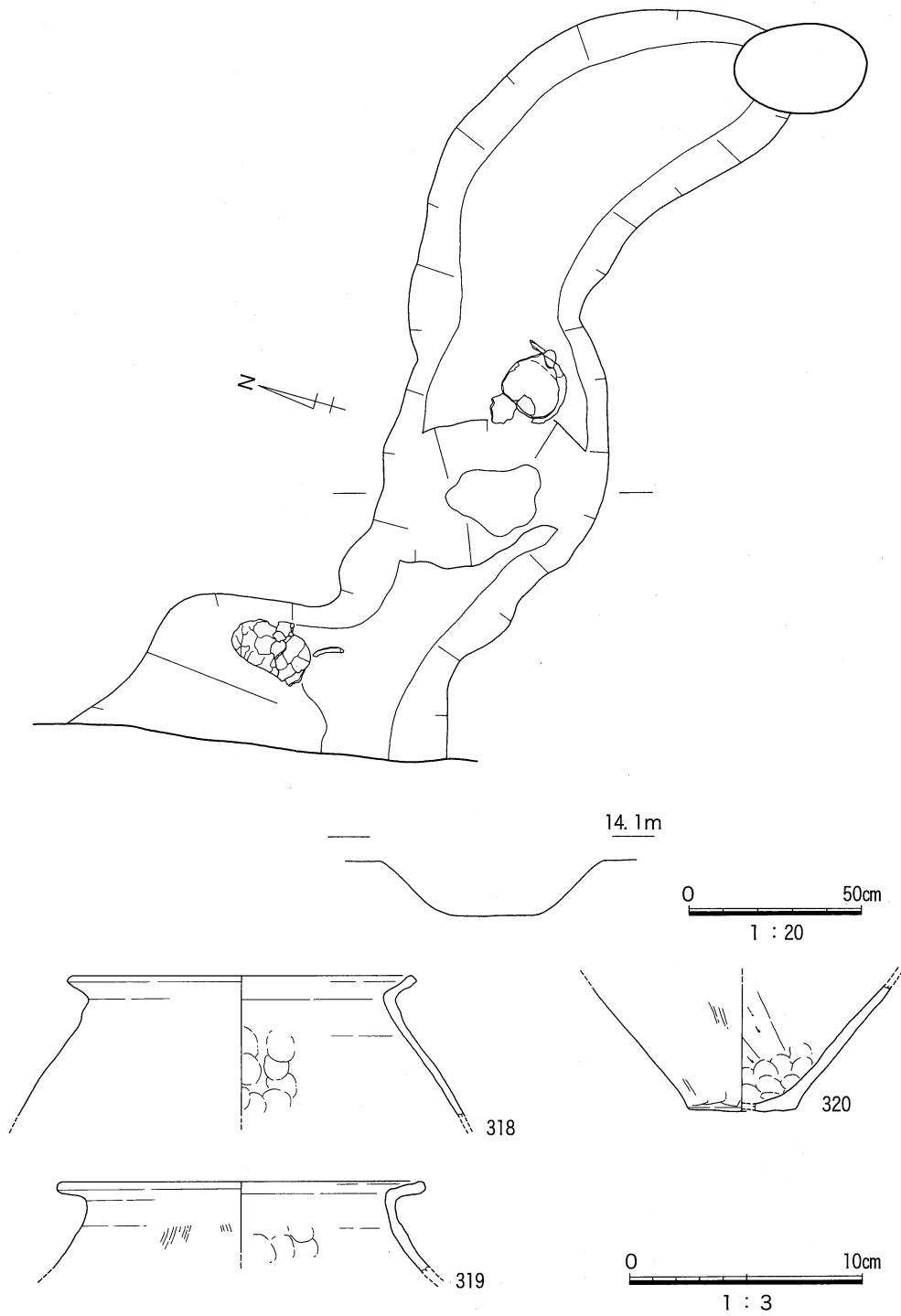


第85図 SKg606 出土遺物実測図

SKg606 (第84・85図)

不整形な土坑で、底面には凹凸が見られる。土坑中から壺・甕・鉢・高杯などの破片が出土した。311はやや扁平な球形体部から上方に伸びる頸部を有する壺で、外面はハケ目、内面には指頭圧痕が顕著である。312~314は甕底部で平底・突出底である。315は鉢でほぼ丸底化した底部を有し外面をヘラ削りで仕上げている。316は高杯の接合部、317は平底の壺底部と考えられる。

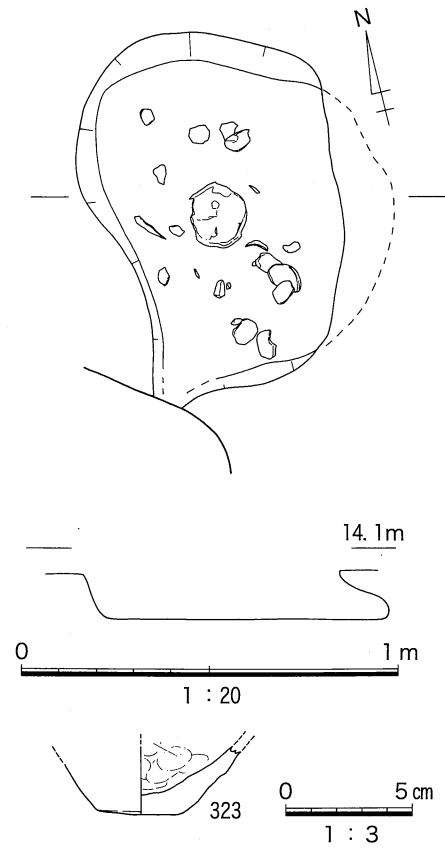
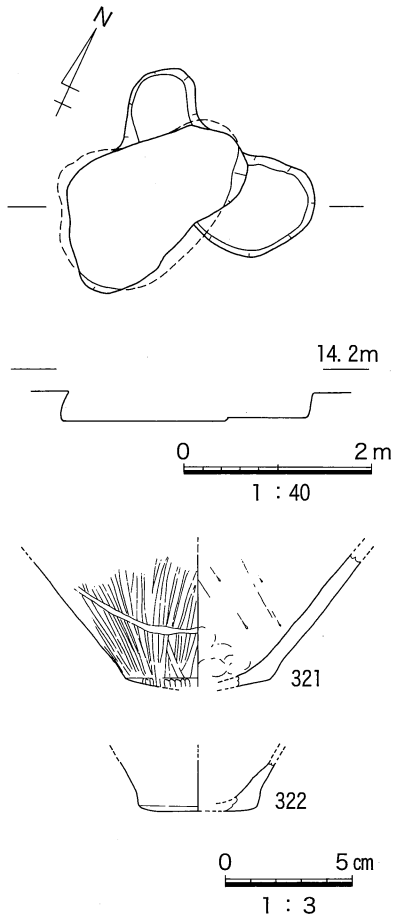




第86図 SKg610 平・断面図、出土遺物実測図

SKg610 (第86図)

不整形な溝状の土坑で、底面直上から甕などの破片が出土した。318・319は甕口縁部で、短く「くの字」に外反する口縁部を有し、内面には指頭圧痕が明瞭である。320は平底を有する甕底部である。甕口縁部の特徴からV-8様式に比定される。



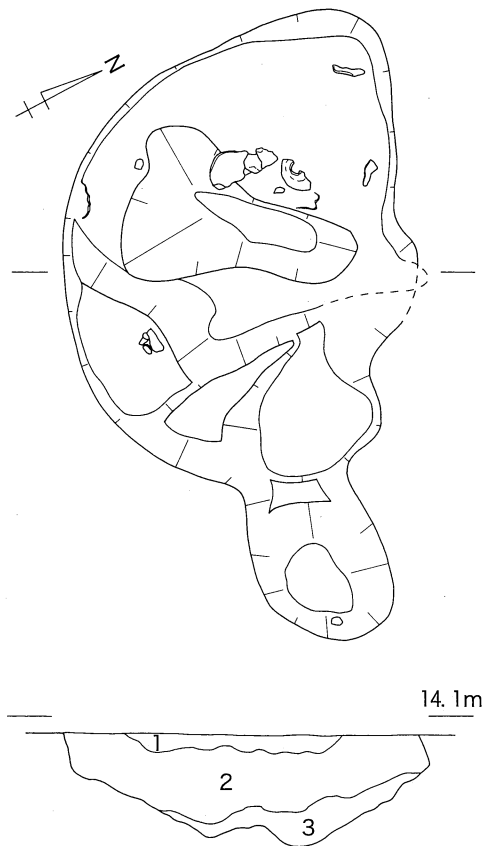
第87図 SKg612 平・断面図、出土遺物実測図 第88図 SKg621 平・断面図、出土遺物実測図

SKg612 (第87図)

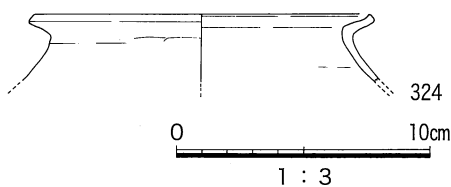
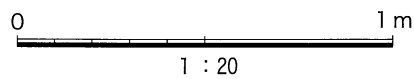
不整形な土坑で、二つの土坑がクロスしている可能性もある。土坑中からは甕底部が2点出土している。321は内面にヘラ削りが見られる。

SKg621 (第88図)

小形の袋状土坑で、底面直上から甕などの破片が出土した。323は甕底部で、やや丸みを持った平底を呈する。



- 1 暗褐色粘土
- 2 濃灰黄色粘土
- 3 暗灰色粘土～粘質シルト (0～5cmのベースブロック含む)



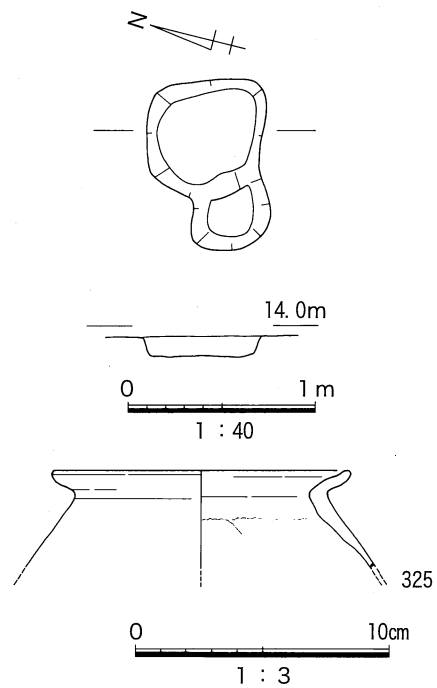
第89図 SKg631 平・断面図、
出土遺物実測図

SKg631 (第89図)

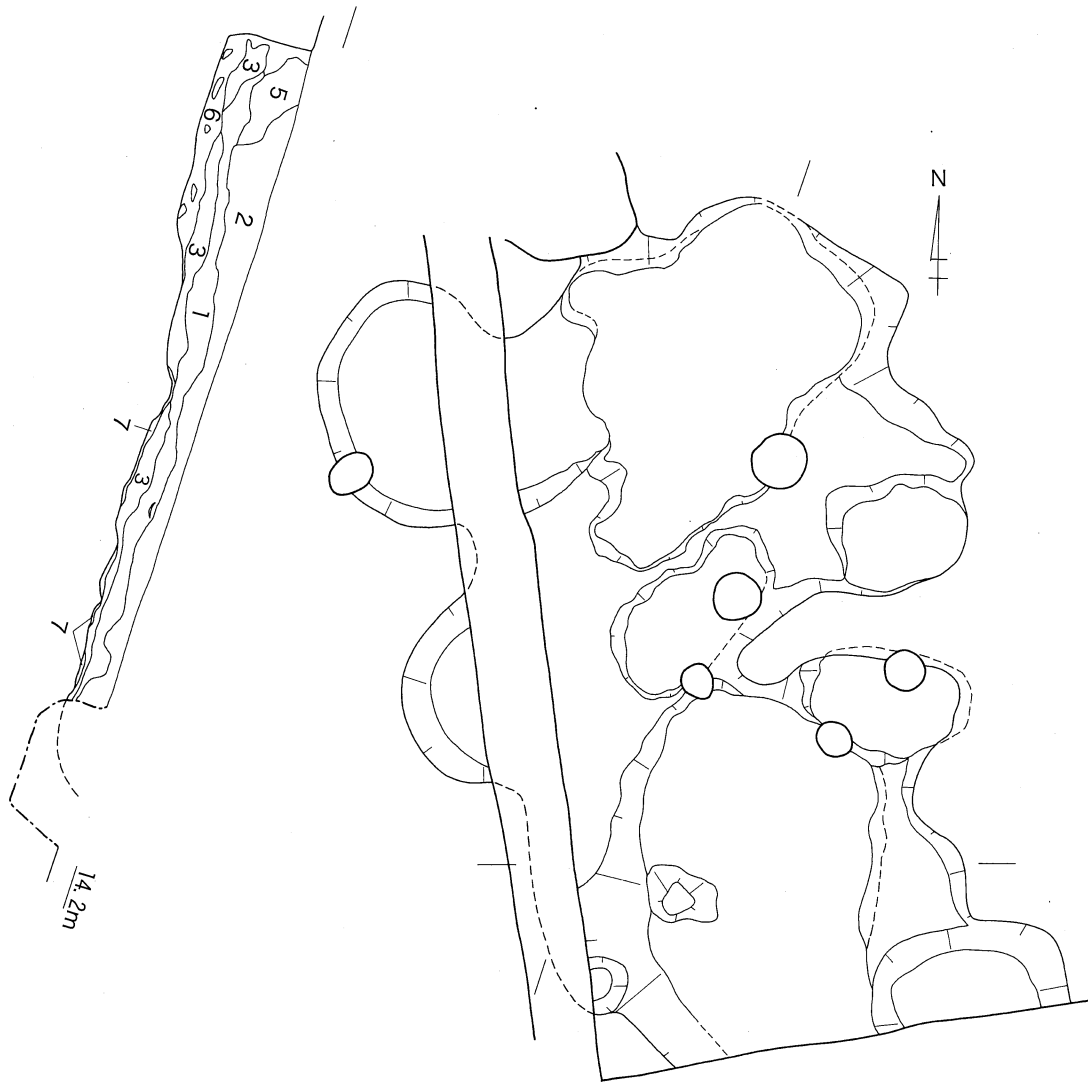
不整形な土坑で、3層の自然堆積によって埋没していた。埋土中から甕などの破片が出土した。324は甕口縁部で、「くの字」に外反し、端部は上方に摘み上げられている。

SKg657 (第90図)

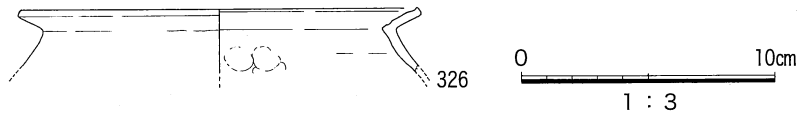
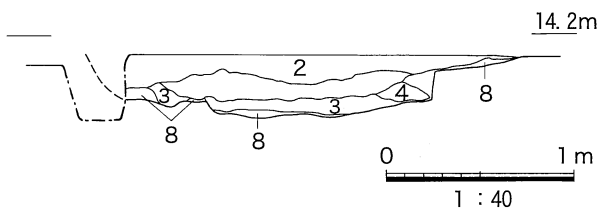
不整形な小形土坑で、柱穴の切り合いの可能性もある。土坑中から甕の口縁部が1点出土した。325は「くの字」に外反する口縁部を有し、内面にはヘラ削りが見られる。



第90図 SKg657 平・断面図
出土遺物実測図



- 1 黄味灰褐色粘土 (Mn含む)
- 2 灰茶褐色粘土 (Mn含む)
- 3 暗灰色粘土
- 4 暗灰色粘土 (3層より粘性強くブロック含む)
- 5 濃灰黄色粘土=色調的には2層に近い
- 6 砂礫
- 7 粘土~砂混り粘土
- 8 地山



第91図 SKg679 平・断面図、出土遺物実測図

SKg679 (第91図)

不整形な土坑で、いくつかの土坑が重なっている可能性もあったが、7層の自然堆積によって埋没していることから、掘削による重複後、徐々に埋没していったと考えられる。埋土中から甕の破片が出土した。324は甕口縁部で、「くの字」に明瞭に外反するものである。

S K g 6 8 2 (第92図)

不整形な土坑で、埋土中から甕の底部2点が出土した。327・328とも平底を呈する。

S K g 6 8 4 (第93図)

ほぼ円形の袋状土坑で、高杯の杯部が伏せた状態で検出されている。脚部は失われているが、土坑検出面とレベルが同一であるため、後世の削平による欠損も考えられる。杯部は、内湾気味に外上方に伸び、外反して終わる。形態からは、V-6~8様式に比定できる。

S K g 6 9 2 (第94図)

円形土坑で、南半分が欠損している。土坑中から壺の底部1点が出土した。330は平丸底の底部を有し、外面をヘラミガキ、内面をヘラ削りで仕上げている。

S K g 6 9 3 (第95図)

円形土坑で、埋土中から甕の口縁部1点が出土した。331は、明瞭な「くの字」口縁を有し、外面をハケ目、内面をヘラ削り後、指頭圧痕で仕上げている。

S K g 6 9 7 (第96・97図)

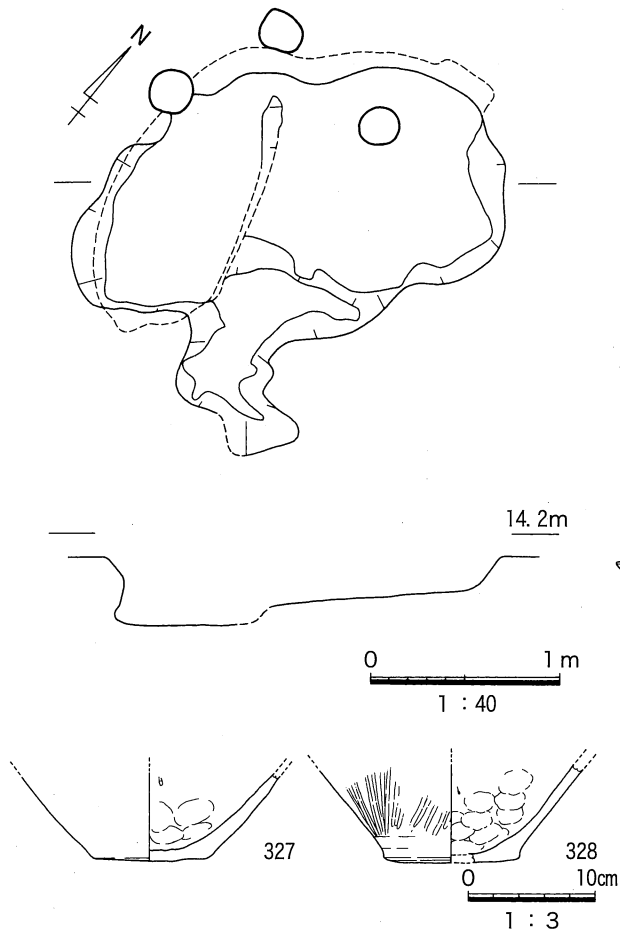
不整形な土坑で、複数の土坑が重複して構成されている。2ヵ所に土器の出土が見られる。出土状況は、土坑底面直上で、内1ヵ所には甕がほぼ完形で埋められていた。ただし、取り上げ段階では完全な形で取り上げができなかった。332は甕口縁部、333・334は甕底部である。底部は2点とも平底を有する。

S K g 7 5 3 (第98図)

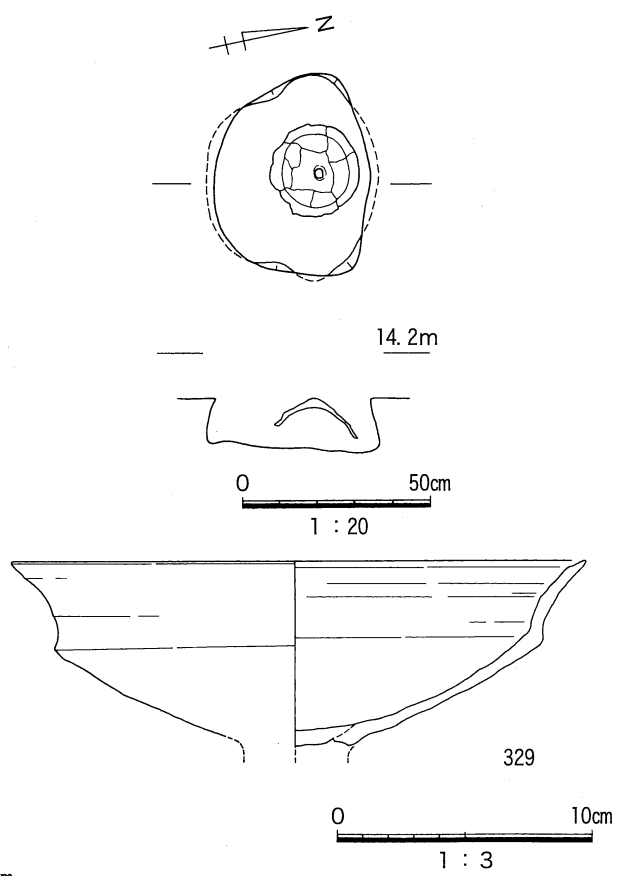
不整形な小形土坑で、3層の埋土からなる。埋土はブロック状に検出されており、人工的な埋没と考えられる。埋土中から壺・甕の口縁部が各1点出土した。335は、球形体部から外上方に緩やかに伸びる口縁部を有し、内面はヘラ削り後、指頭圧痕で仕上げられている。336は明瞭な「くの字」口縁を有する。

S K g 7 6 7 (第99図)

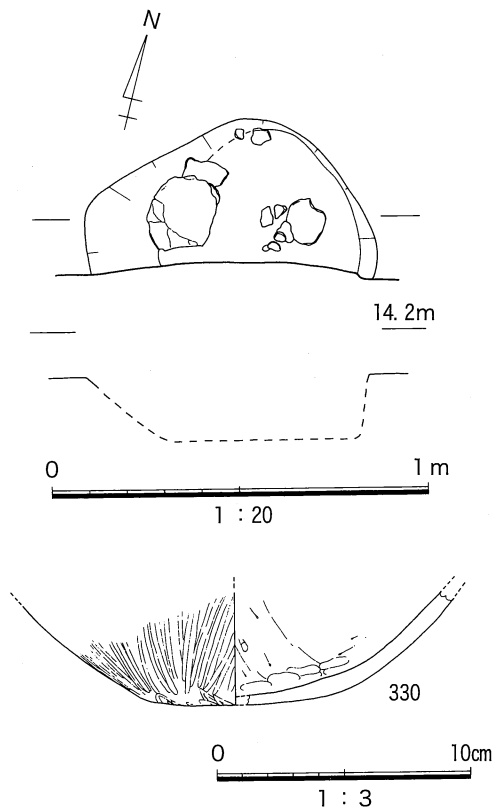
円形の小形土坑で、埋土は1層からなる。埋土中から甕の口縁部1点が出土した。337は、「くの字」に屈曲し、端部を上方に摘み上げている。内面には指頭圧痕が見られる。



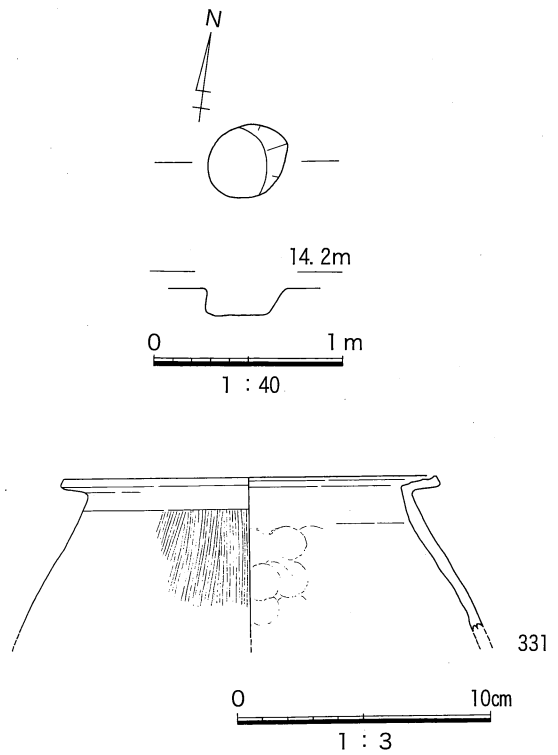
第92図 SKg682 平・断面図、出土遺物実測図



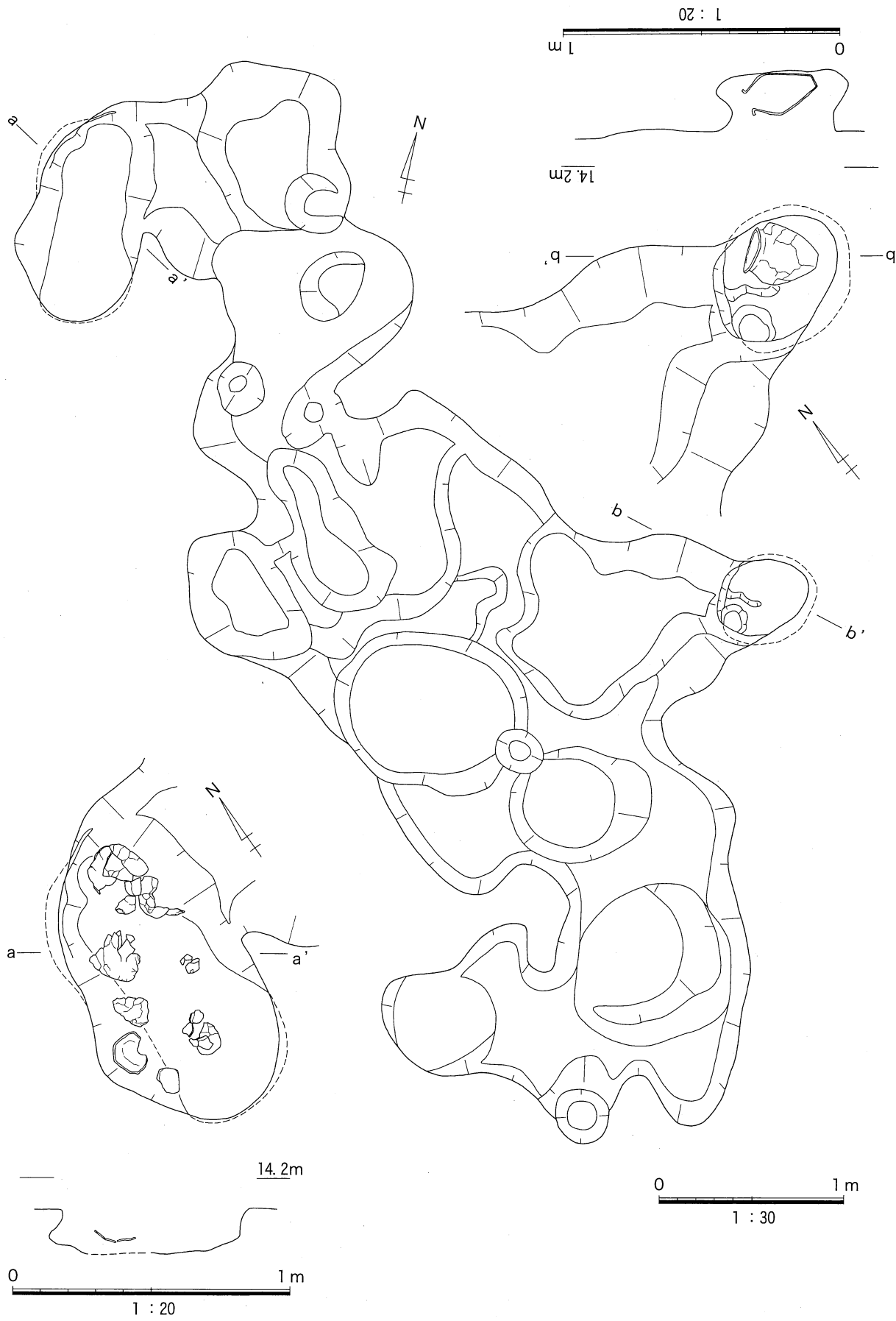
第93図 SKg684 平・断面図、出土遺物実測図



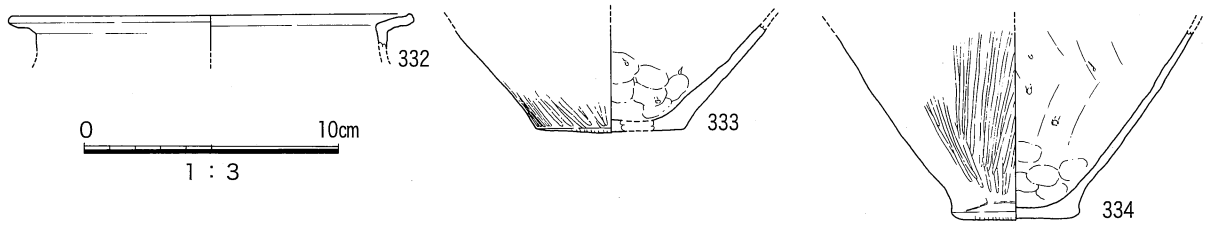
第94図 SKg692 平・断面図、出土遺物実測図



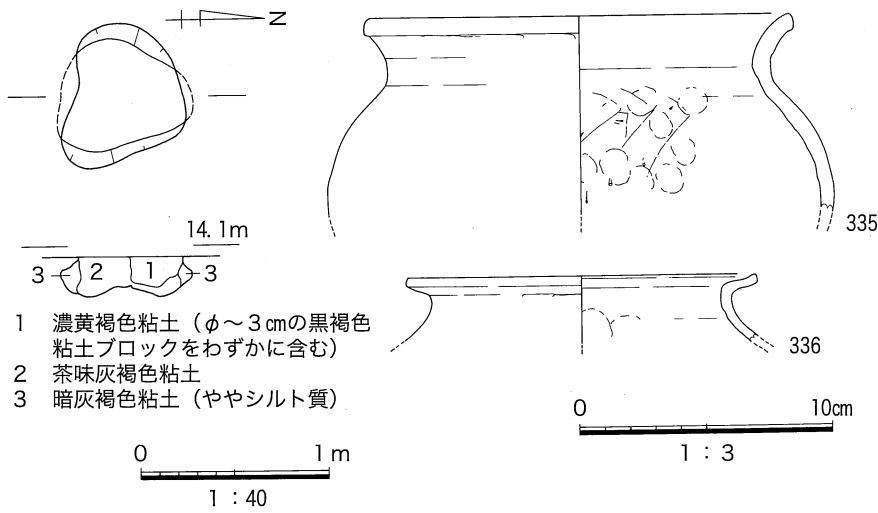
第95図 SKg693 平・断面図、出土遺物実測図



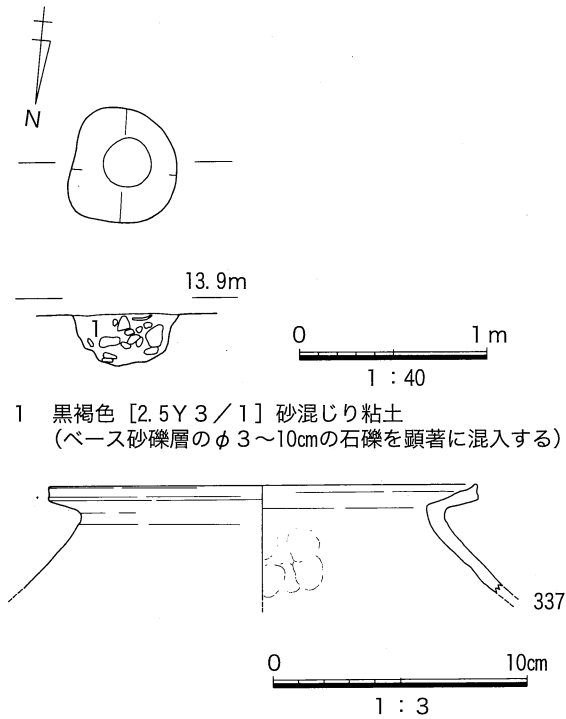
第96图 SKg697 平·断面图



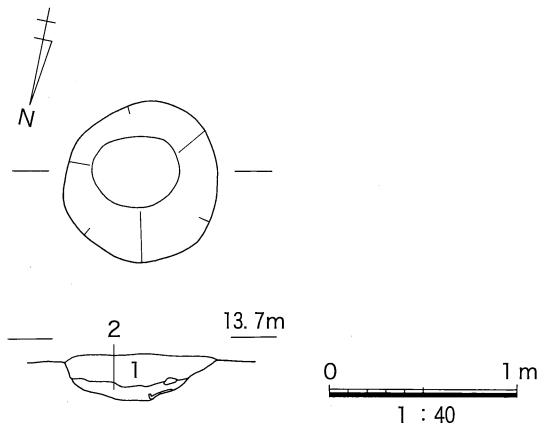
第97図 SKg697 出土遺物実測図



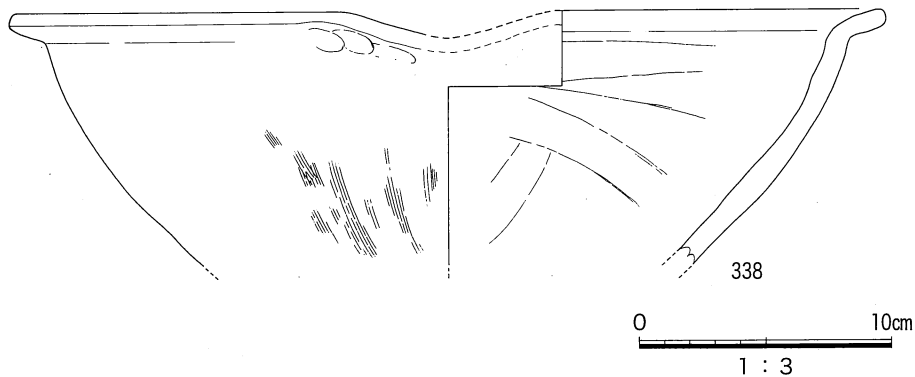
第98図 SKg753 平・断面図、出土遺物実測図



第99図 SKg767 平・断面図、出土遺物実測図



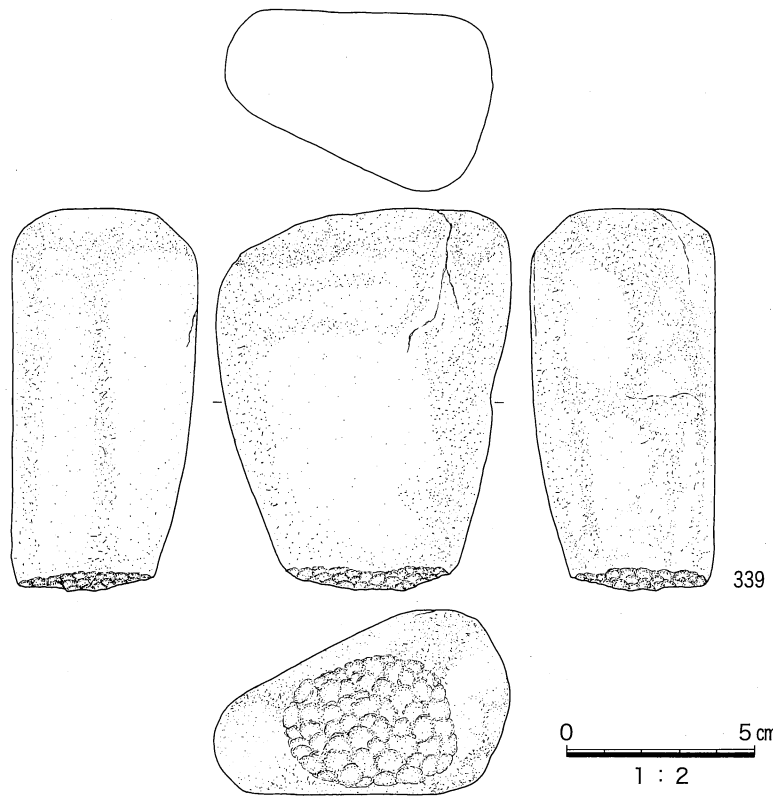
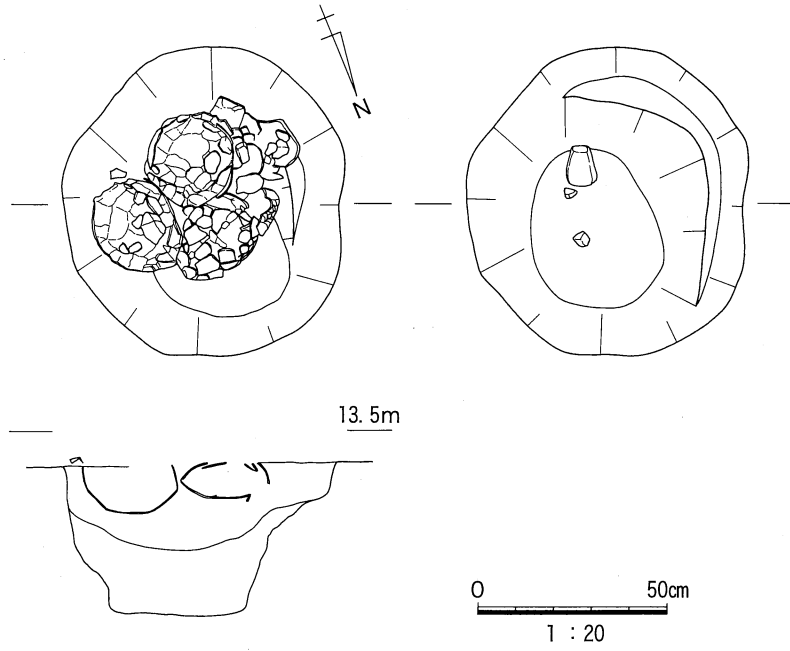
- 1 黒色 [7.5YR 17/1] 粘土 (わずかに小石含む)
- 2 褐灰色 [5YR 7/2] 粘土 (φ 2~4cmの小石含む層をブロック状に混入する)



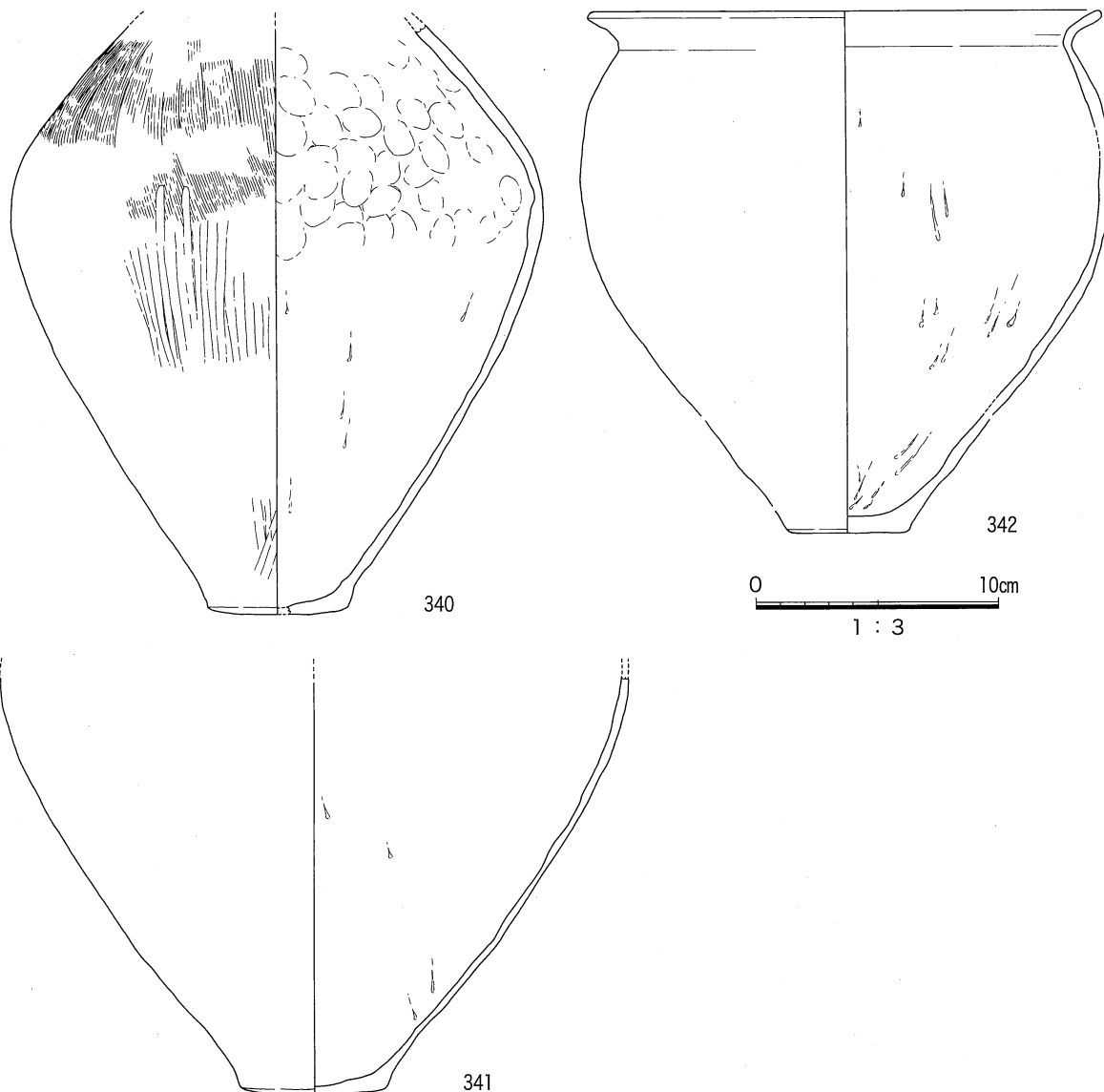
第100図 SKg771 平・断面図、出土遺物実測図

SKg771 (第100図)

円形の小形土坑で、2層の埋土からなる。埋土の状況から自然埋没と考えられる。埋土中から鉢1点が出土した。338は、口縁部が短く外傾する鉢で、口縁部を片口に仕上げている。底部は欠損しており不明である。



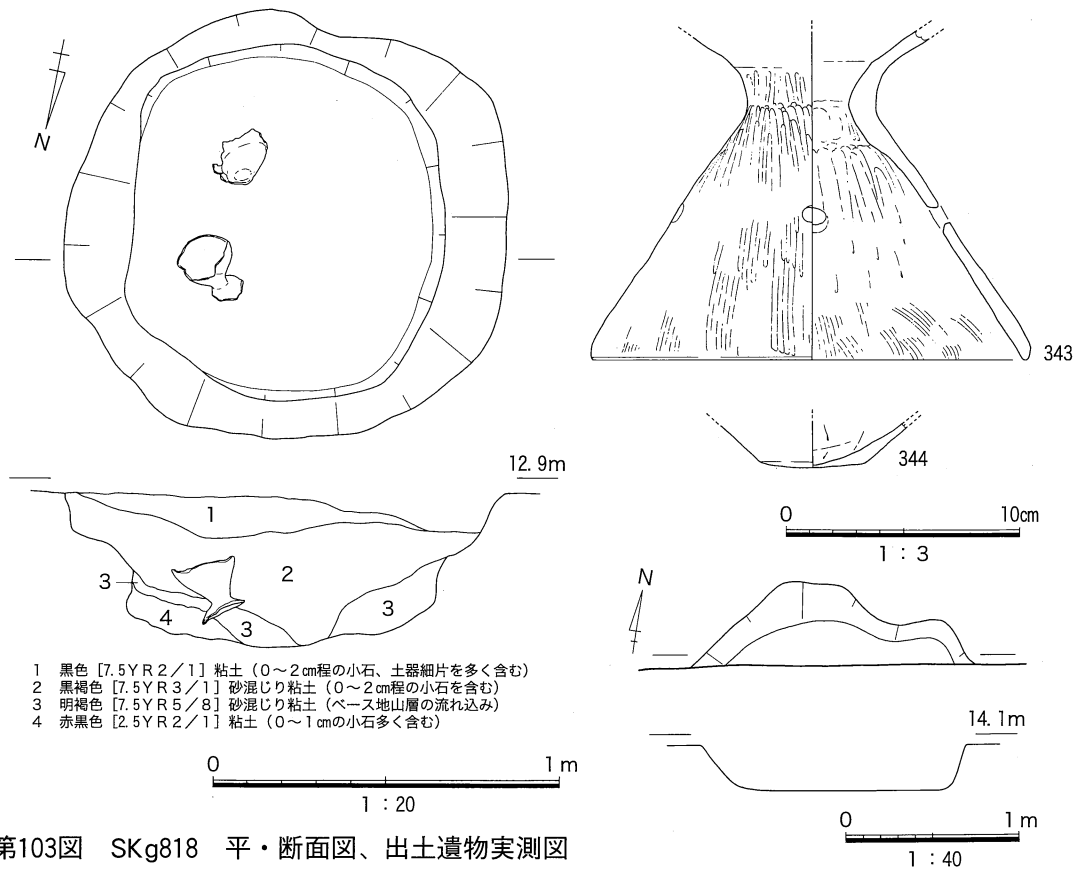
第101図 SKg776 平・断面図、出土遺物実測図(1)



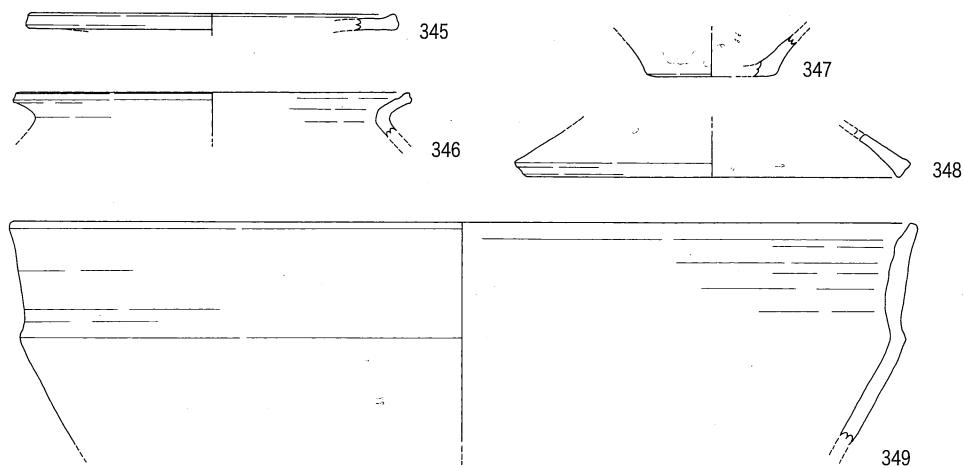
第102図 SKg776 出土遺物実測図 (2)

SKg776 (第101・102図)

円形土坑で、2層からなる。上層中に3個体の土器と叩き石1点が埋納されていた。出土状態から見て、土層2による埋没後、叩き石、土器3個体を安置したと考えられる。これをどのような意図で行ったかについては不明である。340・341は壺底部と考えられ、いずれもやや丸みを持った平底である。342は甕で、緩やかに「くの字」に外反する口縁部を有し、内面をヘラ削りで仕上げている。底部は平底である。339は叩き石で三角形の頂部にのみ叩打痕が認められる。



第103図 SKg818 平・断面図、出土遺物実測図



第104図 SKg857 平・断面図、出土遺物実測図

SKg818 (第103図)

円形の土坑で、二段掘りされている。埋土は4層からなり、自然堆積と考えられる。2層埋没後に高杯脚部が廃棄されている。埋土中からこの高杯脚部と甕の底部1点が出土した。343は器台で、直線的にハの字に伸びる。344は甕底部で、やや丸底気味の平底を有する。

SKg857 (第104図)

不整形な土坑で、南半分は調査していない。埋土中から甕口縁部2点、底部1点、高杯脚部1点、鉢1点が出土した。349は大形の鉢で、直線的に外上方に伸びる体部から、外反気味に直立する口縁部を有する。

2 古代～中世

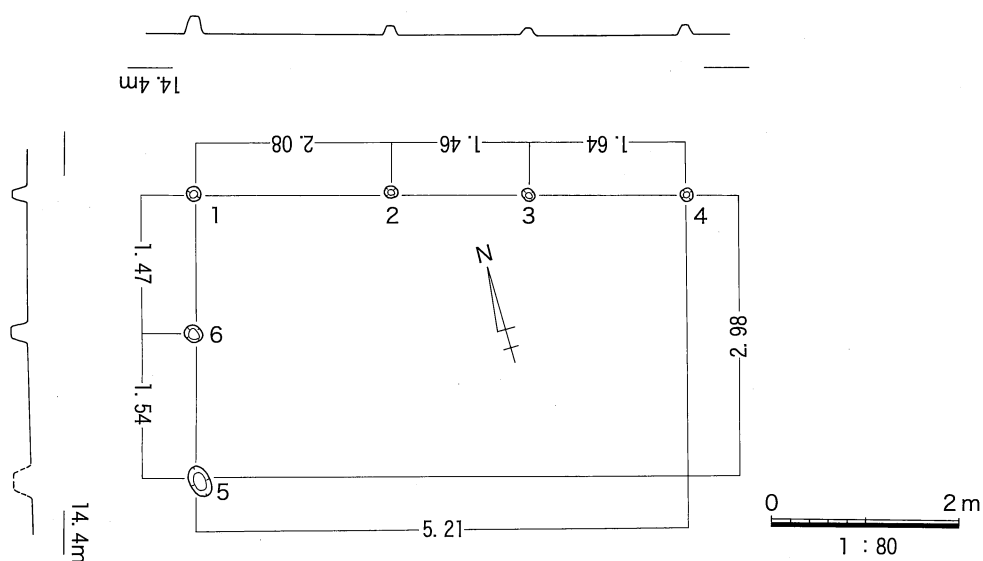
古代から中世にかけての遺構は、その多くが調査区東部に集中している。ここでも、遺構の種別ごとに記載する。

① 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、調査区の西側、弥生時代の土坑群に重なる地域と東側の溝群が交差する地域にほぼ二分される形で検出されている。

東群の掘立柱建物跡の配置は第105図～第107図のとおりである。SDg28から東側では、溝に規制される掘立柱建物跡が多く、屋敷地の一部に該当する可能性もある。

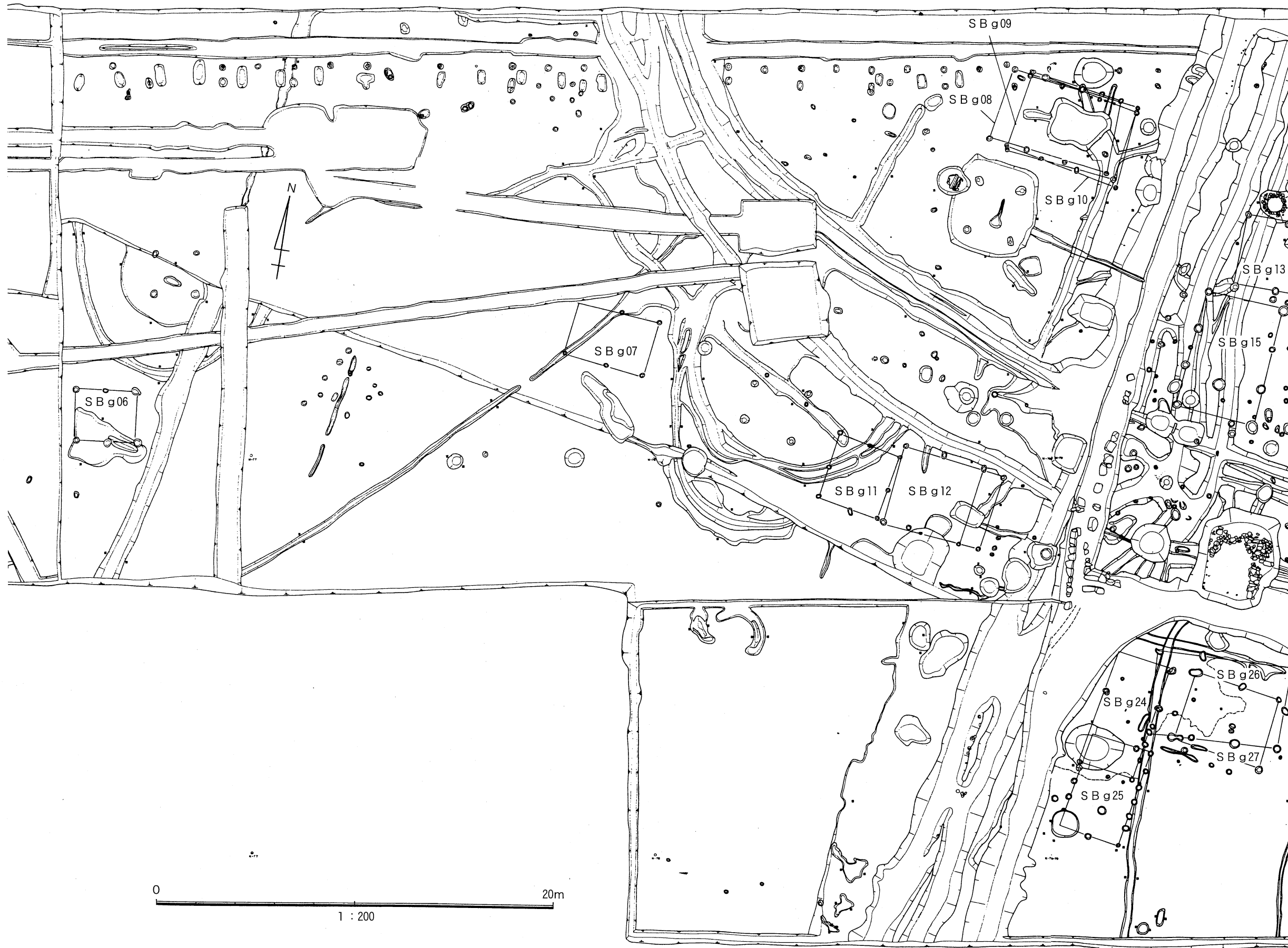
掘立柱建物跡は、柱穴が集中した場合、建物を構成するまともりを見出すのは困難である。柱穴の埋土及び方向を念頭において現場作業の過程で認定したまともりに基づいて記述する。



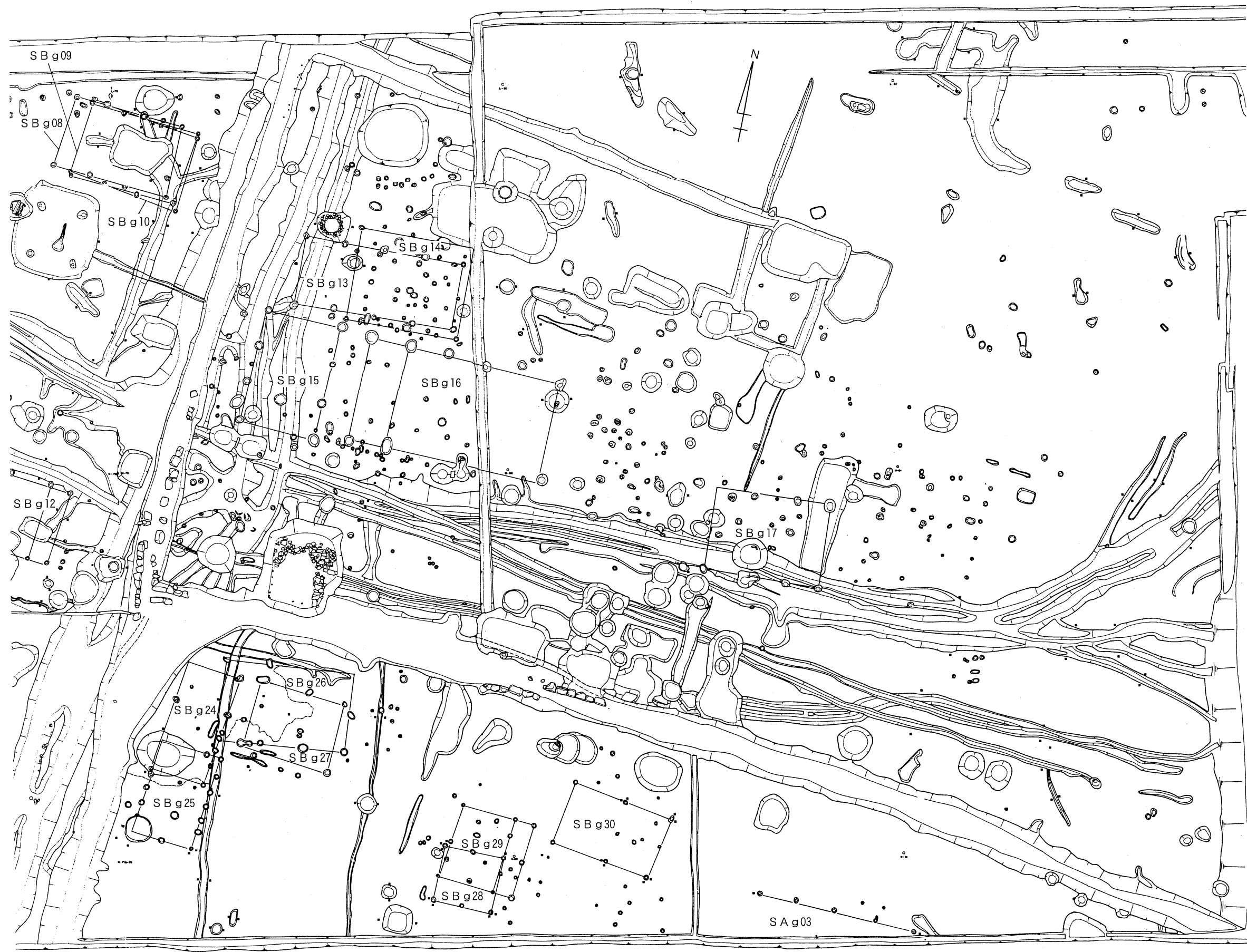
第108図 SBg01 平・断面図

SBg01 (第108図)

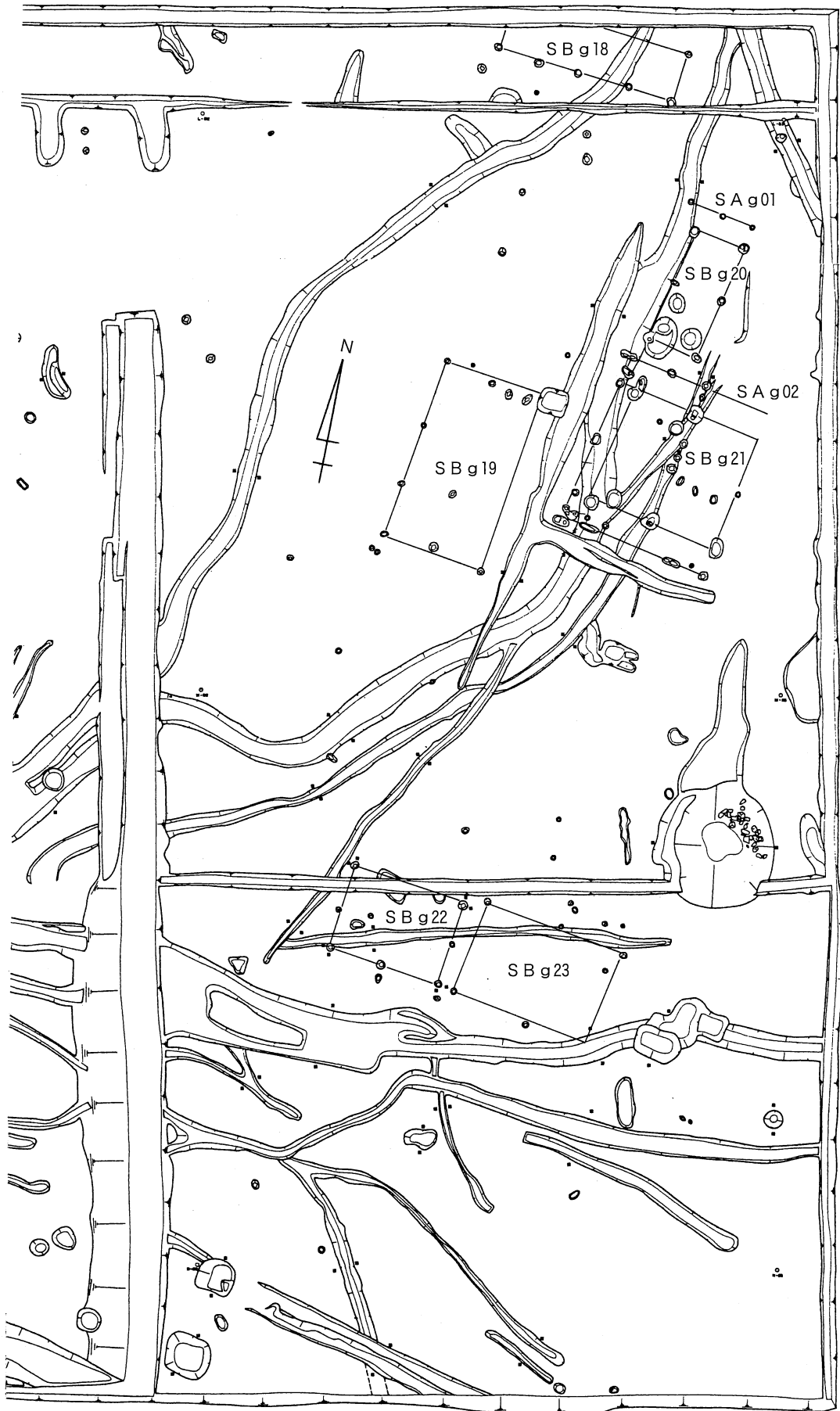
2間×3間の東西棟である。東辺・南辺の柱穴は確認できていない。柱穴は小さく浅い。出土遺物は無く時代は不明である。ただし、弥生時代の土坑を切っていることから、これ以降と考える。



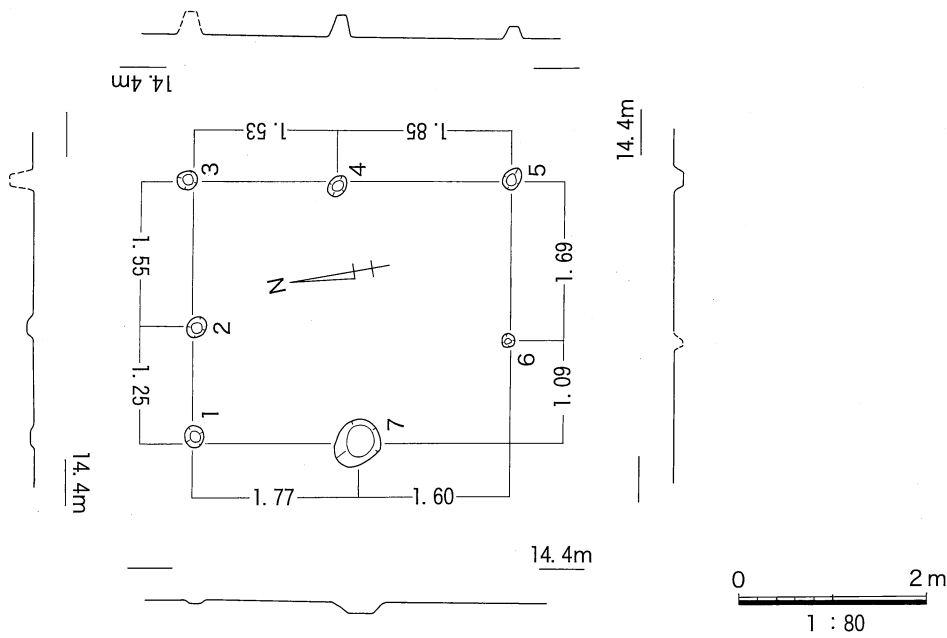
第105図 掘立柱建物跡配置図 (1)



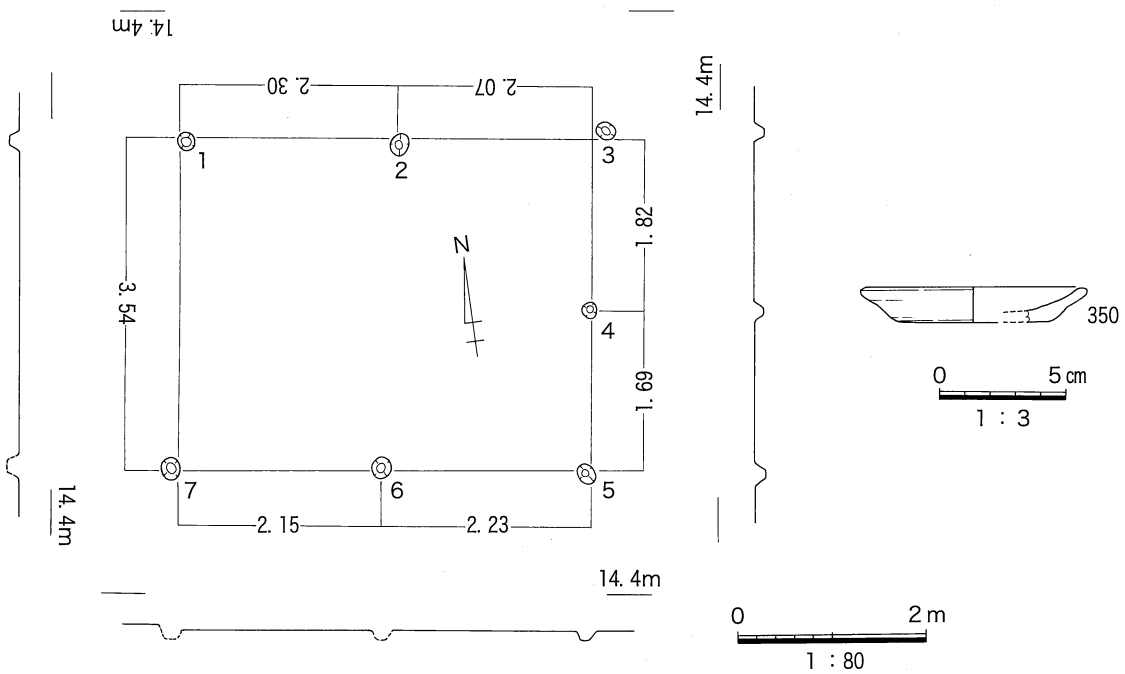
第106图 掘立柱建物跡配置图(2)



第107图 掘立柱建物跡配置图 (3)



第109図 SBg04 平・断面図



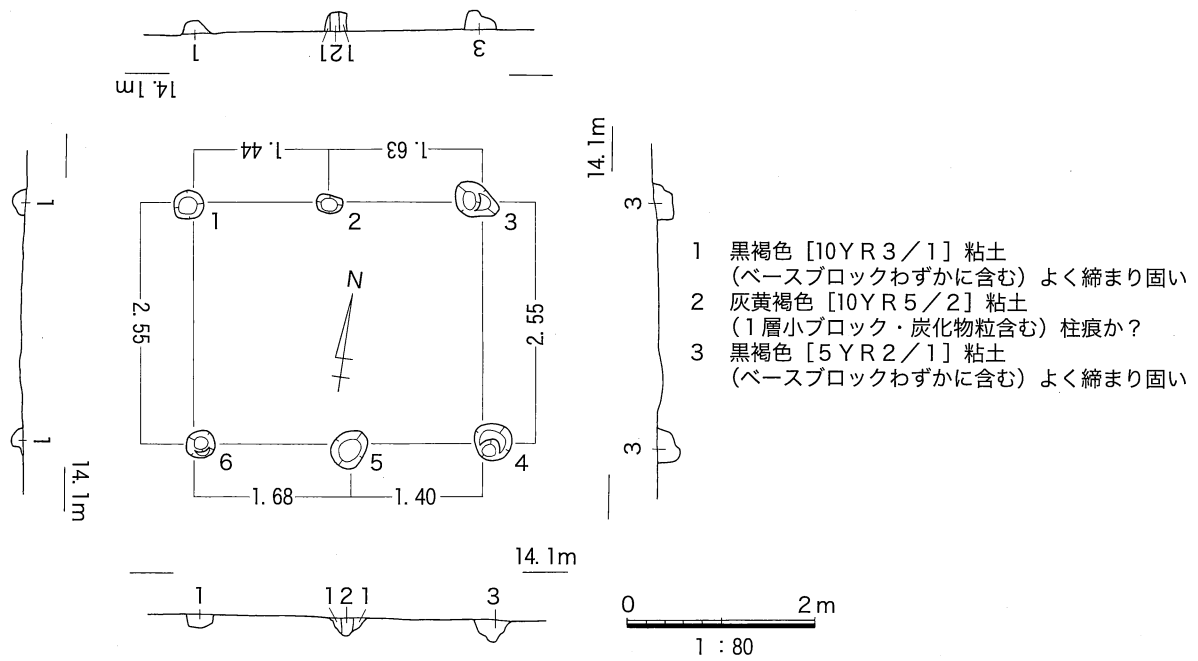
第110図 SBg05 平・断面図、出土遺物実測図

SBg04 (第109図)

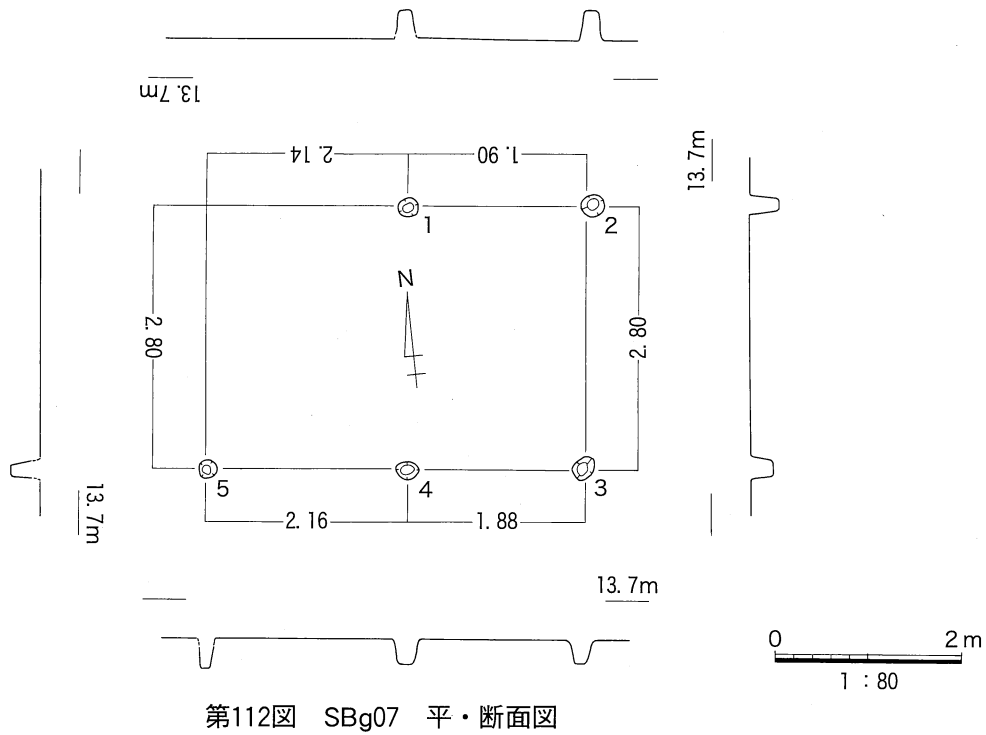
2間×2間の南北棟である。西南隅の柱穴は確認できなかった。出土遺物は無く時代は不明である。

SBg05 (第110図)

2間×2間の東西棟である。西辺中央の柱穴は確認できなかった。出土遺物は350の土師質小皿1点のみである。この小皿は、破片であること、1点のみの出土であることから、年代を求めるのは難しいが、あえて比定すれば佐藤竜馬「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2000 (以下、中世土器の編年には同書を用いる) のI-2~3期に該当し、11世紀末~12世紀前半と考えられる。



第111図 SBg06 平・断面図



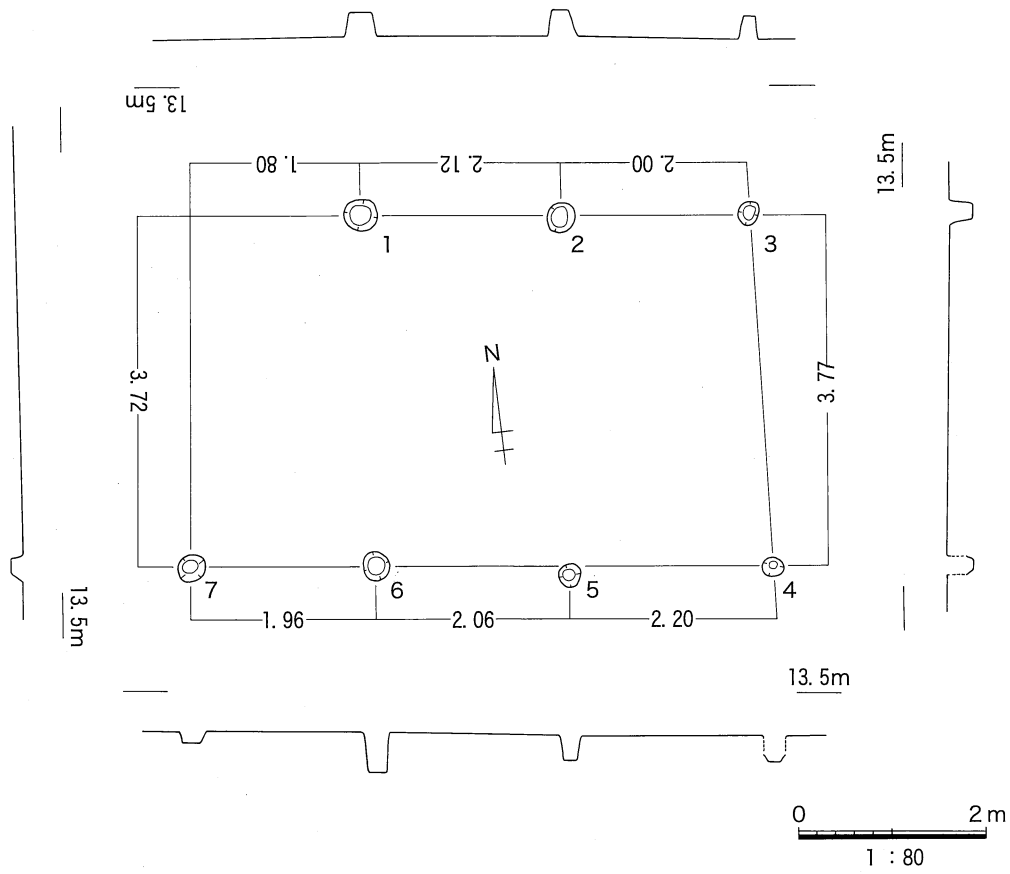
第112図 SBg07 平・断面図

SBg06 (第111図)

1間×2間の東西棟である。柱穴2・5については、断面に柱痕を示す土層が見られる。この断面形状からは、柱の抜き取りは考えにくく、地面に接するあたりで切ったのではないかと考えられる。

SBg07 (第112図)

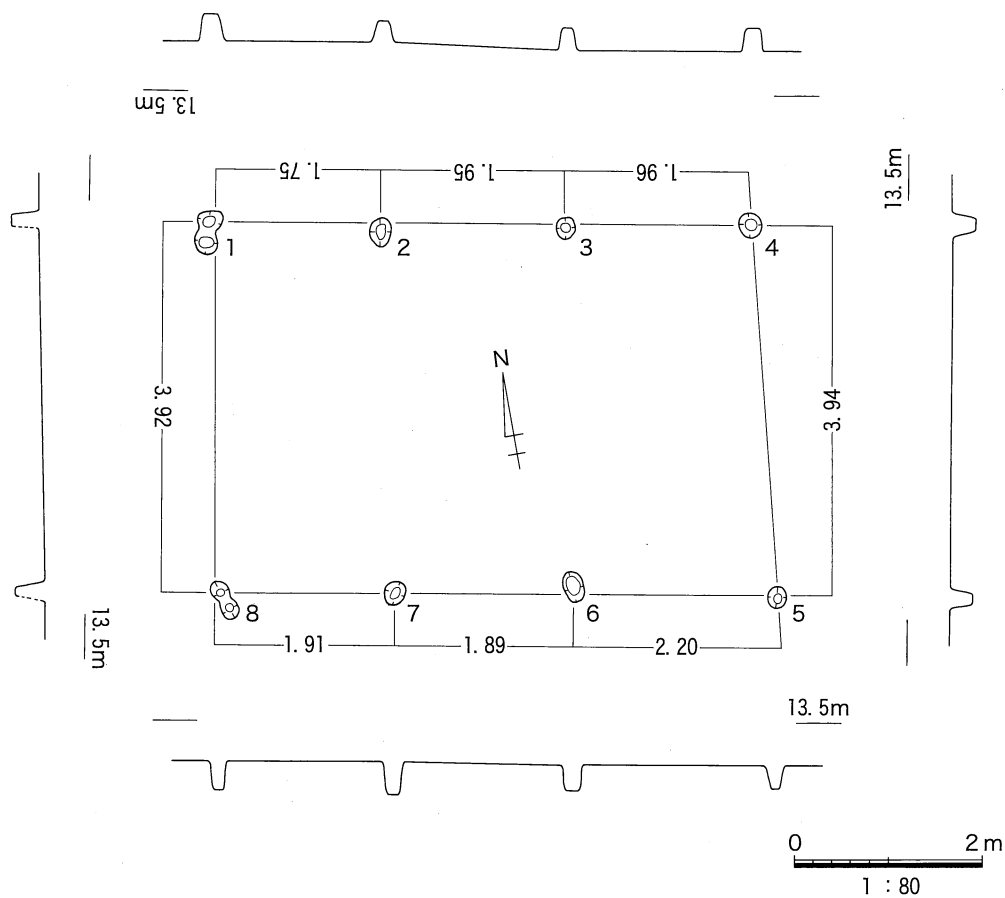
1間×2間の東西棟である。西北隅の柱穴は検出されていない。



第113図 SBg08 平・断面図

SBg08 (第113図)

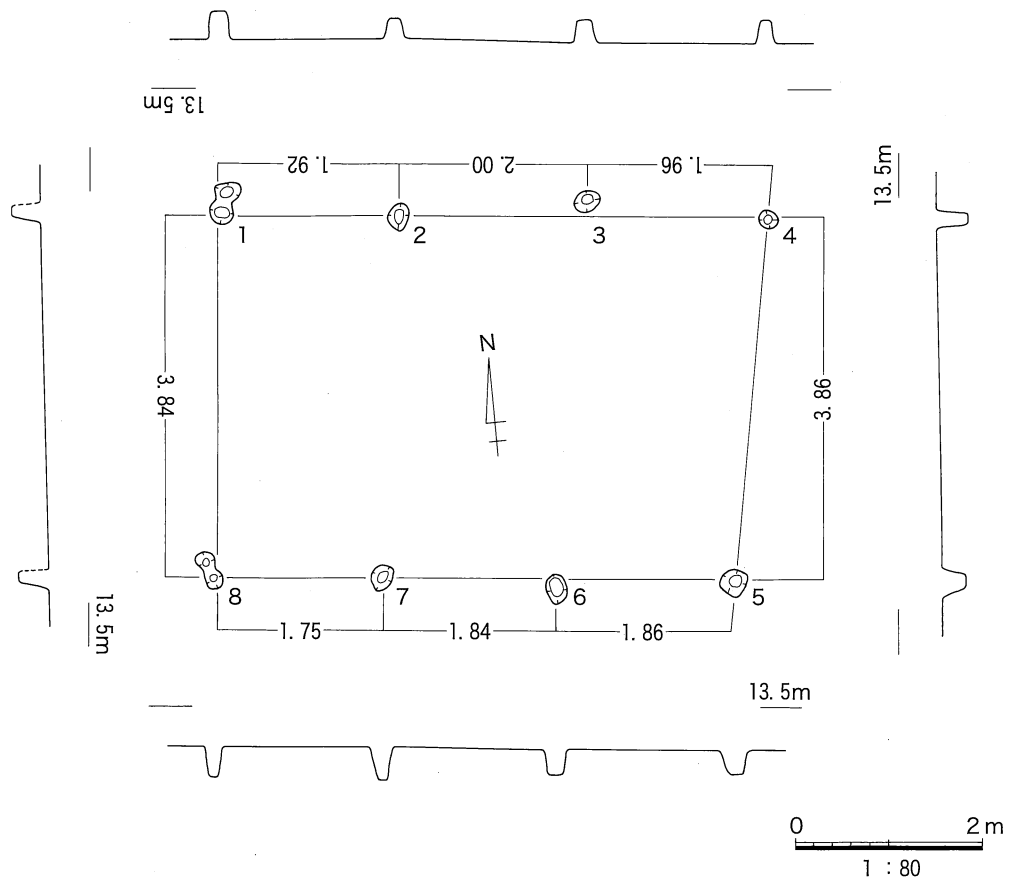
1間×3間の東西棟である。西北隅の柱穴は検出されていない。SBg09・SBg10と重複しているが、先後関係は不明である。



第114図 SBg09 平・断面図

SBg09 (第114図)

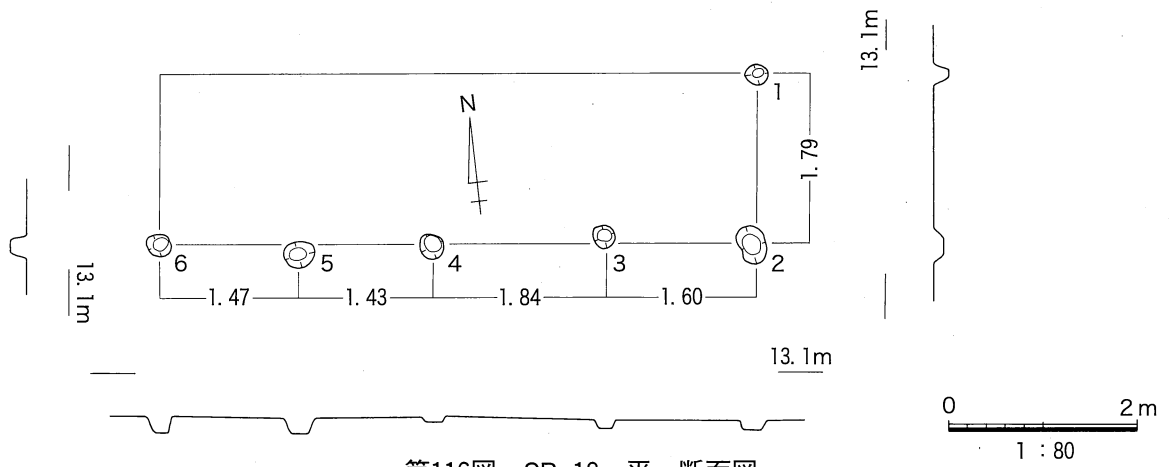
1間×3間の東西棟である。



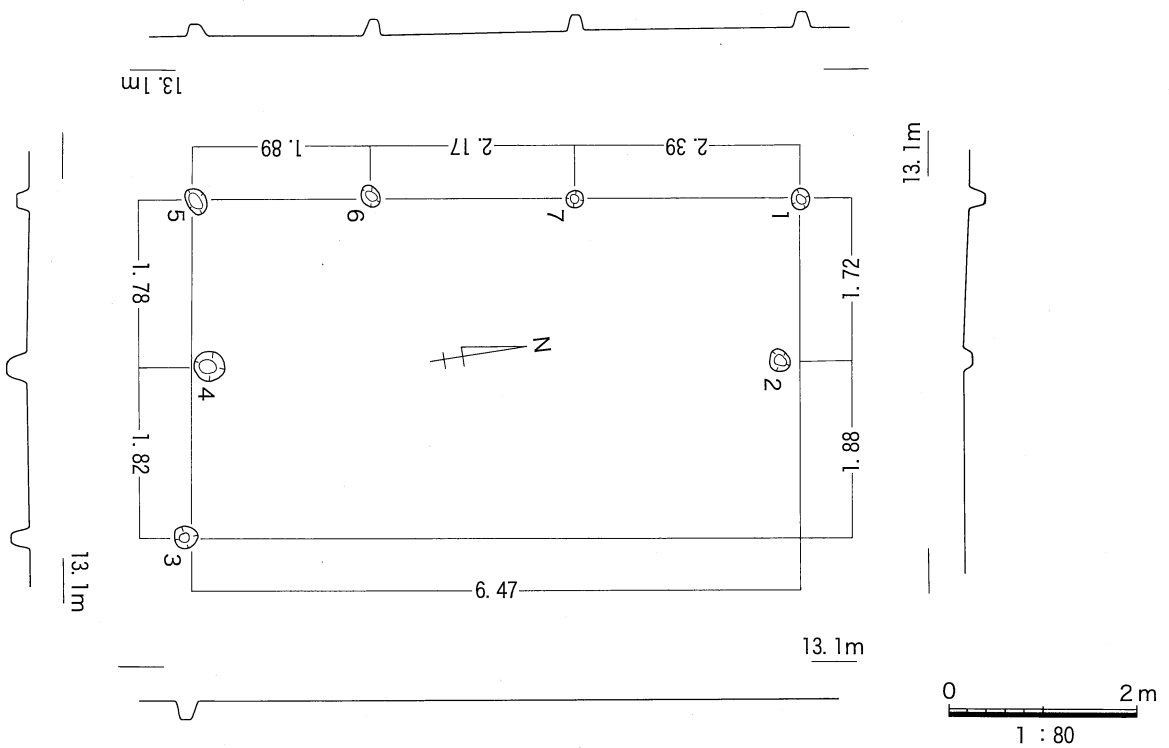
第115図 SBg10 平・断面図

SBg10 (第115図)

1間×3間の東西棟である。SBg09と重複しており、一部の柱が重なる。建て替えが考えられるが、柱穴の切りあいが確認できず、先後関係は不明である。



第116図 SBg18 平・断面図



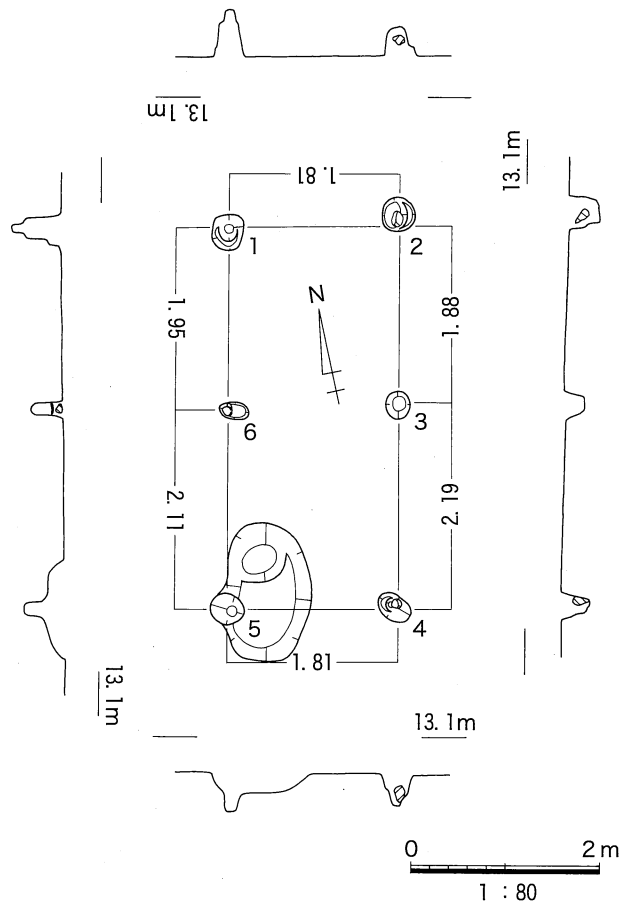
第117図 SBg19 平・断面図

SBg18 (第116図)

現状では、1間×4間の東西棟である。調査区外となる北側の柱穴が確認できていないため、1間以上の梁間になる可能性がある。

SBg19 (第117図)

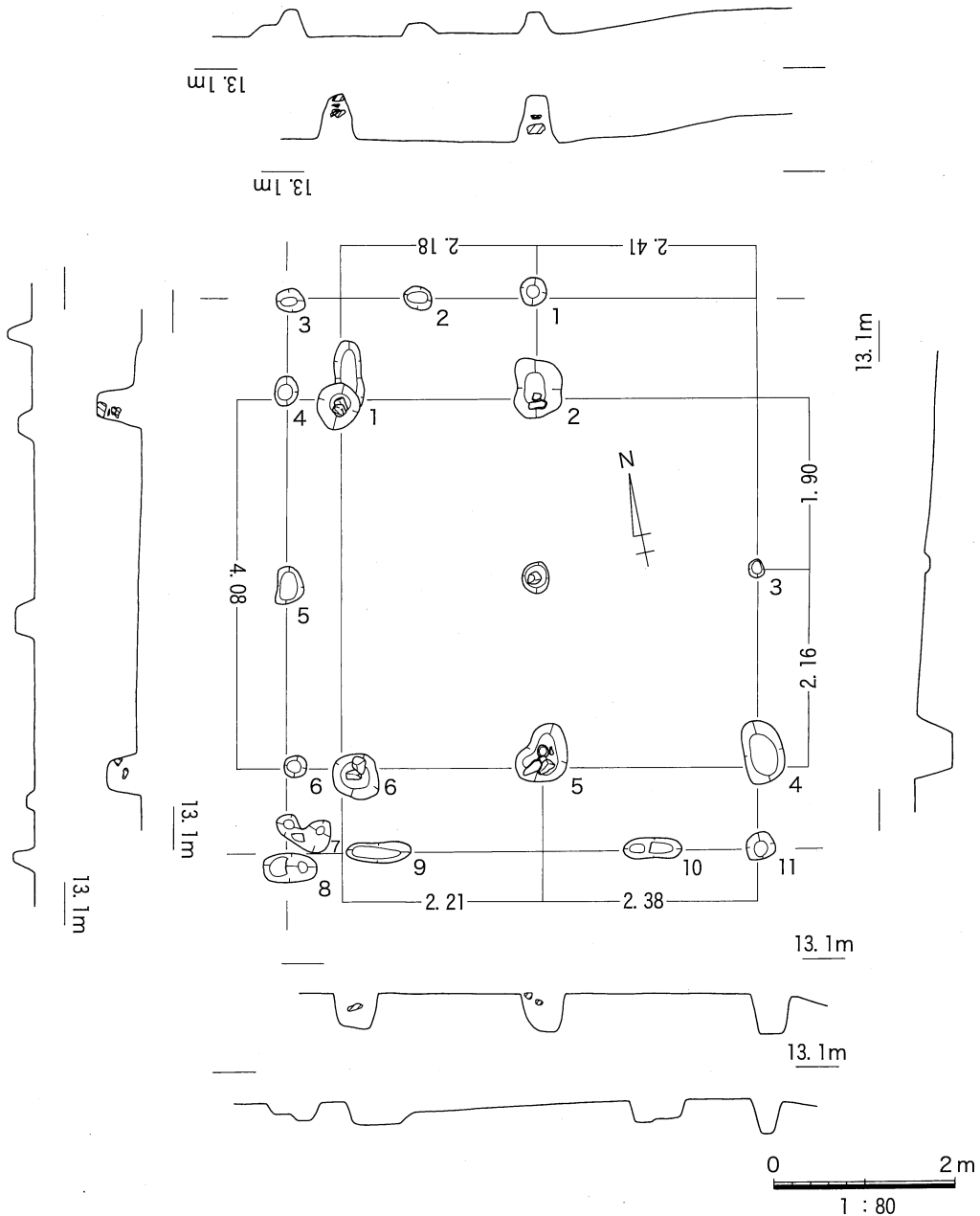
2間×3間の南北棟である。土坑との切りあいにより北東隅の柱穴が確認できていないこと、これ以外に、東辺の柱穴2穴が検出されていない。



第118図 SBg20 平・断面図

SBg20 (第118図)

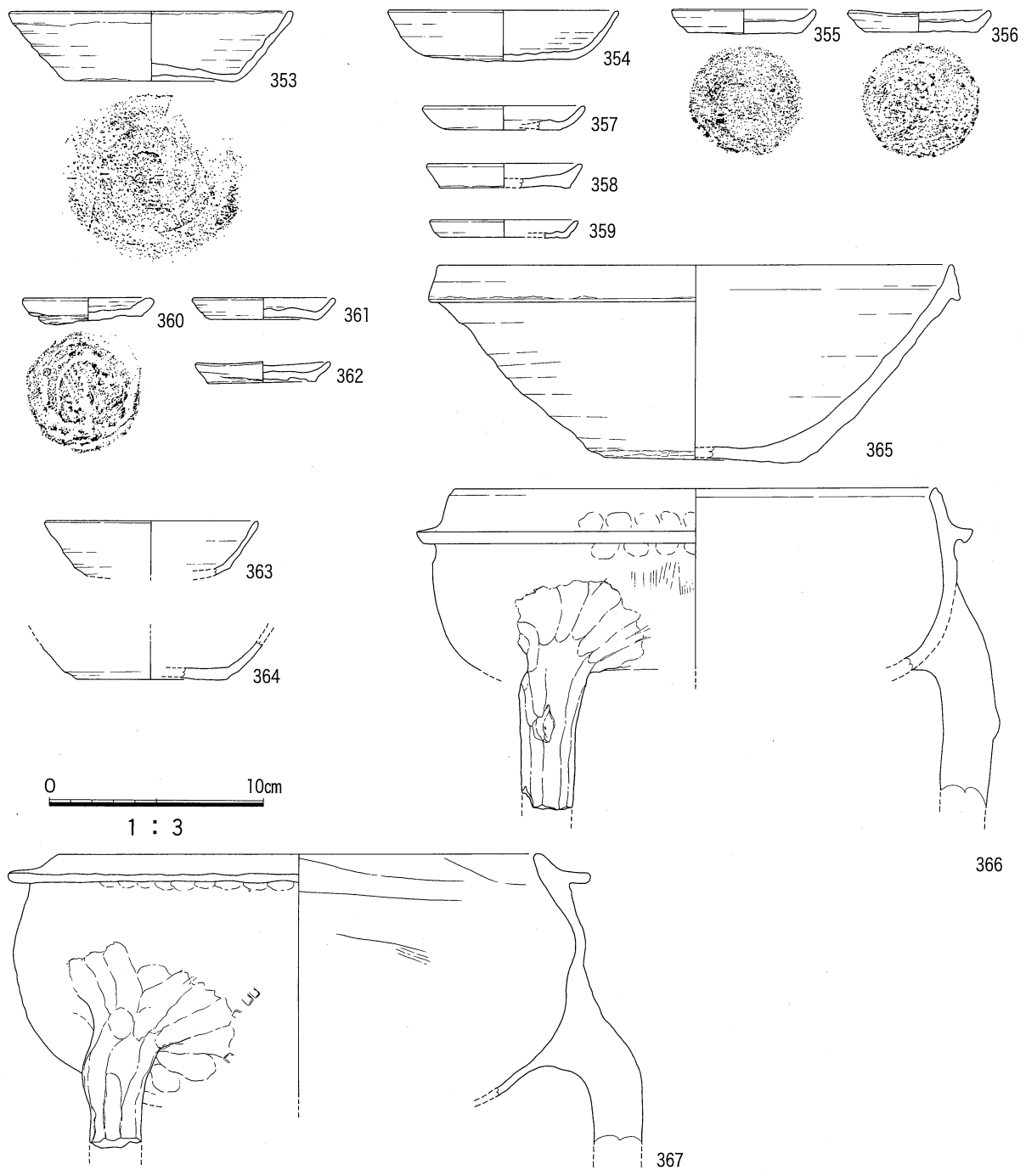
2間×2間の南北棟である。柱穴2・4・6には詰石もしくは基底石が認められる。



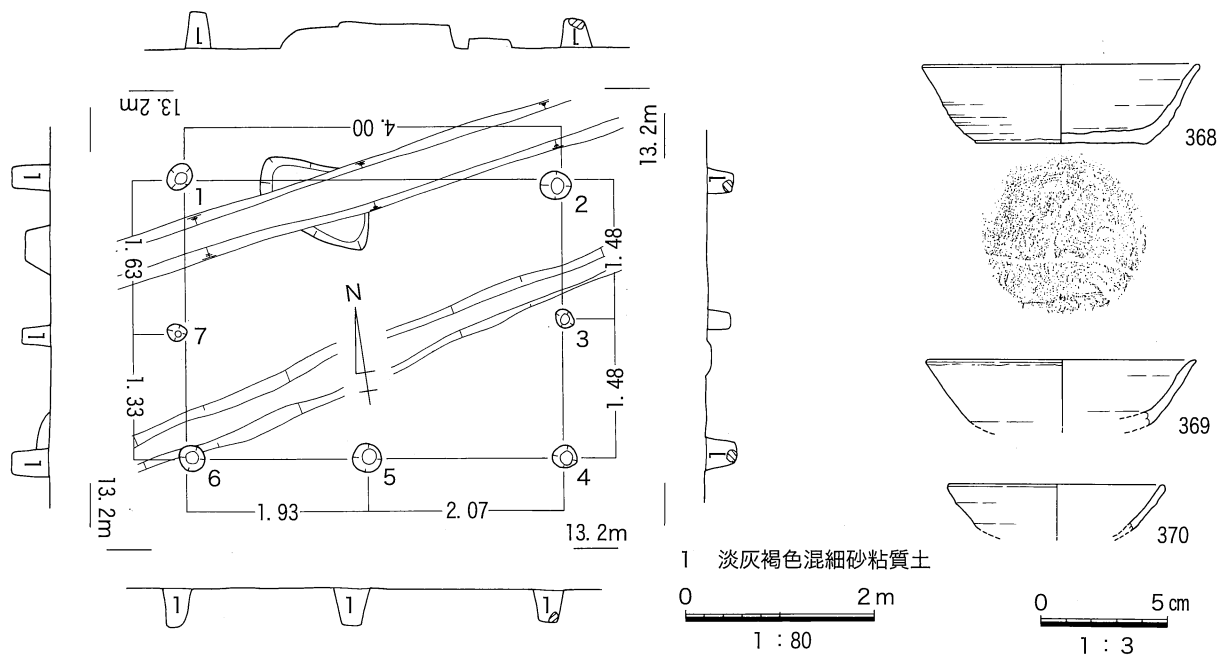
第119図 SBg21・SAg02 平・断面図

SBg21・SAg02 (第119・120図)

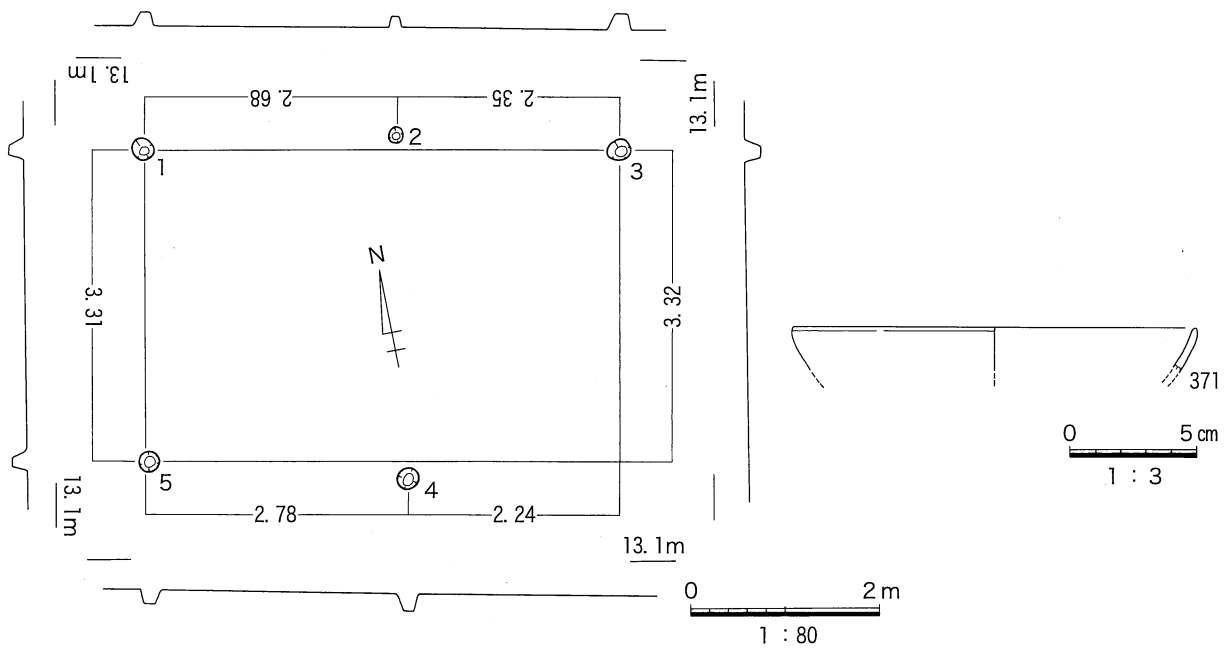
1間×2間の東西棟で、西辺・南辺に庇もしくは縁を持つ。又北側のSBg20との間にSAg02がある。位置的には、北辺の庇もしくは縁とも考えられるが、SBg21同様、北東部分で柱穴が確認できず、断定にはいたっていない。柱穴1・2・5・6の4穴は詰石もしくは基底石がみられ、しっかりした構造を持つ部分と考えられる。この部分を基準として考えれば、柱穴2・5の中間に位置する柱穴を取り込み、1間×2間の建物で、北側(SAg02)と西側に庇もしくは縁を持つ建物も想定可能である。南側の庇もしくは縁と考えている柱穴8・9・10・11は、SDg57に並行する柵列とも考えられる。第120図は、この掘立柱建物跡の柱穴内から出土した資料である。353~364は土師器杯及び小皿である。365は東播系こね鉢、366・367は三足羽釜である。これらの資料が一括性の高いものと想定した場合、365が口縁部形状などにやや後出する要素は見出されるものの、杯及び小皿の形状や底部に糸切りの痕跡が認められないことなどから、II-4期、13世紀後半を主体とする年代が与えられる。



第120图 SBg21 出土遺物実測図



第121図 SBg22 平・断面図、出土遺物実測図



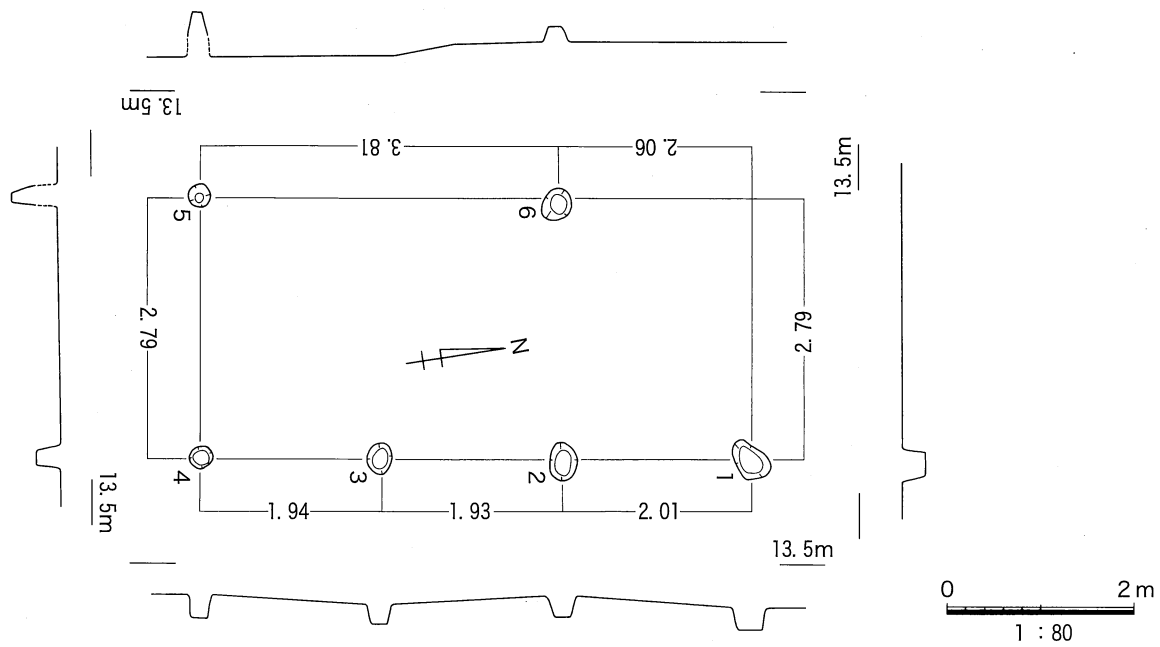
第122図 SBg23 平・断面図、出土遺物実測図

SBg22 (第121図)

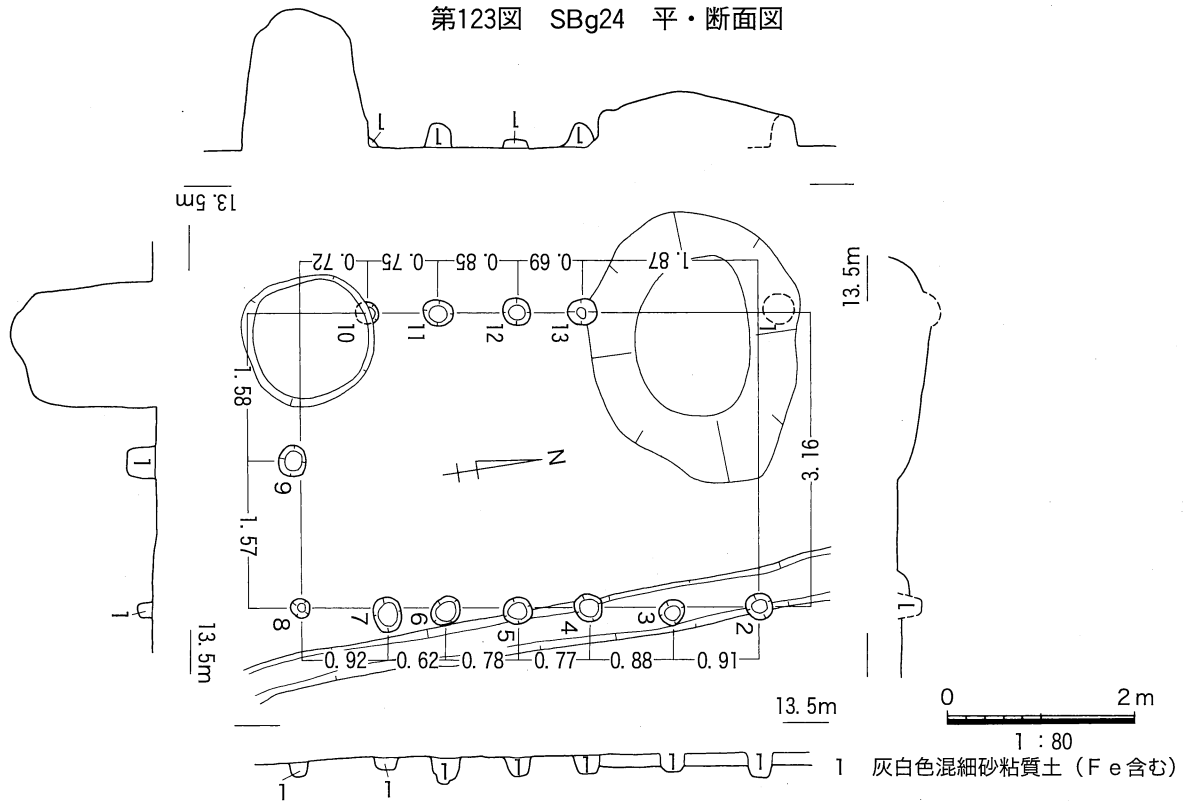
2間×2間の東西棟で、柱穴1・2間の柱穴が確認できなかった。柱穴2・4には詰石もしくは基底石が確認される。出土遺物は368～370で、形態からII-3・4期、13世紀中頃～後半の年代が与えられる。

SBg23 (第122図)

1間×2間の東西棟で、南東隅の柱穴が確認できなかった。出土遺物は土師質杯371のみで、形態からは、時期を明確にできないが、おおむね13世紀代と考えると問題ない資料である。



第123図 SBg24 平・断面図



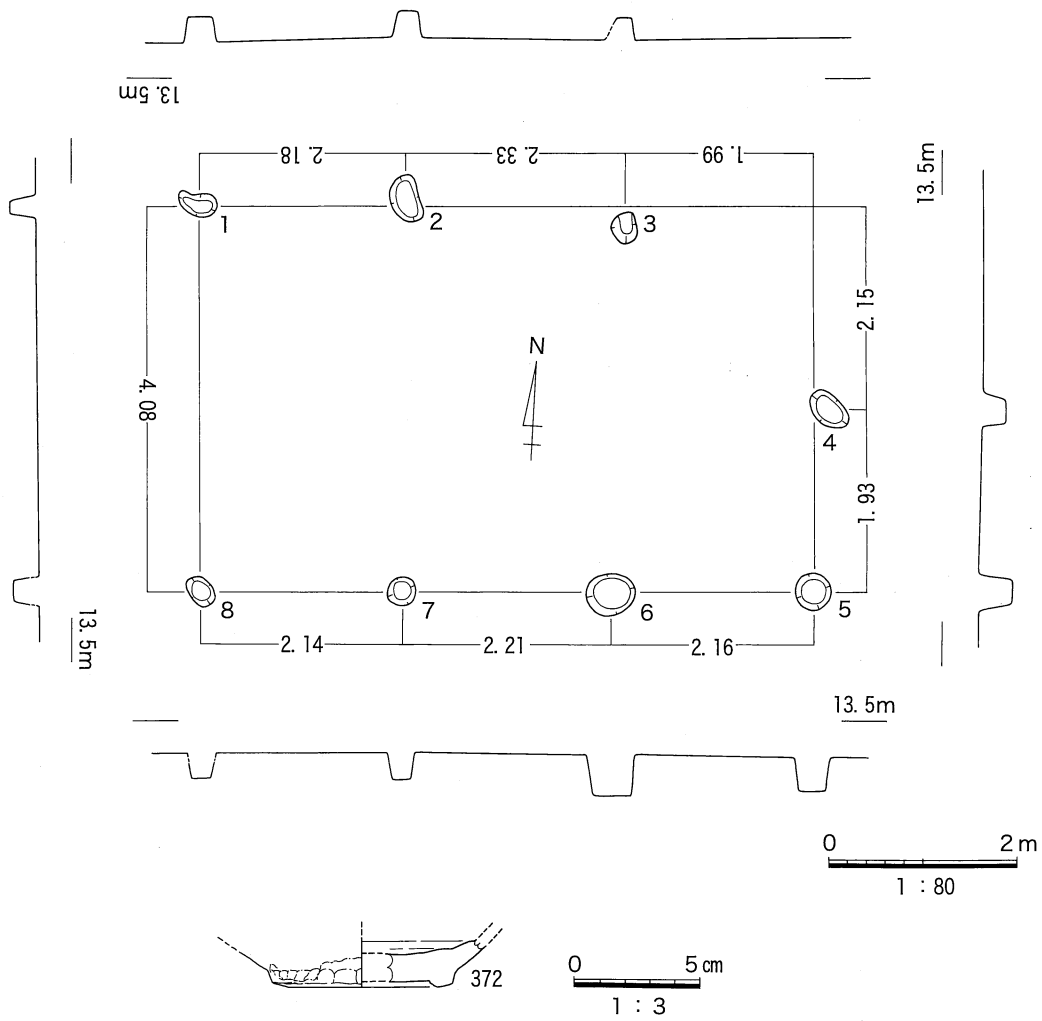
第124図 SBg25 平・断面図

SBg24 (第123図)

1間×3間の南北棟で、西辺の柱穴2穴がSDg29・SKg866との切りあいもあり検出されていない。南北棟では南に次に述べるSBg25と重複しており、東側で重複するSBg26・SBg27とも関連する建物である。

SBg25 (第124図)

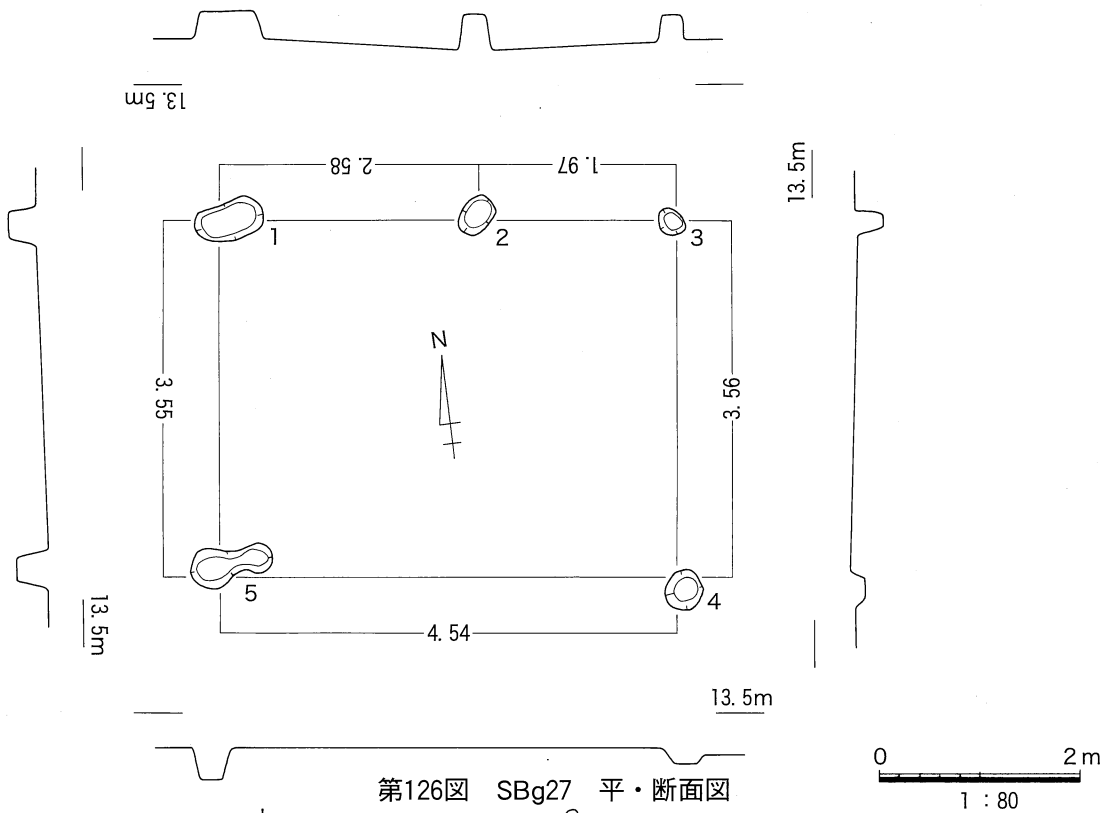
2間×6間の南北棟で、北西・南西に位置する柱穴が土坑と重複しており検出されていない。桁行を構成する柱穴の間隔は、これまで述べた掘立柱建物跡の柱穴の間隔のほぼ半分で、約半間程度である。



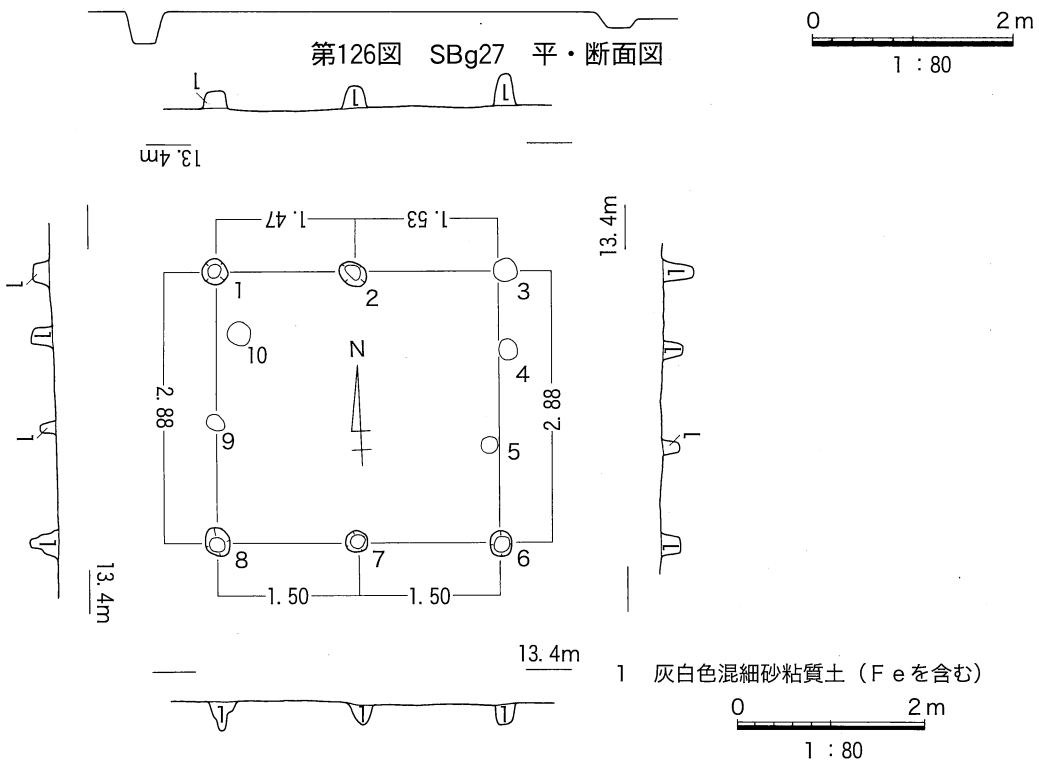
第125図 SBg26 平・断面図、出土遺物実測図

SBg26 (第125図)

2間×3間の東西棟で、北東隅及び西辺の中央柱穴の2穴が確認できていない。柱穴内から白磁碗底部372が出土しているが、詳細な時期を明確にできない。おおむね12～13世紀の範疇に入ると考えられる。



第126図 SBg27 平・断面図



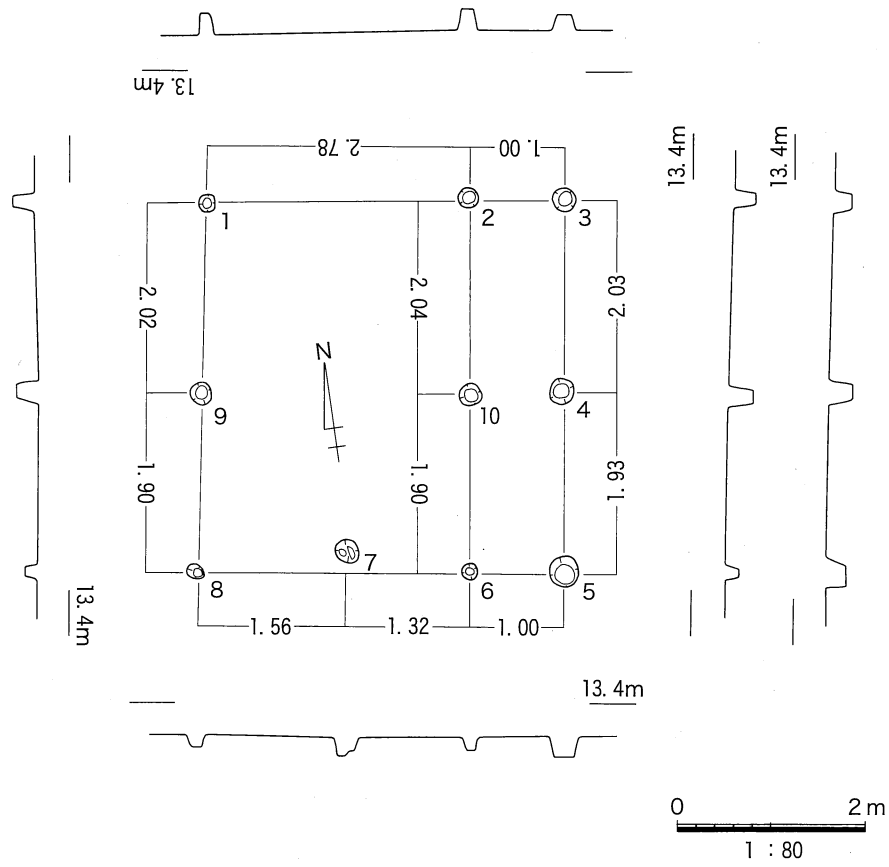
第127図 SBg28 平・断面図

SBg27 (第126図)

1間×2間の東西棟で、南辺中央に位置する柱穴が確認されていない。

SBg28 (第127図)

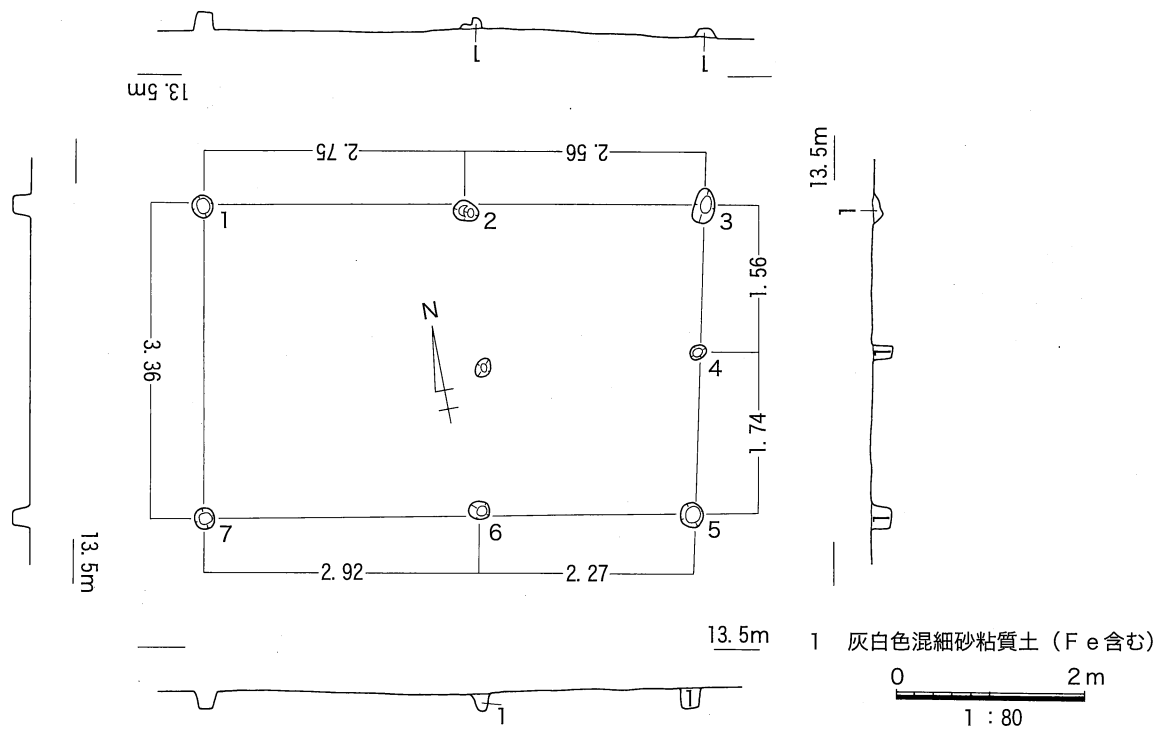
2間×3間の南北棟である。東西の柱穴列はややいびつであるが、対象的に北辺・南辺の柱穴は整然としている。



第128図 SBg29 平・断面図

S B g 2 9 (第128図)

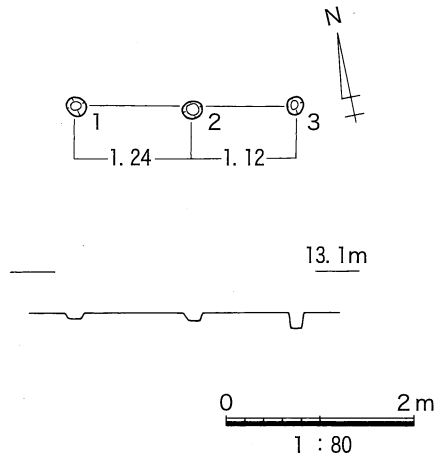
2間×2間の南北棟で、東辺に庇もしくは縁が見られる。北辺中央の柱穴は確認できていない。庇もしくは縁を構成する柱穴は本体の掘立柱建物跡の柱穴と同程度の規模を持つ。



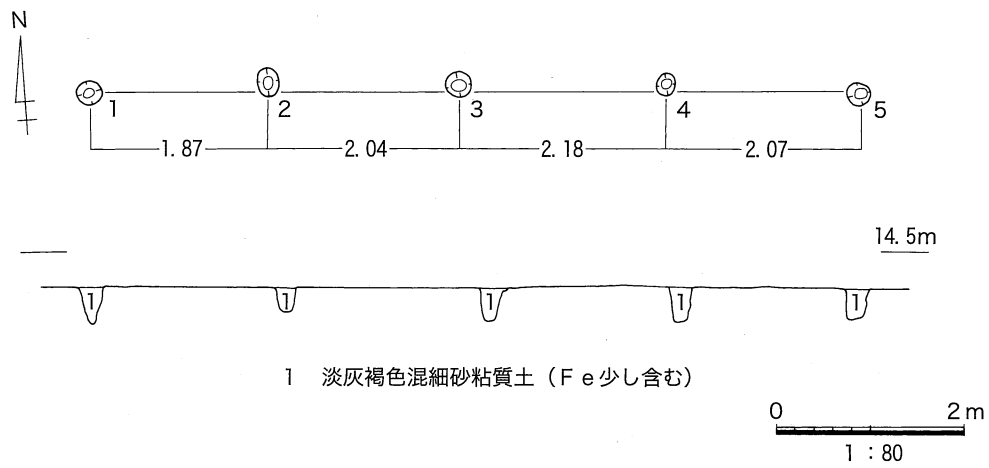
第129図 SBg30 平・断面図

SBg30 (第129図)

2間×2間の東西棟で、南辺中央に位置する柱穴は確認できていない。柱穴2・6の間に柱穴が見られ、この柱穴をこの建物に伴うものと考えれば総柱の建物になる。通常、総柱の建物は、加重を支えるため総柱にしていると考えられ、倉庫などの施設を意味するが、この建物の場合、柱間が広く、柱穴も他の掘立柱建物跡と比べても同程度のものであることから、単に座を上げる程度の床構造であったとも考えられる。



第130図 SAg01 平・断面図



1 淡灰褐色混細砂粘質土 (Fe少し含む)

第131図 SAg03 平・断面図

② 柵列跡

S A g 0 1 (第130図)

SBg20の北辺に並行して検出されており、3穴からなる。SBg20の庇もしくは縁の可能性もある。

S A g 0 3 (第131図)

単独で検出されているが、南側が調査区外であることから、梁間の広い掘立柱建物跡である可能性も残されている。5穴からなり、東西方向に伸びる。

③ 溝状遺構

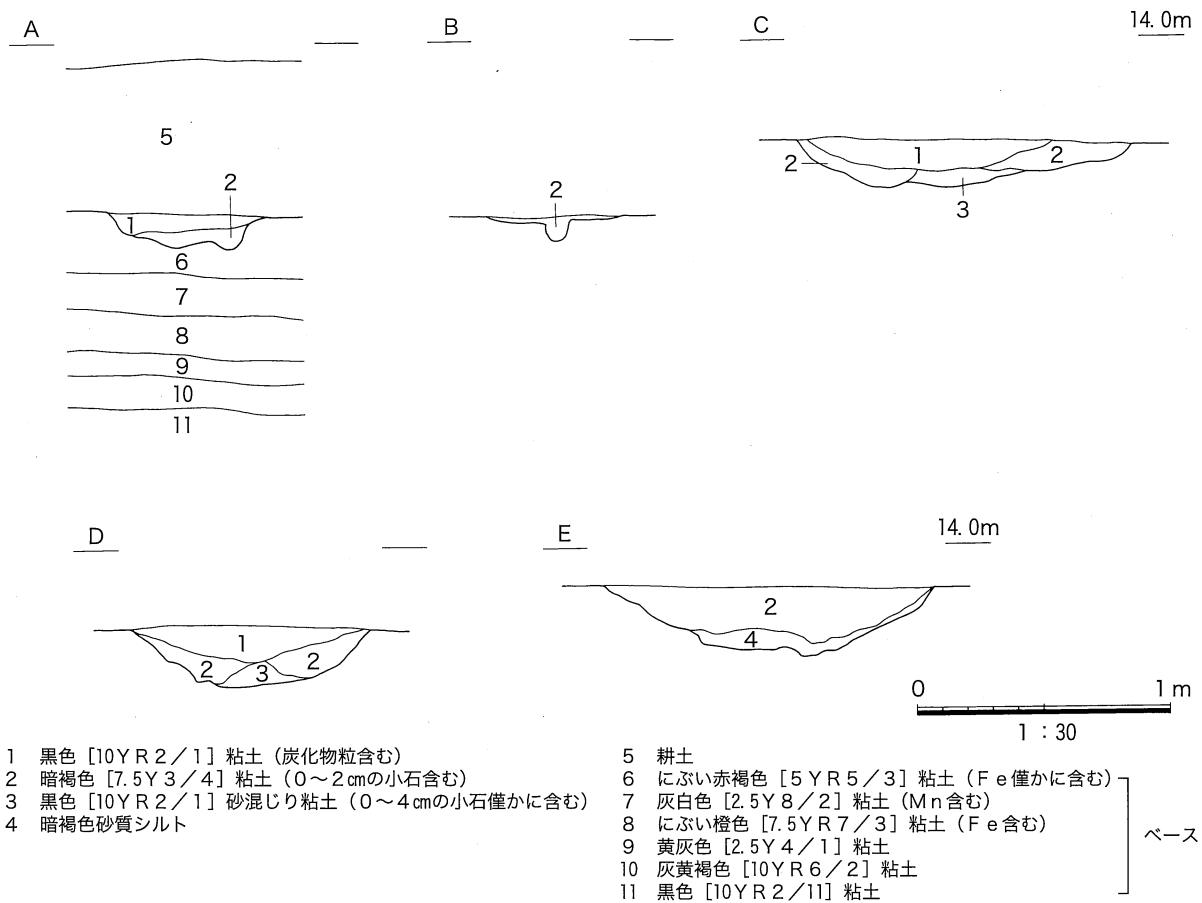
ここでは、主要な溝の土層と出土遺物について記す。

SDg04 (第135・136・154図)

SDg04は、調査区西側の基幹水路と考えられ、ほぼ南北に伸びるが、北側では近世のSDg05と重複し姿を消す。土層図は第154図に掲載している。

出土遺物は比較的まとまっており、373~417を図化した。

373~382は土師質椀である。体部は深みを持ち、高台もしっかりしている。373は吉備系土師質椀である。383は杯で底部を欠損している。384~395は小皿で、確認できる資料のすべてが底部ヘラ切りである。396は壺の口縁部の破片で、あまり見ない器種である。397~409は黒色土器B類である。410~412はこね鉢である。413~416は、十瓶山窯跡群で生産されたと考えられる椀で、内外面の磨きが顕著である。417は須恵器甕で、外面にタタキ目が顕著に見られる。全体の資料からは、I-2~3期に比定され11世紀末~12世紀初頭の年代が与えられる。



第132図 SDg09 土層断面図

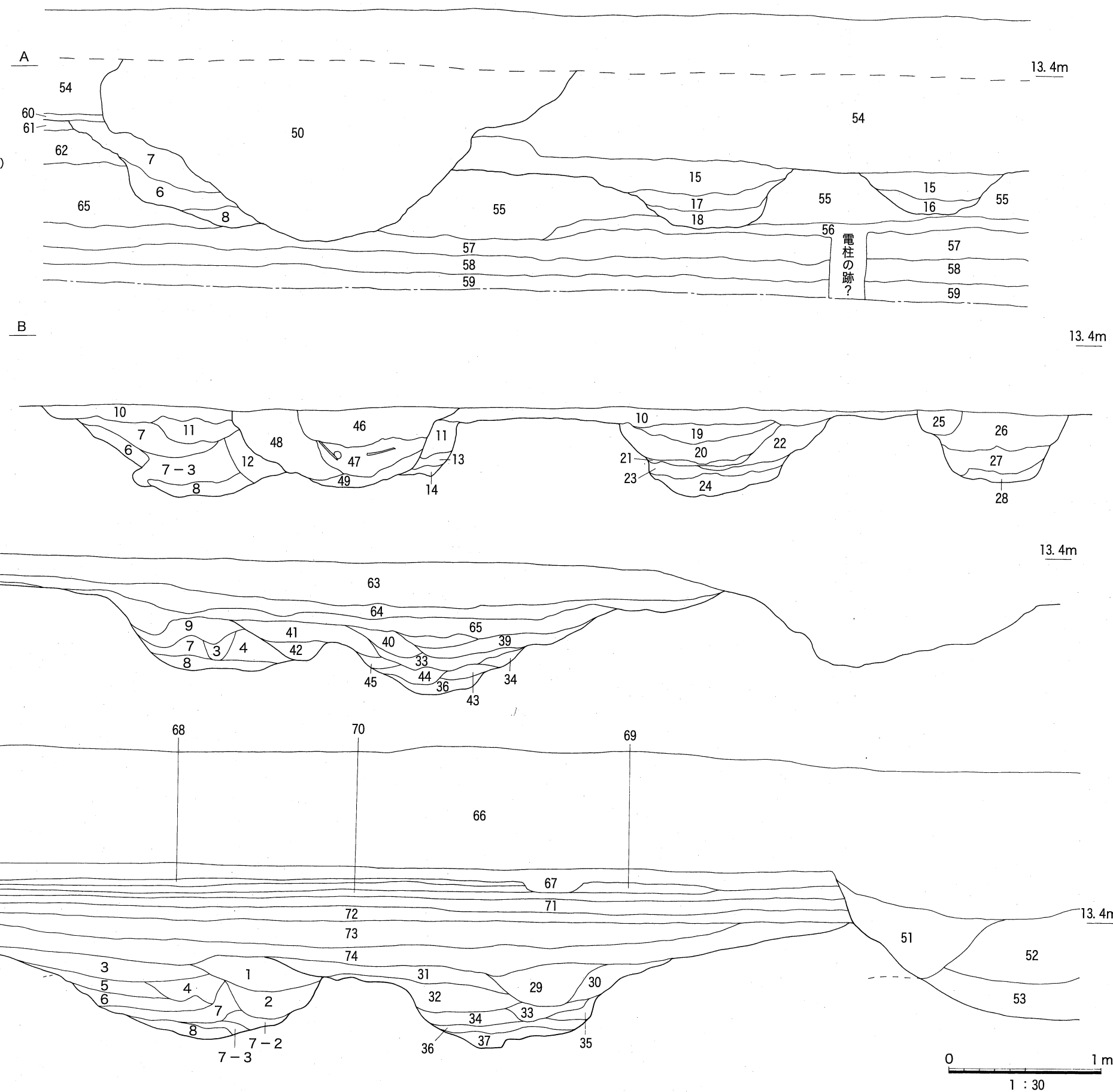
SDg09 (第132・136・137図)

SDg09は、調査区中央部をほぼ南北に伸びる溝で、弥生時代のSHg01やSDg73を切っており、これらより後出することは明らかである。

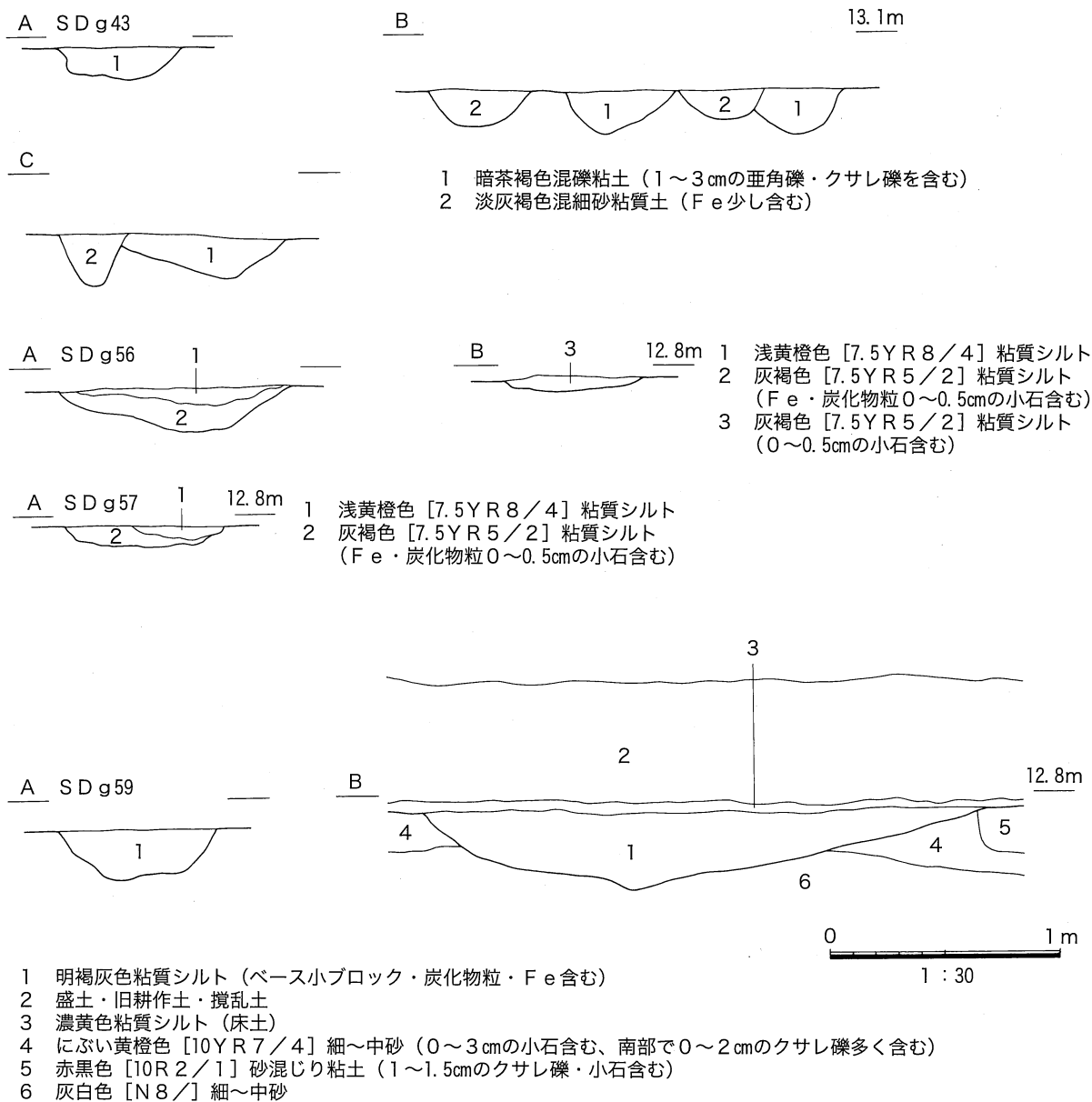
流路は、断面形状が皿状を呈するが、断面C・Dを見ると、完全ではないまでもいったん埋没し、その後再び

- 1 灰褐色混細砂粘質土 (Fe・クサレ礫少し含む)
- 2 灰褐色混細砂粘質土 (Fe多く・クサレ礫少し含む、1層より黄色味を帯びる)
- 3 灰褐色混細砂粘質土 (Mn・クサレ礫少し含む)
- 4 灰褐色混細砂粘質土 (Mn少し、クサレ礫やや多い3層より細砂質)
- 5 暗灰褐色混細砂粘質土 (Mn・クサレ礫少し含む)
- 6 灰褐色粘土
- 7 淡灰色細砂 (シルト質・クサレ礫少し含む)
- 7-2 灰白色細砂
- 7-3 灰色中～細砂 (クサレ礫多く含む)
- 8 茶灰色中～粗砂
- 9 灰褐色粘土 (粘性が強い)
- 10 褐灰 [7.5YR4/6] 粘土 (Fe・Mn含む)
- 11 暗褐色 [7.5YR3/4] 粘土 (Mn含む)
- 12 にぶい褐色 [7.5YR5/4] 粘土 (Fe・Mn含む)
- 13 明青灰色 [5B7/1] 粘土 (Fe含む)
- 14 灰白色 [5Y8/2] 細砂
- 15 褐灰色 [7.5YR5/1] 粘土
- 16 灰白色 [2.5YR7/1] 中砂
- 17 褐灰色 [10YR6/1] 砂混じり粘土
- 18 灰白色 [10YR8/1] 中砂
- 19 にぶい黄褐色 [10YR7/3] 粘土 (Fe含む)
- 20 褐灰色 [10YR6/1] 粘土 (Mn含む)
- 21 灰白色 [10YR7/1] 中～粗砂 (粘土混じり)
- 22 明黄褐色 [10YR6/6] (Fe含む)
- 23 灰色 [7.5Y4/1] 粘土 (18層を小ブロック状に含む)
- 24 灰白色 [2.5YR8/1] 細砂混じり粘土 (0～2cmの小石僅かに混じる)
- 25 褐灰色 [7.5YR6/1] (地山ベース粘土小ブロック顕著に含む)
- 26 暗褐色 [10YR3/4] 粘土 (Fe・Mn・炭化物粒含む)
- 27 灰色 [7.5Y3/1] 粘土 (Fe・炭化物細砂を介する、0～3cmの小石僅かに含む)
- 28 灰白色 [7.5Y8/1] 細砂 (25層のラミナー)
- 29 暗灰褐色粘土 (Fe少し含む)
- 30 暗灰褐色混細砂粘質土 (Fe少し含む)
- 31 灰褐色混細砂粘質土 (Fe少し含む)
- 32 灰褐色混細砂粘質土 (Fe多く含む)
- 33 灰白色中～細砂
- 34 淡灰色細砂 (シルト質)
- 35 灰褐色混細砂粘土 (黄色粘土をブロック状に含む)
- 36 灰色細砂

- 37 茶灰色中～粗砂 (3cm程度の亜角礫を含む)
- 38 灰色中砂
- 39 灰色中～細砂 (灰白色細砂をラミナー状に含む)
- 40 灰褐色粘土
- 41 淡灰茶褐色混細砂粘質土 (Fe多く含む)
- 42 灰褐色混細砂粘質土 (Fe多く含む)
- 43 灰色中～粗砂 (Feのため黄褐色を呈する部分のある)
- 44 灰白色中砂～粗砂
- 45 淡灰褐色中～細砂
- 46 オリーブ灰色 [5GY6/1] 砂混じり粘土
- 47 8層と淡黄色 [2.5Y8/4] 細～中砂ラミナー
- 48 橙色 [7.5YR7/6] シルト (下位はグライ化して青灰色を呈する)
- 49 灰色 [7.5Y5/1] 砂混じり粘土 (強粘質)
- 50 昭和19年溝
- 51 灰色混濁粘質土 (5cm程度の亜角礫少し含む)
- 52 濁青灰色細砂
- 53 濁青灰色 (混中砂) 細砂 (灰色中砂をラミナー状に含む)
- 54 耕土
- 55 黄色 [5Y8/6] 粘土 (上面は54層の影響による濁り有)
- 56 淡黄色 [5Y8/4] 粘土 (Mn、55層に近似)
- 57 暗赤褐色 [5YR3/2] 粘土 (Mn沈着層)
- 58 褐色 [7.5YR4/6] 粘土 (Fe・Mn僅かを含む)
- 59 黄褐色 [7.5YR8/8] 粘土
- 60 明褐色 [7.5YR5/6] 粘土 (Mn僅かを含む)
- 61 黒褐色 [7.5YR3/1] 粘土 (Mn僅かを含む)
- 62 にぶい赤褐色 [5YR5/3] 粘土 (Fe僅かを含む)
- 63 淡灰褐色混細砂粘質土 (Fe多く含む)
- 64 淡灰褐色混細砂粘質土 (Fe少し含む・1より粘性あり)
- 65 淡灰褐色混細砂粘質土 (Fe多く含む・1より砂質)
- 66 空港造成の際の盛土 (コンクリート塊などを含む)
- 67 暗灰色粘質土 (旧耕作土)
- 68 赤褐色粘質土 (旧床土)
- 69 黄褐色粘質土 (Fe多く含む)
- 70 淡黄褐色粘質土 (Fe多く含む)
- 71 黄褐色粘質土 (Fe多く、Mn少し含む)
- 72 黄灰色粘質土 (Fe・Mn多く含む)
- 73 暗灰褐色混細砂粘質土 (粗性が強く・上面にMnが多く沈着する)
- 74 灰褐色混細砂粘質土 (Fe多く含む・1より砂質)



第133図 SDg28・29・30・31・75 土層断面図



第134図 SDg43・56・57・59 土層断面図

流路として機能した後、完全な埋没が行われている。堆積土が黒色粘質土であることから、自然埋没が想定される。

出土遺物は、第136図418、第137図454・455の3点のみ図化した。418は、須恵器平瓶の口縁部片である。454・455は、サヌカイト製のスクレイパー・楔形石器である。後者の石器は、弥生時代の溝などを切っていることから混入と考えられ、僅か1点ではあるが418が7世紀後半頃の年代が与えられること、埋土が黒色粘質土であり他の中世溝状遺構の埋土とは異なることから古墳時代末~古代の溝と考えて差し支えない。

SDg 28・29・30・31・75 (第133・136・137図)

この5本の溝は、調査区東側をほぼ並行して南北に伸びる溝群で、この地域の基幹水路として中世~近世に機能していたものである。

断面の切り合い関係からも分かるように、中世段階では北側ではSDg28・30・31の三本、南側ではSDg30・31が合流して形成されたと考えられるSDg75の2本が認められる。これが、近世段階ではこれらの溝群が埋没した後にSDg29が流れ、長期間にわたって基幹水路の役割を果たしていたと考えられる。

SDg30・31は、比較的順調な堆積で埋没するが、SDg28・75は、埋没状況が複雑で、埋まっては新たな流路が形成されるといった状況で埋没が進んでいったと考えられる。近世に属するSDg29も同様な傾向が認められる。

SDg28からは、422・423の黒色土器、土師質碗底部の2点が出土している。422の内湾する体部形態並びに423の突出気味の底部からI-1期、11世紀前半頃と推定される。また、SDg30からは、419～421・424～437の土器が出土しており、420の形態、432の口縁部の開き具合、435の口縁端部の形態からI-1～2期、11世紀前半を主体とし、11世紀末頃最終埋没したものと考えられる。SDg31からは、438・439・456の3点が出土している。438はやや突出気味の底部から上方に内湾気味に立ち上がる口縁をもつが、あまり例を見ない器種である。439は口縁端部が外反する形態である。456は楔形石器である。資料数が少ないが、10世紀前半～11世紀末までの年代が与えられる。SDg75からは、451・452の2点を図化した。451の形態と452がヘラ切りの底部を持つ杯であることから、II-4期、13世紀後半頃に位置づけられる可能性がある。

SDg43・56・57・59 (第134・137図)

SDg43は、調査区の東部を北西から南東方向に伸びる溝で、比較的短期間で埋没する。断面は皿状を呈し、流路としての機能はあまり果たしていないと考えられる。

SDg56・57・59は、調査区北東隅で検出した。SDg56・57は直角に交わる溝で56はほぼ南北に伸びる。SDg59は、調査区隅をかすめるように検出されている。

SDg43から黒色土器440が出土しており、口縁端部の形状は不明であるが内外面の丁寧なミガキ及び高台からI-3期、12世紀初頭頃に位置づけられよう。SDg56からは、441の土師質杯の底部が出土しており、ヘラ切りの痕跡を明瞭に残すため、II-4期、13世紀後半頃と考えられるが、1点のみの出土であり年代決定には至っていない。SDg57からは、442～444の土師質小皿3点が出土した。底部が摩滅のため不明瞭であるが、糸切りの可能性が高く、これを前提に考えればII-2期、13世紀前半頃以降の資料となる。SDg59からは、445～447の3点が出土した。445は土師質杯、446は黒色土器、447は須恵質鉢の底部であり、それぞれ細片であるが12世紀中葉～後半頃カ。

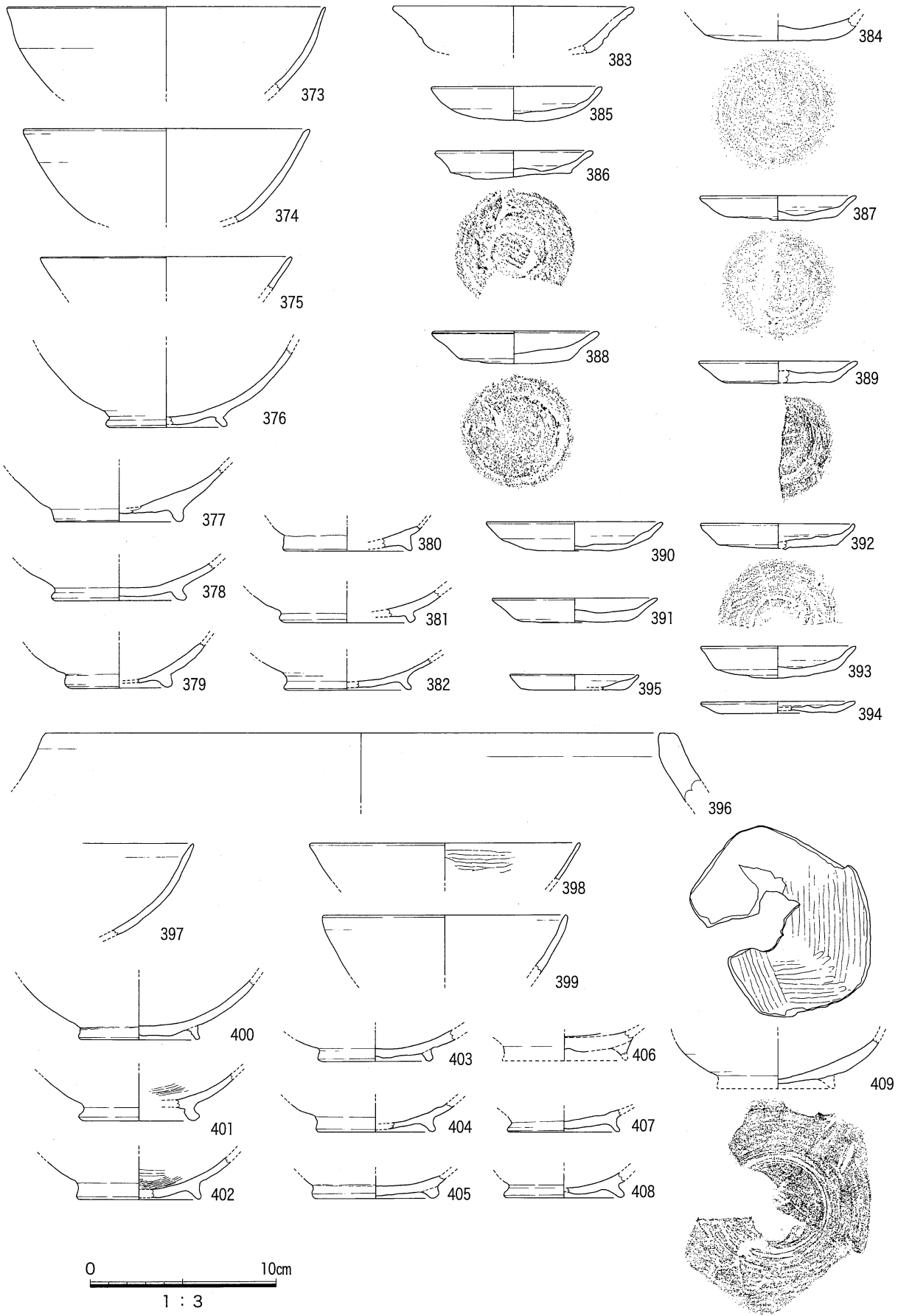
SDg63 (第137図)

SDg63は、後述するSEg07に付随して検出した溝で、SEg07に給水する目的を持った溝と考えている。

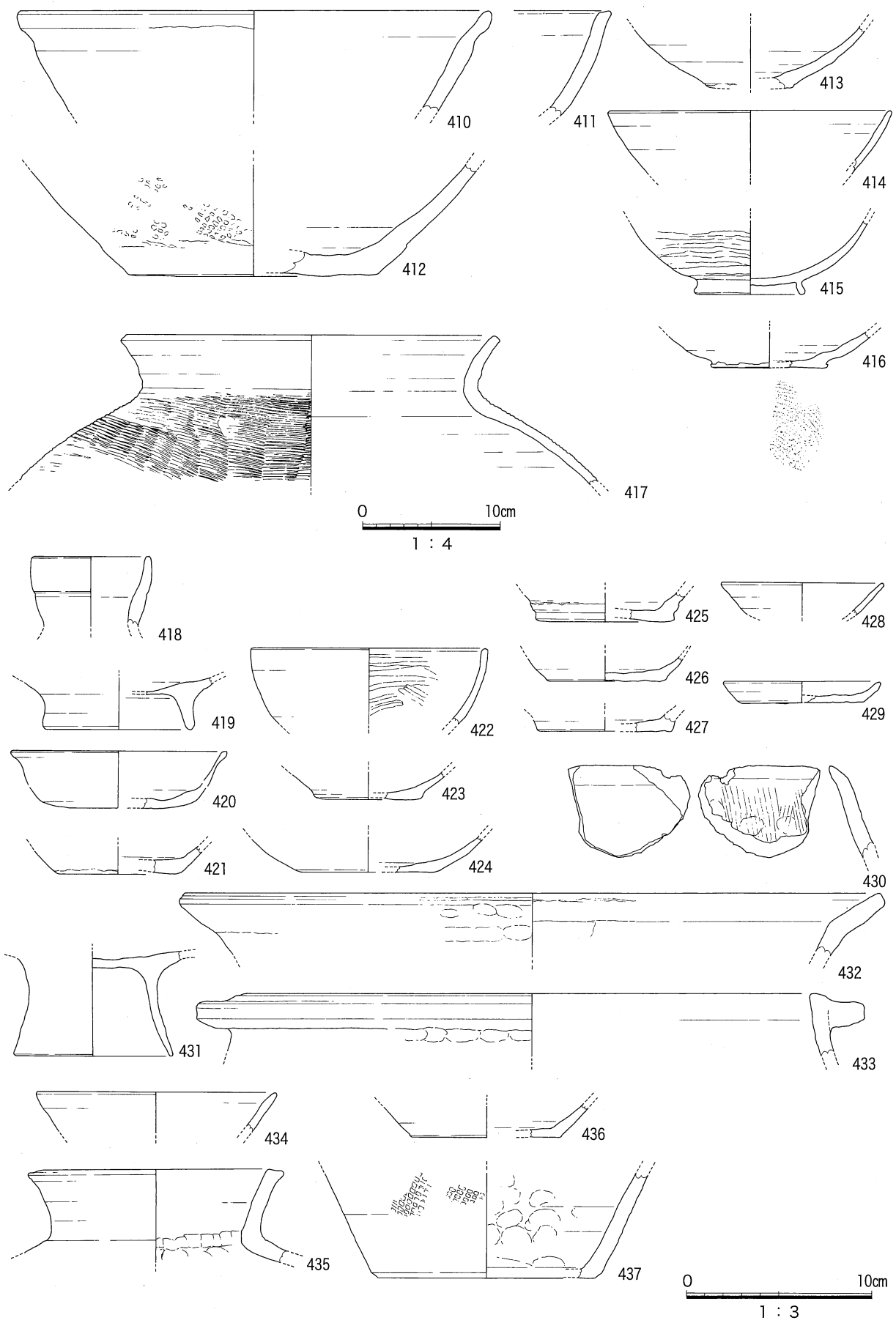
出土した資料は、448～450の小皿3点である。細片のため年代決定に慎重になるが、底部がヘラ切りである点、浅い皿部であることを考慮すれば、13世紀中葉～後半代の中で考える資料といえる。

SDg84 (第137図)

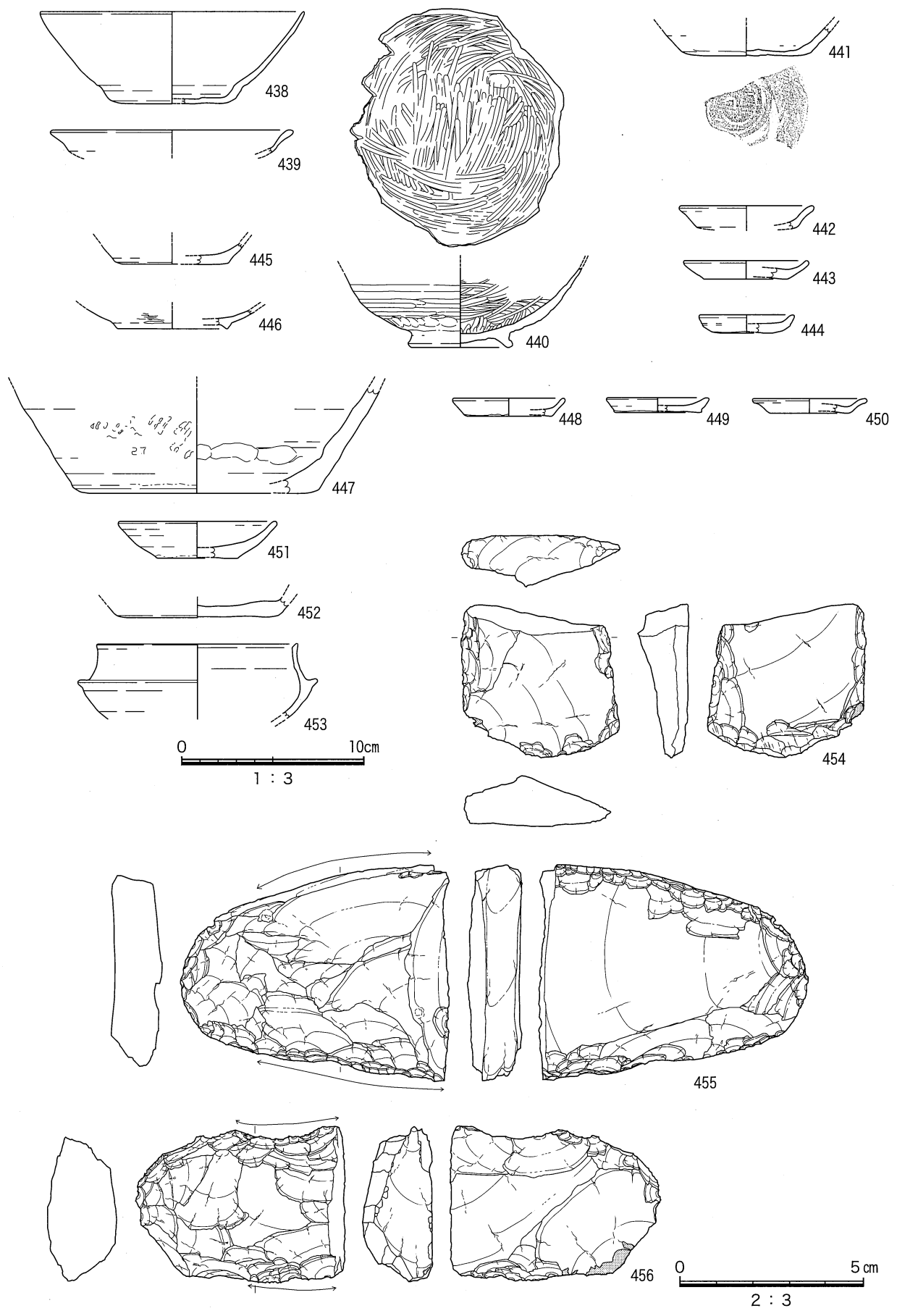
出土した資料は453の1点で、口縁部がほぼ垂直に長く立ち上がる特徴から古墳時代中期に位置づけられるが。



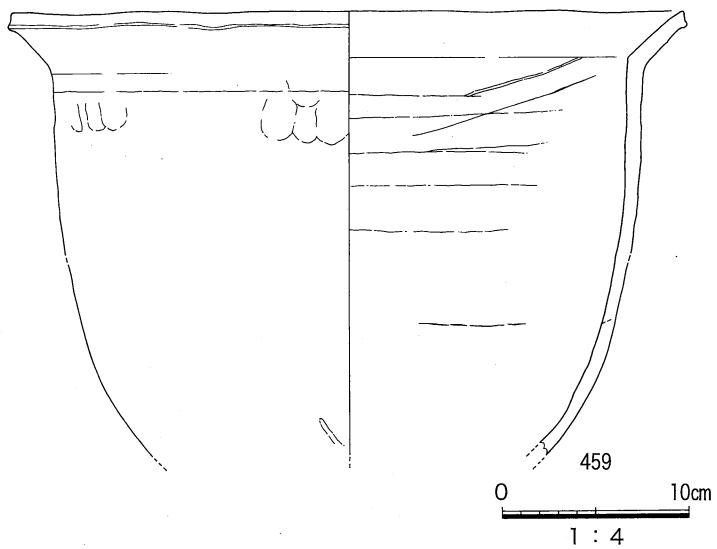
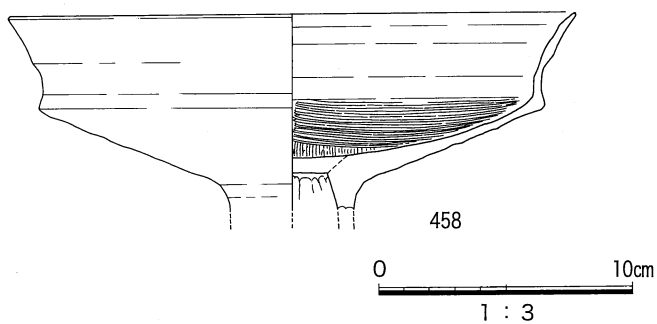
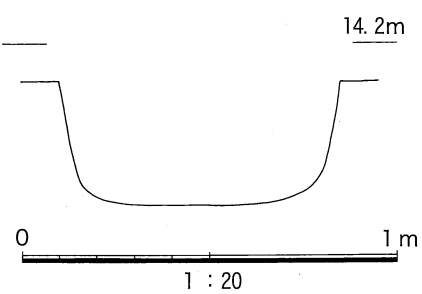
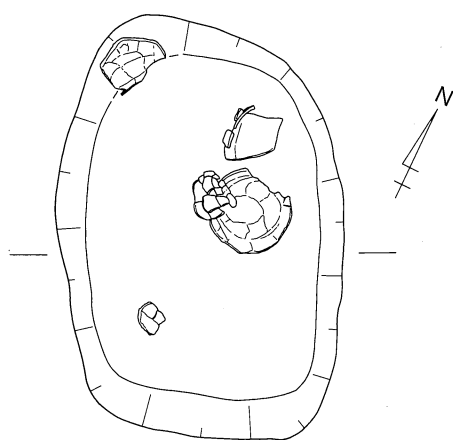
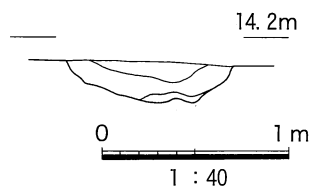
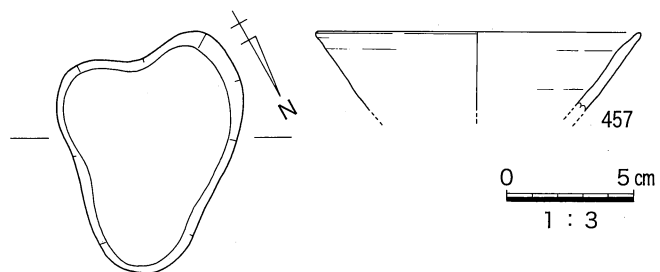
第135図 SDg04 出土遺物実測図



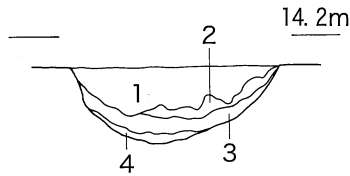
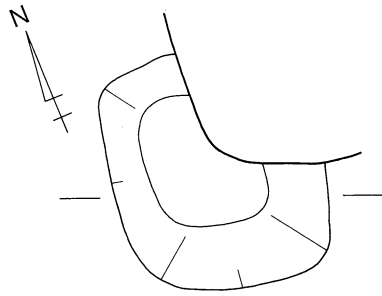
第136図 SDg04・09・28・30 出土遺物実測図



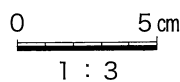
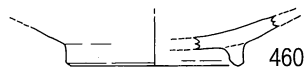
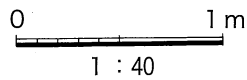
第137图 SDg09·31·43·56·57·63·75·84 出土遺物実測図



第138図 SKg184・SKg416 平・断面図、出土遺物実測図



- 1 黒褐色粘質シルト
(0~5mのブロック含む)
- 2 灰燈色粘質シルト
- 3 灰色粘土
- 4 灰色細砂



第139図 SKg673 平・断面図、
出土遺物実測図

④ 土坑

ここでは、遺物が出土した土坑のみ記述する。

SKg184 (第138図)

SKg184は、隅丸の三角形を呈し、皿状の断面を有する。埋土は3層からなり自然埋没と考えられる。土師質椀1点が出土している。体部は外上方に直線的に伸びる器形で、年代は不詳である。11世紀代カ。

SKg416 (第138図)

SKg416は、隅丸の方形を呈し、四角形の断面を有する。高杯、甕各1点が出土している。高杯は、杯部が直線的に外上方に伸びた後、明瞭に外反する器形を持ち、明らかに弥生土器の形態を持つ。甕は砲弾型の体部から短く直線的に外傾する口縁部を持つ。9~10世紀代に位置づけられる。出土状況から見れば、明らかに共伴資料と言える状態であるが、周辺の弥生土坑群との重複もあり、古代の土坑と考えて差し支えない。

SKg673 (第139図)

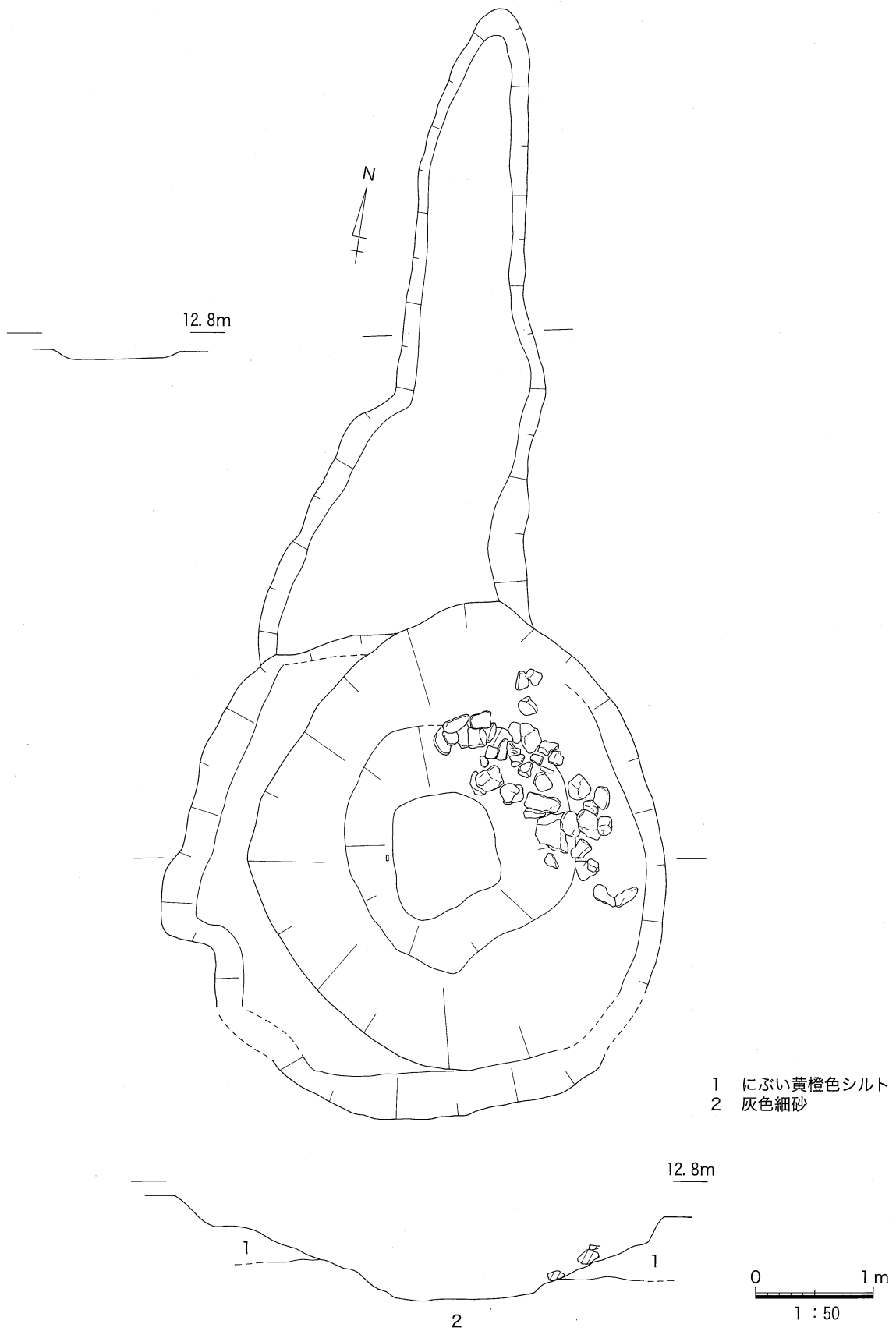
SKg673は、SKg672より後出し、SKg674に先行する隅丸の四角形を呈し、皿状の断面を有する。埋土は4層からなり自然埋没と考えられる。土師質椀1点が出土している。高台部が明瞭に立ちあがるため、Ⅱ-1期前後の年代と考えられ一応12世紀末~13世紀初頭前後と考えている。

⑤ 井戸跡

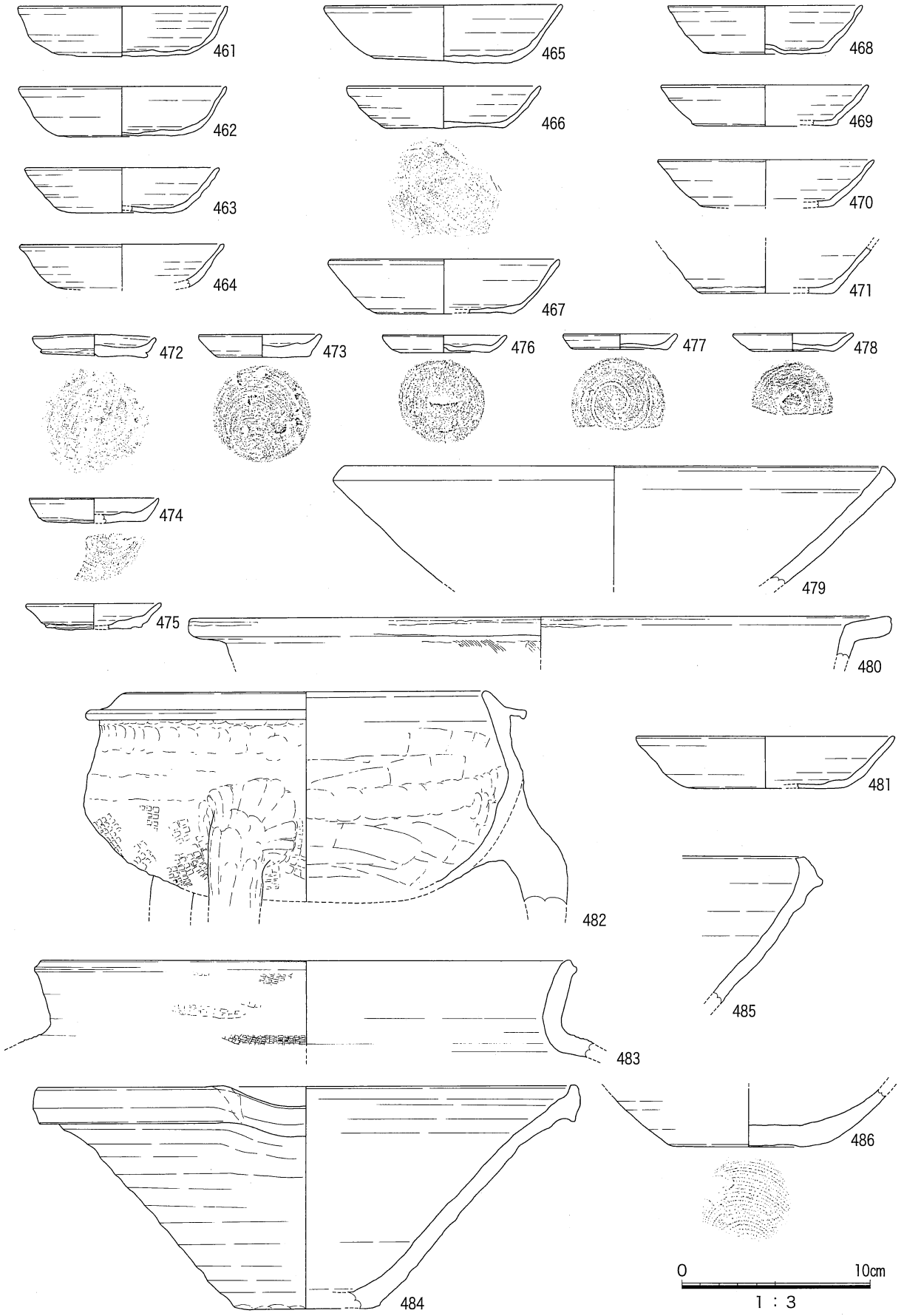
SEg07 (第140~142図)

SEg07は、調査区東端に位置し、楕円形の素掘り井戸である。東側傾斜面には拳大の礫が集中して検出された。SDg63とつながっており、同時期に機能したものと考えられ、SEg07を出水と考えた場合には北への水の供給が想定される。

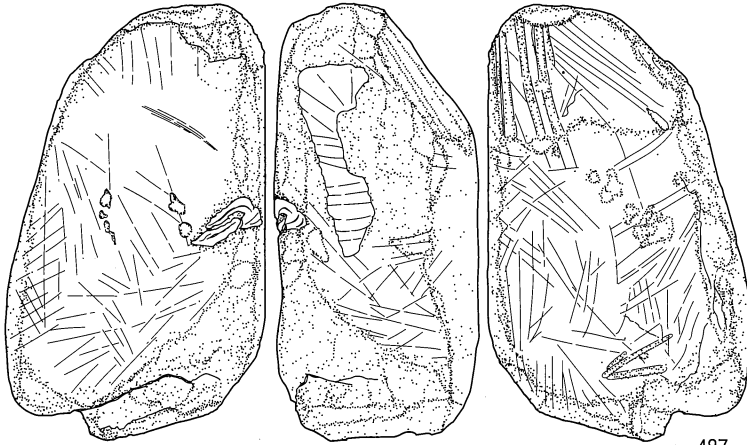
出土遺物は、土師質杯、小皿、こね鉢、鍋、足釜、甕などに加えて砥石、椀形鍛冶滓が出土している。土師質杯や小皿の底部には、ヘラ切り及び糸切りが混在しており一括資料として位置づけられるかどうか難しいが、その他の資料の形態も考え合わせ13世紀代の資料と考えておく。



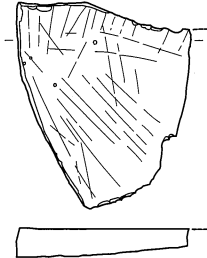
第140図 SDg63・SEg07 平・断面図



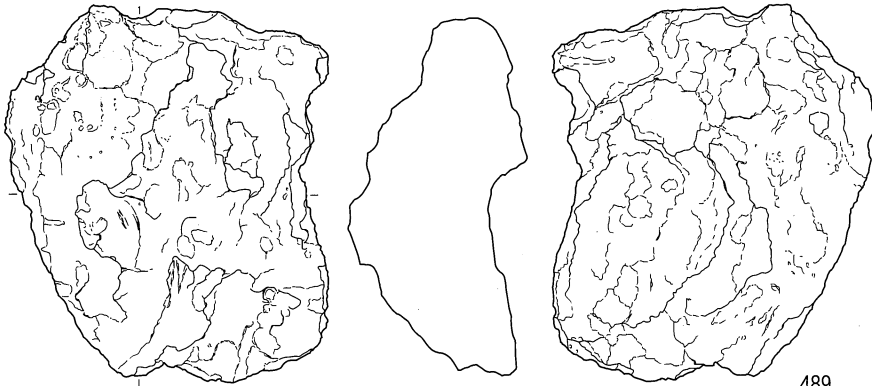
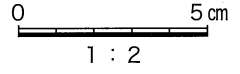
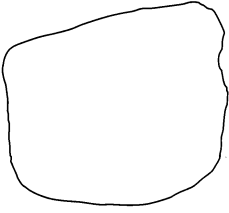
第141图 SEg07 出土遺物実測図 (1)



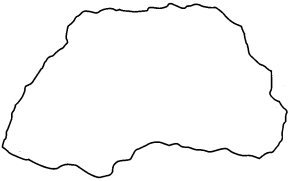
487



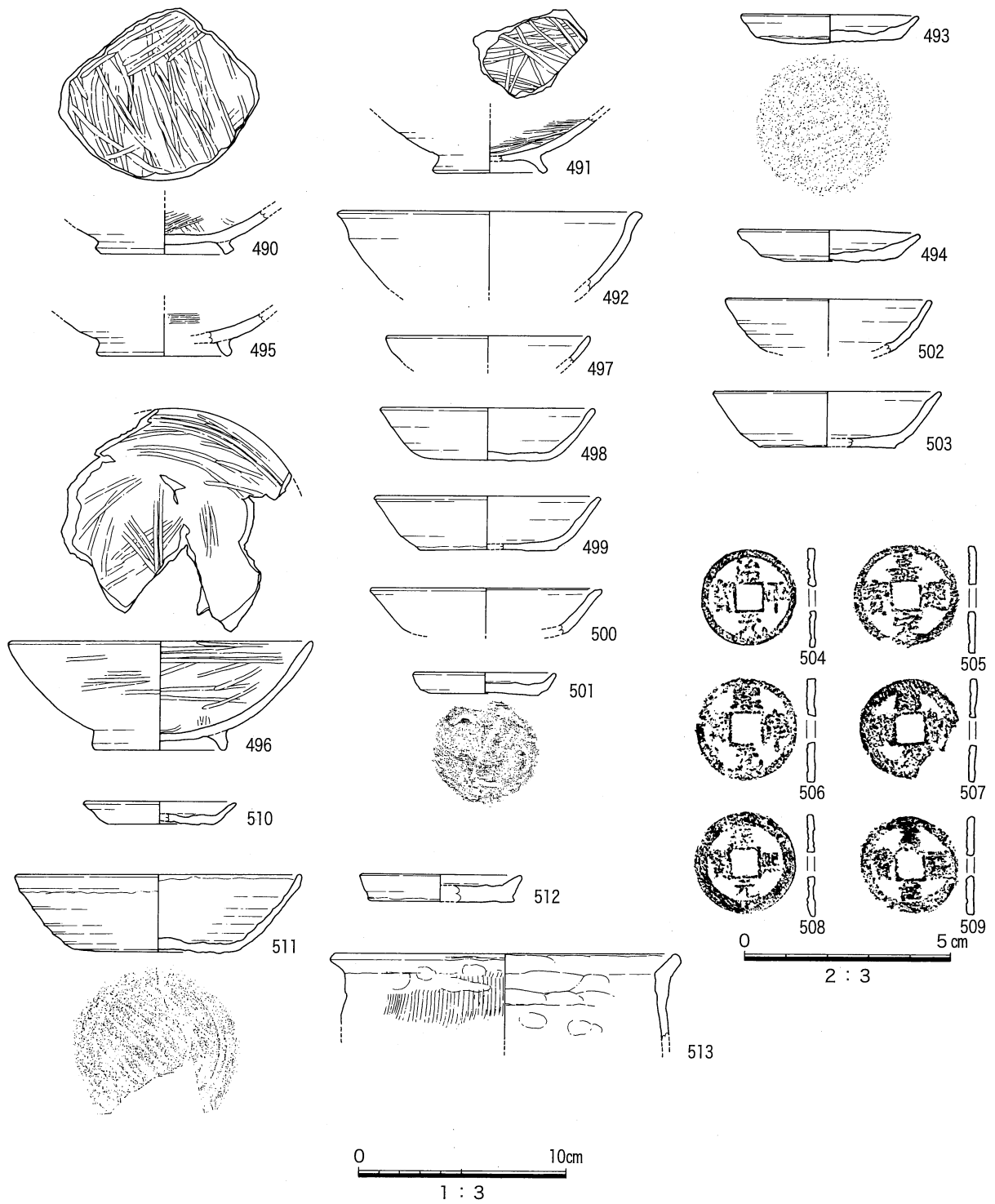
488



489



第142図 SEg07 出土遺物実測図 (2)



第143図 SPg039・087・114・116・133・134・648・651・655・660・664・668 出土遺物実測図

⑥ 柱穴跡

第143図は、柱穴出土の遺物である。各柱穴の説明は省略するが、黒色土器、土師質杯、小皿、甕、銭などが出土しており、全体的に11世紀～13世紀代の資料と考えられ、周辺の遺構群とほぼ同様の時期の遺物である。

3 近世～近現代

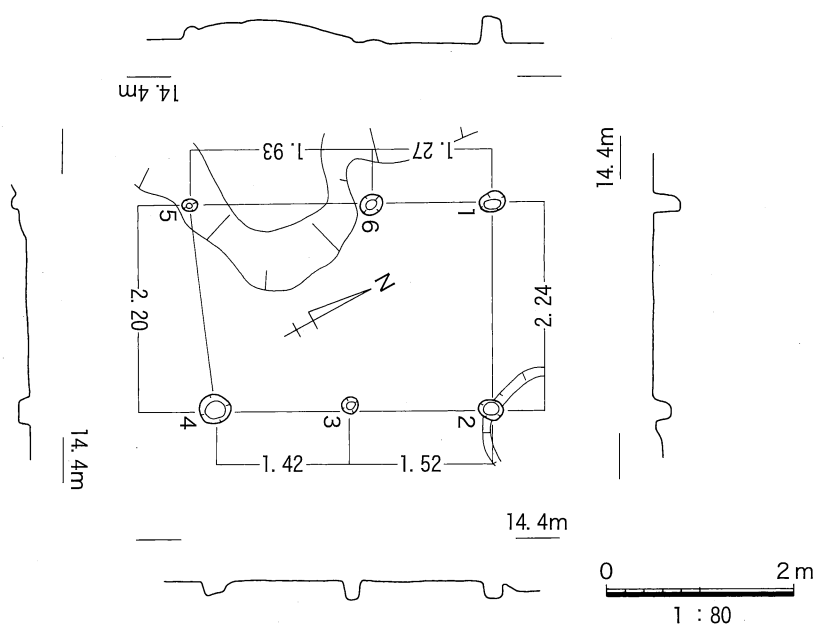
近世の遺構は、掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸、不明遺構、柱穴があり、遺構数としては多くない。また、溝はこの地域が第2次世界大戦中に陸軍飛行場として整備された段階まで機能していたものも含まれるため、出土した遺物にも時間差がある。

掘立柱建物跡については、第4章3近世～近現代で詳述している近世屋敷地の復元に基づき、屋敷地内に含まれる掘立柱建物跡で出土遺物が明確でないものは近世として取り扱っている。

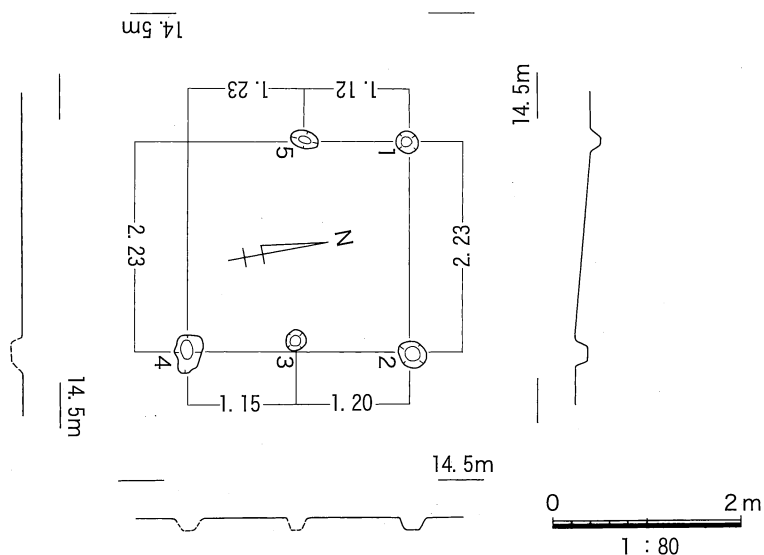
① 掘立柱建物跡

SBg02 (第144図)

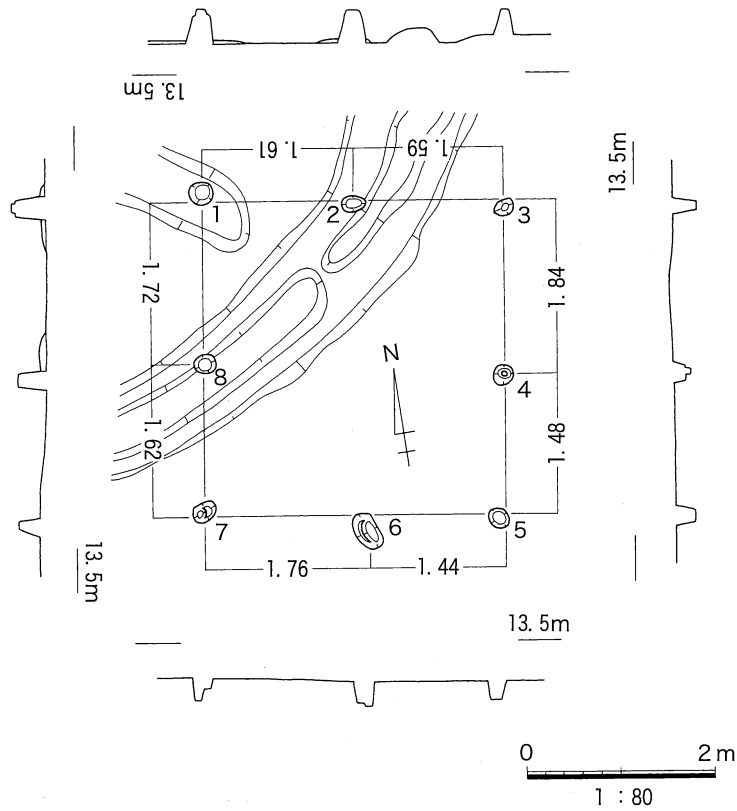
1間×2間の東西棟である。柱穴は小さく浅い。出土遺物は無く時代は不明である。ただし、弥生時代の土坑を切っていることから、これ以降と考える。



第144図 SBg02 平・断面図



第145図 SBg03 平・断面図



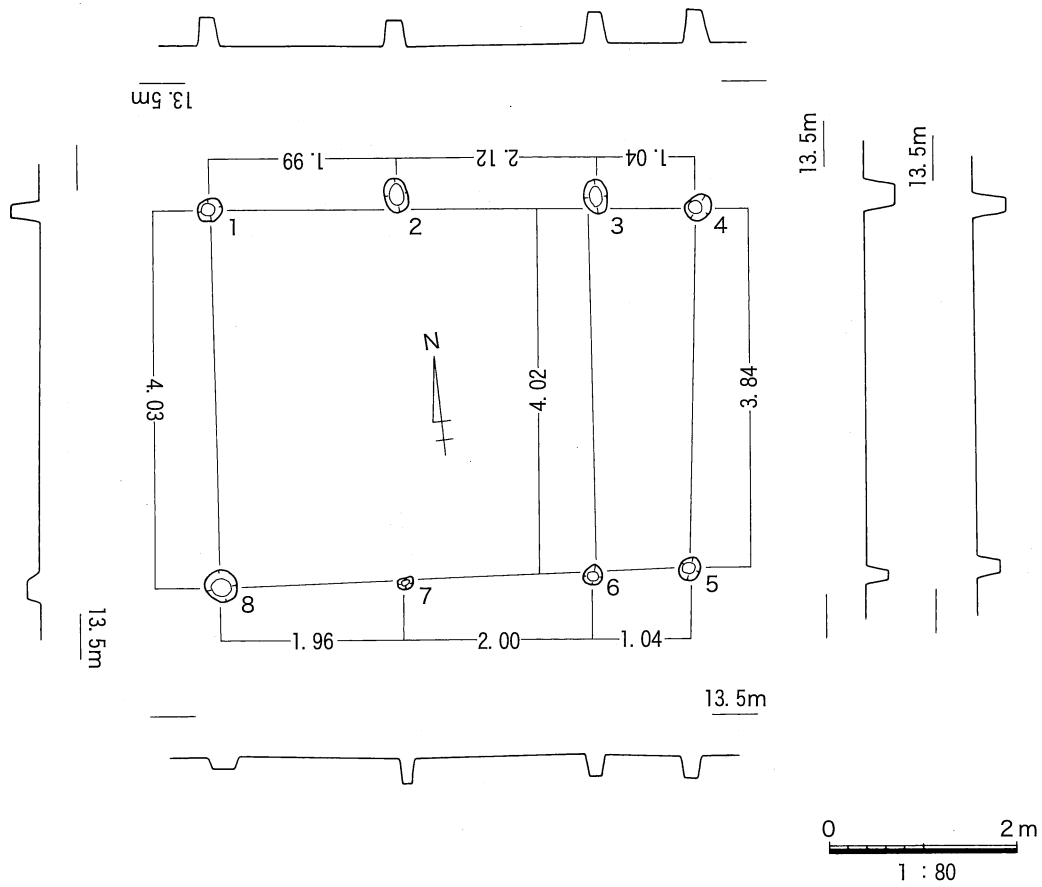
第146図 SBg11 平・断面図

SBg03 (第145図)

1間×2間の南北棟である。西南隅の柱穴は確認できなかった。柱穴は小さく浅い。出土遺物は無く時代は不明である。

SBg11 (第146図)

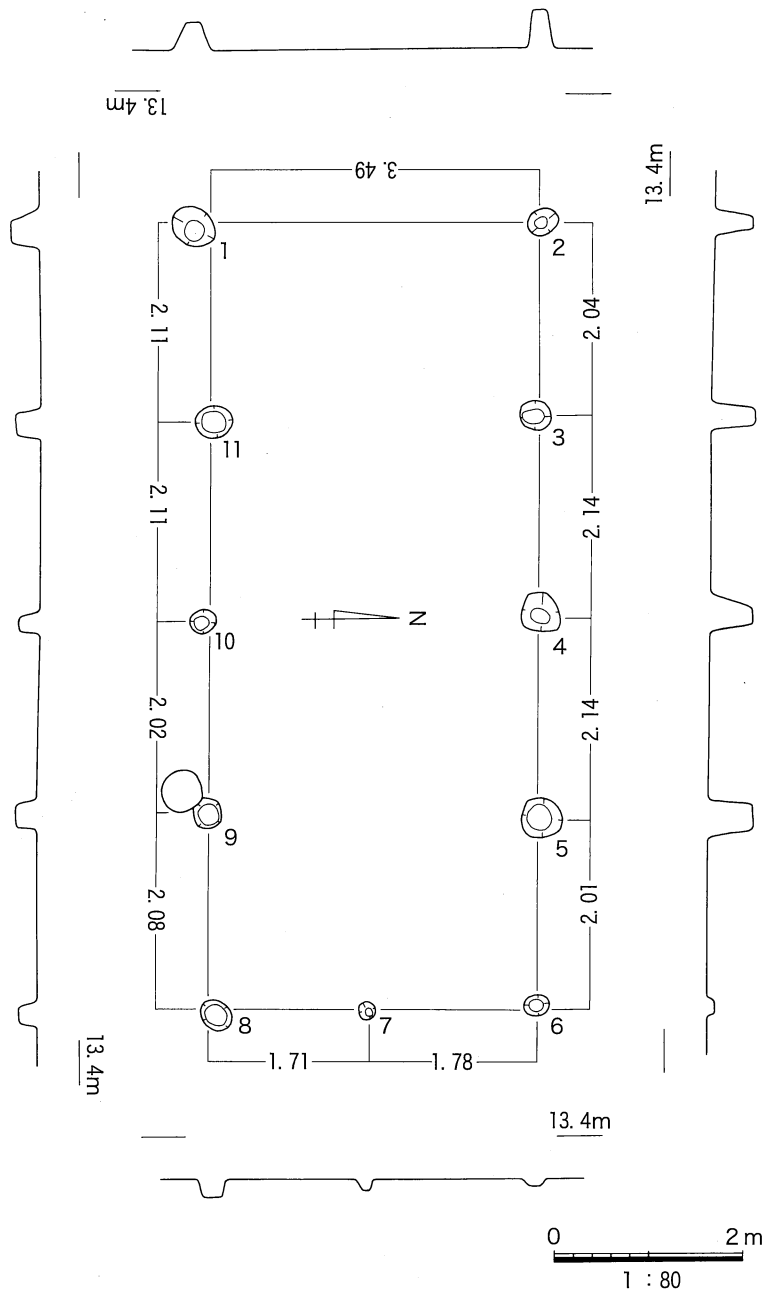
2間×2間でほぼ正方形の掘立柱建物跡である。SDg18を切っており、弥生時代以降の建物である。柱穴の断面観察では、底面が二段になっているものが多い、柱材の太さを示すと同時に、柱の抜き取りに伴う状況と理解している。



第147図 SBg12 平・断面図

SBg12 (第147図)

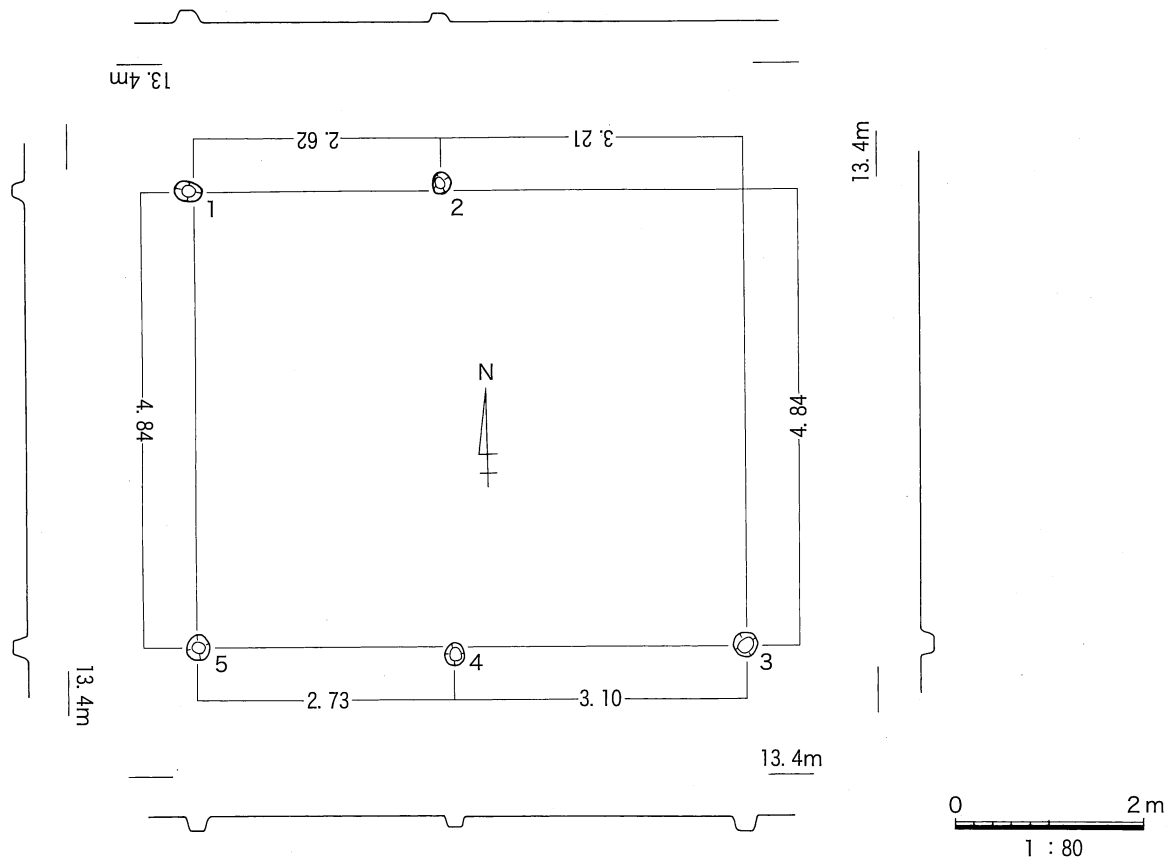
1間×3間の東西棟である。東側の1間（桁行）が他の柱間に比べて狭いことから、土間のような建物内施設が存在が考えられる。



第148図 SBg13 平・断面図

SBg13 (第148図)

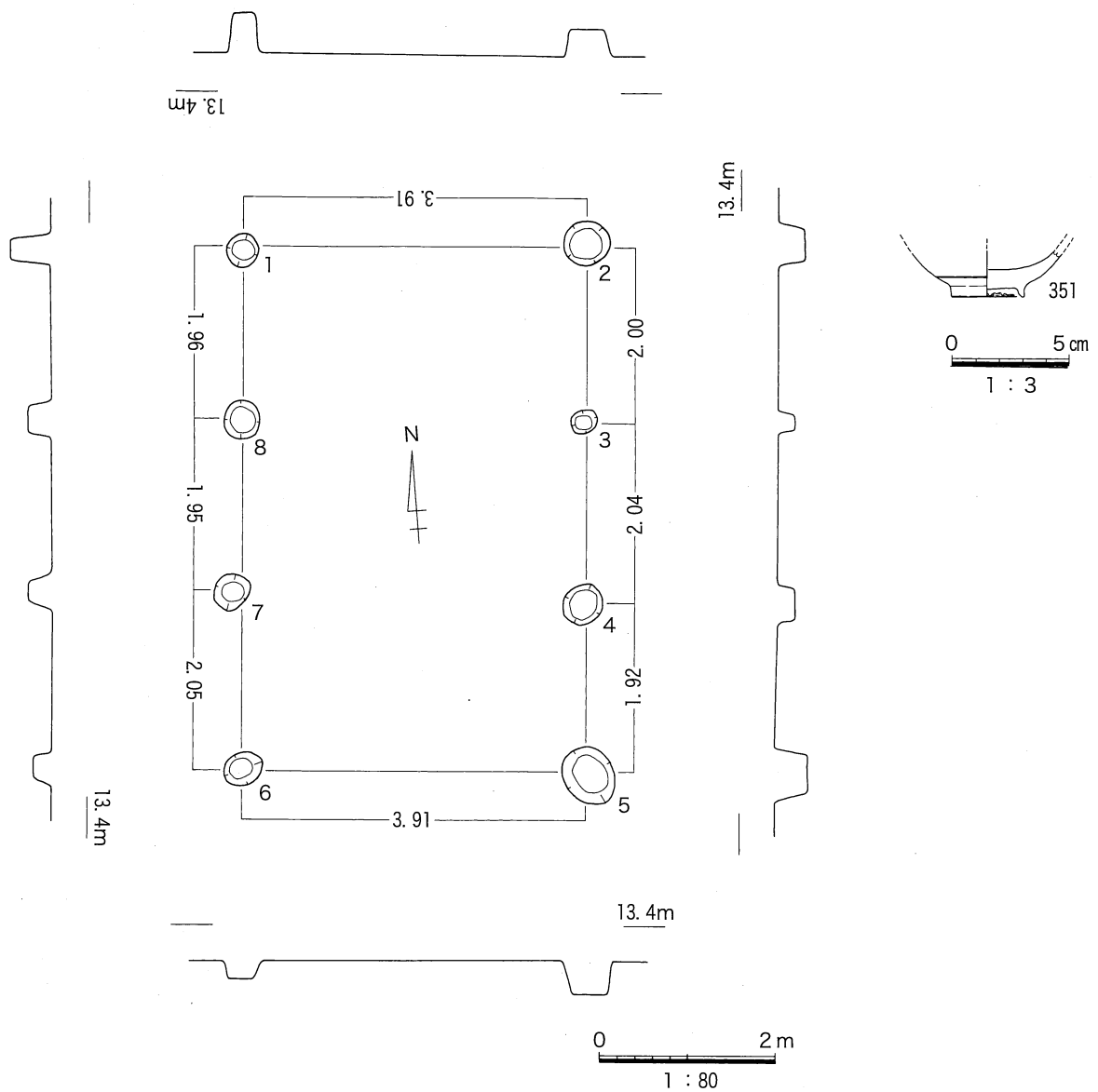
2間×4間の東西棟である。西辺梁間中間の柱穴が確認できていない。



第149図 SBg14 平・断面図

S B g 1 4 (第149図)

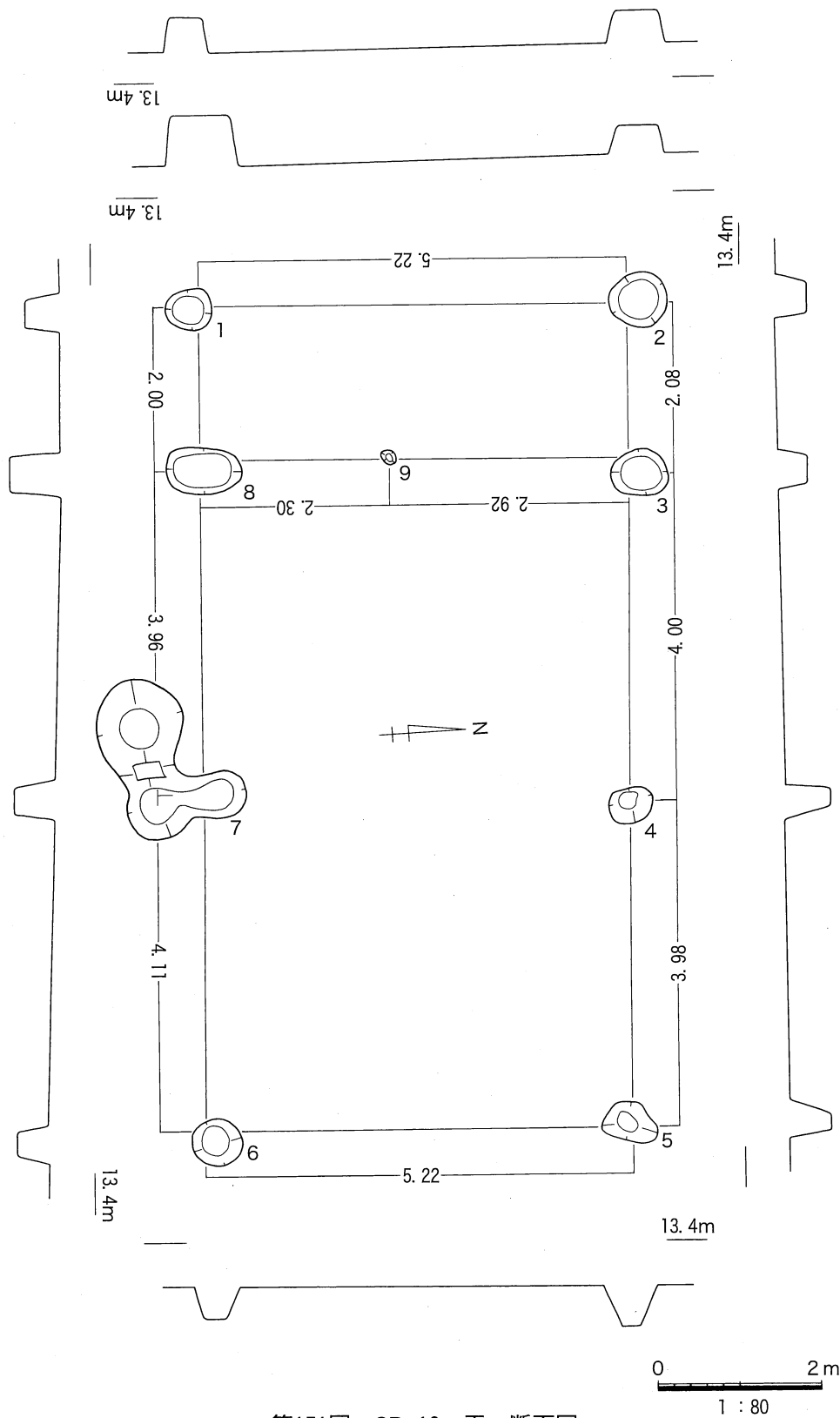
1間×2間の東西棟である。北東隅の柱穴は確認できていない。



第150図 SBg15 平・断面図、出土遺物実測図

SBg15 (第150図)

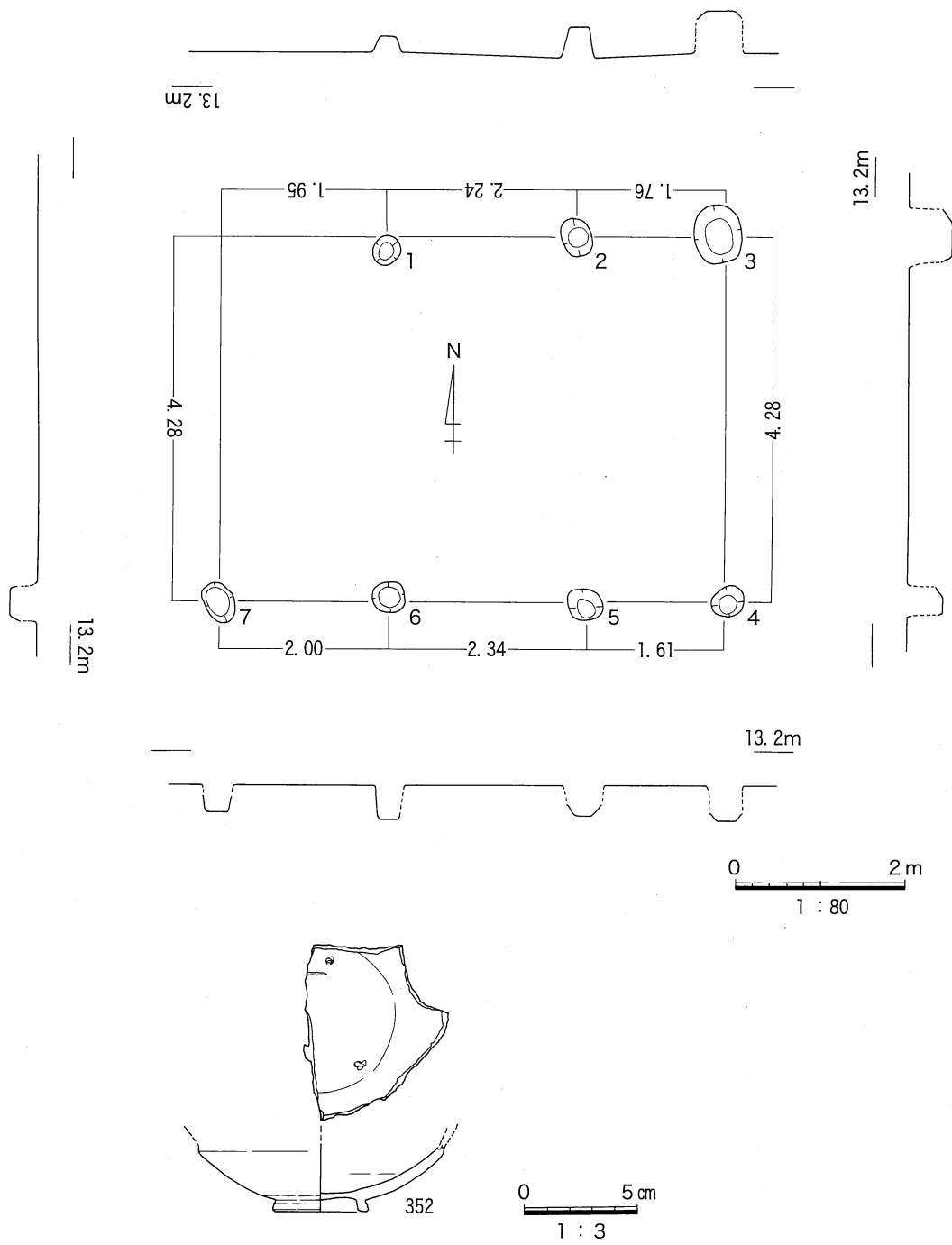
1間×3間の南北棟である。今回検出した掘立柱建物跡の中では、しっかりした柱穴を持つ建物である。柱穴内から肥前系磁器の小碗底部片(351)が出土している。おおむね、18世紀後半の所産となろう。しかし、出土状況が不明であること、近世以降の溝SDg26に隣接するため、この資料での年代決定には慎重にならざるを得ないが、他の掘立柱建物跡と比べて柱穴がしっかりしている点を考慮すれば、近世に属する可能性もある。



第151図 SBg16 平・断面図

SBg16 (第151図)

1間×3間の東西棟である。SBg12同様、西側の1間（桁行）が他の柱間に比べて狭い。また、柱穴9とした小形の柱穴が確認できることから、東側2間×2間の座があがっており、柱穴9が座の支え柱としての役割を担っていた可能性もある。



第152図 SBg17 平・断面図、出土遺物実測図

SBg17 (第152図)

1間×3間の東西棟である。西北隅の柱穴は確認できていない。柱穴内から京・信楽陶器碗、半筒碗の底部(352)が出土し、弥生時代の溝SDg16と幕末前後に埋没した近世土坑SKg843を切っていることから、それ以降の年代が考えられる。

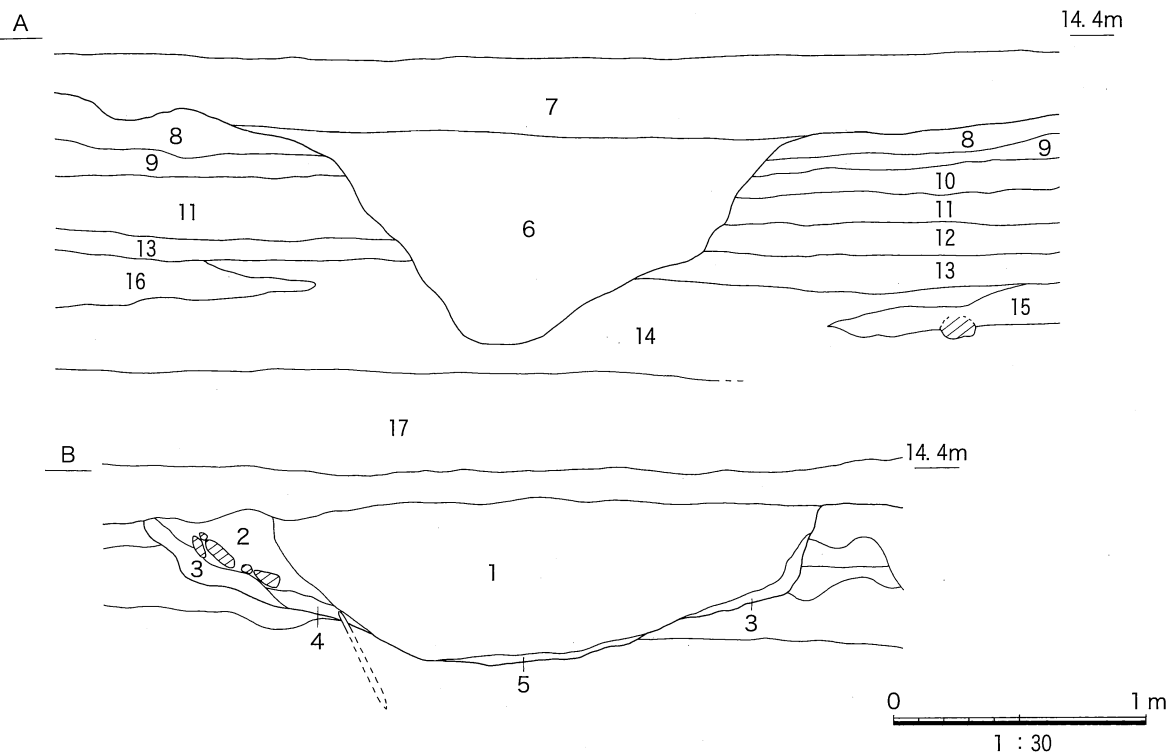
② 溝状遺構

SDg02 (第153・156～158図)

SDg02は、調査区の西端に近い位置を、北から南に直線的に伸びる溝で、先に述べた昭和段階で埋められたものである。溝は弥生時代の土坑群を横切る形で設けられており、埋土も1層からなる。

514～537はSDg02出土遺物である。

514～516は肥前系磁器碗である。514は外面に二重網目文を認め、18世紀後半の所産となる。515は小碗、516は広東碗である(1780～1820年代)。519は肥前系磁器鉢である。口縁部は大きく開き、端部を下方へ垂下させる。18世紀末～幕末。517・518は中国産磁器である。517は漳州窯青花皿である。碁笥底を呈し、染付皿C群となる(小野1982)。518は景德鎮窯系青花皿である。520～522は肥前系陶器である。520は呉器手碗である。521は砂目皿である。522は鉢である。見込みには蛇の目釉剥ぎ後にアルミナ砂の塗布を認める。523は大谷焼瓶である。底部には同心円ケズリを認める。524は施釉陶器鉢である。内外面には灰釉を施し、鉄釉の流し掛けを認める。見込みには複数の胎土目が遺存する。525は焼締陶器甕である。丹波焼か。526は土師質土器鉢である。底部中央は遺存しないため、穿孔の有無は確認できない。端部は肥厚し、底部は高台をなす。527は瓦質浅鉢である。方形の平面形を呈し、底部四隅には脚を有する。口縁部は内面に折り返し、断面三角形をなす。外面には顕著なヘラミガキを施し、各隅角には面取りを認める。



- | | |
|---------------------------------|---|
| 1 灰色砂礫 (5～20cmの砂礫多量を含む) | 10 9層に砂混じり |
| 2 灰褐色粘質シルト (Fe含・下面に礫含む) | 11 灰白色 [7.5Y7/1] 粘土 (7層に近似・Fe含む) |
| 3 灰色砂混粘土 (Fe含む) | 12 褐灰色 [5YR5/1] 細～中砂 (東半で1～6cmの小石顕著) |
| 4 明灰色細砂 | 13 緑灰色 [10GY6/1] シルト質細砂 (黒色粘土小ブロック含む) |
| 5 濃灰～青灰色粘土 (Fe・植物遺体含む) | 14 明緑灰色 [10GY8/1] 細砂 (2～4cmの小石わずかに含む植物遺体含む) |
| 6 SDg02埋土 | 15 明黄褐色 [10YR6/6] 中～粗砂 (2～6cmの小石含む) |
| 7 表土・旧耕地 | 16 灰白色 [10YR8/2] 細砂 (黒色粘土小ブロック含む) |
| 8 褐色 [7.5YR3/4] 粘土 | 17 明緑灰色 [10GY8/1] シルト質細砂 (植物遺体含む) |
| 9 灰色 [10YR7/1] 粘土 (わずかに砂混・乾痕顕著) | |

第153図 SDg02 土層断面図

528～534は瓦である。528は軒平瓦である。中心飾りは半肉状を呈する半裁花菱文で、瓦当面に刻印を認める。529は丸瓦である。外面には「林善○」の刻印を認める。530～533は平瓦である。広面及び狭端面に刻印を認め、530は「・ ・ ・吉野」、531・532は「岡崎 上林」、533は「林善？」とある。

535は石製硯である。墨堂には墨が付着する。536は滑石製石鍋である。明瞭に突出する鏝部を認め、木戸編年Ⅲ－b類に該当する(木戸1995、13世紀代)。537は砥石である。砂岩製。各面には顕著な擦痕ないし研磨痕を認める。

以上、SDg02の出土遺物の年代観は、16世紀末～17世紀初頭に属する中国産磁器(517・518)、17世紀前葉の肥前系陶器砂目皿(521)を認めるが、主体は18世紀末～19世紀前半の陶磁器となる。但し、526の土師質土器鉢は後出する様相を示し、519は18世紀末～幕末に位置付けられる。よって、17世紀初頭に新たに開削され、近世～近現代を通して継続的に機能し、最終的に陸軍飛行場造成により昭和19年に埋没した溝と理解できる。

SDg05 (第154・159～163図)

SDg04は、先にも述べたように中世段階の溝で、SDg05に切られる形で検出されている。部分的にSDg04の西肩が並行して確認されたが、大半はSDg05によって破壊されている。

SDg05は、先のSDg02の東側に位置し、ほぼ並行する形で北から南に伸びる。断面図でも明らかなように、部分的に礫を包含しており、部分的に残る石垣を壊して廃棄したものと考えられる。これもSDg02同様、昭和段階での埋め立てが考えられる。

538～609はSDg05出土遺物である。

538・539は瀬戸・美濃系磁器碗である。赤色絵葉による上絵付けを認める。540～545は肥前系磁器である。540は鉢、541は小広東碗である。542・545は見込みに蛇の目釉剥ぎを認める底部無釉の皿である。543は広東碗である。1780～1820年代。544は粗製の碗である。高台内には崩れ大明年製を認める。546は中国産磁器碗であろう。外面には花卉文を認める。547・548は瀬戸・美濃系磁器小碗である。前者は文字、後者は草花文の染付を認める。549～554は肥前系磁器である。549は小杯で、外面には梵字繫ぎ文を認める。550は火入れ・香炉類である。口縁部内面は端部のみ施釉し、外面には松文と源氏香を描く。551は蓋物である。端部内面のみ無釉で、外面には蛸唐草文を認める。552は皿である。553は内外面に銅板転写による絵付けを認め、明治・大正時代の所産となる。554は菊皿である。高台内は無釉で、口銹を施す。555・556は瀬戸・美濃系磁器である。555は見込みに紗綾形文を認める木型打込皿である。556は蓋である。外面にはゴム印による絵付けを認める。大正時代。557は肥前系磁器香炉である。外面には丁寧な絵付けにより梅花文を描く。558は施釉陶器鉢である。見込みには鉄絵による「寿」文を認める。18世紀後半～19世紀代。559は肥前系磁器であろう。平面形は正方形をなし、四隅に脚を有する。型成形による板材を接合したもので、上半は透かしとなる。下半には桐葉文が陽刻され、薄ダミを施す。560・561は瀬戸・美濃系磁器人形である。560は鑄込み成形により、外面には緑・黄色の絵葉による着色を認める。561は前後型合わせ成形の招き猫である。内面には布目痕跡が遺存する。562は肥前系磁器皿である。二重高台をなし、内高台畳付のみ無釉である。内面中央には柘榴文を認める。563は木瓜形を呈する皿である。高台はおおむね円形をなす。見込み中央には宝文を描く。昭和前半。564・565は肥前系磁器器手碗である。いずれも高台内の挟り込みは、高台脇に等しい。565は17世紀～18世紀前半に位置付けられる。566は陶胎染付火入れである。内面は無釉である。18世紀前半。567は産地不明施釉陶器である。高台断面は三角形を呈し、内外面には濃い緑色の色調を呈する灰釉を施す。瀬戸・美濃系陶器か。568は京・信楽系陶器である。高台径はやや小さく、腰部には張りを認めない。内外面には淡黄色の色調を呈する灰釉を認める。569は軟質施釉陶器坏である。内外面には柿釉を施し、底部は遺存しないが、回転糸切り痕を認める可能性が高い。570は大谷焼坏である。口縁部は長く直立し、底部には同心円ケズリを認める。571は軟質施釉陶器皿である。高台断面は四角形を呈し、畳付を除く全面に鮮やかな緑色の色調の緑釉を施す。型成形。572は瀬戸・美濃系陶器皿である。外面には櫛描状の沈線を認める。573・574は軟質施釉陶器蓋である。黄白色の緻密さを欠く胎土に白色の灰釉を施す。土瓶ないし鉢の蓋となる。575・576は京・信楽系陶器灯明皿である。後者には仕切を認める。577は施釉陶器瓶(徳利)である。口縁部は玉縁状に肥厚する。大谷焼に似た形状を呈するが、大谷

焼ではない。578・579は施釉陶器行平状の鍋とした。把手を有し、90°展開した位置に片口を認める。口縁部は受け口状をなし、蓋を有する。580は施釉陶器片口鉢である。口縁部は丸く肥厚し、片口を有する。見込みには6個の胎土目を認める。富田吉金窯産の可能性が高い（森下友2000）。581・582は施釉陶器摺鉢である。口縁部は丸く肥厚し、底部は高台を有する。内外面には黄褐色の色調を呈する鉄釉を施釉する。スリメはほぼ全面に及び、見込みには「*」字状に施す。583は施釉陶器鉢である。口縁部は丸く肥厚する。富田吉金窯産か。584は施釉陶器瓶である。内外面には鉄釉を施す。585は施釉陶器片口鉢である。口縁端部は内上方へ強く引き出し、先端部のみ無釉となる。586・588・589・591は信楽甕である。口縁部は短い逆L字形を呈し、外面には鉄釉を施し、鉄釉の流し掛けを行う。587は施釉陶器鉢である。内外面には灰釉を施釉する。590は肥前系陶器ないし北部九州産施釉陶器甕である。口縁部は鈍く屈曲し、端部は丸く肥厚する。592～595は焼締陶器である。592は浅鉢、593は甕、594は瓶である。595は植木鉢である。口縁部は強く短く屈曲し、逆L字形を呈する。底部に高台を有し、中央には焼成前の穿孔を認める。596は大谷焼瓶（棗）である。体部下半に屈折を認める。597・598は堺・明石系摺鉢である。前者は白神編年Ⅲ型式、後者はⅡ型式1段階に相当する（白神1992）。598は内外面に鉄釉を施す摺鉢である。産地不明。600は大谷焼甕である。口縁部は大きく肥厚し、端部に砂目を認める。601は土師質土器小皿である。口径は小さく、口縁部は大きく開く。底部には回転糸切り痕を認める。602・603は土師質土器七厘とした。口縁部は直線的に外傾し、端部は多角形状に肥厚する。602には四角い窓を有し、端部には穿孔とそれに装着した金具が遺存する。604は瓦質焙烙である。型成形により、端部は四角形に肥厚する。佐藤編年AⅡ-4ないし5型式となる（佐藤2001）。605は土師質土器さなである。606は軒平瓦である。607は軒丸瓦である。珠文数は12に復元でき、巴頭は明瞭で尾は巻き付くように細く延び、尾尻は円形をなす。608は石鏝である。サヌカイト製。609は砥石である。

以上、SDg05の出土遺物は、18世紀末～幕末までの製作年代を付与できるものが、主体を占めるが、ゴム印を使用した瀬戸・美濃系磁器蓋（556）、銅板転写の肥前系磁器皿（553）、ゴム印転写の舟形皿（563）鑄込み成形の瀬戸・美濃系磁器人形（561）、型成形の瓦質焙烙（604）は明治期以降の所産となる。

よって、SDg05は出土遺物による限り、18世紀末以降、近代を経て機能し、最終埋没は昭和19年となる。しかし、その開削時期に関しては、先行するSDg04の存在が示すように11世紀前半前後に開削された溝であり、条理型地割の坪界溝に相当する。よって、ここではSDg02との関連から、17世紀初頭前後に再掘削された溝と理解しておきたい。

SDg26（第155・164図）

610～613はSDg06・07・26出土遺物である。

610は大谷焼鉢の可能性が高い。611は京・信楽系陶器灯明皿である。端部には煤の付着を認める。612は土師質土器甕である。口縁端部は三角形に肥厚し、口縁部下に断続ナデ調整を施した突帯を認める。胎土中には、多量の雲母粒と少量の角閃石を含有する。613は瓦質羽釜である。口縁部は長く直線的に内傾し、鏝部は大きく延びる。なお、外面にはキラコの塗布を認め、型成形による成形が想起できる。

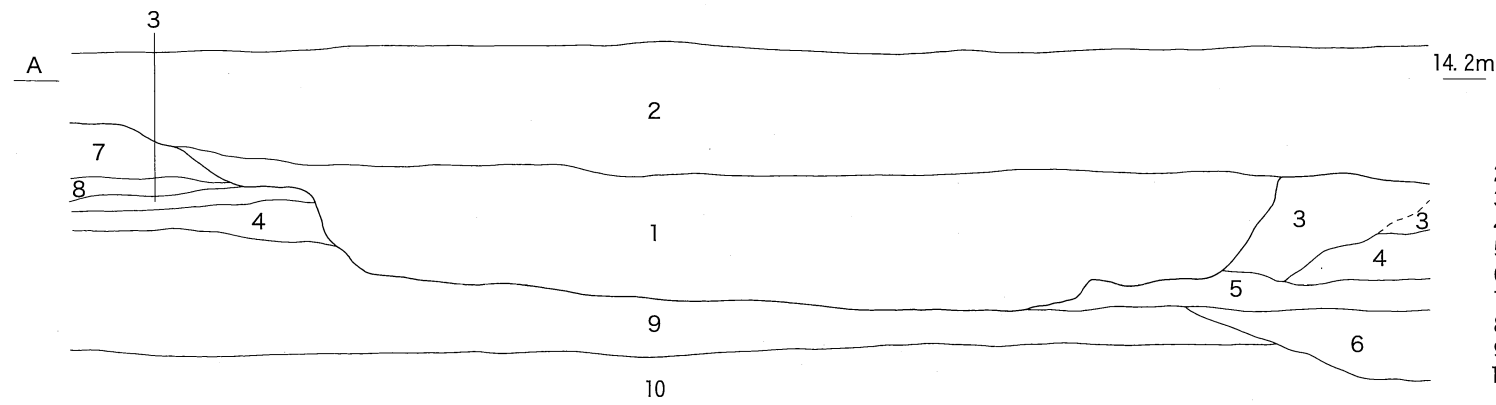
以上、SDg06・07・26出土遺物は、612・613の存在により、幕末前後の年代観を付与できる。

SDg29（第165図～第186図）

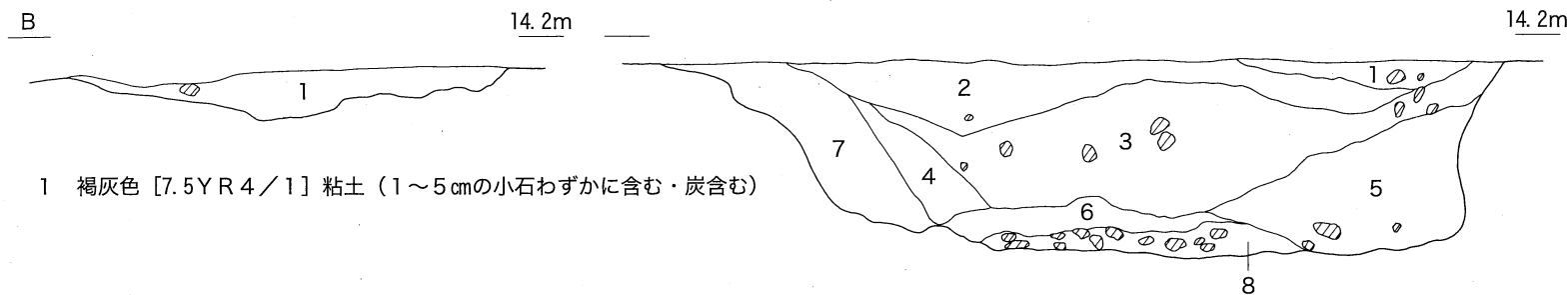
古代～中世の溝であるSDg28に重複する形で北から南に延びる溝で、調査区北端で東に屈曲してSDg47となり、南端で東に屈曲してSDg86となる。南端付近には大形の石材が石垣状に見られる。

614～888はSDg29出土遺物である。

614は肥前系磁器小碗である。615・616・716は京・信楽系陶器である。615は端反碗、616・625は小杉碗である。625は錆絵により簡略化した若松文を描く。617～623・626～633・635～637・641～643・647～660・664～676・678～681・683～690・694～699は肥前系磁器である。617は碗である。618～621・623・626～633・635は端反碗である。1820～60年代。外面には、草花文・（斜）格子文・多重圏線文・木の葉文・蝶文等、

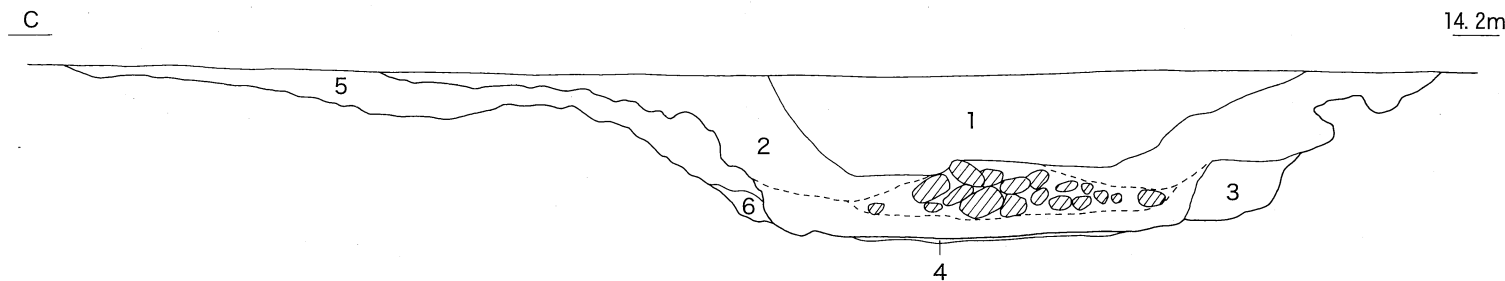


- 1 SDg05
- 2 耕土
- 3 黄色混じり明青灰色 [5BG7/1] 粘土
- 4 黄色混じり明青灰色 [5B7/1] 砂混じり粘土 (弥生土坑群ベース下層)
- 5 黄灰色 [2.5Y4/1] 砂混じり粘土 (灰色細砂ブロック状に含む)
- 6 青灰色 [5BG6/1] 細砂
- 7 黄褐色 [10YR8/8] 粗砂混粘土
- 8 黒褐色 [10YR3/1] 粘土 (強粘)
- 9 オリーブ黒色 [5Y3/2] 砂礫~黄色 (5Y7/8) 中砂ラミナー
- 10 明緑灰色 [10G7/1] 細砂~砂礫 (オリーブ黒色粘土をブロック状に含む)

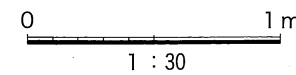
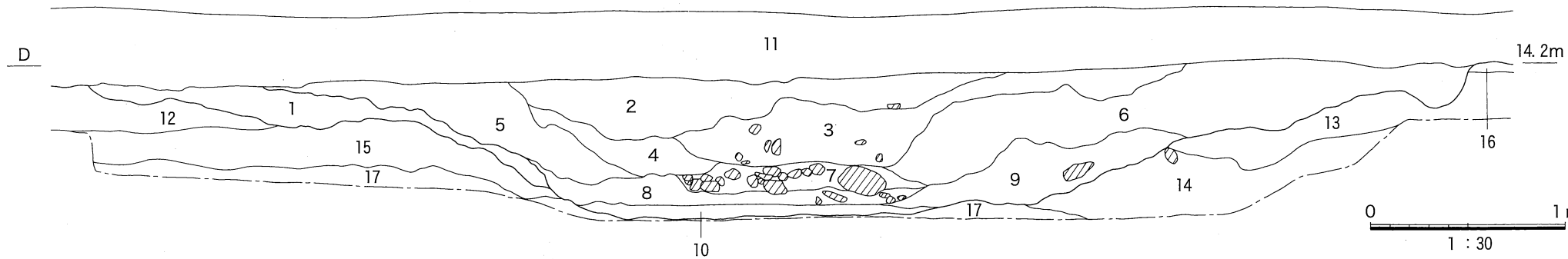


1 褐灰色 [7.5YR4/1] 粘土 (1~5cmの小石わずかに含む・炭含む)

- 1 浅黄色 [7.5Y7/3] 砂混じり粘土 (φ~7cmの石わずかに含む)
- 2 緑灰色 [10GY6/1] シルト質粘土 (φ~3cmの小石わずかに含む・地山粘土ブロック含む)
- 3 暗オリーブ灰色 [2.5GY4/1] 粘質土 (φ~7cmの石多く含む・地山粘土ブロック含む)
- 4 青灰色 [10BG5/1] 粘土
- 5 暗緑灰色 [10GY4/1] 粘土 (φ~10cmの石多く含む)
- 6 暗青灰色 [10BG4/1] 粘土 (植物遺体多く含む)
- 7 青灰色 [10BG6/1] 粘土 (φ~3cmの小石わずかに含む)
- 8 明黄褐色 [2.5Y7/6] 砂礫 (φ~5cmの石多く含む・遺物多く含む)



- 1 灰色土 (ベースブロック・小石顕著に含む)
- 2 青灰色粘質土 (礫層はさむ)
- 3 青灰色粘土
- 4 黄色粗~中砂
- 5 灰褐色粘土
- 6 灰褐色砂混じり粘土



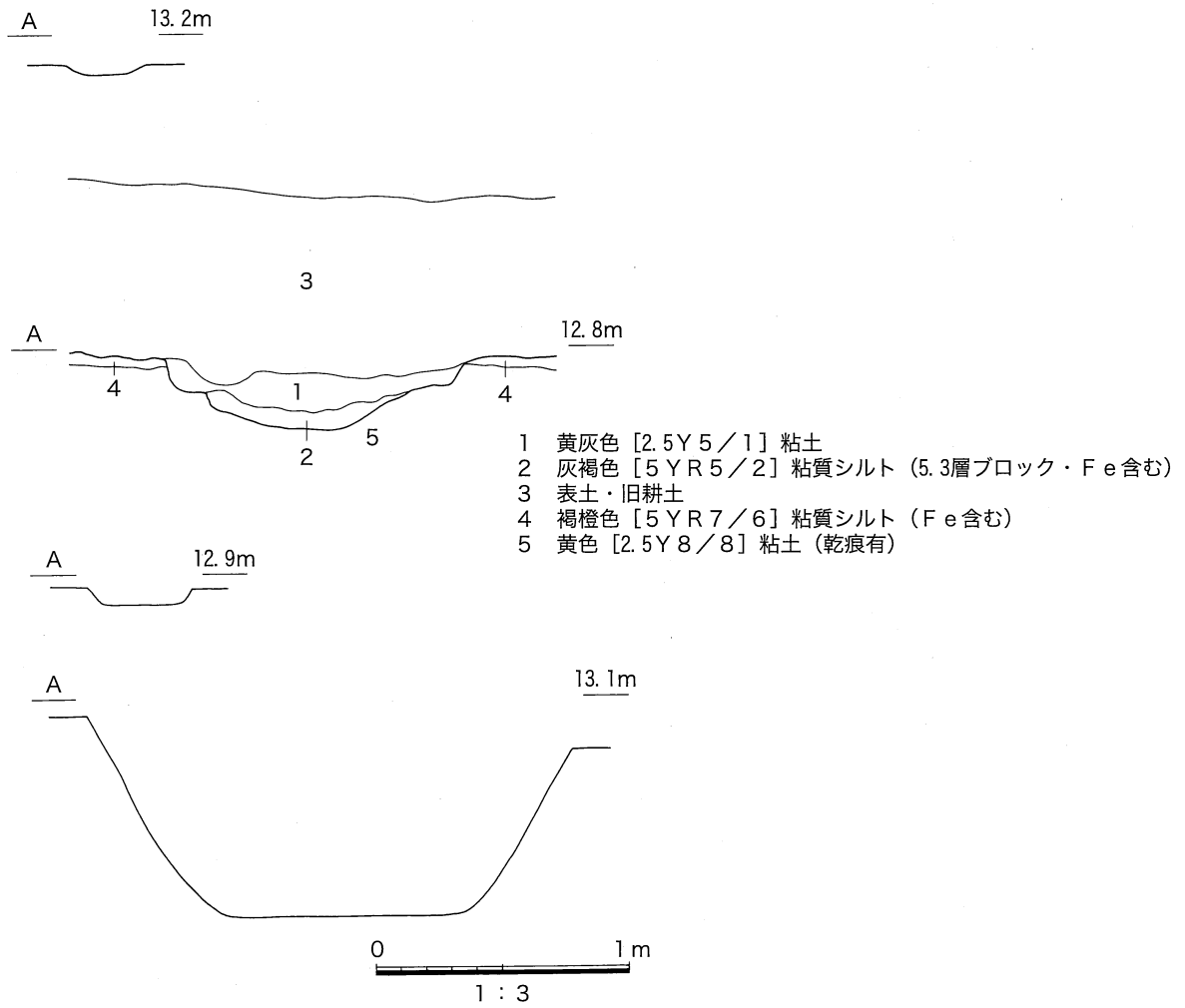
- 1 暗褐色粘土
- 2 灰色シルト (5層よりやや暗い・黄色シルトのブロック20cm含む)
- 3 褐色砂礫土 (12~14層ブロック含む)
- 4 灰色シルト (2層に近似・Fe含む)
- 5 灰色シルト (Fe顕著)
- 6 濁灰黄色シルト (1層・12層ブロック顕著に含む)
- 7 濁灰茶色粘土 (10~30cmの石顕著に含むFe含む)
- 8 青灰色粘土 (上面鉄分沈着)
- 9 青味灰色粘土 (肩部で17層をブロック状に含む)
- 10 黄色中~粗砂

基本的に自然堆積層と思われ人為的に埋め戻しは3・6層が可能性がある。

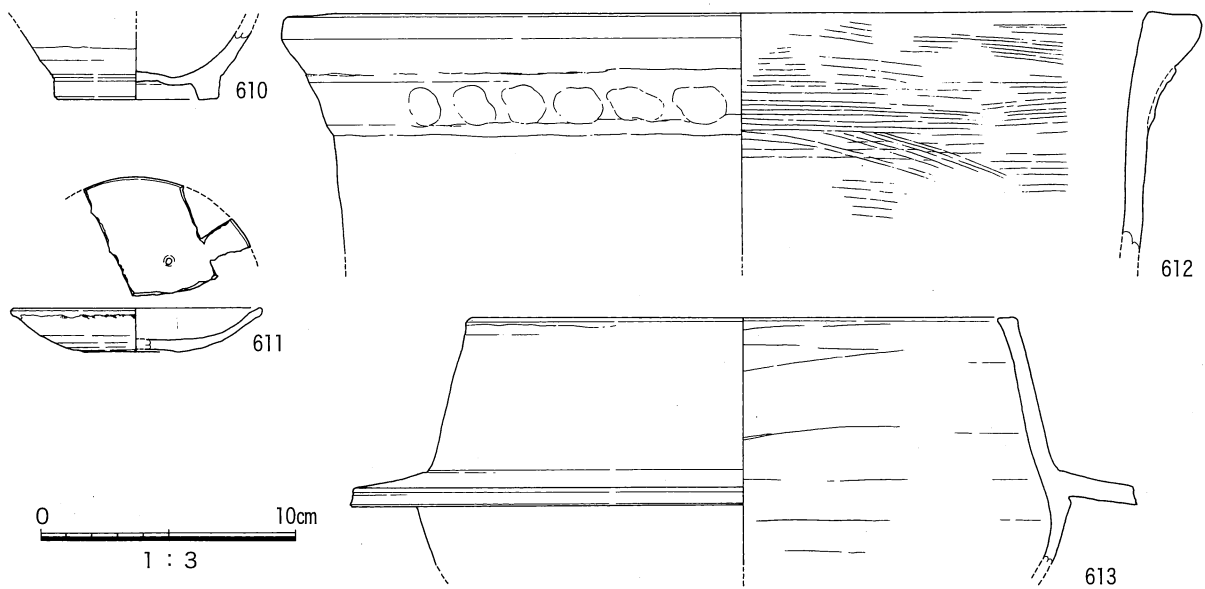
- 11 盛土・旧耕土
- 12 灰黄色粘土 (強粘質・白色粒含む)
- 13 灰黄色砂混じり粘土 (強粘質・白色粒含む)
- 14 茶味灰褐色中砂 (2~5cmのクサレ礫含む)
- 15 淡灰黄色粘土 (Fe含む)
- 16 濁灰黄茶色砂混じり粘土 (砂粒多い)
- 17 灰色中~細砂

ベース

第154図 SDg04・05 土層断面図



第155図 SDg26・47・48・86 土層断面図



第164図 SDg06・07 出土遺物実測図

見込みには草花文・抽象文等を描く。619・628の見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂塗布による窯詰めが確認でき、626にはガラス焼継の痕跡を認める。622は粗製の碗で、外面には二重網目文を認める。18世紀後半。636は外面に簡略化した草花文を描く碗である。18世紀後半～19世紀初頭。642・655は小広東碗であろう。外面には草花文ないし楼閣山水文を描き、内面縁文様は二重圏線である。647～649・651～654は広東碗である。1780～1820年代。656は青磁染付の朝顔形碗である。見込みには印判による五弁花を認める。18世紀後半。657は内面無釉であり、瓶とした。658は八角鉢である。19世紀初頭～幕末。659は火入れである。外面には青磁釉を施し、高台は蛇の目凹形高台となる。660は段重である。口縁部は無釉で、底部外縁にはアルミナ砂の塗布を認める。外面には区画文内に四方禪文・七宝繋ぎ文を描く。664～666は小杯である。664には広東碗や小広東碗に頻繁に描かれる矢筈文を描く。666は18世紀末～幕末に位置付けられる。667は瓶である。668～670は広東碗蓋である。671～676・678・680・681・696は皿である。671は内外面の縁文様（四方禪文）を呉須で描き、赤・青・緑・茶色の絵葉により内面に区画文・窓・草花文、外面に宝文を上絵付けする。明治・大正期。672・673は蛇の目凹形高台（低）の皿で、見込みに銀杏文、口縁部内面に蛸唐草文、外面に草花文を描く。674は蛇の目凹形高台（低）、675は見込みに蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂の塗布を認める。676は見込みに楼閣山水文を描く。680は蛇の目凹形高台（高）の菊皿で、見込みに足付きハマの目跡を認める。679・683は鉢である。高台は蛇の目凹形高台（高）である。696は見込みに蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂塗布を認める。684は香炉である。輪高台・三足を有し、口縁部は短く直立した後、逆L字形に屈曲する。外面には楼閣山水文を描く。18世紀前半～中頃。685～689は瓶である。685・686は外面に蛸唐草文を描く。690は灰吹きないし花生である。底部にはアルミナ砂の塗布を認める。694・695は紅皿である。型押成形。697～699は仏飯器である。699は外面に赤色絵葉による圏線の上絵付けを施す。624・634・638～640・644・646・661～663・682・691～693・700は瀬戸・美濃系磁器である。624・638～640は端反碗である。638・639は口鏽、639・644には陰刻沈線を認める。646は碗である。外面には面取りを認め、多面体状を呈する。661～663は皿である。661は型成形による五弁花ないし紗綾形文を認め、薄ダミを施す。19世紀後半。662は木型打込皿である（木型打込皿）。663には陰刻沈線を認める。19世紀後半。682は鉢ないし皿である。蛇の目凹形高台で、見込みには楼閣山水文を描く。691・692は水滴である。691は上面縁部に赤色絵葉による上絵付けを認める。19世紀頃。三川内系色絵製品の可能性も残る。692は型成形による草花文を認め、薄ダミを施す。18世紀後半～幕末。693は油壺である。体部内面上半には顕著な指押さえを認め、外面には赤・青・緑・黄・茶色の絵葉により草花文を上絵付けする。19世紀後半。700は人形である。前後型合わせ。645は瀬戸・美濃系磁器瑠璃釉碗である。昭和。677は中国産磁器青磁碗である。見込みには印花を認める。中世後半。701～705は京・信楽系陶器端反碗である。706・717・727は萩焼碗である。天目碗形を呈し、内外面には藁灰釉を施し、緑釉を点掛けする。707は陶胎染付碗である。肥前系。708・712～715は瀬戸・美濃系陶器広東碗である。太白手。外面には桜・四弁花・宝珠文、見込みには五弁花（梅花）を染付で描く。709は瀬戸・美濃系陶器刷毛目碗である。外面には直線的な刷毛目を認める。710・711・718は瀬戸・美濃系陶器腰鍔碗である。内面及び口縁部外面には灰釉、外面下半には鉄釉を施す。719は京・信楽系陶器碗である。高台は細長く、高台脇には連続する鎬、口縁部には多面体をなす面取りを認める。720・726は施釉陶器火入れである。口縁端部は肥厚し、底部には高台を有する。外面には白泥塗布後に灰釉を施釉する。721は京・信楽系陶器瓶である。外面には白泥→灰釉の施釉を認め、高台は削り高台をなす。722・723は瀬戸・美濃系陶器火入れである。外面には鉄釉を施す。後者の口縁部上端部には顕著な敲打痕を認める。724は大谷焼瓶である。高台を有し、外面には多条沈線を認める。725は京・信楽系陶器瓶である。728は肥前系陶器皿である。印花→白泥を施す。三鳥手。729は瀬戸・美濃系陶器小碗である。内外面には灰釉を施釉する。731は瀬戸・美濃系陶器刷毛目皿である。内外面には直線的な刷毛目を認める。732は軟質施釉陶器蓋である。外面には柿釉を施釉し、天井部には回転糸切り痕を認める。733～735・737～739は京・信楽系陶器灯明皿である。仕切を有さない733・734には足付きハマの目跡を認め、前者には櫛描きのアクセントを認める。733・734・737には端部に煤痕を認める。736は備前系陶器灯明皿である。仕切には3箇所のかほみを認め、その延長上に位置する口縁端部には煤の付着を認める。740・741は産地不明焼締陶器である。立方体に復元でき、外縁には沈線を認める。

742は京・信楽系陶器瓶で、把手を認める。底面には墨書を認めるが、判読できない。743は施釉陶器香炉であろう。外面には灰釉を施す。744は施釉陶器瓶であろう。蓋受けを有する。745は施釉陶器甕である。外面及び内面上半には鉄釉を施す。746～749は施釉陶器土瓶である。746は外面に鉄釉、747は白泥塗布後に灰釉を施釉する。748は柿釉を施し、外面には飛鉋痕を認める。750～754は肥前系陶器刷毛目鉢である。端部は外方へ小さく肥厚し、751には片口を認める。白泥による直線的ないし波状刷毛目を施し、灰釉を施釉する。752は18世紀後半、754は18世紀末～19世紀に位置付けられる。755～758・760は瀬戸・美濃系陶器鉢である。755は見込みに足付きハマの目跡を認める。756～758は同一個体ないし器種である。口縁部は大きく開き、端部は小さく直立する。白泥→灰釉を施し、鉄釉により草花文を描く。見込みには白泥の型紙摺りにより、桐葉文を表現する。760は器高が浅く、口縁部が「く」字形に屈曲する形態を呈する。見込みには銹絵染付により草花文を描く。759・761は皿である。759は白泥→灰釉を施し、銹絵染付により紅葉を描く。761は馬の目皿である。762は施釉陶器皿である。内外面には灰釉を施し、見込みには蛇の目釉剥ぎを認める。763・766～769は施釉陶器鉢である。763は内傾する口縁部を有し、端部を外方へ短く肥厚させる。内外面には灰釉を施す。766はボール状を呈する体部から口縁部は強く屈曲し、水平方向に開く。富田吉金窯か。767は体部から口縁部は「く」字形に屈曲して立ち上がり、端部を外方へ鋭く折り返す。把手・片口は確認できないが、把手付きの片口鉢の可能性が高い。富田吉金窯産か。768・769は口縁端部を外方へ折り曲げ、端部は丸味を有する。内外面には灰釉を施す。764は施釉陶器甕である。口縁部は直線的に内傾し、端部は玉縁状をなす。内外面には灰釉を施釉する。765は瀬戸・美濃系陶器鉢である。口縁端部を内側に引き出し、外面口縁部下には強い凹線を認める。770は施釉陶器鉢である。内面及び口縁部外面に白泥を塗布し、灰釉を施す。内面にはコバルト呉須を用いた草花文を認める。瀬戸・美濃系陶器か。771は施釉陶器浅鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を逆L字形に折り返す。内外面には灰釉を施す。772は瀬戸・美濃系陶器浅鉢である。器形は771に通ずる。773・774は瀬戸・美濃系陶器水甕である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を外上方及び内側へ強く引き出して拡張する。外面には片彫りないし列点文を認め、緑釉を流し掛けする。底部は高台を有し、見込みには胎土目を認める。775は富田焼水甕と考えた。わずかに高台を有し、見込みには胎土目を認める。776・779は施釉陶器鉢である。底部は広東碗のような形態を呈し、見込みには足付きハマの目跡を3箇所認める。776の高台内には「山に安」の墨書を認める。777・780も施釉陶器鉢である。前記した鉢とは底部形態を違え、明瞭な高台を有する。見込みには目跡を認め、777は残存部位最上位外面に明瞭な凹線を施す。778は大谷焼鉢である。口縁部は大きく外反し、6箇所に復元できる目跡を認める。781は京・信楽系陶器平碗である。782は瀬戸・美濃系陶器仏花瓶である。口縁部は大きく外反し、端部は短く直立する。リボン状の把手を有し、口縁部内面及び外面には鉄釉を施す。783・784は施釉陶器瓶である。いずれも瑠璃釉を施釉し、明治期以降の所産と考えられる。785～787は京・信楽系陶器灯明皿である。脚を有する形態を呈する。788は肥前系磁器仏飯器である。外面には赤色絵葉により圏線の上絵付けを認める。789は瀬戸・美濃系陶器火入れ・香炉である。底部は平底をなし、回転糸切り痕を認める。外面には横方向に櫛描文を施し、縦方向の鑄を入れ、銹釉を施釉する。790は施釉陶器行平鍋である。791は軟質施釉陶器鉢である。口縁部は大きく外反し、内面には型成形による斜格子文・十字花を表現する。792は軟質施釉陶器羽釜である。791・792には淡い緑色釉を施し、胎土は白色の緻密な胎土な素地であり、源内焼の可能性が高い。793・794は大谷焼碗である。口縁部は短く直立し、京・信楽系陶器半筒碗（せんじ碗）のような形態を呈する。口縁部下には2条の鋭い突線、見込みには目跡を認める。795・796は備前浅鉢である。口縁部は短く直立する。797～799は大谷焼火入れないし瓶である。底部には同心円ケズリを認め、798は箆筒底状を呈する。体部は直立し、口縁部は内側に肥厚する。外面には多条沈線を施す。800は軟質施釉陶器小杯である。底体部境には面を有し、口縁部は短く直立し、端部を断面三角形に仕上げる。底部外面を除き、柿釉を施す。801は焼締陶器蓋である。乳頭状のつまみを有し、外面には火襷を認める。802は備前系陶器灯明皿である。803は軟質施釉陶器蓋である。外面には柿釉を施し、天井部には回転糸切り痕を認める。804は肥前系陶器鉢である。内外面には白泥による刷毛目を施した後、灰釉を施釉する。見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂塗布→高台痕跡が確認できる。805・806は大谷焼鉢である。口縁部は逆L字形を呈し、見込みには目跡を認め

る。807は施釉陶器土瓶である。痕跡的な三脚を有する。808・809は大谷焼徳利（棗）である。底部には同心円ケズリを認め、体部下半に屈折点を有する。810は軟質施釉陶器土瓶である。痕跡的な三脚を有し、鉄釉を施釉する。811は信楽焼甕である。口縁部は短く直立し、横方向へ強く屈曲させる。外面には鉄釉を施釉し、色調の濃い鉄釉による流し掛けを認める。812は軟質施釉陶器蓋である。内外面には柿釉を施す。813は施釉陶器把手である。814は施釉陶器摺鉢である。口縁部は丸く肥厚し、スリメ端はナデ消される。内外面には鉄釉（銹釉）を施す。816～824は堺・明石系摺鉢である。スリメ端は口縁部整形に伴いナデ消され、体部外面には顕著なヘラケズリ調整を認め、焼き台の使用による重ね焼きにより、外面口縁部と体部の色調の差異を認めないといった特徴を有する。823・824の見込みには「*」形のスリメを認める。白神編年との対比では、816・817・819・821・824がⅡ型式、818・820・822・823がⅢ型式に該当する。825～830・833は土師質土器甕ないし井筒である。825～828は三角形に肥厚する口縁部下に扁平な突帯を有し、板材小口面を押し当てた斜格子文を認める。827の口縁部上端には「辰○」の刻印を認める。832は土師質土器浅鉢である。口縁部は直線的に外傾し、口縁部下に扁平な突帯を断続的なナデ調整でナデつける。831は土師質土器火鉢である。口縁部から連続する窓を有し、下端部は受け口状に突出する。口縁部下には内側への突起を3方向に認め、底部には三脚を有する。834・835は土師質土器焙烙である。口縁部は短く直立した後、大きく開き、佐藤分類口縁部2に該当する。834には内耳をわずかに認めるが、穿孔内容は確認できない。836は瓦質竈（おくど）である。837は瓦質浅鉢である。方形の平面形を呈し、その隅角から連続する脚を有する。口縁部は直線的に外傾し、端部は内側に三角形に肥厚する。838は瓦質七厘である。円形の平面形を呈し、三脚を有する。体部には方形の窓を有し、体部外面には型成形による草花文を認める。839は土師質土器浅鉢である。端部内面には煤痕が付着する。840は土師質土器甕である。体部中位には凹線、その上位に1条流線による波状文を認める。841は土師質土器土管である。胎土中には多量の雲母粒と少量の角閃石を認め、上端面には「横井式」という文字を刻む。842・843は土師質土器十能である。844は不明土器である。基部には突起を認め、中空構造を呈する。両側縁ないし下面、先端面には入念なヘラミガキが施され、基部及び上端面にはミガキ調整は確認できない。その性格は民俗例より、荒神棚の補強材であるとの指摘がある（日下2002）。845は瓦質羽釜である。茶釜形の口縁部形態を呈し、外面には菊花文スタンプを認める。846は土師質土器焙烙である。内耳を有し、貫通しない穿孔を認める。佐藤編年AⅠ-4型式に該当する。847は土師質土器甕である。口縁部は内湾し、端部を内側に折り曲げることにより肥厚させる。口縁部外面には2条の凹線を認める。848・849は瓦質甕である。後者の口縁部には櫛描波状文と直線文を認める。852～857は瓦質羽釜である。852は小型品で、器壁も薄い。853・854の口縁部は内湾気味に立ち上がり、後者には櫛描波状文・直線文を認める。856は口縁部が直線的に内傾し、855・856の口縁部には型成形による草花文を認める。858・859は土師質土器甕である。858の体部下端には穿孔を認める。860は板状を呈し、内面には入念な板ナデ調整を施す。外面には「みまや村 津内山東 善○（善カ）」の刻印を認める。内面には煤が顕著に付着し、竈（おくど）の可能性を考えておきたい。刻印は御厩での生産を示す。861・862は土師質土器焙烙である。861は口縁部が短く直立し、端部は短く、太く屈曲する。862も短く直立する口縁部となるが、比較的長く延びる。後者は佐藤分類口縁部2に該当する。863・864は瓦質七厘である。口縁部は内側に肥厚し、体部は直立する。外面は型成形により波を表現し、亀を貼付する。口縁部下と底部付近に強い凹線を認め、底部には三脚を有する。865は瓦質火鉢である。底部は丸味を有し、不明瞭な底体部境に高台を貼付する。866は瓦質鉢である。ボール状の形態を呈し、口縁部上端に把手を認める。867は土師質土器焙烙である。口縁部は短く直立した後、大きく開く。868・869は瓦質羽釜である。前者は口縁部が直線的に内傾し、後者は内湾する。870は瓦質火鉢である。底部形態は865に共通し、体部には受け口を有する窓を認める。胎土中には雲母粒と角閃石を多量に含有する。871は瓦質火鉢である。体部は直立し、底部外縁に体部から連続する高台を有する。

872は石製硯である。海には墨痕跡を認める。873は石臼（下臼）である。中央に円孔を認め、上端面には紗綾形の溝を彫り込む。砂岩製。874は鉄滓である（椀形鍛冶滓）。

875・876は軒平瓦である。後者は下向きの半裁花菱文を中心飾りとし、半肉状を呈する。875にはキラコ（剝離材）の塗布を認める。877～884は軒丸瓦である。いずれも瓦当面にはキラコの塗布を認める。885は軒棧瓦で

ある。右側に丸瓦部を有し、珠文は小さく、16個を数える。886は軒丸瓦片と考えられる。外面には「辰カ」の刻印を認める。887・888は平瓦である。端部には「林善」の刻印を認める。

以上、SDg29出土遺物は明治・大正期まで下る遺物として、645・740・741・743・744・770・783・784・800・801がある。陶磁器では肥前系陶器・瀬戸美濃系磁器端反碗が主体を占め、1820～60年代の製作年代が想定できる。さらに、瀬戸・美濃系磁器木型打込皿（662）は幕末前後に位置付けられる。なお、在地産土師質土器・瓦質土器の編年の確立は行われていないため、年代的な位置付けは困難であるが、焙烙において型成形の製品は認められない。出土遺物による限りは、19世紀以降、近代を経て、昭和19年に埋没した状況が窺える。しかし、SDg05と同様に坪界線に合致する溝であり、先行する中世段階のSDg28・30・31を考慮すると、17世紀初頭前後に再掘削された可能性を想定しておきたい。

SDg47（第155・187～189図）

調査区東側の北半に位置し、北西から南東に伸びる溝で、東端では直角に屈曲して南に折れるが、角地の土坑により明確ではない。この土坑も溝と一体の施設の可能性もある。ただし、遺構全体の性格は不明である。断面は皿状を呈し、2層の埋土からは自然埋没と考えられる。溝の西端は、SDg29と直角に合流している。

889～914はSDg47出土遺物である。

889・890は瀬戸・美濃系磁器碗である。889は赤色と緑色絵葉により扇文を上絵付けする。890は小碗である。口銹。891は肥前系磁器小杯である。底部は蛇の目凹形高台（低）となり、外面には矢筈文を描く。892は施釉陶器鉢である。内外面には鉄釉の施釉を認める。893は京・信楽系陶器灯明皿である。見込みには目跡を認める。器壁がやや厚く、口径も小さい。富田吉金窯産か。894・895は京・信楽系陶器有脚の灯明皿である。896は施釉陶器瓶である。把手を有し、かすかに高台を認める。白泥による断続的な刷毛目を施した後、灰釉を施す。897は大谷焼徳利である。899・900は信楽焼甕である。口縁部は短く直立し、端部は強く屈曲する。内外面には鉄釉を施し、900には鉄釉の流し掛けを認める。901は土師質土器甕である。口縁部は内側に強く突出し、外面には突起を認める。胎土中には多量の雲母と角閃石を認める。902は土師質土器竈（おくど）である。内面には入念な板ナデ調整を認め、煤が顕著に付着する。さらに、底部には煤の付着を認めないため、土中に埋没していたと考えられる。903・904は瓦質焙烙である。型成形により、端部は四角形を呈する。底面には剥離材に用いた砂が付着し、未調整となる。905は土師質土器炬燵である。四隅に脚部を有し、天井部には煤痕跡を認める。胎土中には多量の雲母と角閃石を含有する。906～908は土師質土器土管である。外面には丁寧な板ナデ調整、内面には顕著な指押さえを認める。いずれも胎土中に多量の雲母と角閃石を含有する。909・910は土師質土器七厘である。体部中位が最も細くなり、底部ないし口縁端部にかけて緩やかに開く形態を呈する。端部は内側に強く引き出し、口縁端部内面には突起を有する。底部は幅の広い切り高台状となり、体部下半に逆台形の窓を認める。体部中位内面にはさな受けと考えられる突帯を貼付する。さらに、外面には口縁端部・体部中位・底部に特徴的な凹線を認める。911・912は土師質土器五徳と考えた。胎土中には多量の雲母と角閃石を認める。913は軒平瓦である。瓦当面にはキラコの塗布を認める。914は丸瓦片である。外面には「○次郎」の刻印を認める。

以上、SDg47出土遺物は陶磁器では、18世紀末～幕末に属するものが主体を占めるが、896・898は明治期以降の所産となろう。在地土器では、焙烙において型成形を認め、明治期前半期の製作年代が想定できる。

SDg48（第155・190図）

SDg48は、SDg47の南側を並行して伸びる短い溝で、時期的にも同時に並存していた可能性が高い。

915はSDg48出土遺物である。堺・明石系摺鉢。口縁端部内面には突出する段を認め、白神編年I型式の所産となる。出土遺物の年代観は18世紀中葉前後となる。

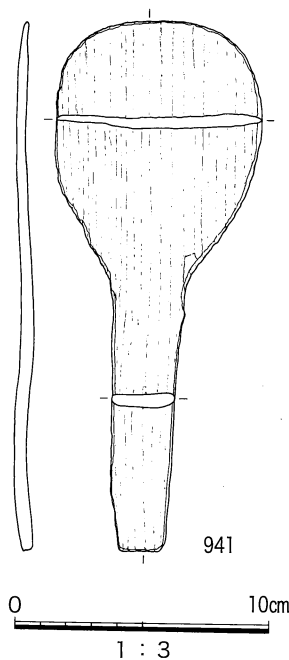
SDg86 (第155・191~194図)

SDg86は、SDg29から直角に屈曲する溝で、先のSDg47とほぼ並行して伸びる溝である。ただし、この溝の規模はSDg47の倍近くあり、SDg47はこの溝やSDg29を基幹水路とする区画溝の性格が考えられる。このため、これら3本の溝に囲まれた方形区画内に存在するSBg13~16などこの時期の掘立柱建物跡とも考えられる。

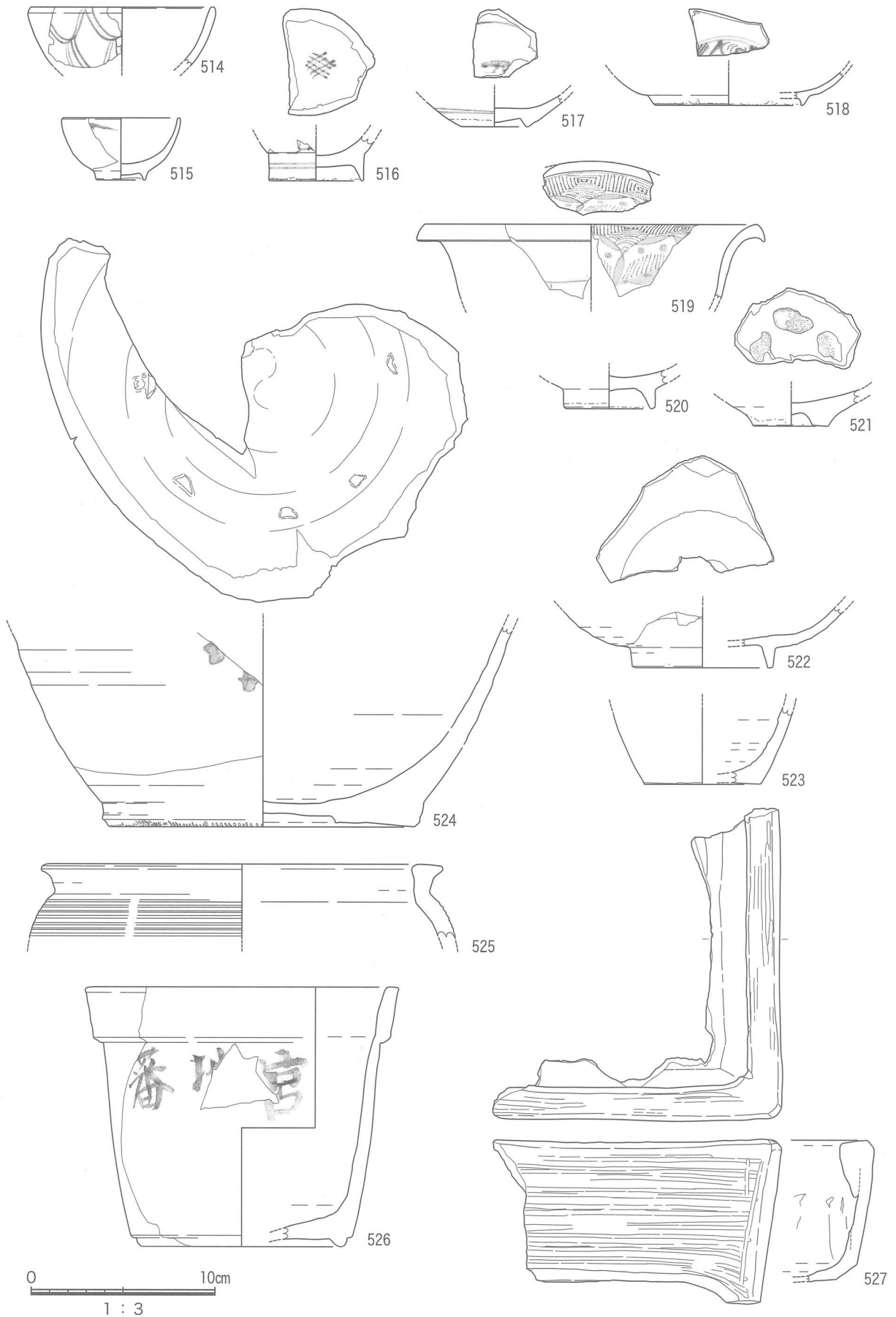
916~941はSDg86出土遺物である。

916は肥前系磁器皿である。見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂を認め、底部は無釉となる。波佐見窯産。18世紀代。917は中国産白磁碗である。横田・森田分類白磁碗IV類(横田・森田1978)。918は瀬戸・美濃系磁器火入れである。919は肥前系磁器火入れである。外面及び口縁部内面には白磁釉を施釉し、底部は無釉となる。江戸後期。920は肥前系磁器染付皿である。見込みには草花文、外面には唐草文を描き、高台内にはハリ支えを認める。921は富田焼磁器皿である。口縁部は大きく開き、内面には2条の圏線を認める。高台内縁部には角枠内に「富」の刻印を押印する。922・923は肥前系陶器銅緑釉皿である。見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂の塗布を認め、底部は無釉となる。内野山窯産。924は施釉陶器鉢である。広東碗に共通した底部形態を呈し、内外面には灰釉を施す。925は備前系陶器灯明皿である。926は焼締陶器甕である。927は瀬戸・美濃系陶器灰釉片口鉢である。端部は肥厚し、内部下端を小さく引き出す。928は大谷焼甕である。929は施釉陶器甕である。内外面には鉄釉を施釉し、見込みには胎土目を認める。幅広の低い高台壘付には丸に「い」の刻印を押印する。930は備前摺鉢である。上端部でわずかにスリメ間隔を認める。931は堺・明石系摺鉢である。白神編年II型式2段階。932は土師質土器土管である。外面には「甚」の刻印を認める。胎土中には多量の雲母と角閃石を含む。933は瓦質羽釜である。口縁部は内湾し、外面には数条の沈線を認める。934は軒平瓦である。935は軒丸瓦である。丸瓦部と瓦当面の接合部にはカキメ状の切り込みを認める。936~938は軒棧瓦である。936は丸瓦部が左、平瓦部が右側、937・938はその逆となる。939は石製硯である。内面には墨の付着を認める。940は石臼(上臼)である。下面は顕著に磨り減り、中央部には下臼との接合孔を認める。角礫凝灰岩製。941は木製杓文字である。

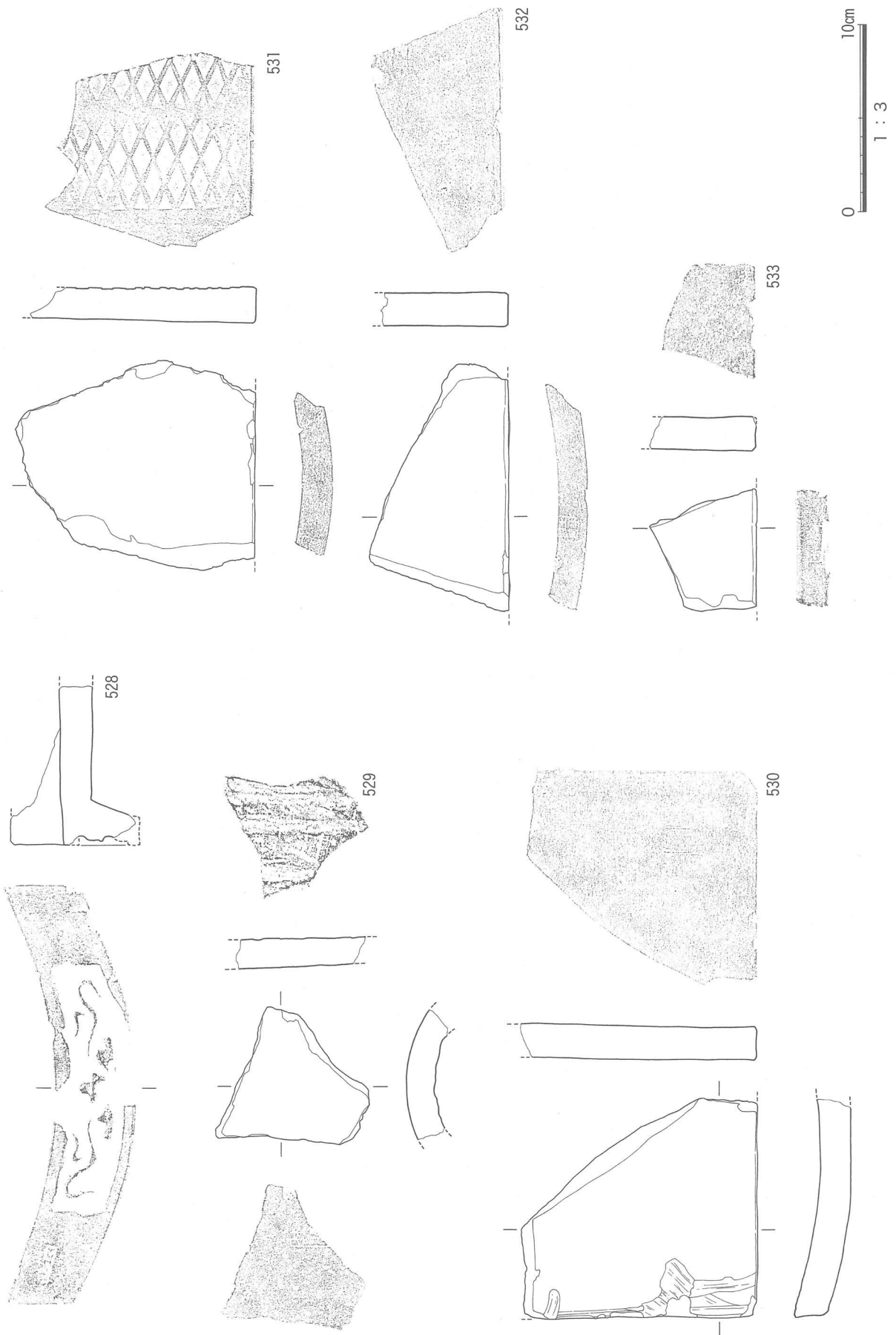
以上、SDg86出土遺物は陶磁器において、明治期以降の所産も認めるが(918)、大多数は19世紀前半~幕末前後に属する。なお、17世紀後半に属する陶磁器も数点認める(916・922・923)。



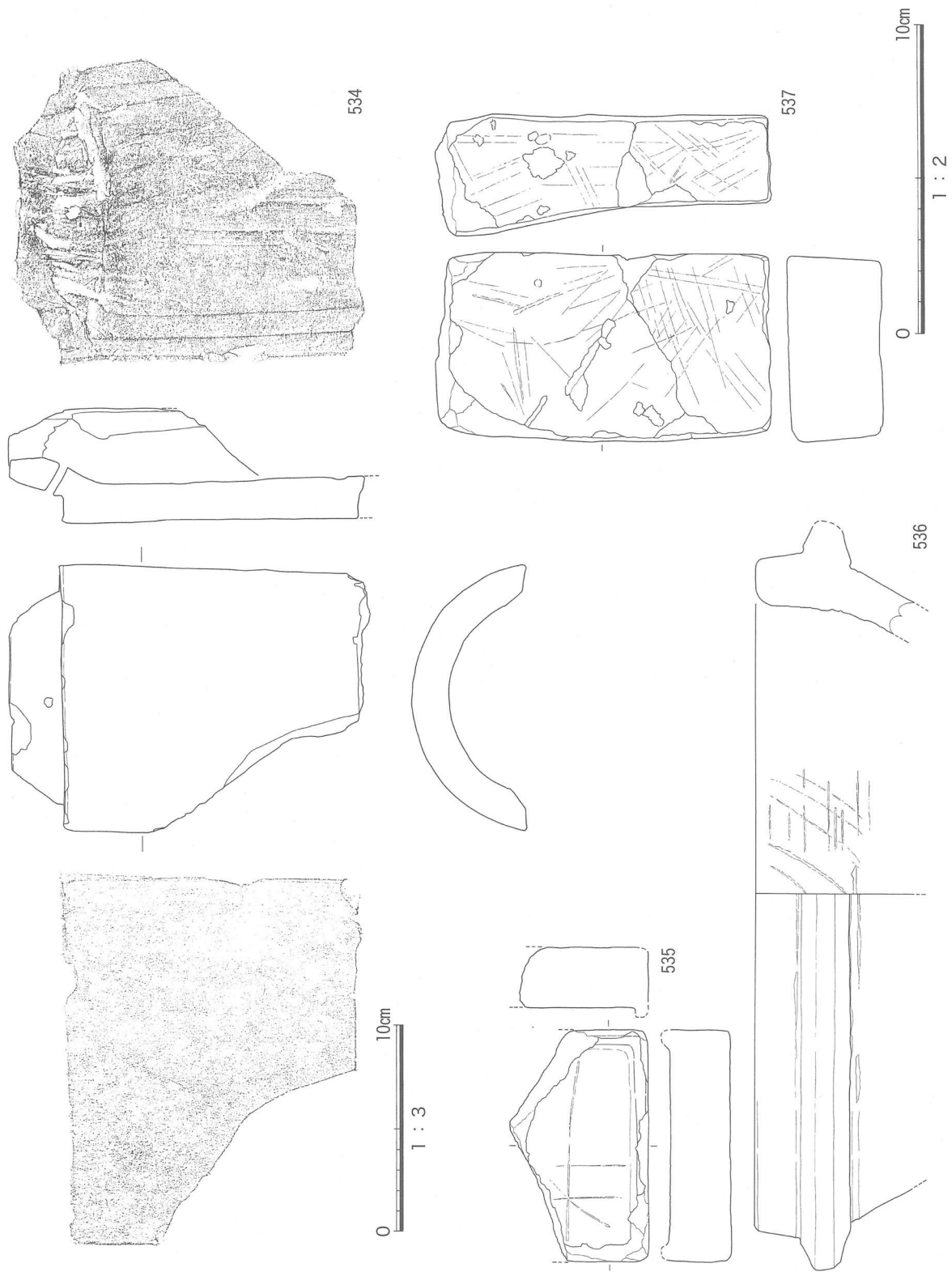
第194図 SDg86 出土遺物実測図(4)



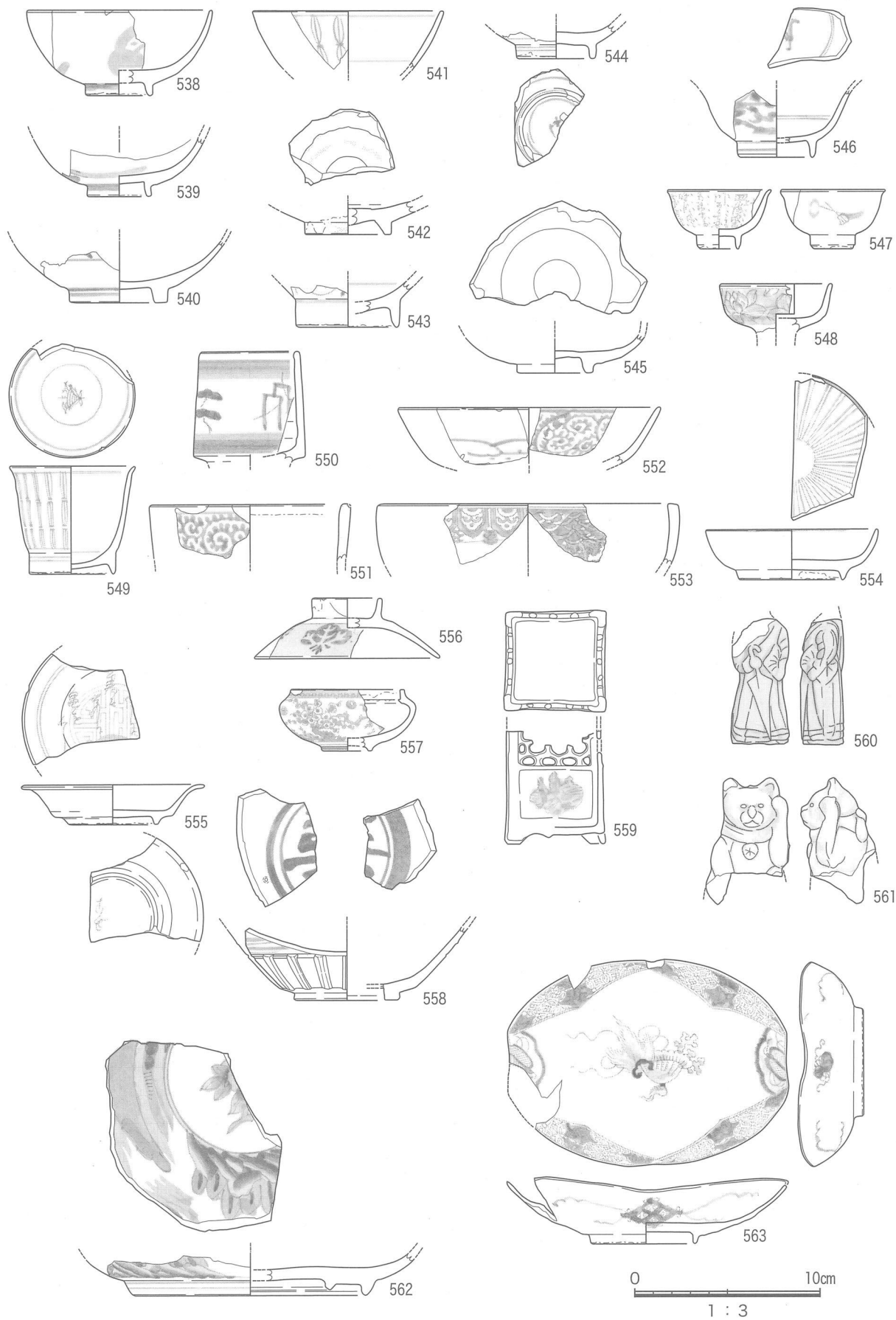
第156图 SDg02 出土遺物実測図 (1)



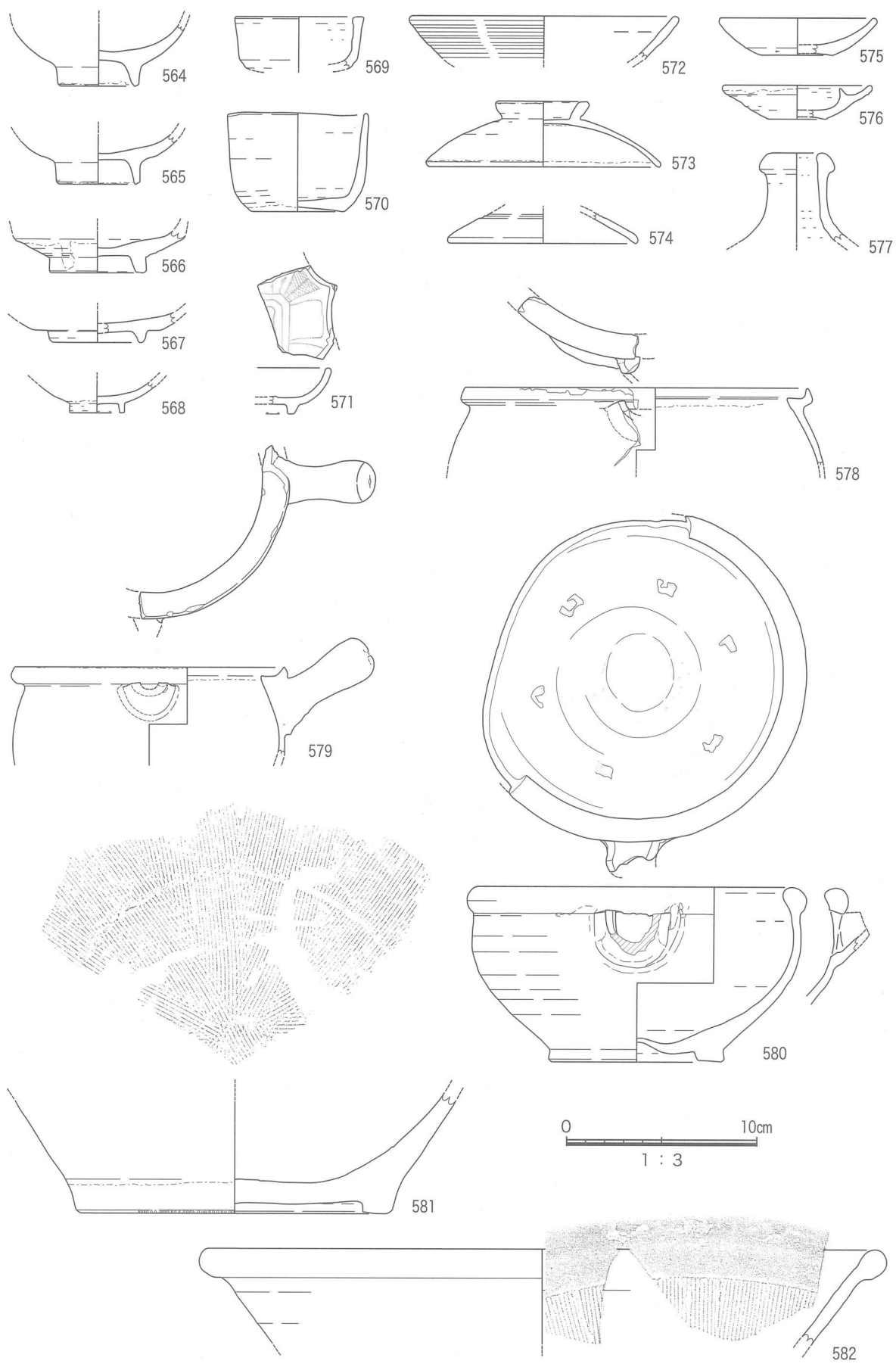
第157図 SDg02 出土遺物実測図 (2)



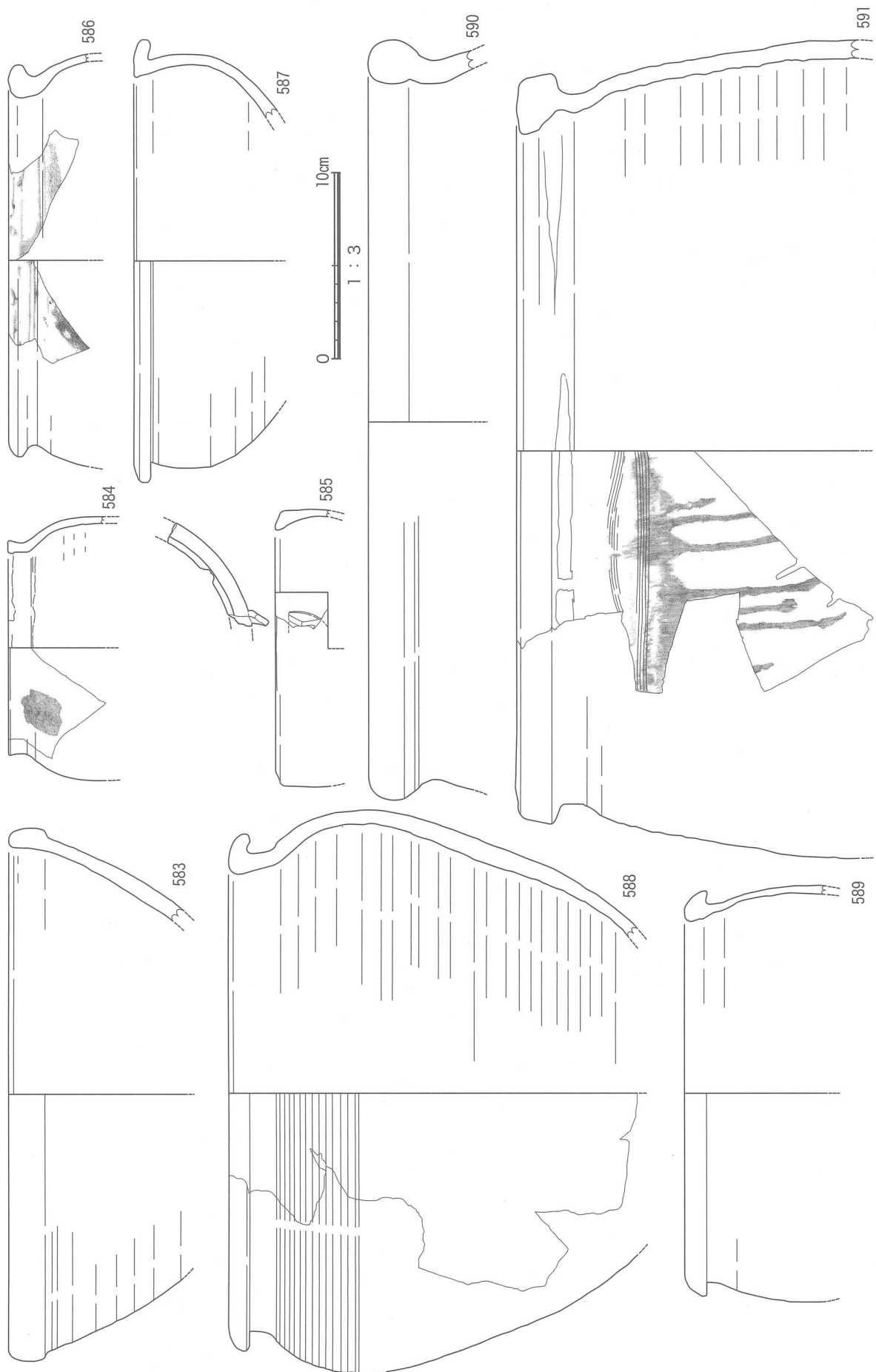
第158図 SDg02 出土遺物実測図 (3)



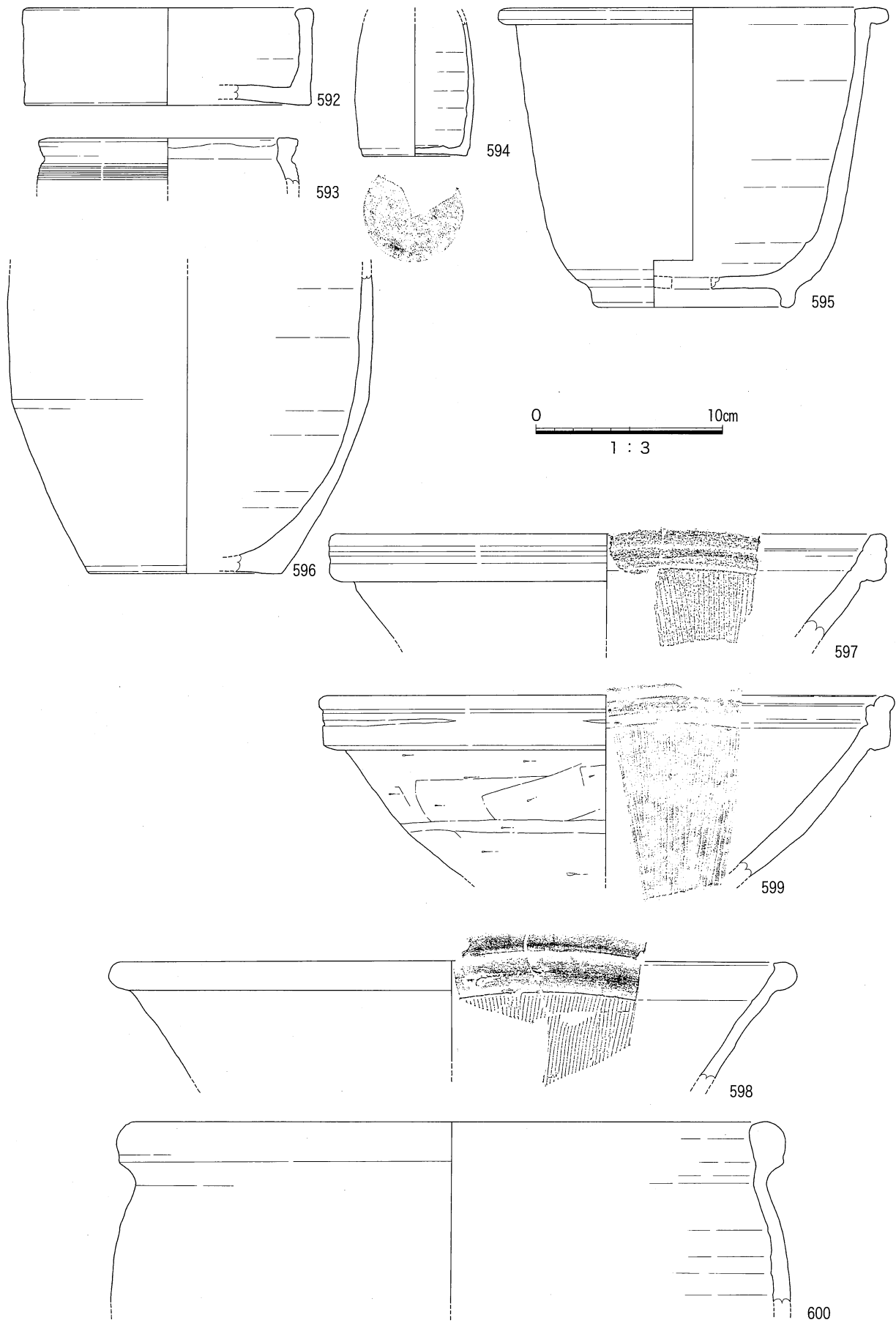
第159图 SDg05 出土遺物実測图 (1)



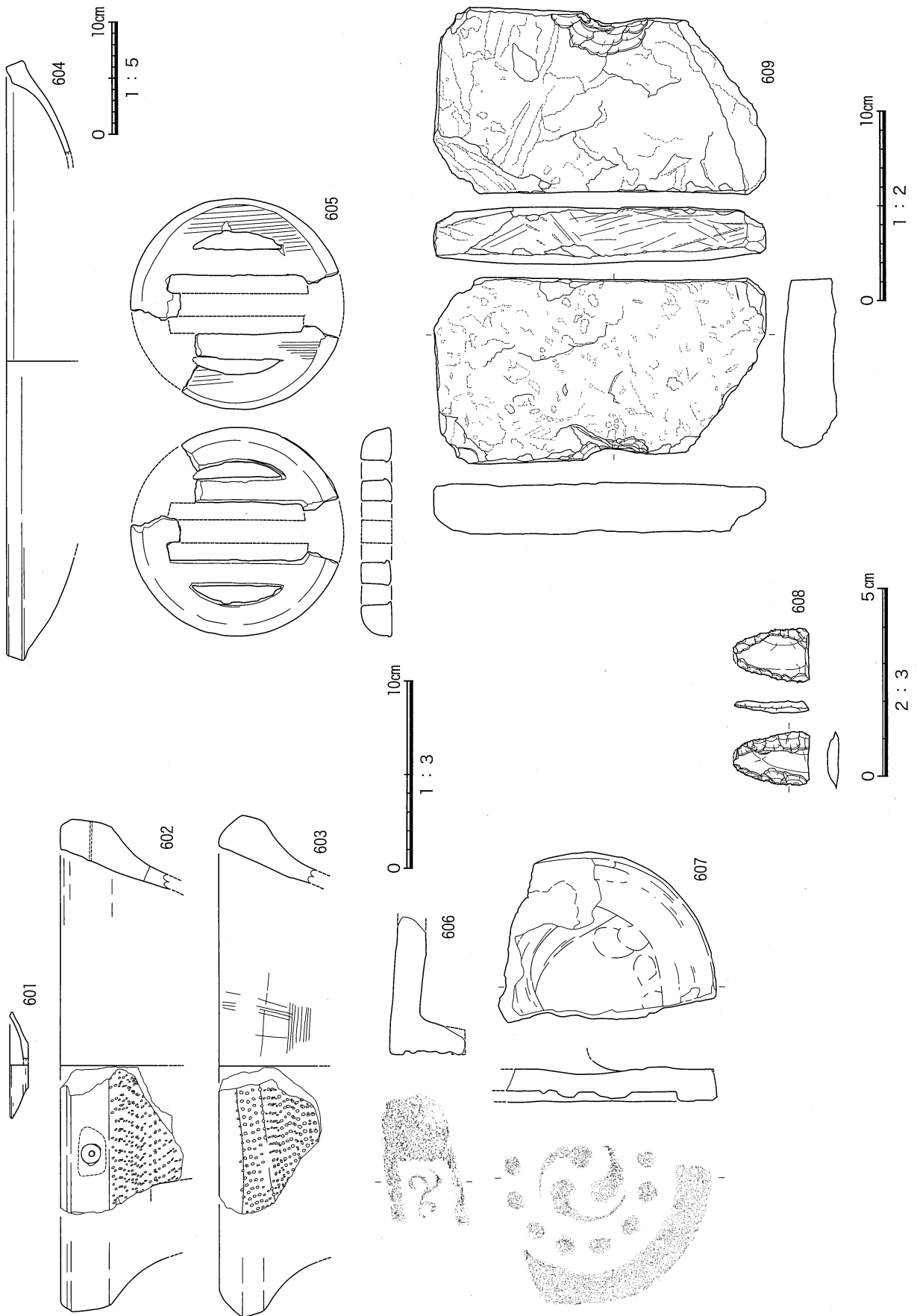
第160図 SDg05 出土遺物実測図 (2)



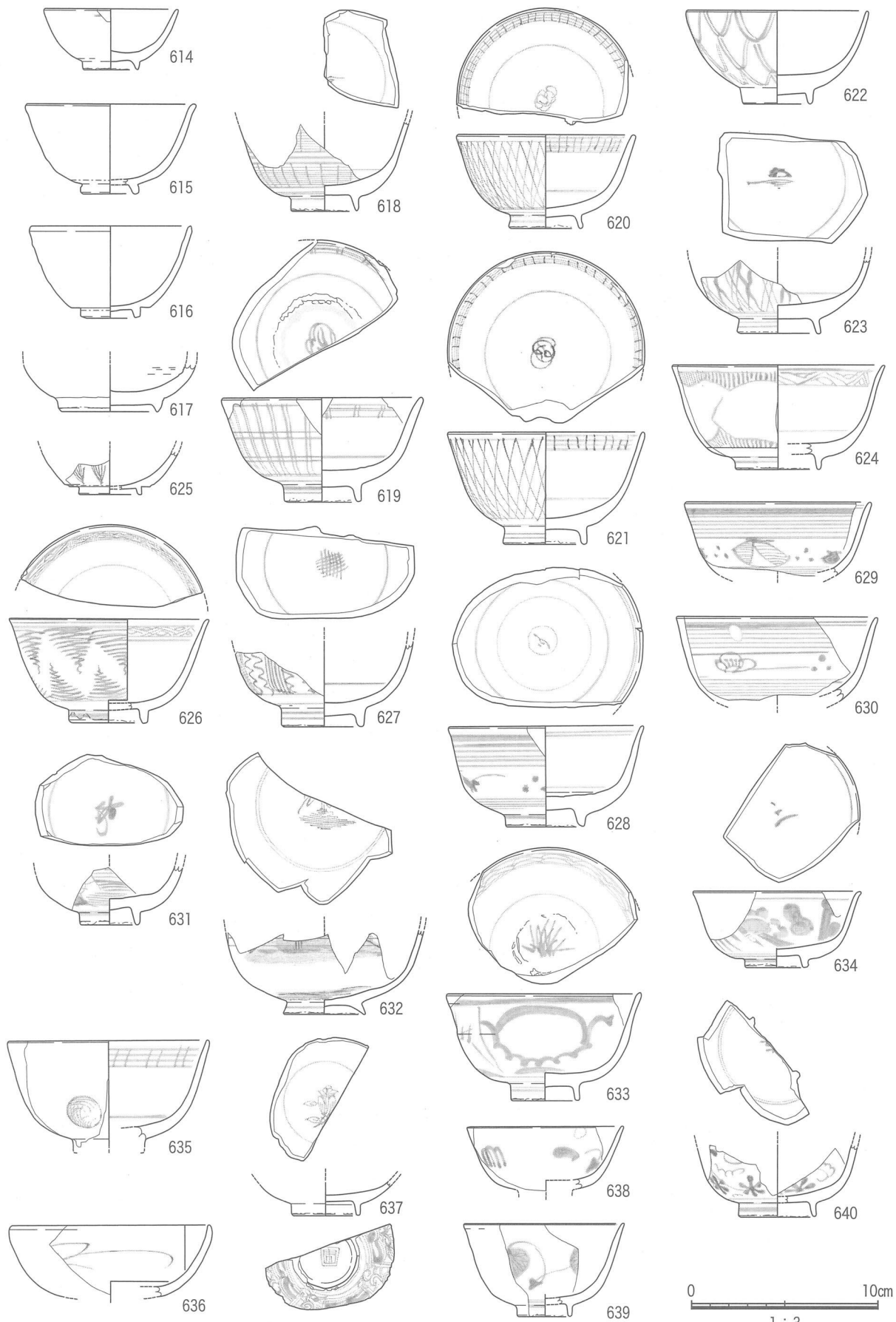
第161図 SDg05 出土遺物実測図 (3)



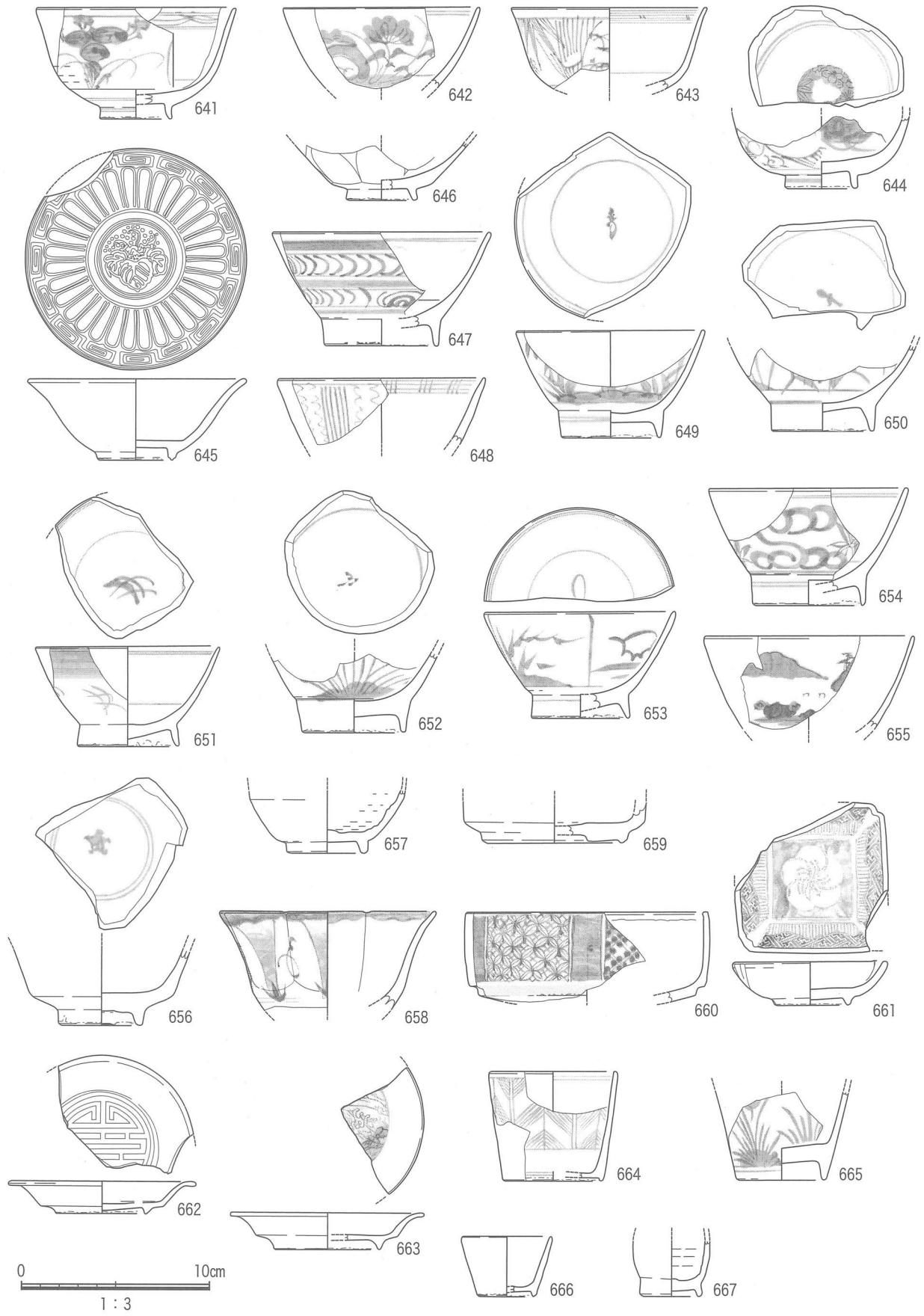
第162図 SDg05 出土遺物実測図(4)



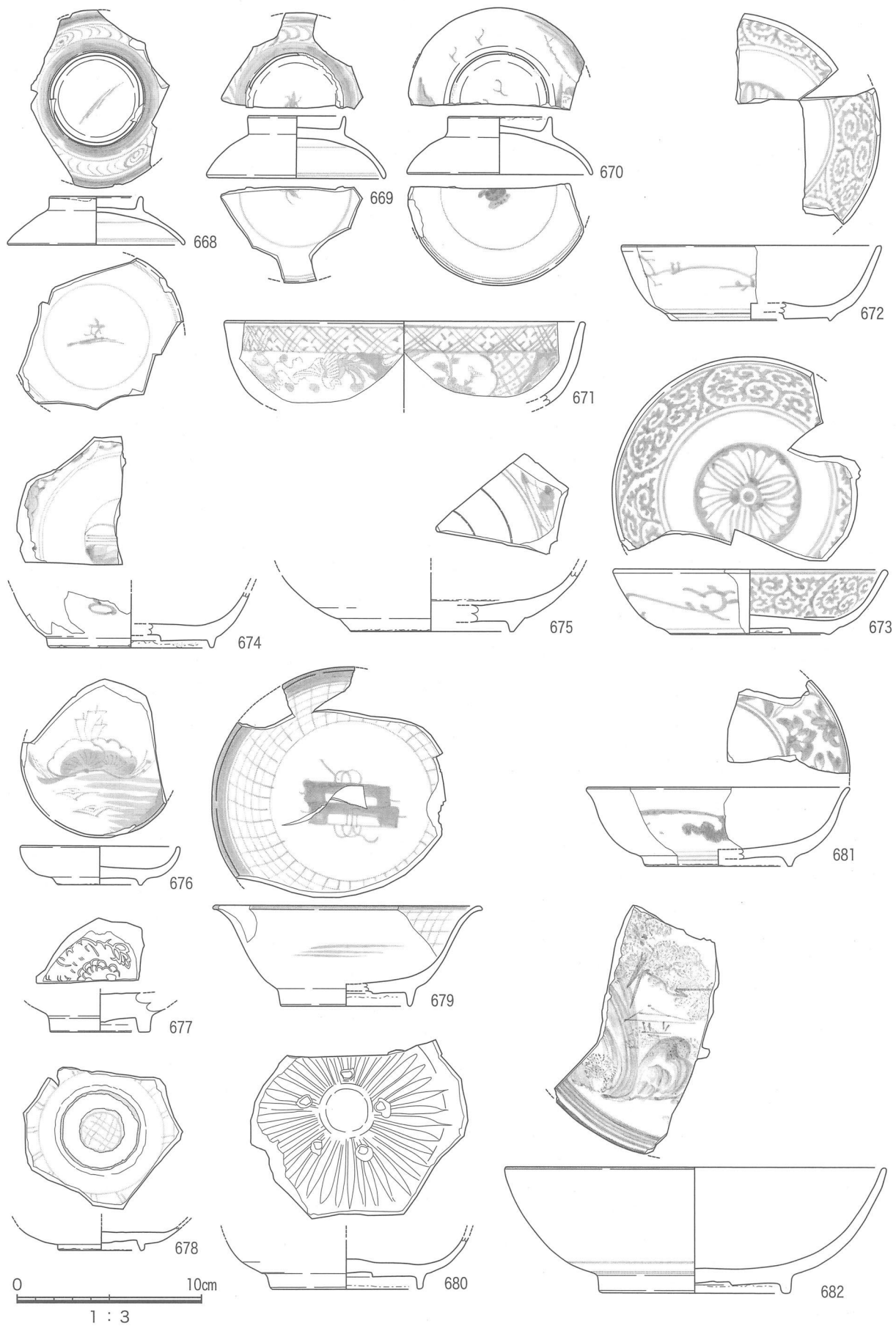
第163图 SDg05 出土遺物実測図 (5)



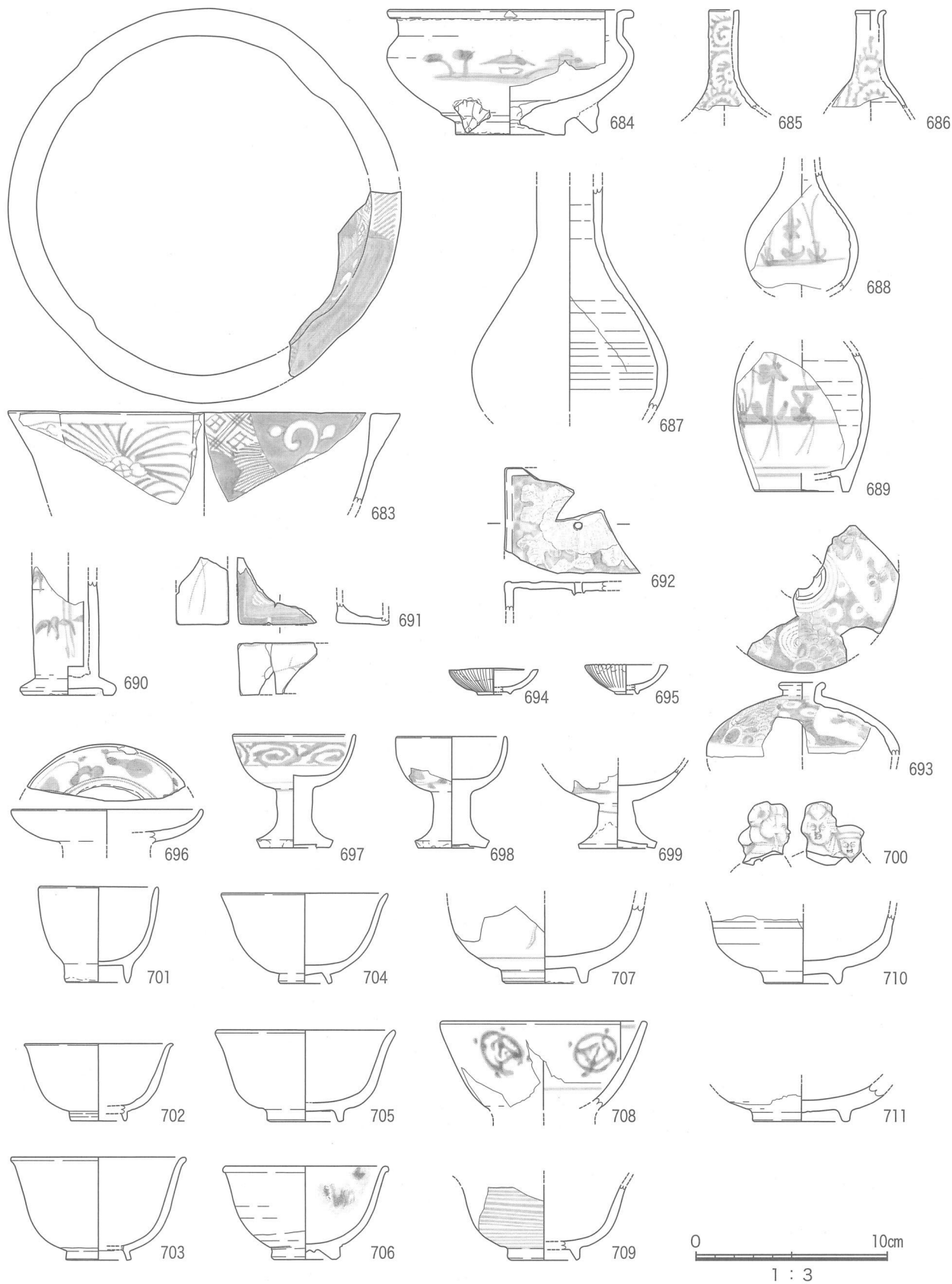
第165図 SDg29 出土遺物実測図 (1)



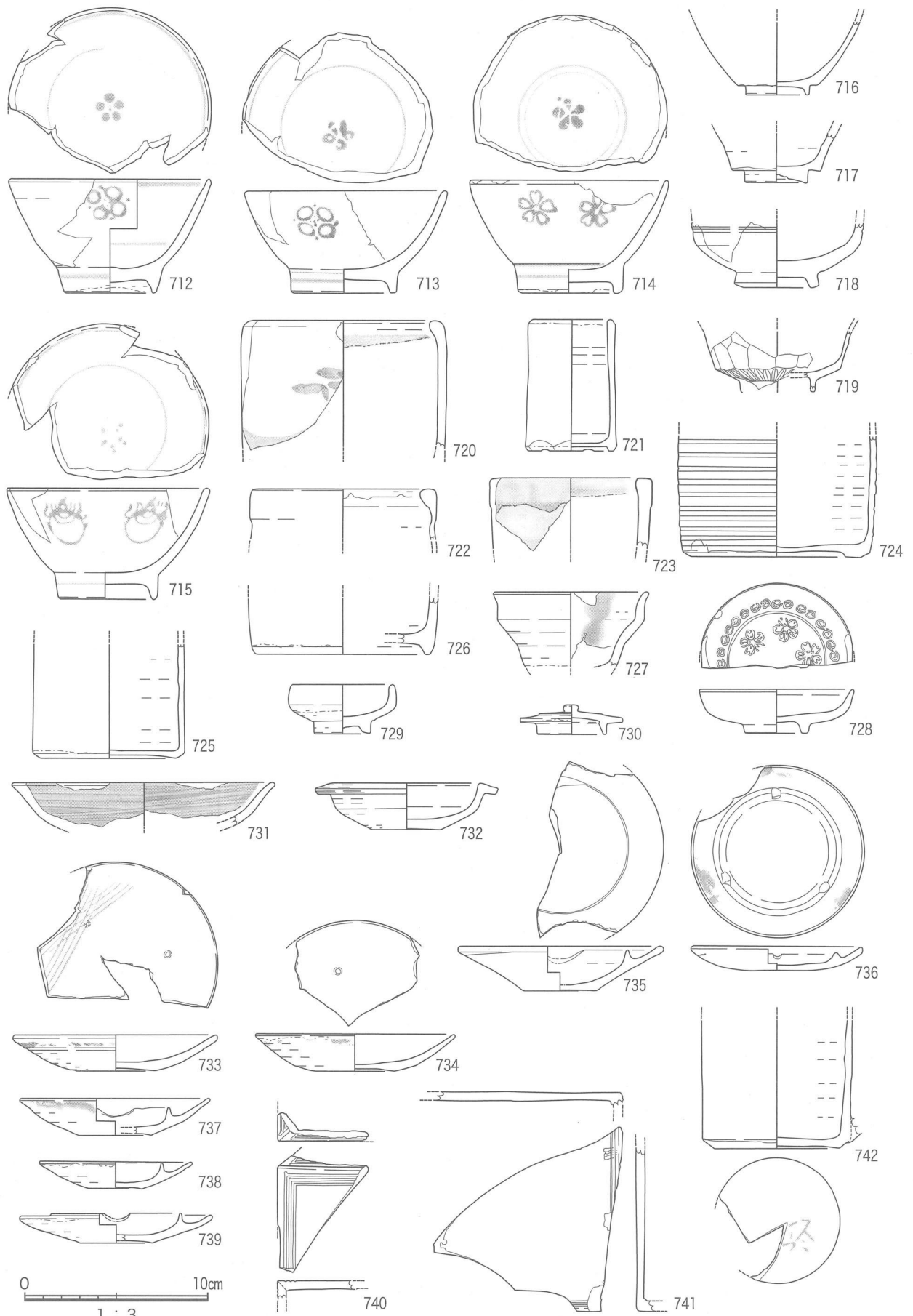
第166図 SDg29 出土遺物実測図 (2)



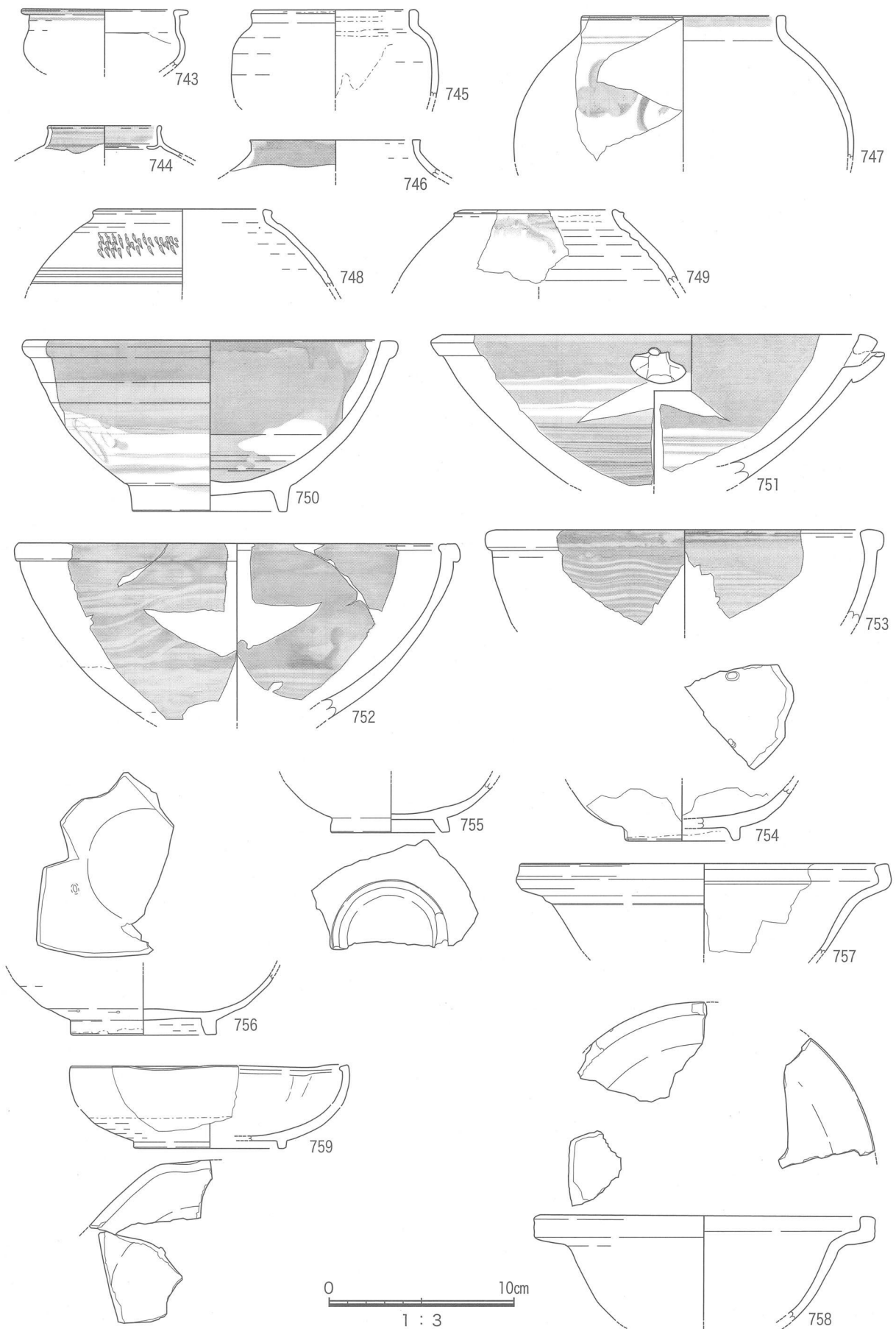
第167図 SDg29 出土遺物実測図 (3)



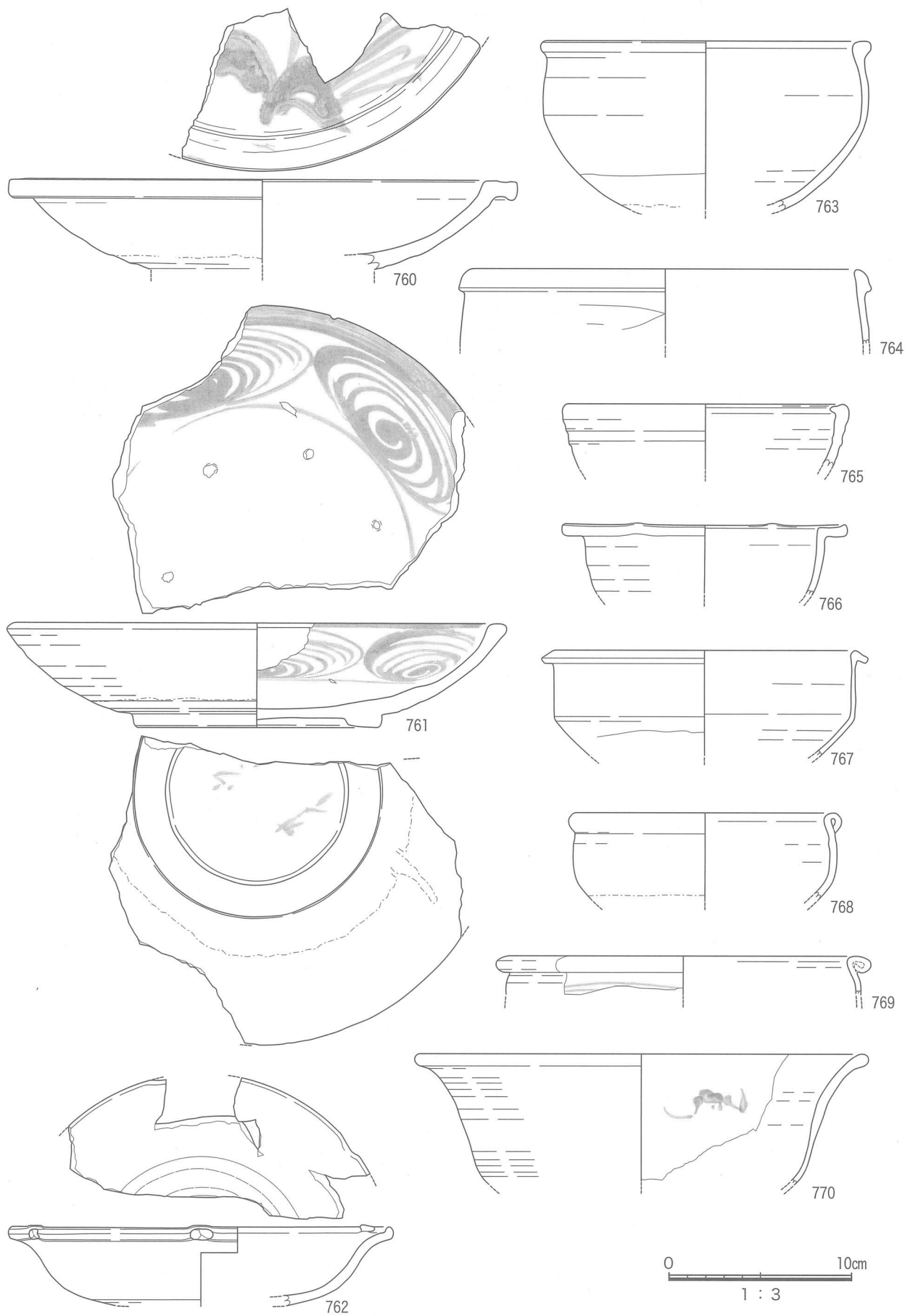
第168图 SDg29 出土遺物実測図 (4)



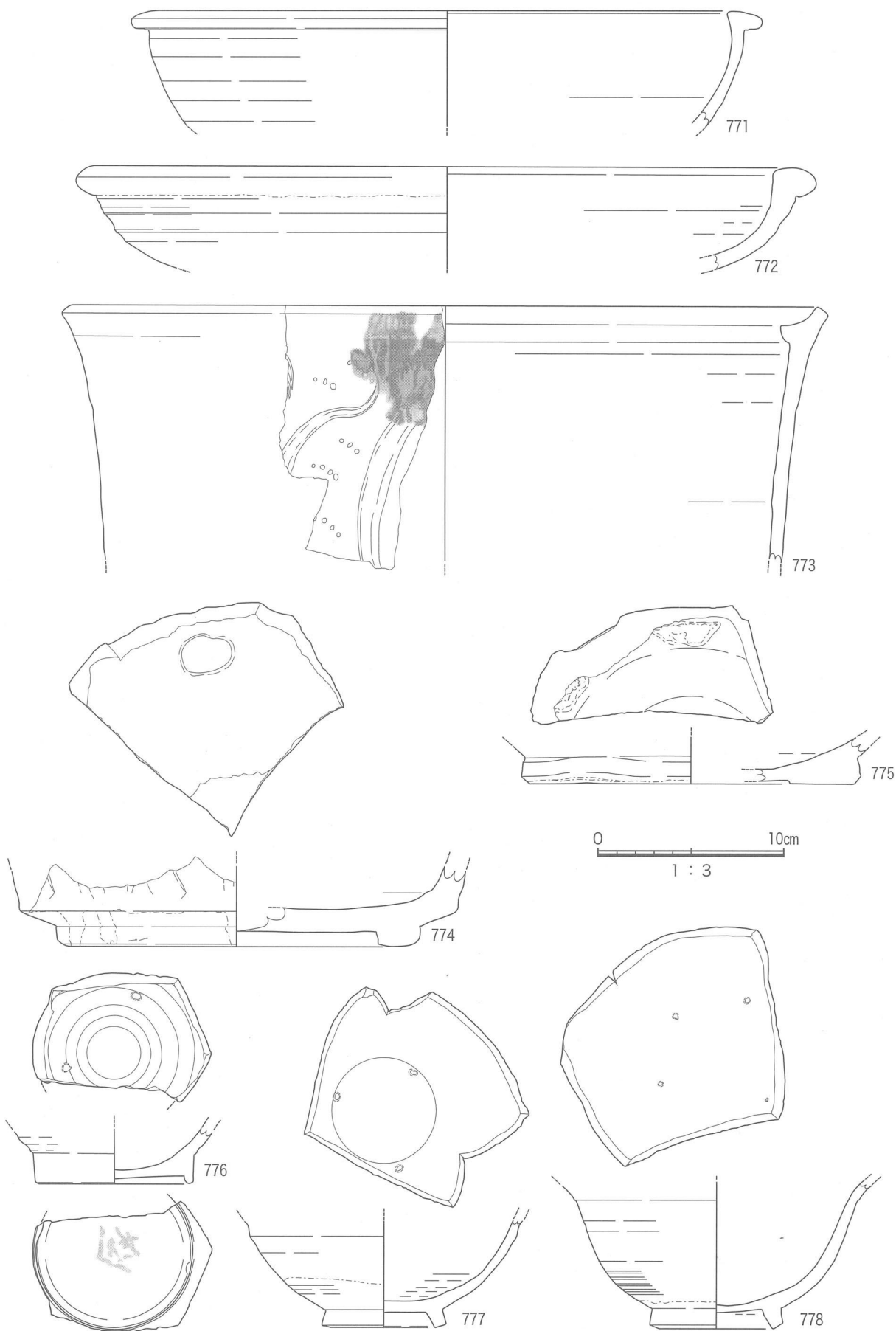
第169图 SDg29 出土遺物実測图 (5)



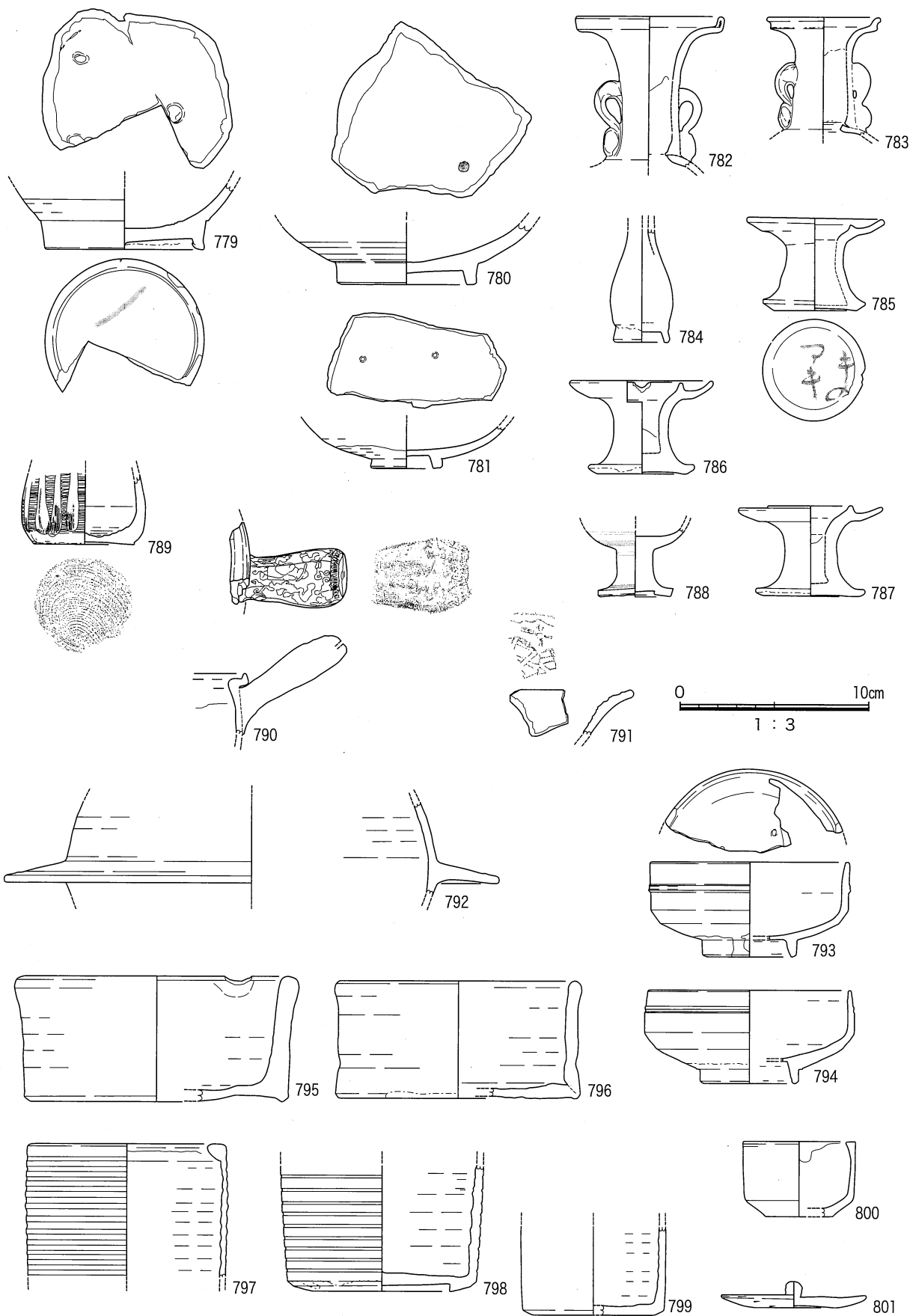
第170図 SDg29 出土遺物実測図 (6)



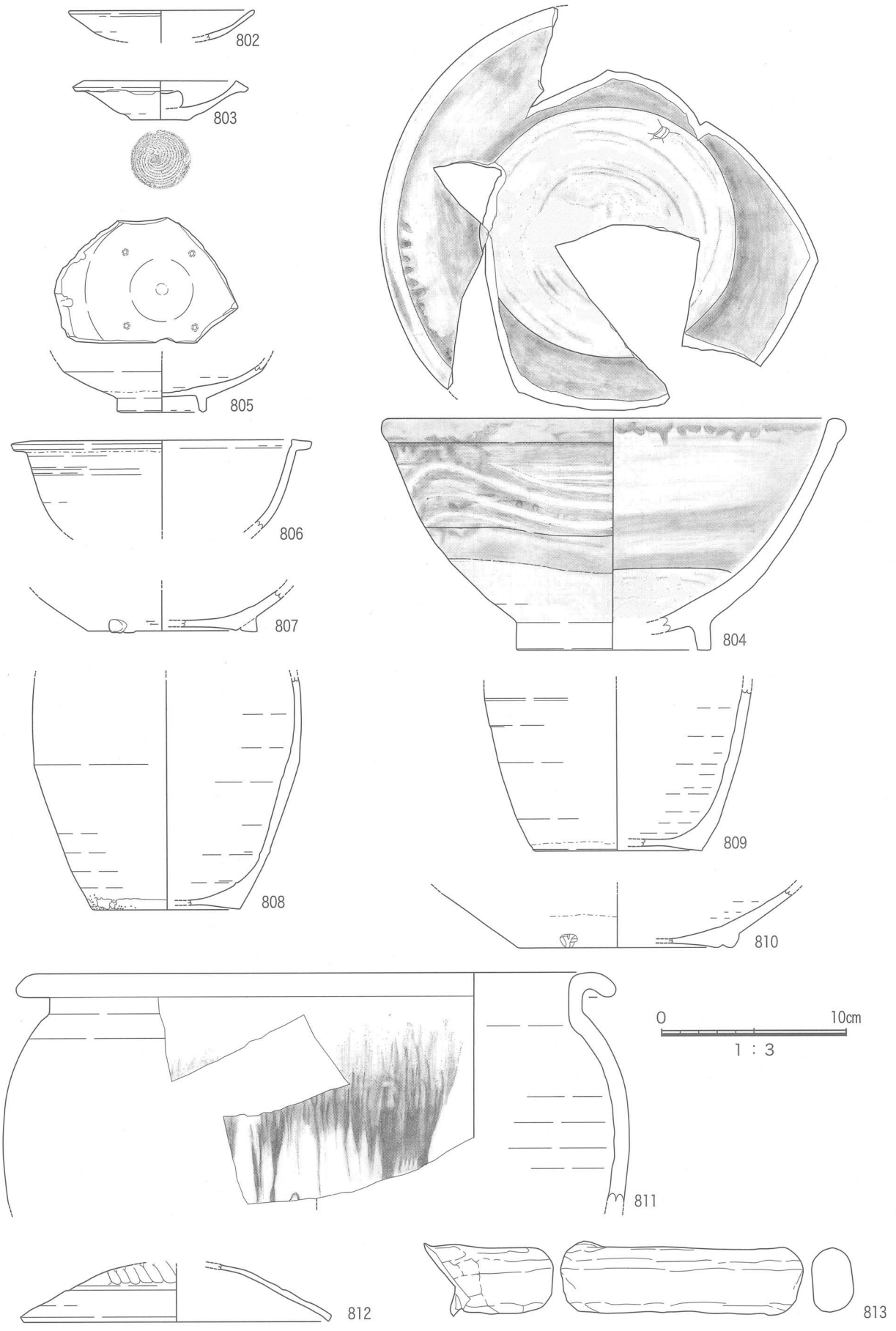
第171図 SDg29 出土遺物実測図 (7)



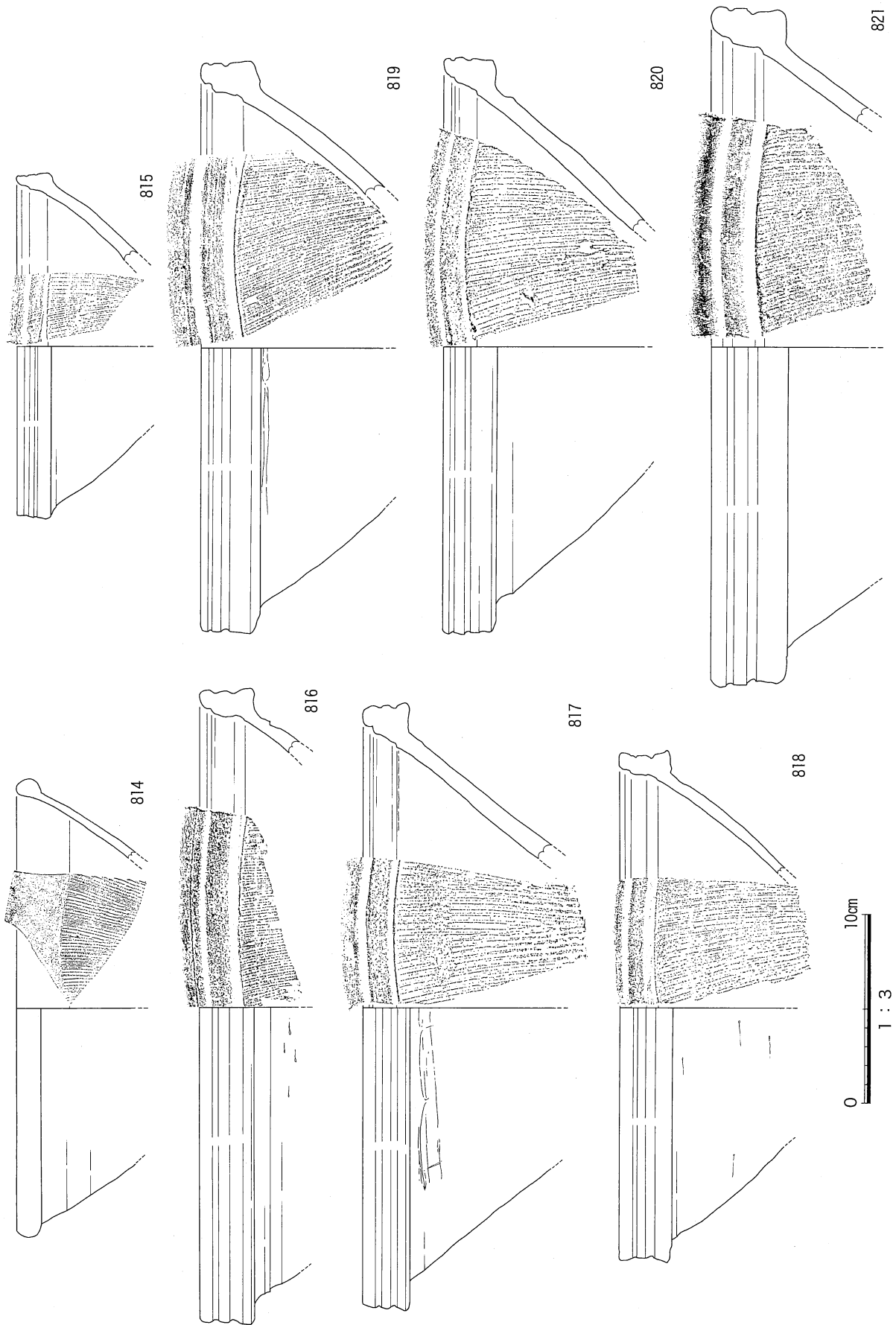
第172図 SDg29 出土遺物実測図 (8)



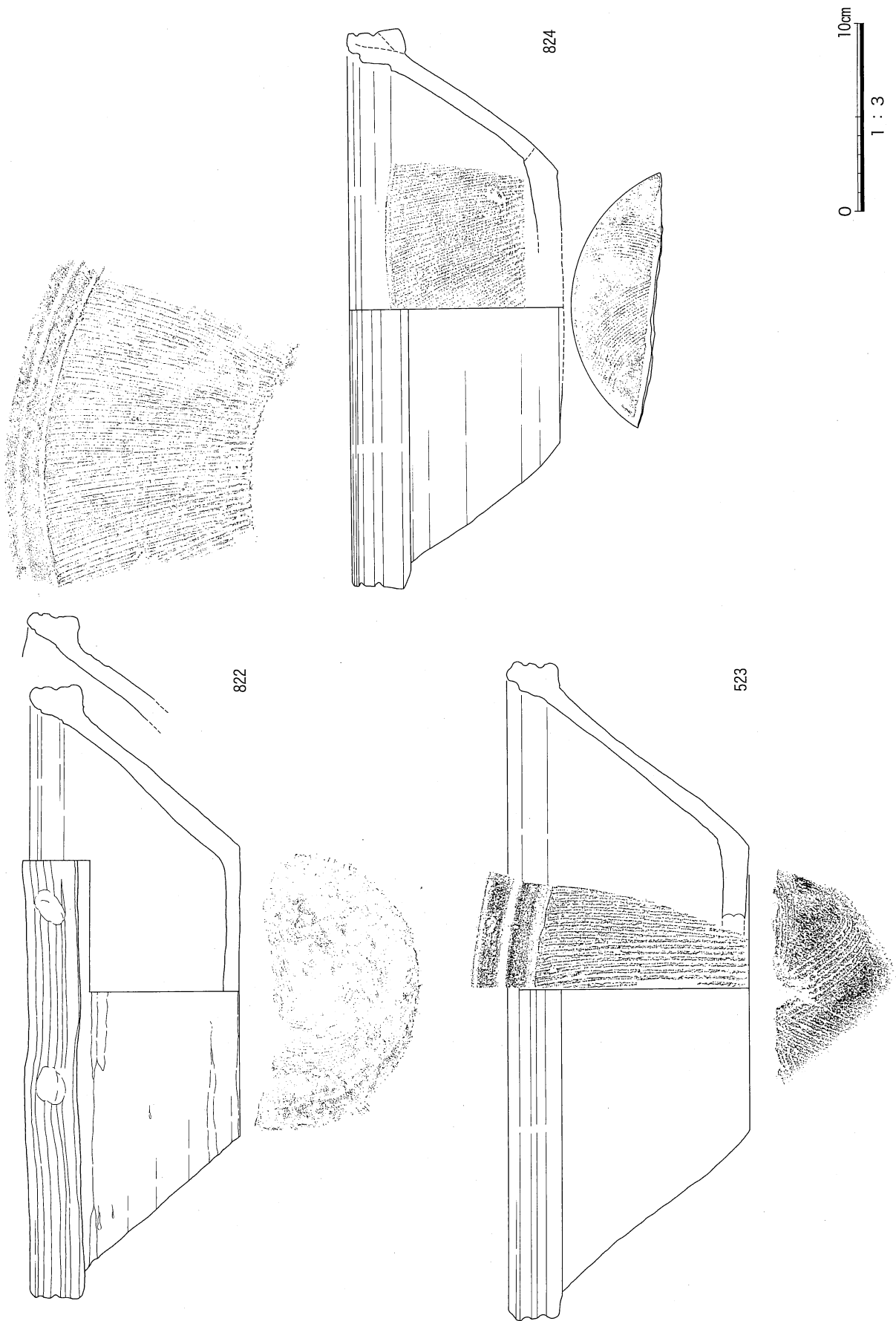
第173図 SDg29 出土遺物実測図 (9)



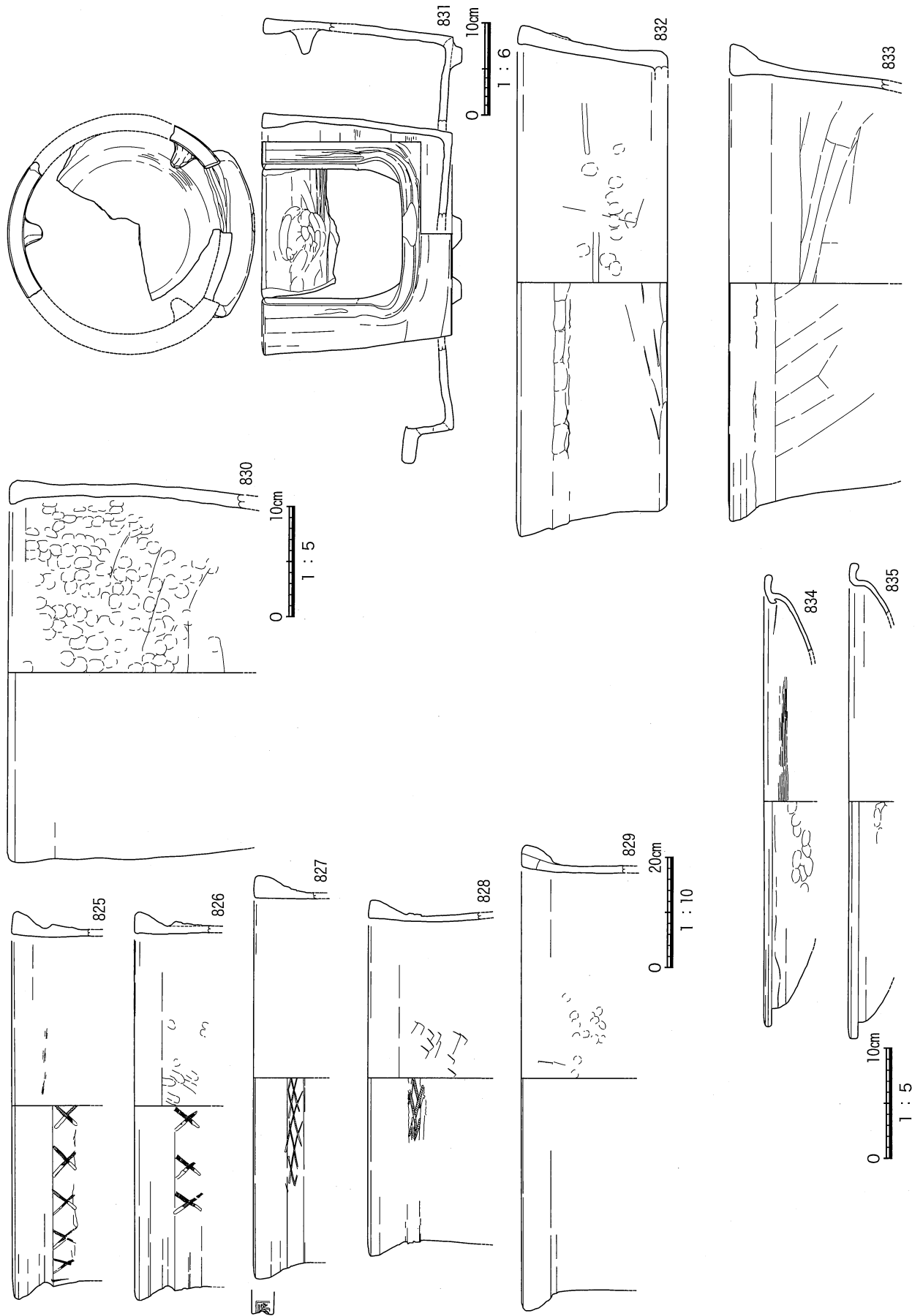
第174図 SDg29 出土遺物実測図 (10)



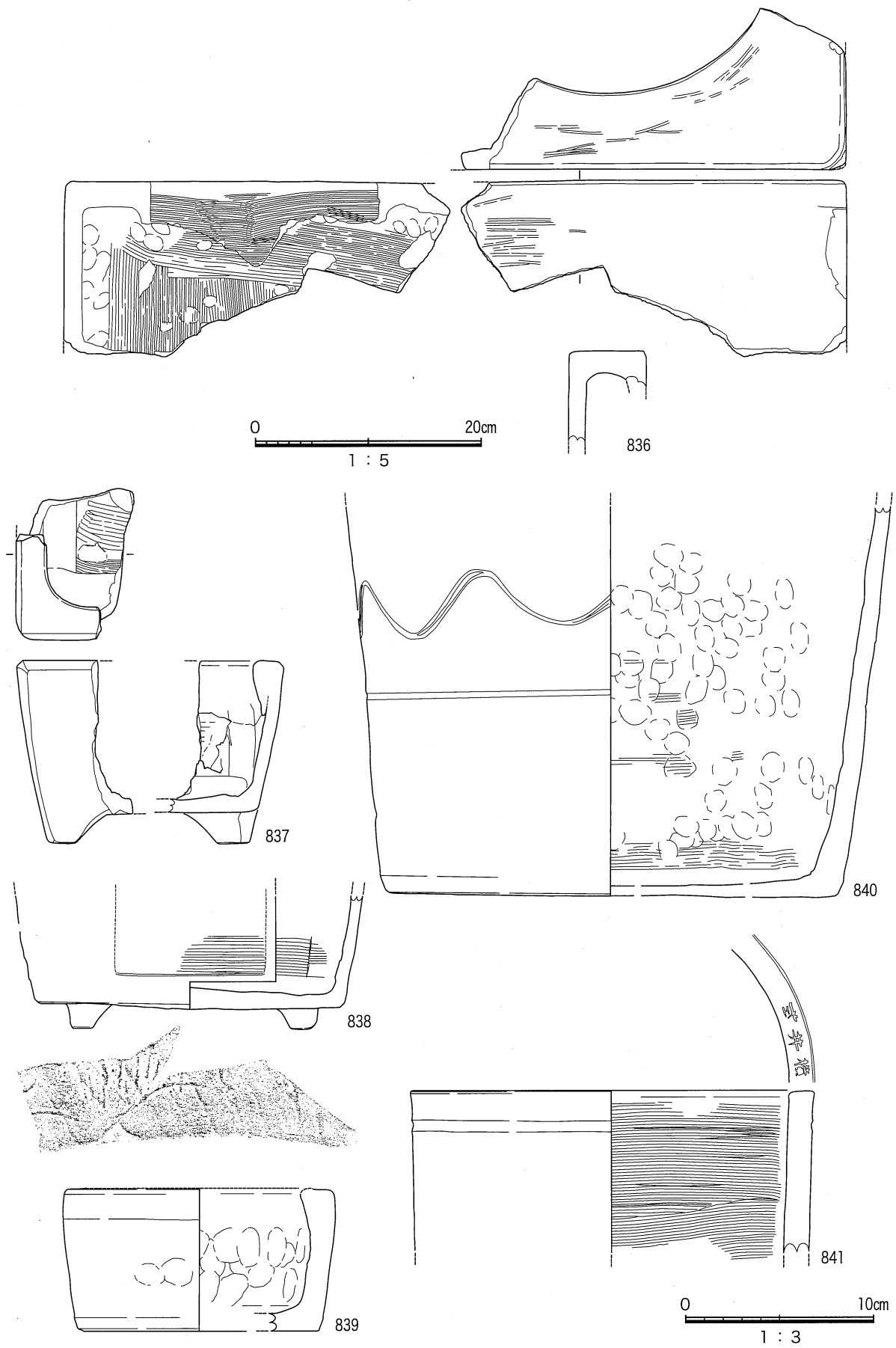
第175図 SDg29 出土遺物実測図 (11)



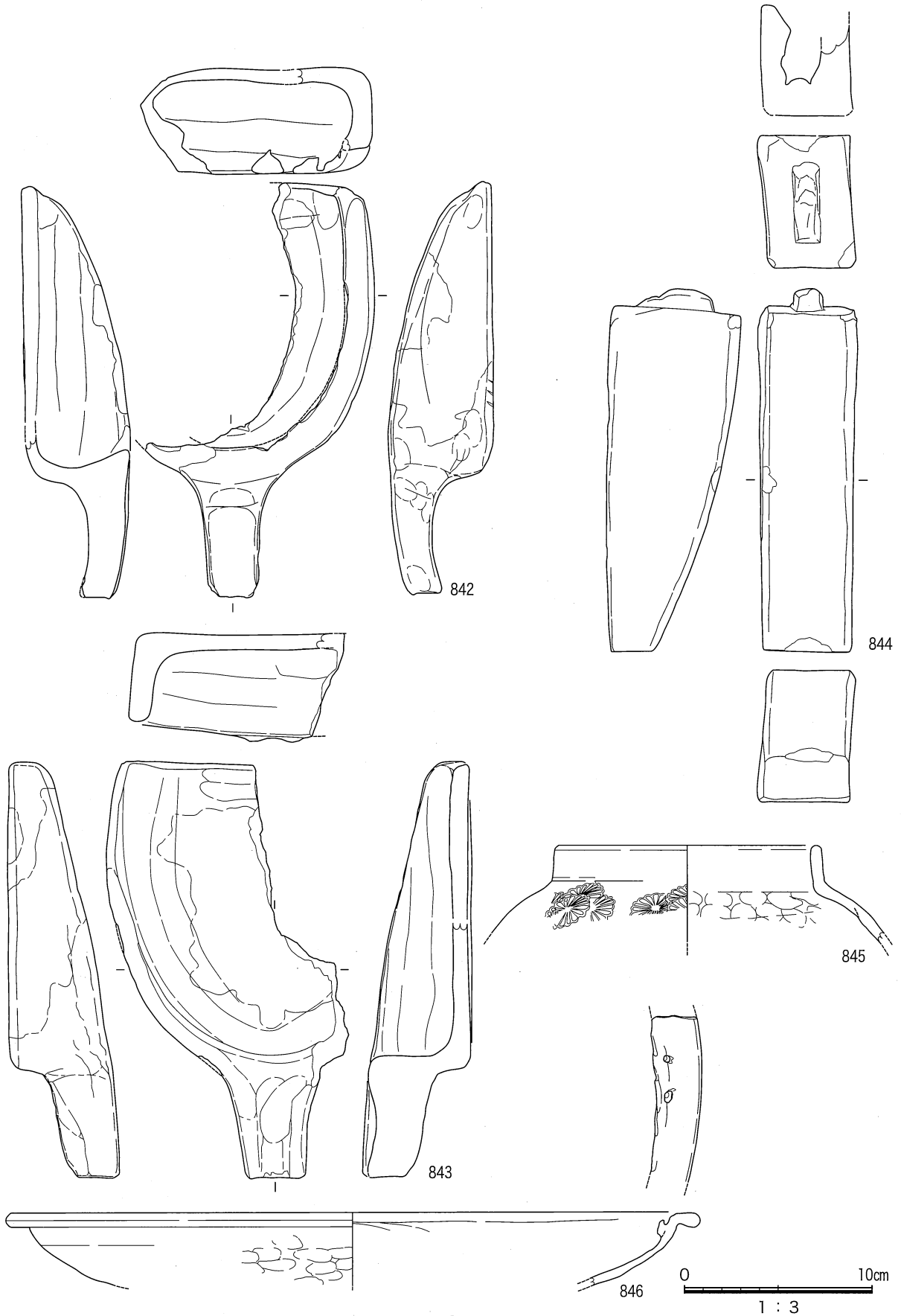
第176図 SDg29 出土遺物実測図 (12)



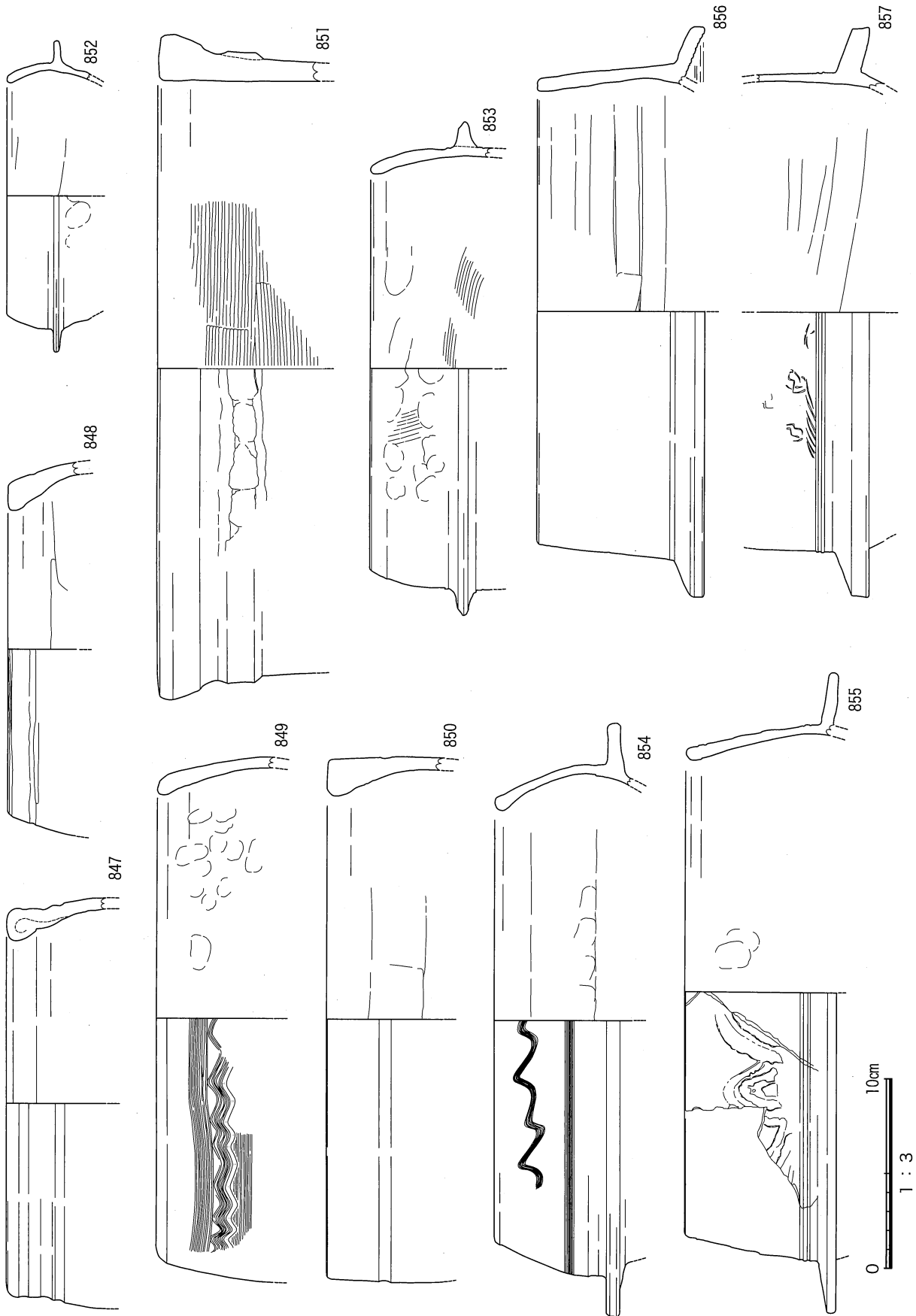
第177図 SDg29 出土遺物実測図 (13)



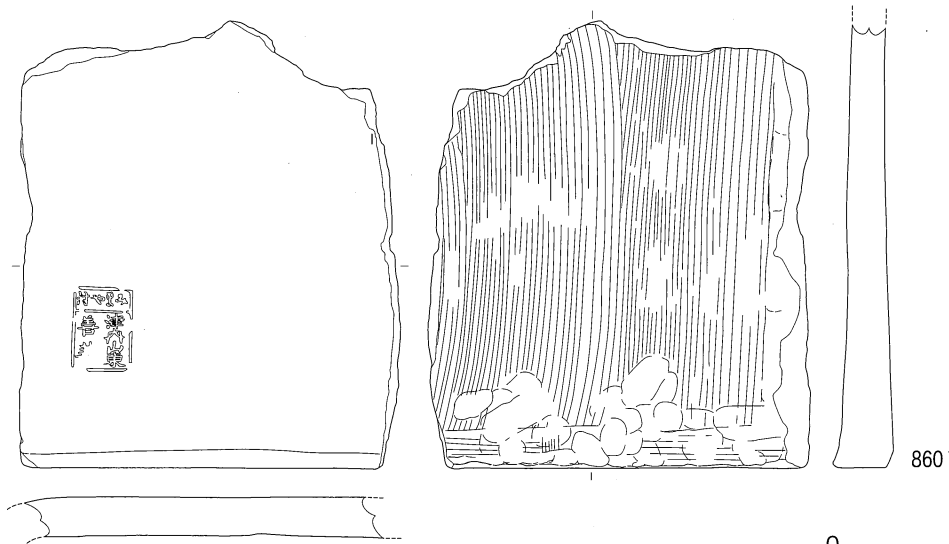
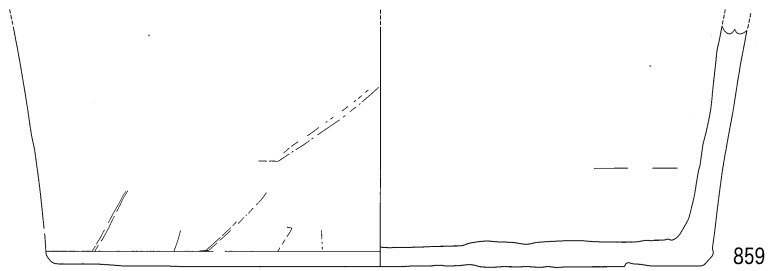
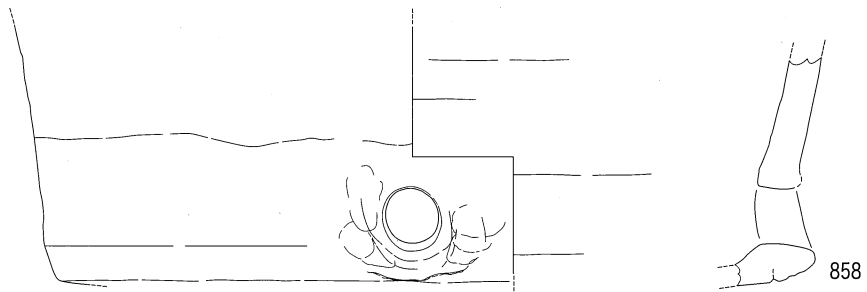
第178図 SDg29 出土遺物実測図 (14)



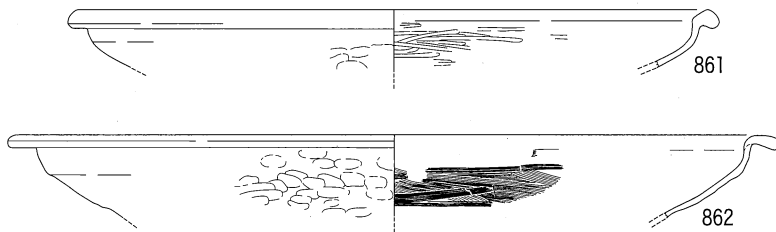
第179図 SDg29 出土遺物実測図 (15)



第180図 SDg29 出土遺物実測図 (16)

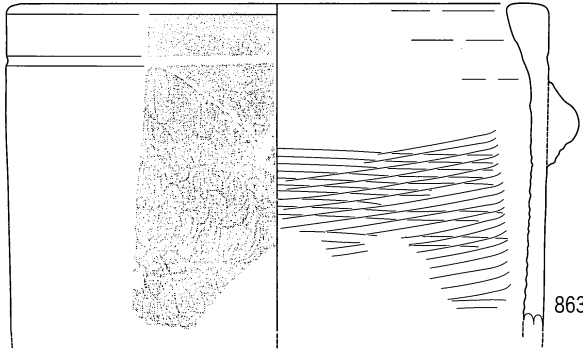


0 10cm
1 : 3

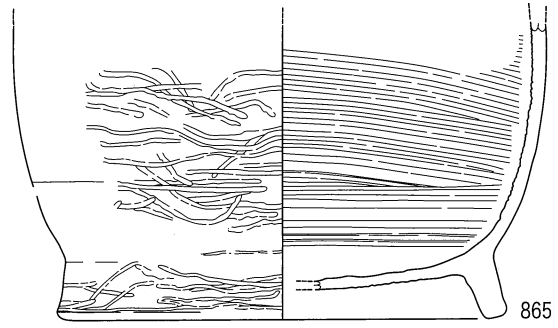


0 10cm
1 : 5

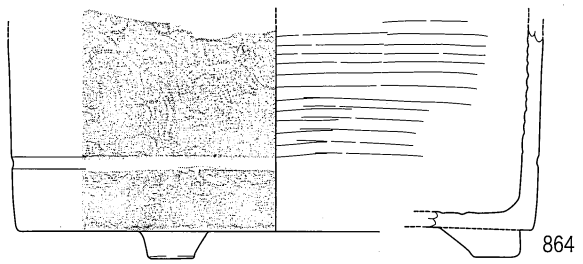
第181図 SDg29 出土遺物実測図 (17)



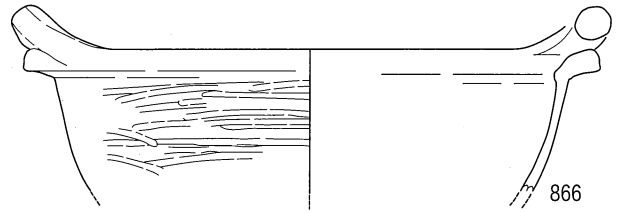
863



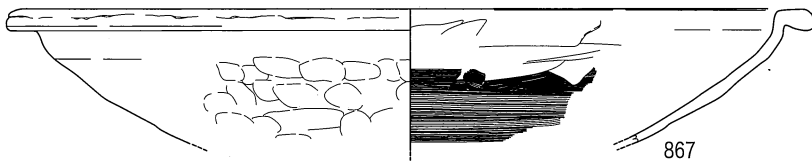
865



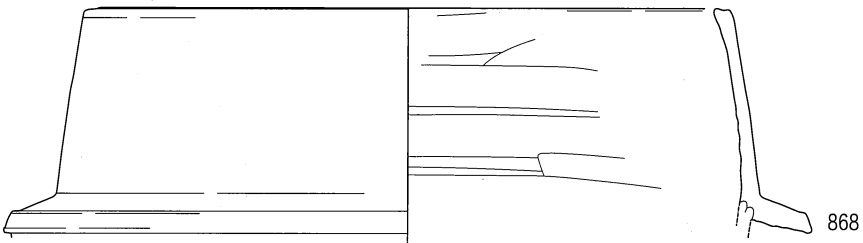
864



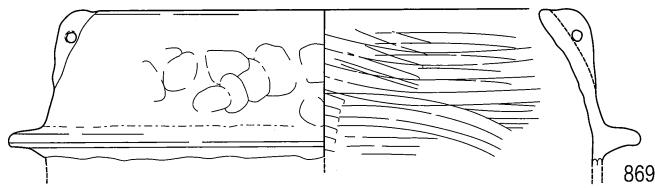
866



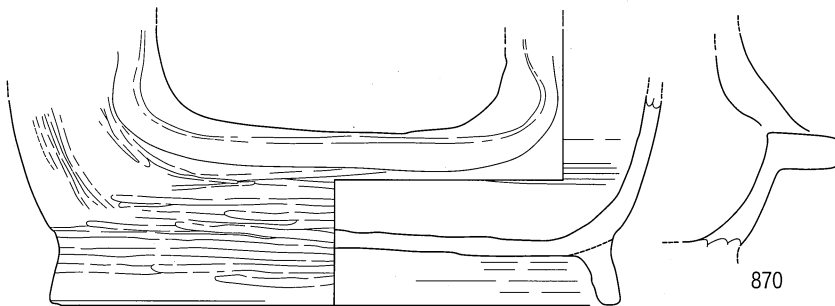
867



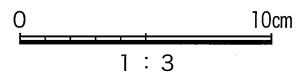
868



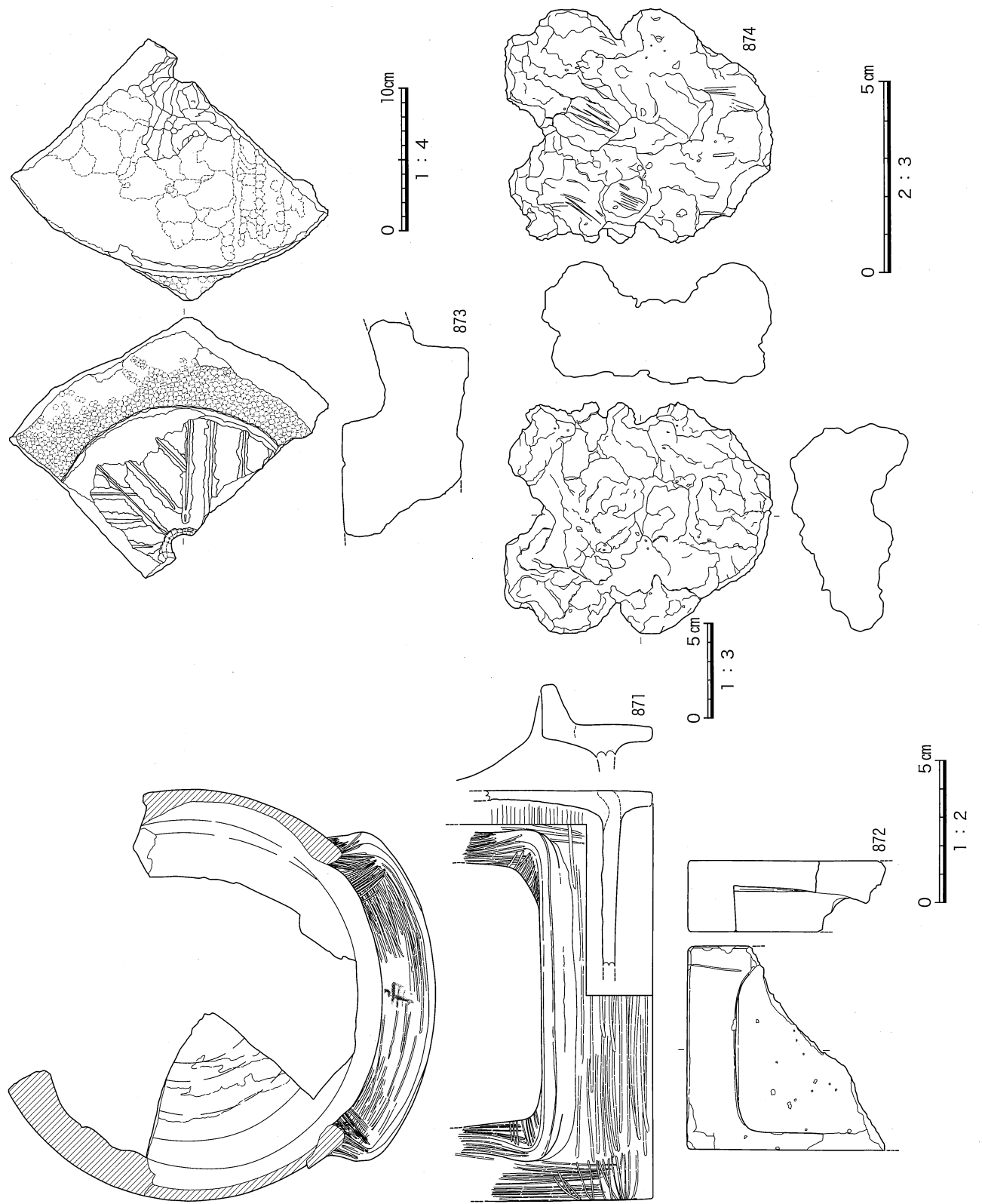
869



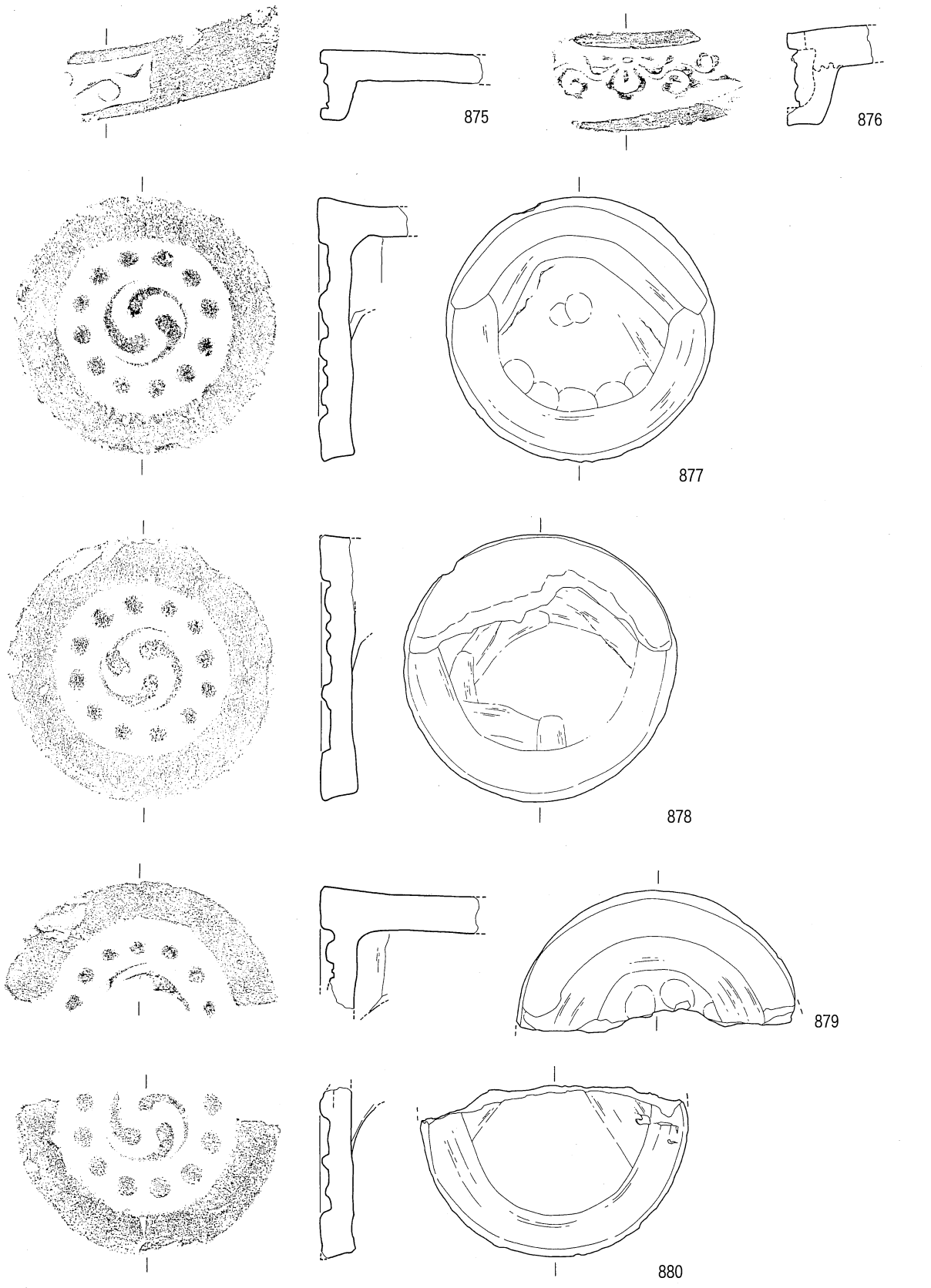
870



第182図 SDg29 出土遺物実測図 (18)

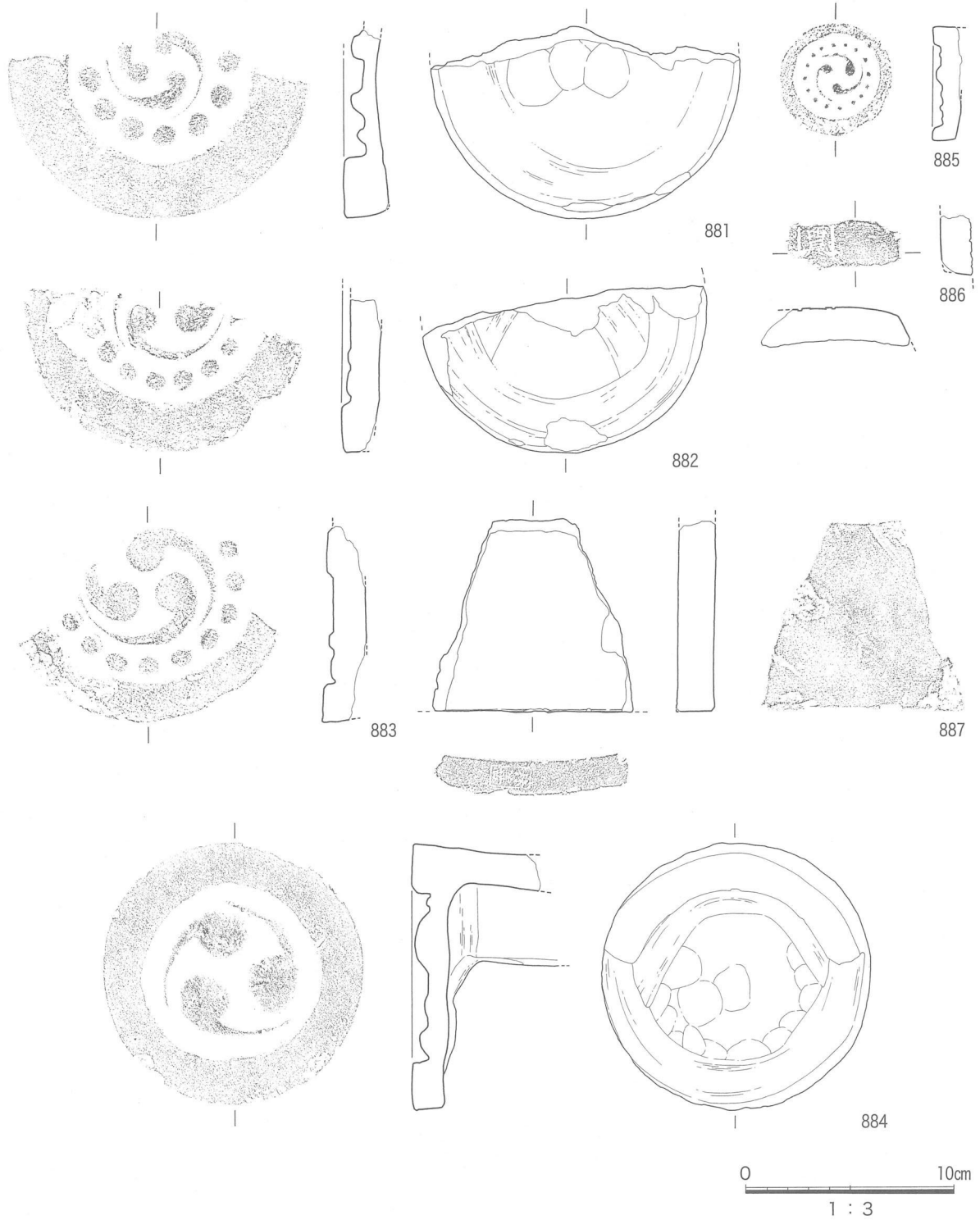


第183図 SDg29 出土遺物実測図 (19)

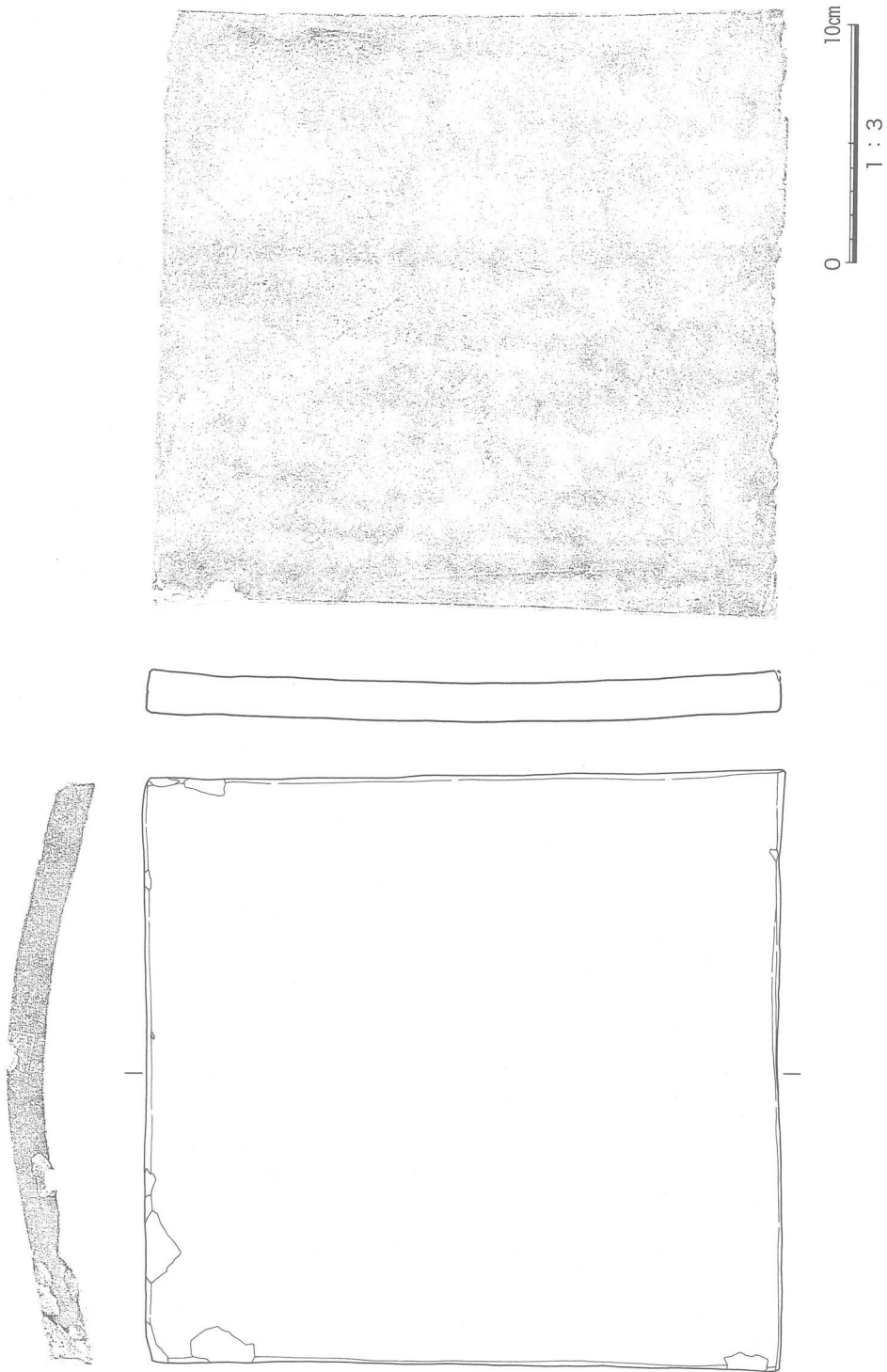


0 10cm
1 : 3

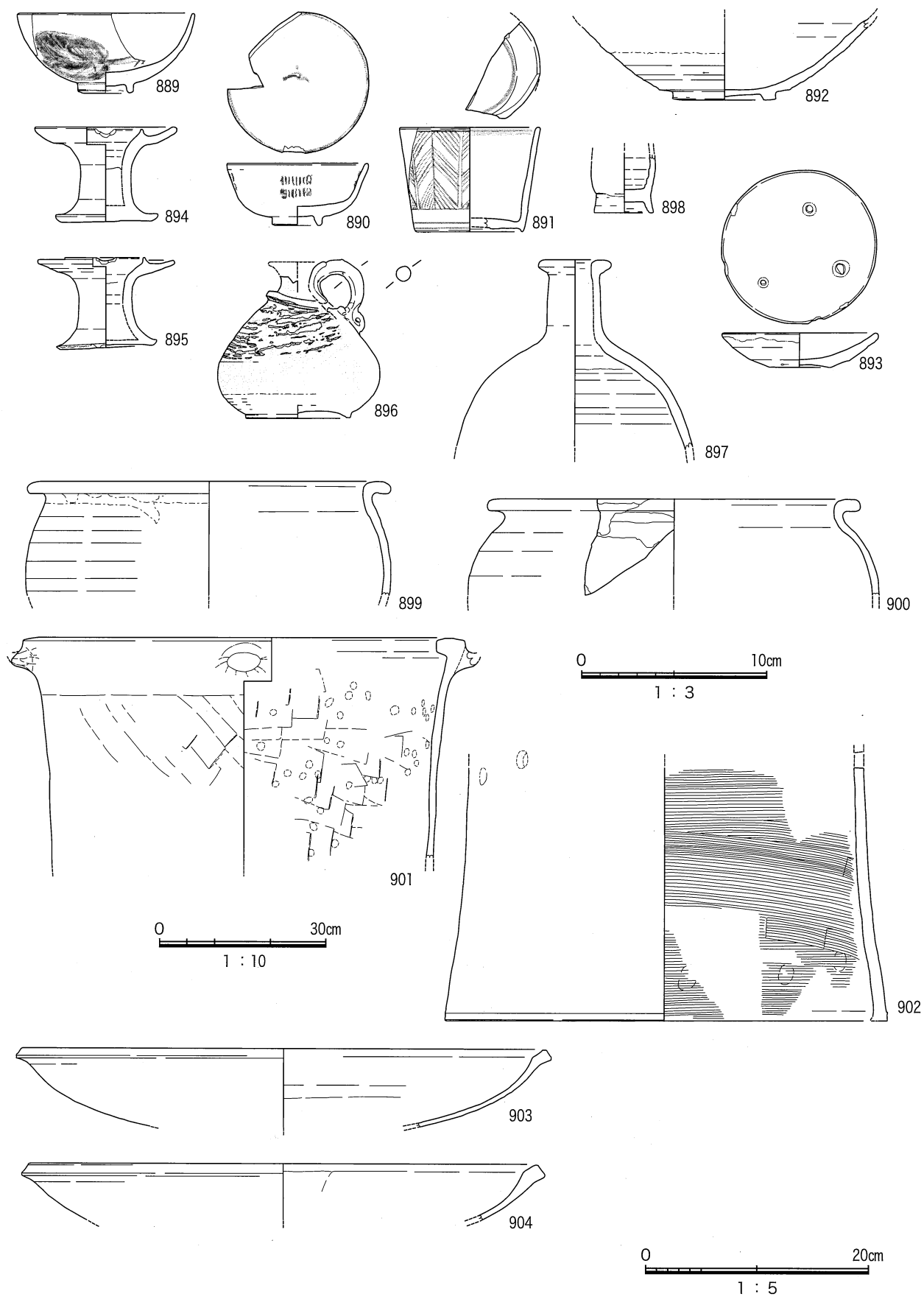
第184図 SDg29 出土遺物実測図 (20)



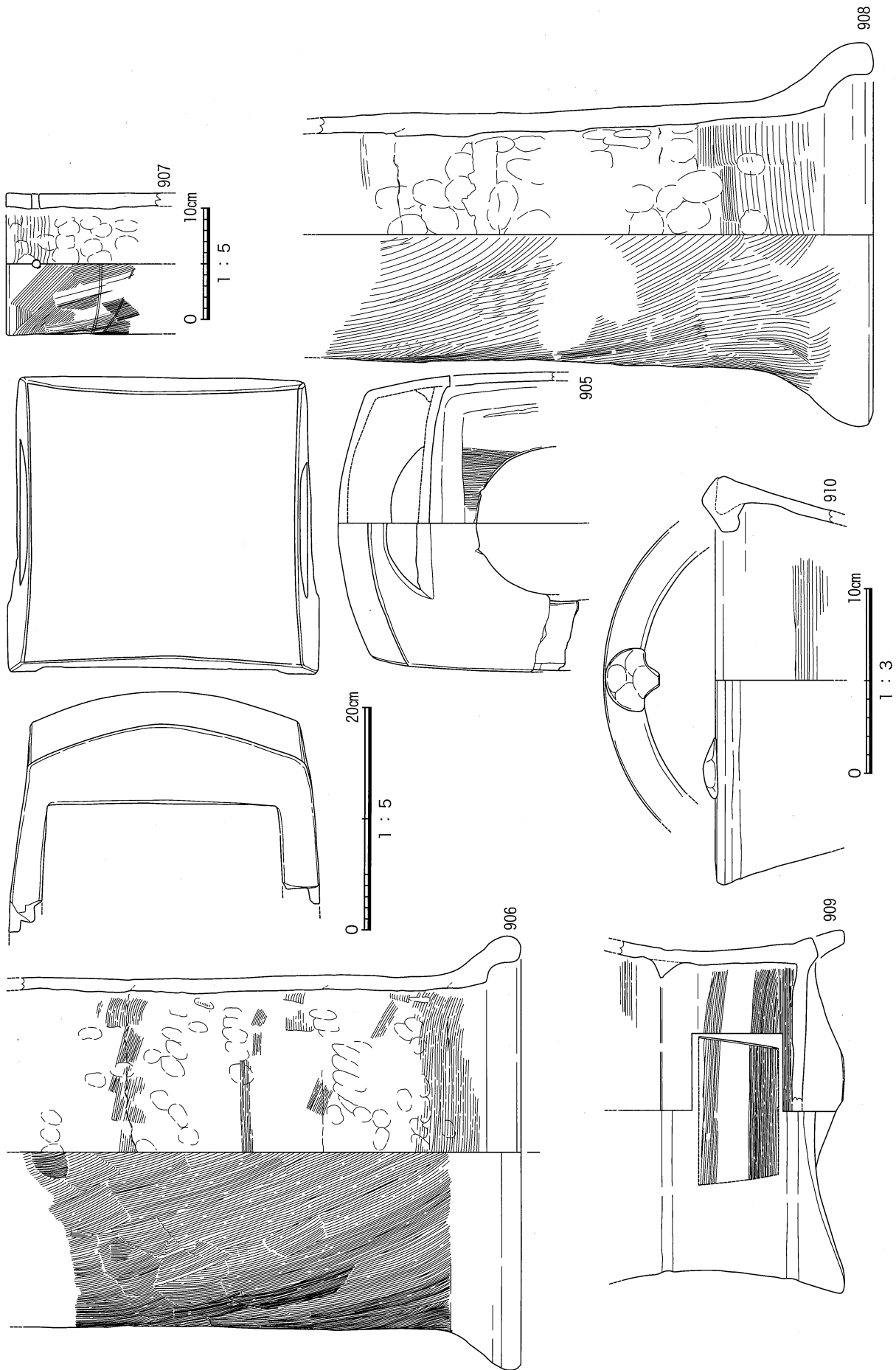
第185図 SDg29 出土遺物実測図 (21)



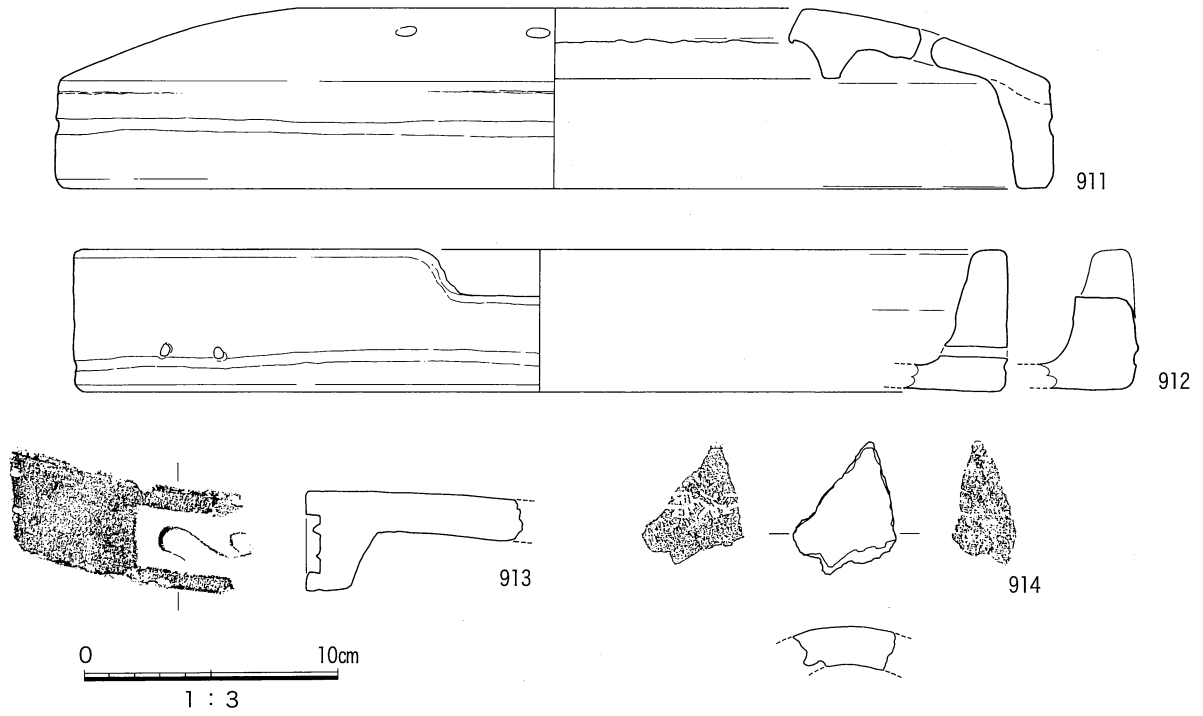
第186図 SDg29 出土遺物実測図 (22)



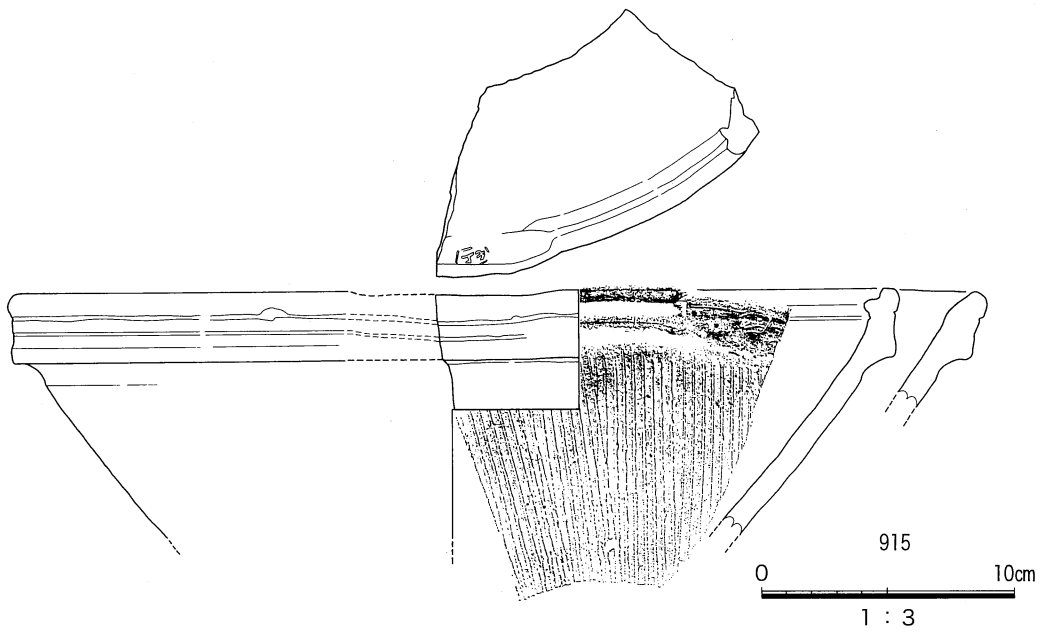
第187图 SDg47 出土遺物実測図 (1)



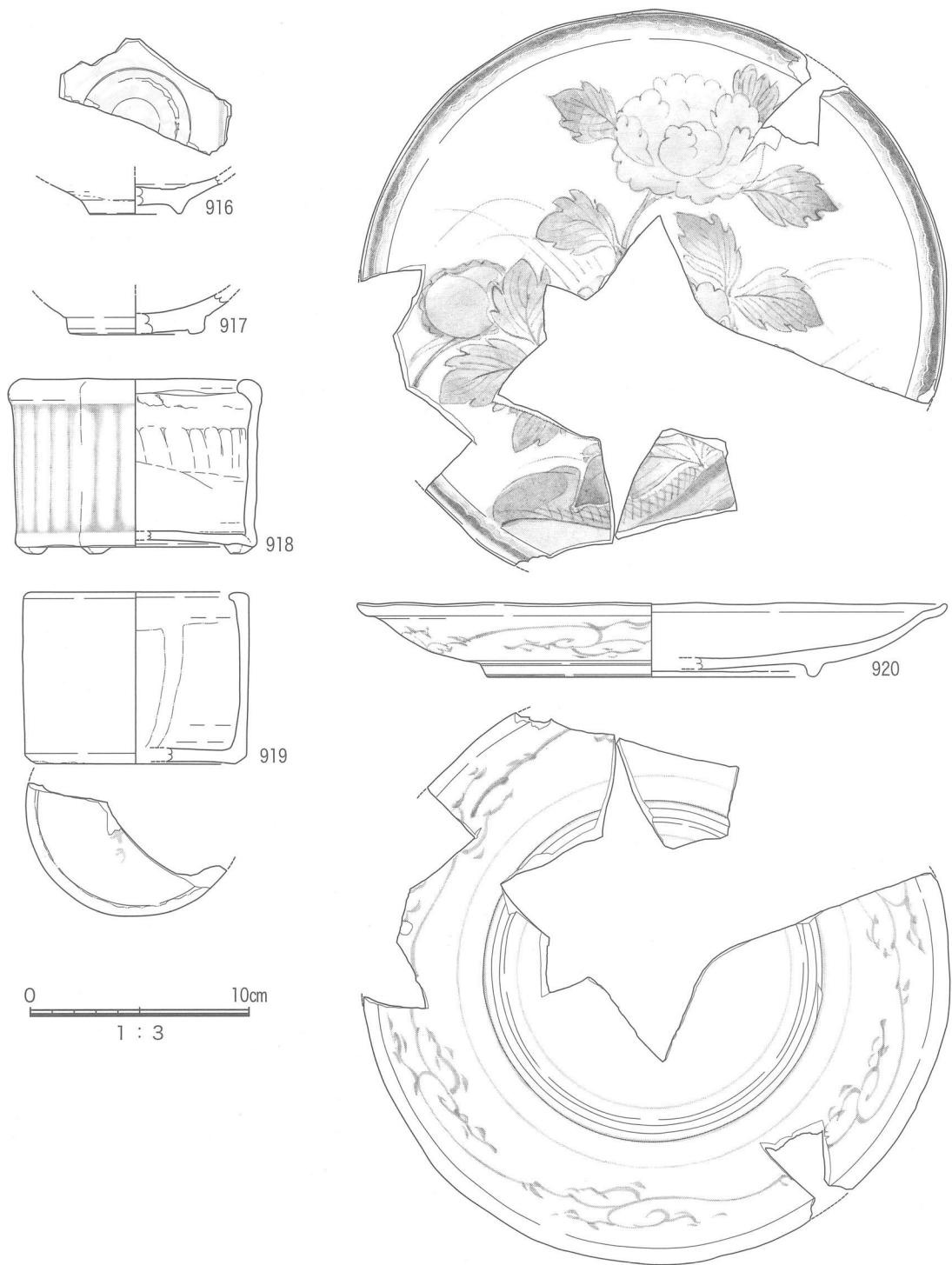
第188図 SDg47 出土遺物実測図 (2)



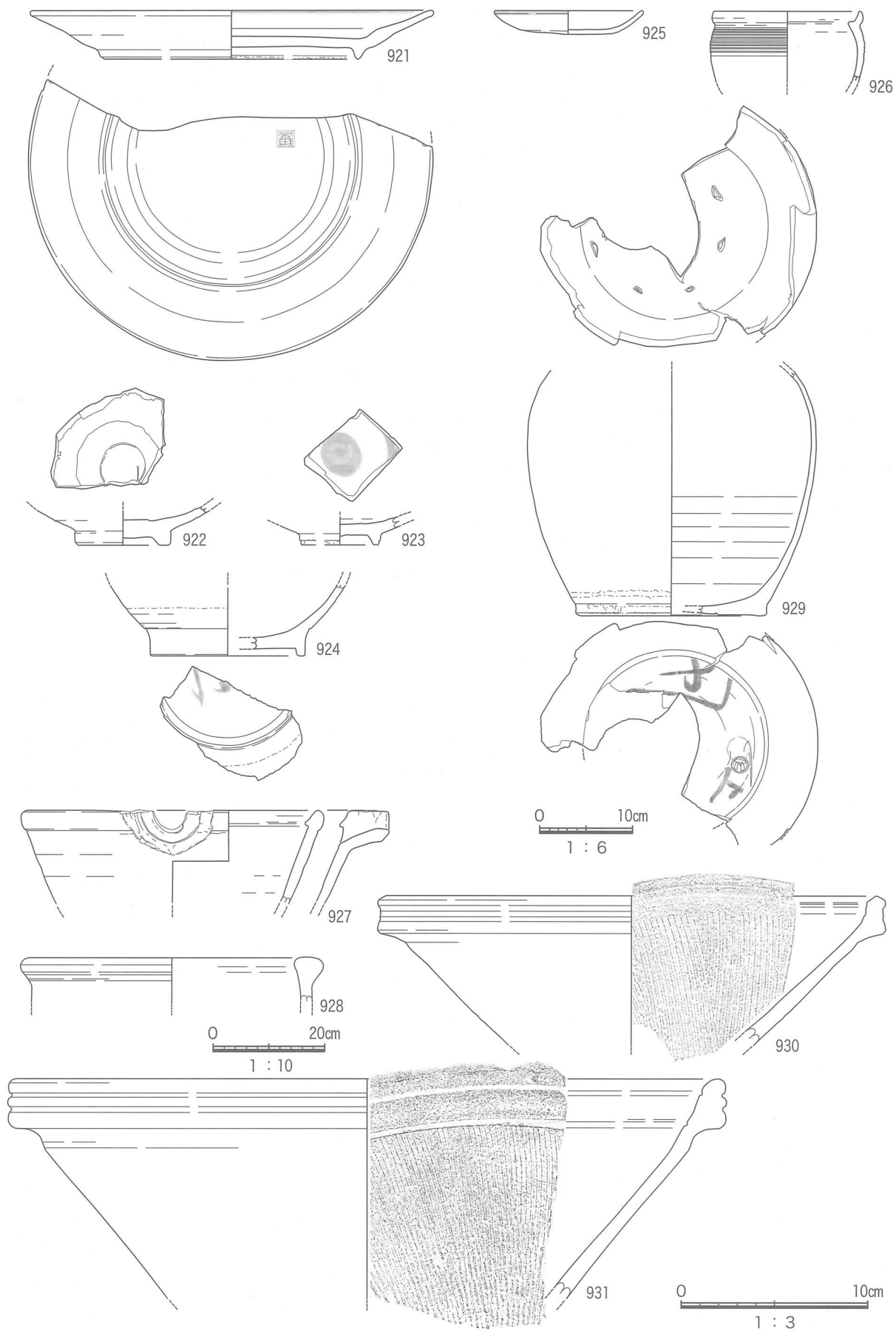
第189図 SDg47 出土遺物実測図 (3)



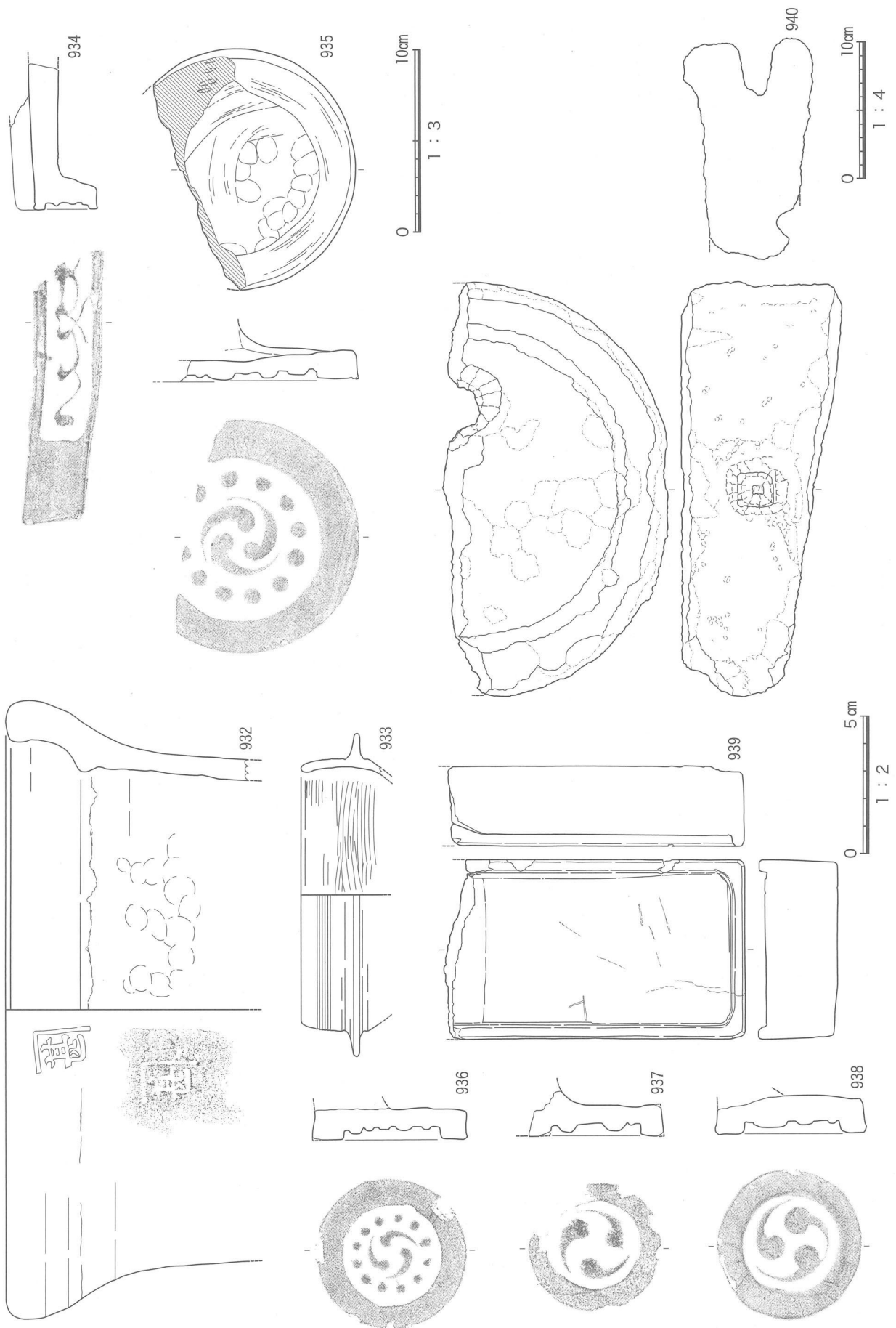
第190図 SDg48 出土遺物実測図



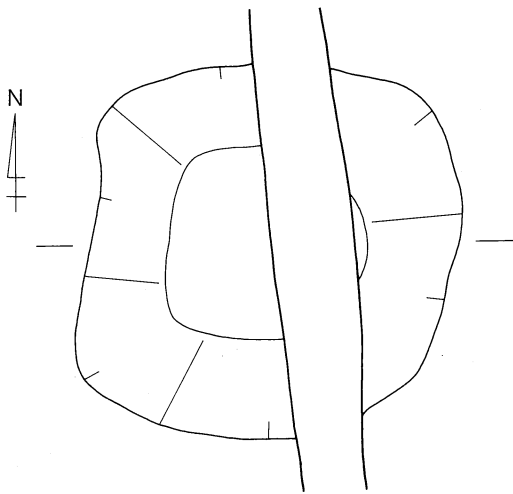
第191図 SDg86 出土遺物実測図 (1)



第192図 SDg86 出土遺物実測図(2)



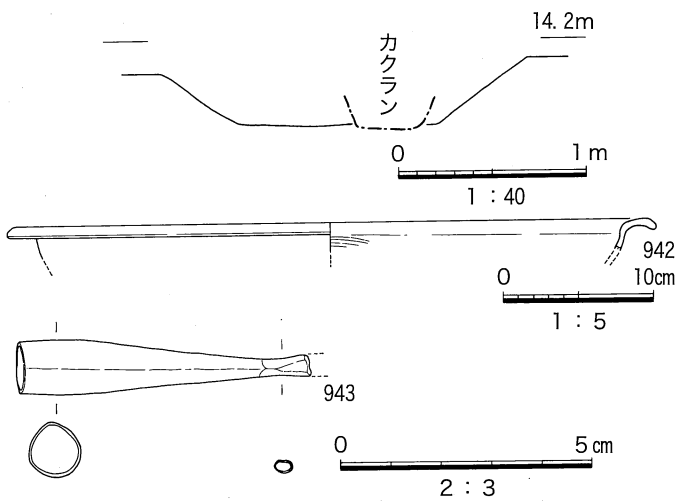
第193図 SDg86 出土遺物実測図 (3)



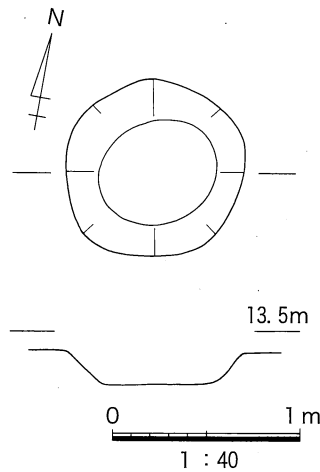
③ 土坑

SKg674 (第195図)

方形の土坑で、942・943の遺物が出土している。942は土師質土器焙烙である。口縁部は佐藤分類口縁部1と2の中間形態を呈する。943は銅製キセル吸口である。出土遺物が示す年代観は、18世紀末～19世紀初頭となる。

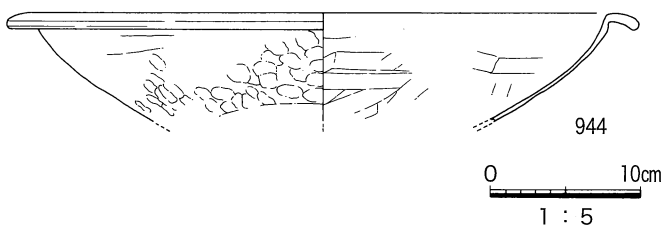


第195図 SKg674 平・断面図、
出土遺物実測図

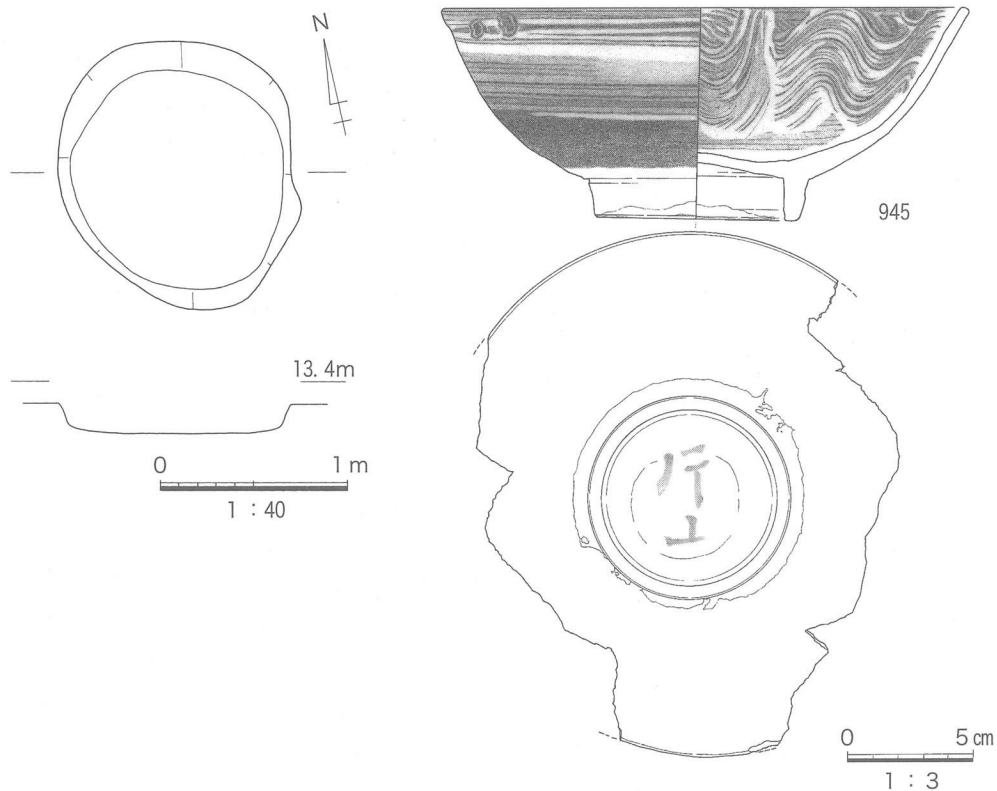


SKg777 (第196図)

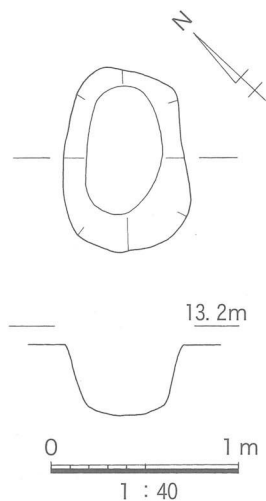
円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。土坑内から瓦質焙烙が出土している。口縁部は底部から緩やかに内湾し、「く」字形屈曲し、下方に小さく垂下する。佐藤編年A I - 1ないし2型式となろう。出土遺物が示す製作年代は18世紀後半となる。



第196図 SKg777 平・断面図、出土遺物実測図



第197図 SKg778 平・断面図、出土遺物実測図



第198図 SKg781 平・断面図

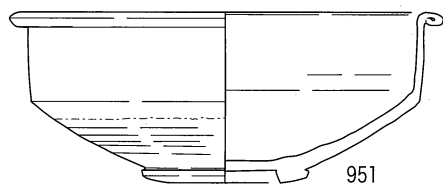
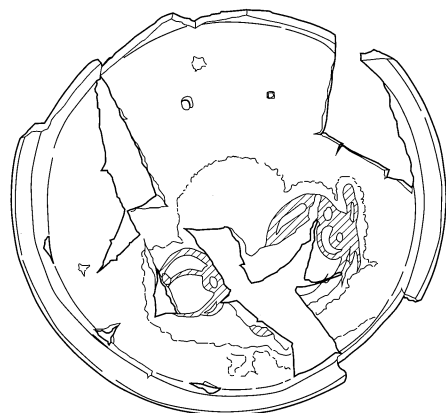
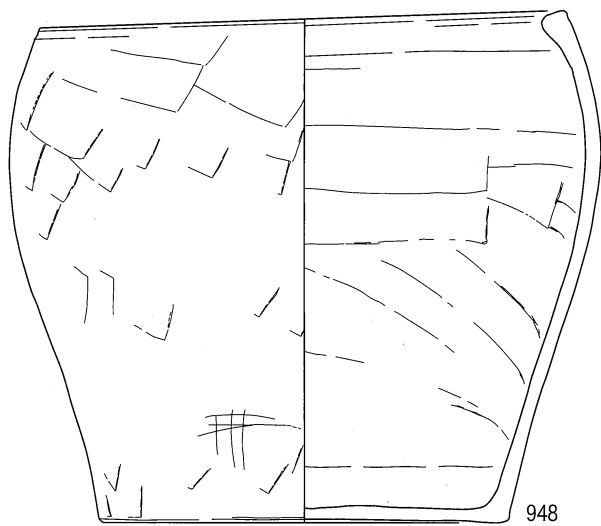
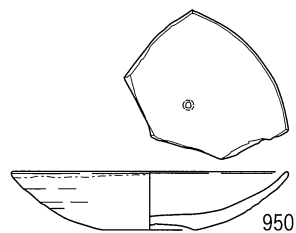
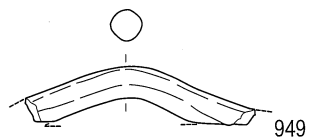
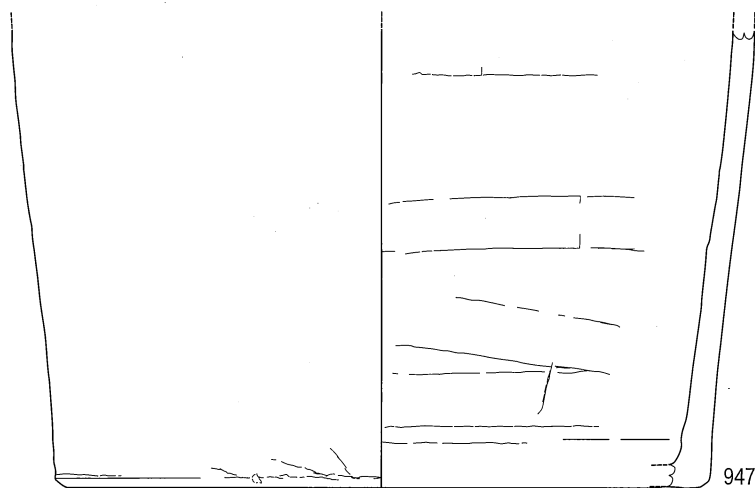
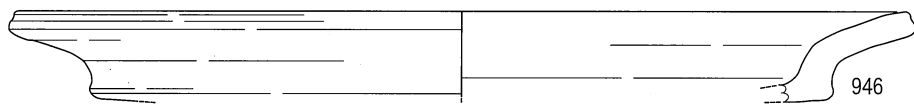
SKg778 (第197図)

円形の浅い土坑で、断面は逆台形を呈する。土坑内からは、肥前系陶器刷毛目鉢が出土している(945)。内面には波状、外面には直線的な刷毛目を施し、灰釉を施釉する。見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂塗布→高台痕付着を認め、畳付にもアルミナ砂が付着する。出土遺物が示す年代観は18世紀代2・3四半期となろう。

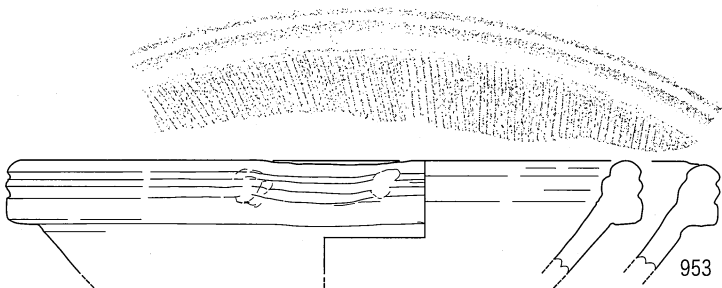
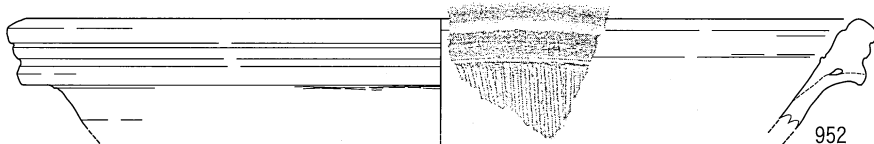
SKg781 (第198~199図)

楕円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。946は土師質土器火消壺蓋である。胎土中には角閃石の含有を認める。ほぼ全面に煤痕が付着し、一部には発泡した状況も窺える。947・948は土師質土器甕である。前者の胎土中には多量の雲母・角閃石を含有する。後者は口縁部下に体部最大径があり、底部にかけて窄まる形態を呈する。949は瓦質鉢の把手部である。950は京・信楽系陶器灯明皿である。見込みには目跡を認める。951は施釉陶器鉢である。体部中位で「く」字形に屈曲し、口縁部は直立した後外方へ折り曲げる。蛇の目高台状の幅の広い高台を有し、見込みには目跡を認める。さらに、見込みにはイッチン掛けにより、草花文を表現し、灰釉を施釉する。富田吉金窯産か。952・953は堺・明石系摺鉢である。いずれも白神編年Ⅱ型式2段階の所産である。

以上、SKg781出土遺物の年代観は、19世紀代に属し、幕末までは下らない。

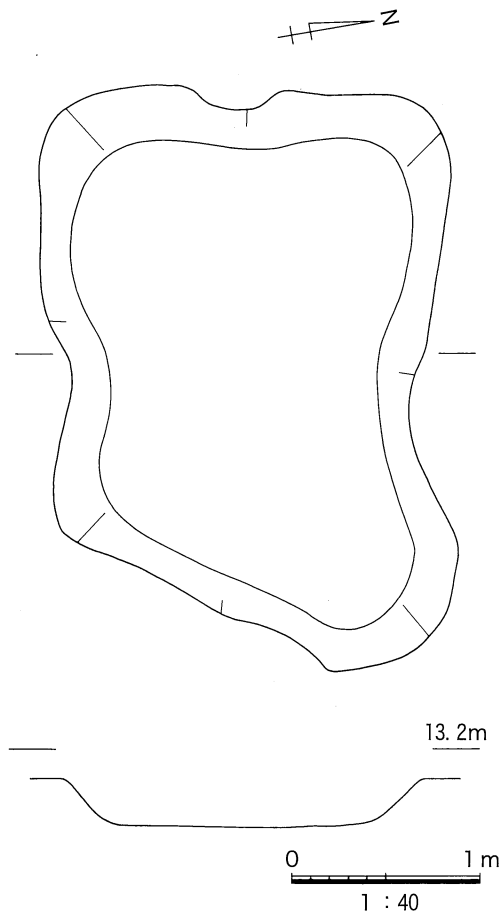


0 10cm
1 : 5



0 10cm
1 : 3

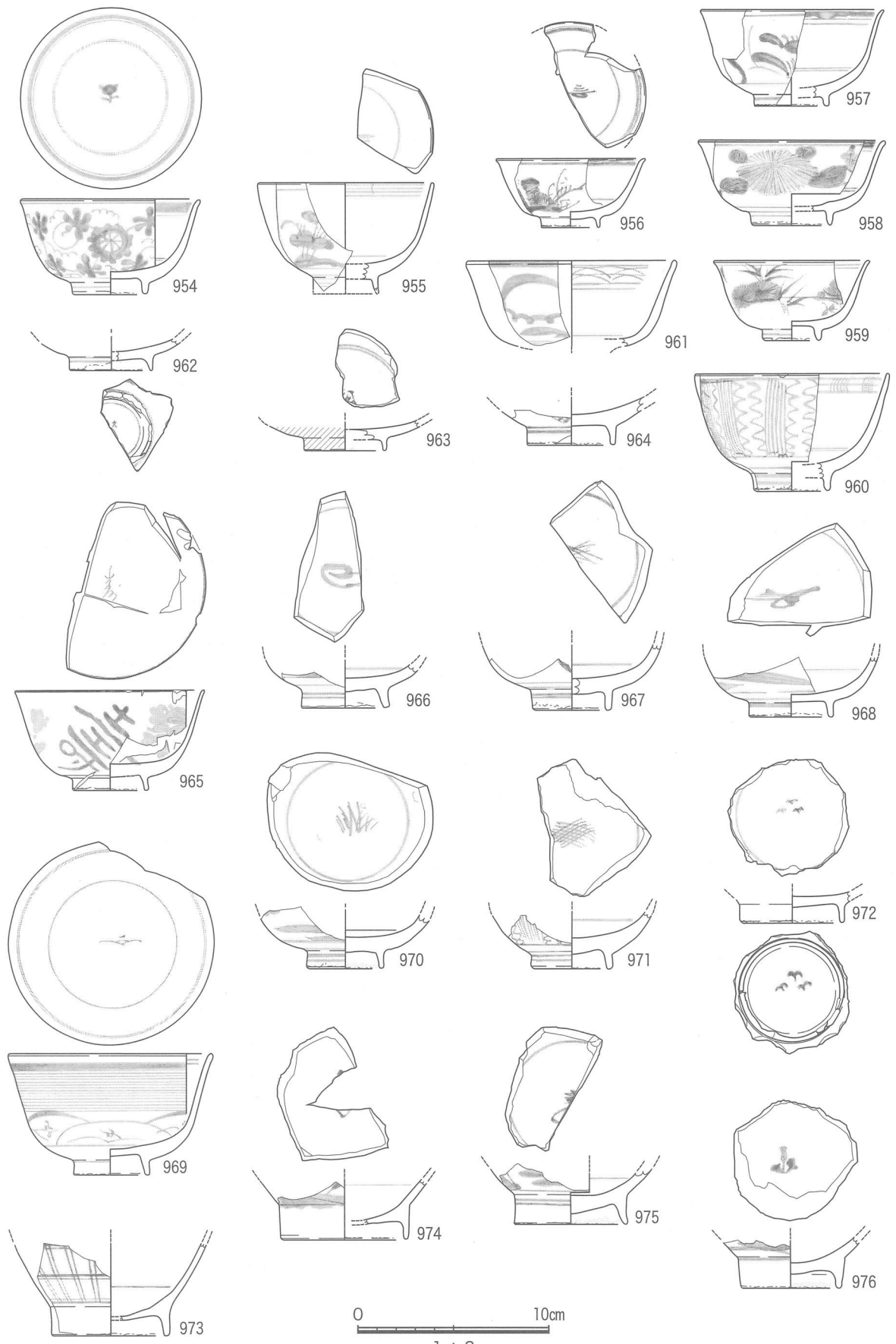
第199图 SKg781 出土遺物実測図



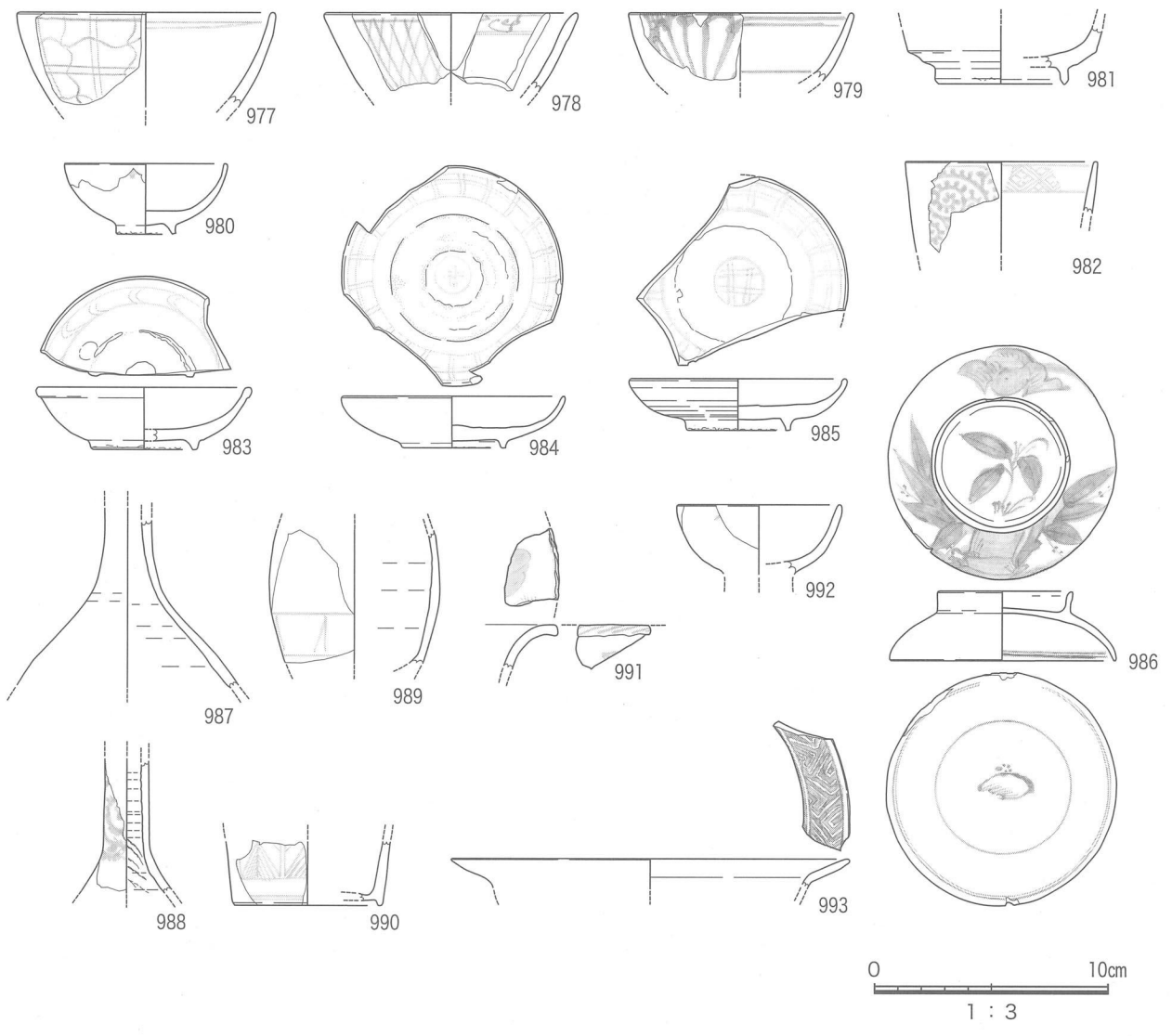
第200図 SKg783 平・断面図

S K g 7 8 3 (第200~210図)

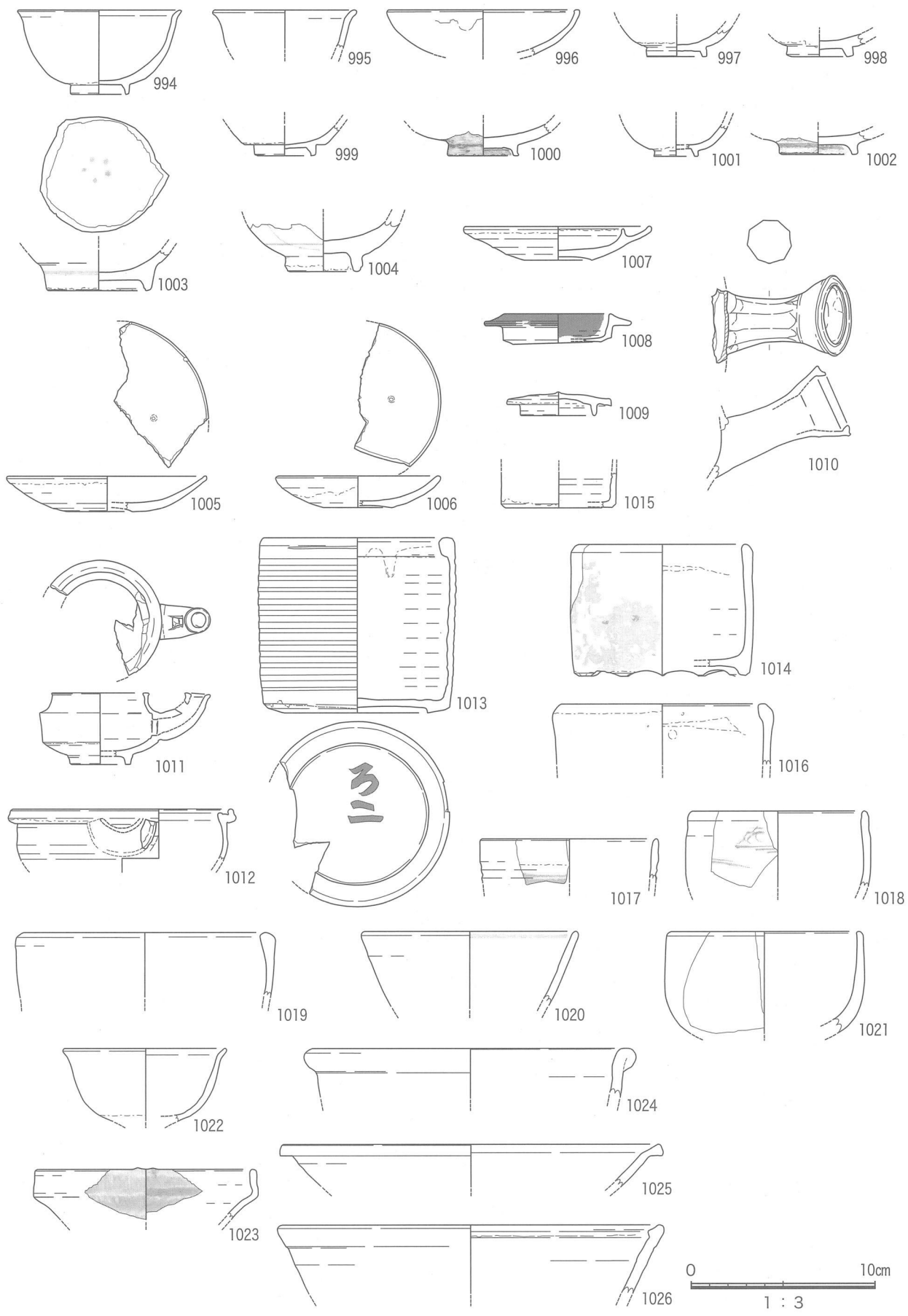
不整形な四角形を呈し、逆台形の断面を有する。954・956~959・965は瀬戸・美濃系磁器端反碗である。958には陰刻沈線を認める。959は関西系磁器の可能性も残る。965には赤・桃・茶色絵葉により寿文、草花文を上絵付けする。955・960~964・966~993は肥前系磁器である。碗形態では端反碗が主体を占め(955・960・961・966~971・978)、広東碗を一定量認める(973~976)。972・986はその蓋となる。957・958は幕末頃に位置付けられる。969は外面上半に多重圏線、下半に山水文を描き、愛媛県砥部焼の可能性も残る。962は高台内に崩れ大明年製、外面にはわずかに草花文を描き、18世紀中葉前後に属する。963は青磁染付丸碗である。18世紀後半。977は丸碗である。19世紀初頭~幕末。981は朝顔形碗である。高台脇には明瞭な段を認める。980・992は小碗である。982・990は小杯である。前者には蛸唐草文、後者には矢筈文を認める。983~985は皿である。いずれも見込みには蛇の目釉剥ぎ→アルミナ砂塗布を認め、987~988は瓶である。987は外面に白磁釉を施す。988の外面には蛸唐草文を描く。991・993は鉢である。991は口縁部が大きく開き、端部に捻り沈線を入れ、ダミを施す。993は外傾した後、端部手前で「く」字形に屈曲し、端部は先細る。口縁部内面には搔き取りによる紗綾形文も認める。994・995・1022は京・信楽系陶器端反碗である。996は京・信楽系陶器平碗である。999は京・信楽系陶器小杉碗である。997・998・1001は瀬戸・美濃系陶器灰釉丸碗である。1000・1002・1017は瀬戸・美濃系陶器腰鏝碗である。内面には灰釉、外面には鉄釉を施す。1003・1020は瀬戸・美濃系陶器広東碗である。太白手と呼ばれ、染付を認める。1004・1021は陶胎染付碗である。高台脇に比して、高台内の挟りはわずかに深い。1005~1007は京・信楽系陶器灯明皿である。1005・1006の内面には目跡を認め、1007には仕切を有する。1008は大谷焼蓋である。落とし蓋。1009は京・信楽系陶器蓋である。1010は軟質施釉陶器把手である。入念な面取りにより断面形状は多面体を呈する。1011は瀬戸・美濃系陶器カンテラである。注口の上端には四角い穿孔を認める。1012は軟質施釉陶器片口鉢である。行平鍋状となろう。1013は大谷焼火入れである。碁笥底を呈し、口縁部は内側に肥厚する。外面には多条凹線を施す。高台内には「ろ二」の墨書を認める。1014は京・信楽系陶器火入れである。外面及び口縁部内面には白泥を塗布し、灰釉を施す。外面には赤・黒色絵葉により草花文を上絵付けする。高台は削り高台をなす。1015は京・信楽系陶器瓶である。1016は陶胎染付火入れである。1018は陶器碗である。外面には簡略化した楼閣山水文を鏤絵で描く。富田吉金窯産か。1019は瀬戸・美濃系陶器鉢である。1023は瀬戸・美濃系陶器仏花瓶である。内外面には鉄釉を施釉する。1024は肥前系陶器鉢である。口縁部は外方へ折り返し、丸味を有する。端部上端には重ね積み痕跡を認める。1025・1026は瀬戸・美濃系陶器鉢である。前者は口縁部が「く」字形に鈍く屈曲し、後者は内側に肥厚し、下端を小さく引き出す。1027~1031は肥前系陶器刷毛目鉢である。1027・1028は波状、1029~1031は直線的な刷毛目を施す。口縁部は端部を外方へ小さく拡張する。1032は大谷焼鉢である。見込みには輪状に砂の付着を認める。1033は瀬戸・美濃系陶器皿である。鉄絵により馬の目を描く。1034は施釉陶器鉢である。口縁部は外方へ小さく拡張し、高台は断面三角形形状を呈する。中国地方系。内外面には茶褐色の灰釉を施釉する。18世紀後半~幕末。1035は瀬戸・美濃系陶器瓶ないし甕である。灰釉を基調とし、緑釉の流し掛けを行う。高台内には「イワキ」の墨書を認める。1036~1038は施釉陶器土瓶である。柿釉を施釉する。1038の上半には飛鉦を認める。1039は瀬戸・美



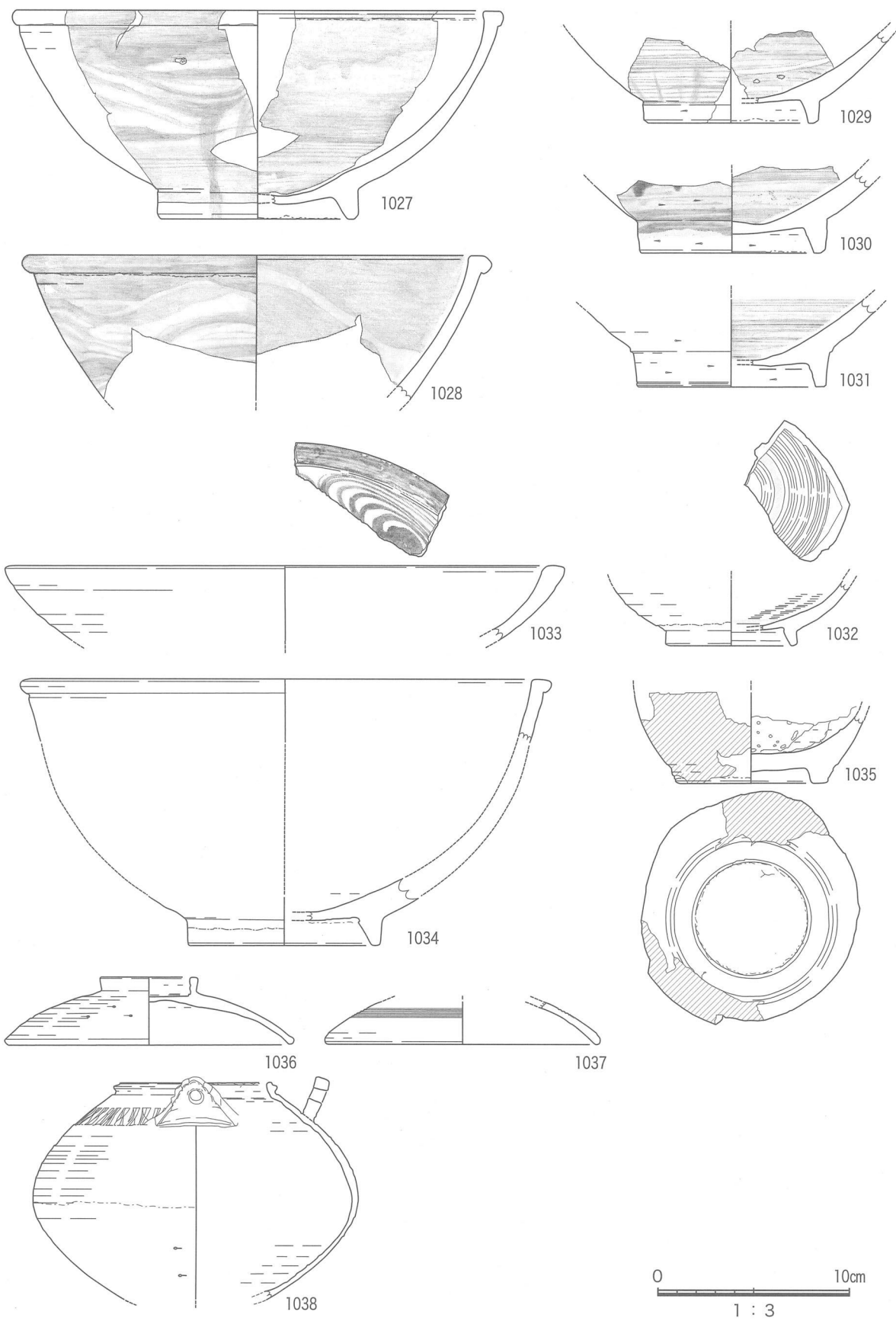
第201図 SKg783 出土遺物実測図 (1)



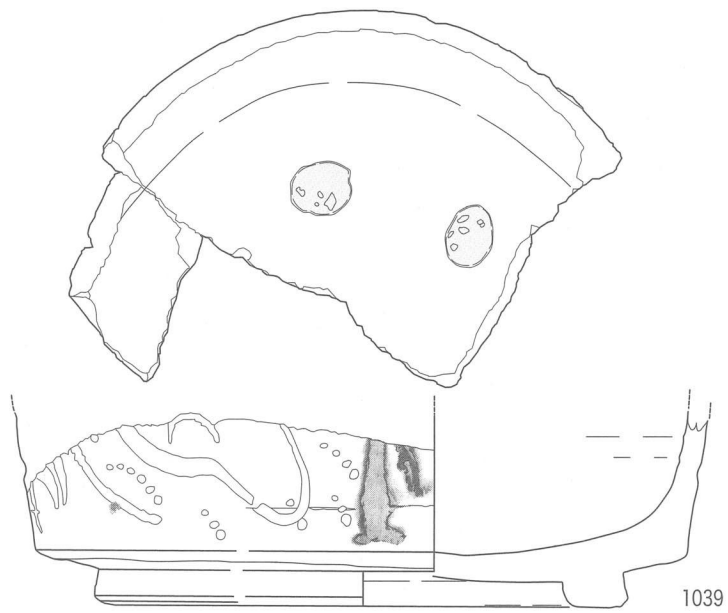
第202図 SKg783 出土遺物実測図 (2)



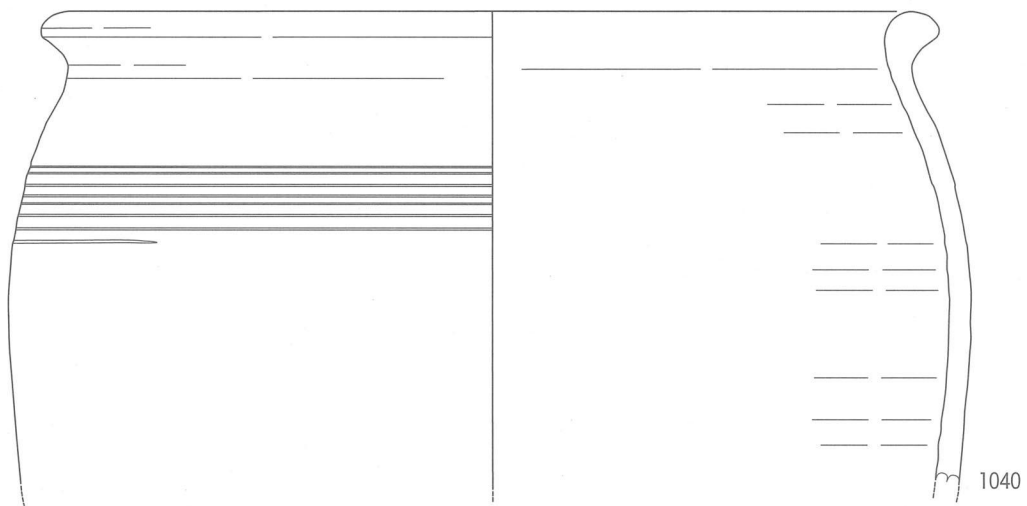
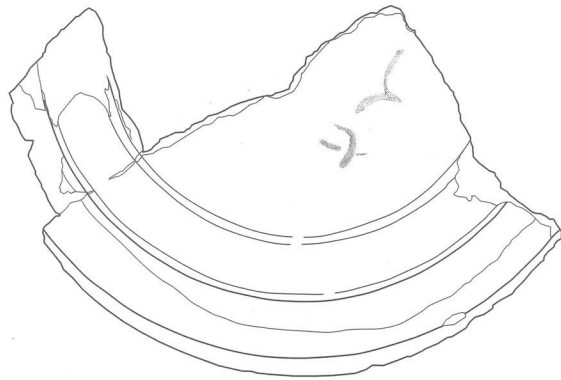
第203図 SKg783 出土遺物実測図 (3)



第204図 SKg783 出土遺物実測図 (4)



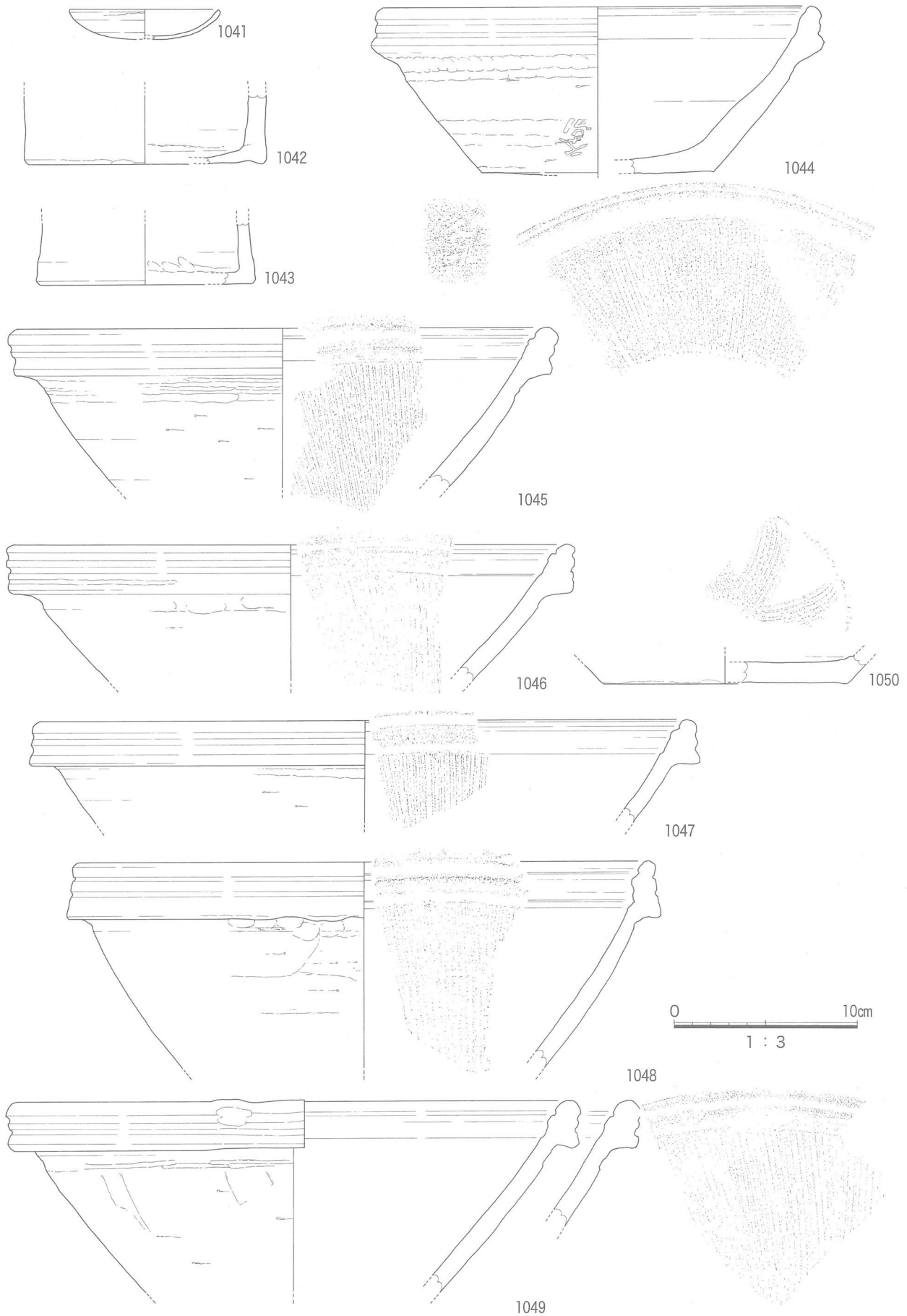
1039



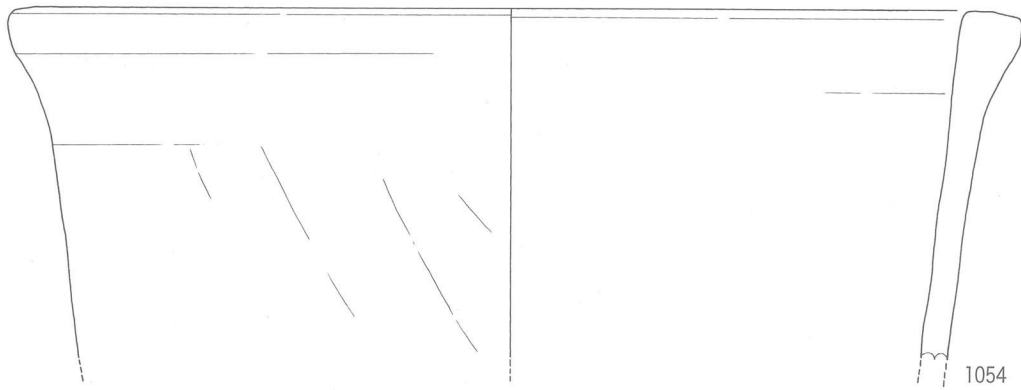
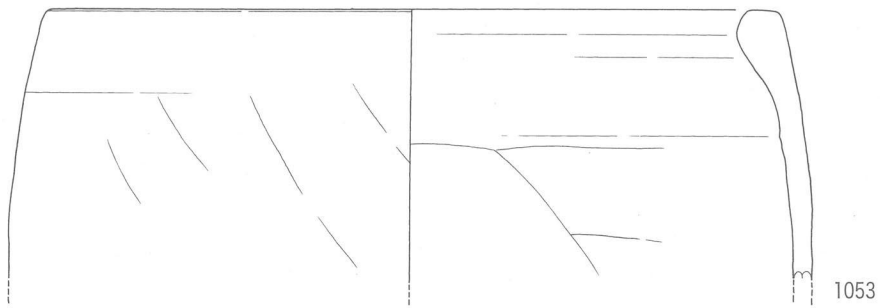
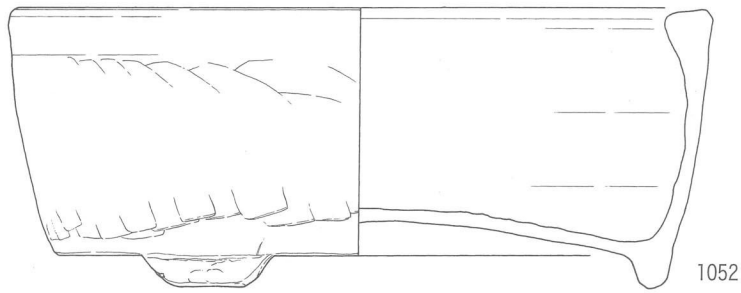
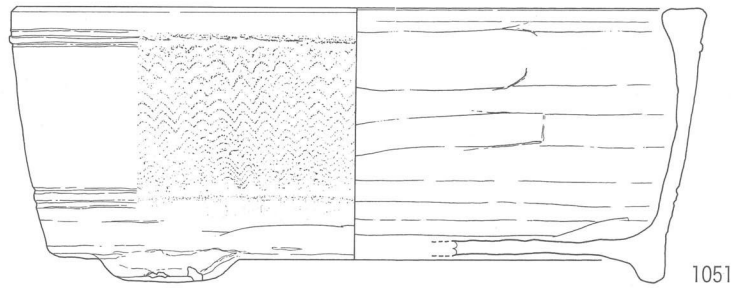
1040



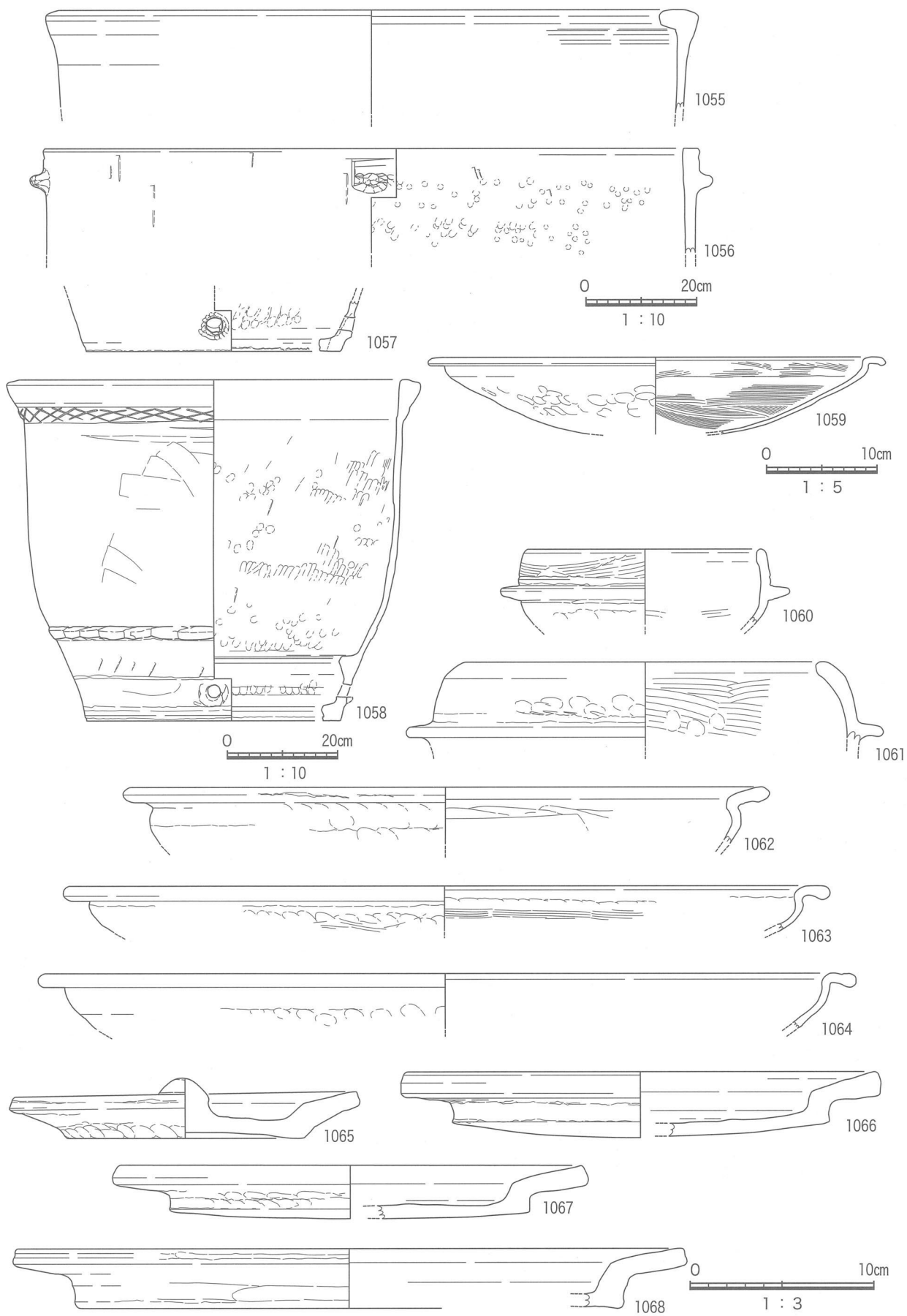
第205図 SKg783 出土遺物実測図 (5)



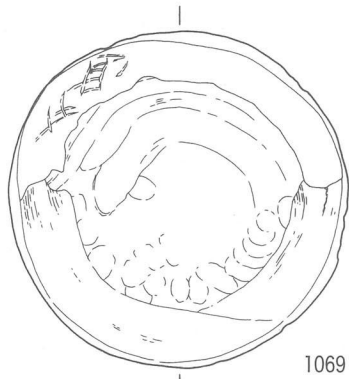
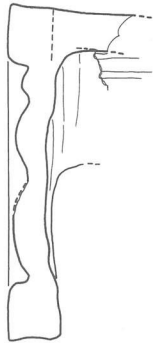
第206図 SKg783 出土遺物実測図(6)



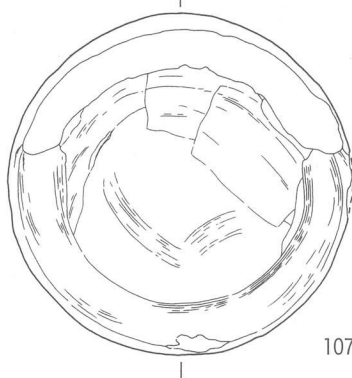
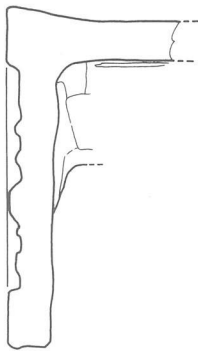
第207図 SKg783 出土遺物実測図 (7)



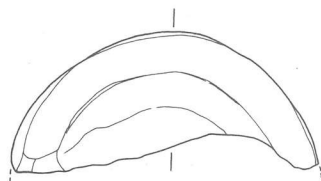
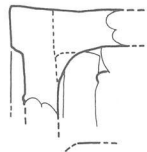
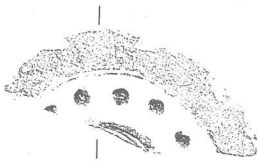
第208图 SKg783 出土遺物実測図 (8)



1069



1070



1071



第209図 SKg783 出土遺物実測図 (9)